一月十五日發行

女學世界

花籠

第十二卷 第二號



博文館



御料
御園白粉
御園白粉はやんごとなき御方々の御料に召させ玉ふ本邦唯一の化粧料にして専ら實質本位の製法に苦心を重ね取分け膚の衛生に留意し容器及体裁を飾らず一切の冗費を白粉其物に集中して弘く化粧界に貢献せん事を期せり。
御園白粉は純無鉛製にして殺菌消毒を施したれば安全此上なく永久の保存と陽氣の變遷に堪へ効能の變ずる事無く濃淡自在乗りよく伸びよく斑点なく附き肌を透して自然の生彩を現はす事化粧界の記録を破りたる模範品なり。
御園白粉
水白粉 御園の月
御園の花
御園なでしこ
御園四季の花
高等化粧水 御園の露
御園の蕾
洋風化粧下 御園クレーム
高等香水 御園香精
御園の橘
御園香油
御園歯磨
製造本舗 伊東胡蝶園
發賣元 丸見屋商店

柄の新しい東コートと

二重トンビとインバネス

東コート地には御婦人向きとしておもしろき流行の柄合のみを集め、外套地には紳士用として御召工合のよろしきもの種々有之候。之に加ふるに三越の仕立は親切にして鄭寧、スタイルは最新式なり。何卒御用命のほど奉願上候

東京駿河町

三越呉服店

女學世界定期增刊 **花籠** 第十二卷第二號

目次

花神



田中製版所三色版


文藝倶樂部　第十八卷第二號　増刊
講談　落語
仲よきものた、昔の女夫といへり、げに
女夫中のよきばかり、美しくもまた羨ましきものは・・・女夫婦の一對な
わらし、本號は四十五年初春の讀物として、大讀者ならざる女夫中も、や
似に捧ぐ、この書を一たび繙き玉はゞ、又
がて蜜の如くならん事、印紙を貼って請合ひ申す。
目次
△女夫の仇討　一龍齋貞山
△越後傳吉　神田松鯉
△桐ヶ谷紀聞　桃川如燕
△おかふれい　三遊亭小圓朝
△子別れ　柳家小さん
△見合の玉　五明樓玉輔
△遊女の簪　桑々齋桃葉
△野狐三次　小金井蘆州
△お禮參り　柳亭燕枝
△三夫婦　三遊亭し齋
△正直夫婦　錦城齋典山
△揚卷助六　田辺南龍
△萩天吉松　神田伯山
△柴木村甚助　早川貞水
△垂乳根　三遊亭圓右
本誌　婉久未の松山（市村座興行）　岡村柿紅
雜錄
題未定……石橋思案
敲語の落……海賀變哲
其他興味津々
菊判紙數三百二十頁　口繪彩極色錦繪及艷麗美人寫眞版十數葉挿入
正價二十五錢　郵税二錢五厘
東京本町　博文館

女(甲の一)

産婆看護婦

新學期開講

第十三回

會長陸軍二等軍醫正 正六位勳四等ドクトル 渡邊鼎

講師東都の大先生十數名

今や入會の絶好機

産婆科六ヶ月 看護科四ヶ月卒業

講習生募集

本會は通信教授を以て産婆及び看護婦たらんとする女子を養成するに有り

規則郵券二錢要

東京市四谷内藤町

東京産婆看護婦講習會

宮内省御買上の光榮ある

天下一品



於内外各博覧會賞牌受領ノ最良髪油

營業品目

香なしみやけ油　すき油　除垢粉

みやけ香油　ビンツケ　絹綿實用洗粉

香入みやけ油　髪洗粉　島の春　粉末石鹸

冬シラズ　墨拔洗粉　其他洗濯用品等

高評嘖々

東京市日本橋區蠣殼町二丁目十五番地

みやけ油製造發賣元 木村三宅堂

電話浪花六百二十番振替口座八七五一番

代理大販賣所、有名化粧品、小間物、藥種店等にあり

女(甲の三)



天賞堂製作品價格一斑
(1) ダイヤモンド入 十八金製價五百圓
(2) ダイヤモンド入 十八金製價三百卅圓
(3) ダイヤモンド入 十八金製價二百十圓
(4) ダイヤモンド、眞珠入 價百七十五圓
(5) 牛肉眞珠入十八金製 價十五圓
(6) 眞珠入十八金製 價十八圓
(7) 眞珠入十八金製 價十二圓
(8) 眞珠入十八金製 價二十圓
(9) ダイヤモンド入 十八金製價九百圓
(10) ダイヤモンド入 十八金製價百二十圓
(11) ダイヤモンド入 十八金製價三十圓
(12) 白サフヤ、ルビー入 十八金製價十圓
(13) 眞珠入十八金製 價十圓半
(14) 眞珠入十八金製 價十八圓
(15) ダイヤモンド、ルビー入十八金製價廿八圓
(16) 色サフヤ入十八金製 價十四圓
(17) 眞珠入十八金製 價十五圓
(18) ダイヤモンド入 十八金製價四十圓
(19) ルビー入十八金製 價八圓五十錢
(20) 眞珠入十八金製 價三十圓
(21) ダイヤモンド、ルビー入十八金製價百圓
(22) ルビー入十八金製 價十八圓
本圖は本堂職工場に於て製作せる多數の指環中特に寶石嵌入の一斑を揭げ大小形狀に據り概價の標準を知るの一助となせるものなり此他美術彫刻指環印面付指環等を始め貴婦人用としては根掛、簪、櫛、笄、眼鏡、襟針、襟留、帶締、[illegible]鎖、時計鎖、同提物等に至る迄悉く現時流行の粹を抜き專ら品質の優秀と價格の低廉とを主眼とし以て斯界先覺の實を擧げんを期す冀くは愛顧諸君多少を問はず高需の榮を給はらんことを
天賞堂本店
東京市京橋區尾張町二丁目
電話新橋特長三三三〇長三三四〇長三一五三
振替貯金口座番號東京五五
大阪支店●東京神田出張所●橫濱出張所

花の春



武田壽筆

女(乙の一)

東京帝國大學文科大學講師
文學博士　佐佐木信綱君著

和歌入門

全一冊洋裝四六判上製
紙數二百八十餘頁

正價金五十五錢
郵稅六錢

此書は和歌の教授に多年の經驗ある佐佐木先生が、初學者の手引の爲に著されたもの。穩健な說を懇切に述べ引例も豐かで、誰でも本書を讀むと、知らず識らず歌心を養ひ、歌の世界に入つて歌の眞味が解り、歌が詠めるやうになる。本書一冊あれば、古來の歌論の書や多くの歌集を見ずとも、古來の歌論の精神古來の歌人の眞髓は含められてある。併し本書は、古人の說や古人の作の註解や評釋では無くて、先生が自己獨特の經驗から自得された所を述べられた初學者の道しるべである。男子にも女子にも、老人にも靑年にも、初學者にも、多少心得のある人にも、凡てにわたつて和歌を學ばうとする人の爲に、此書ほど適當なものは他に無いと思ふ。

東京
本町
博文館

内藤千代子著

ホネームーン

希望に滿ちたる新らしき歲のはじめに、新らしき人々の爲めに新らしく草されし小說以上に面白き書物、その名を「新婚旅行（ホネームーン）」と云ふすでに愉快ならずや。内藤千代子の名は天下の耳目を驚かし前著スヰートホームは忽ち八版を重ねたりと知らば、誰でも讀んで見たくなるべし。まことに四十五年劈頭の快著！！

目次

▲ホネームーン▲華厳行▲紅筆▲若き日の戲れ▲華族系▲春の乙女▲學生の都會▲花つみの夢▲セラニアム▲コスモスの頃▲帝都の秋▲現代の人より▲鴻沼日記▲虚榮の都へ！▲帝劇の樂屋

杉浦非水君裝幀
定價六十五錢
郵稅六錢

發賣元　東京日本橋區本町三丁目　振替口座東京二百四十番　博文館

女（乙の二）

東京市九段下 神田今川小路二丁目十一番地

隆鼻術（はなたかくするほう）

午後 夜間

和田耳鼻咽喉醫院

電話本局一七三〇番

肺病

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇藥發明の爲め全治せる故世の同病者を救ひ度き志願に付望の方は郵券二錢封入にて御照會あれ

東京府下大森入新井村　川名助次郎

男女 ちゞれ くせ毛 赤毛

は何程の難毛も直に根本的矯正黒化良き艶の出る最新發見奇液を郵券封入申込の方に敎授し誓て美髮に治して差上升

東京麻布區材木町　岩阪澄子

◎診察時間毎日午前八時より午後九時迄院長診察

梅毒 症 りん病 生殖器諸病 神經衰弱症 婦人病 わきが ぢ

東京淺草瓦町 廿八淺草橋通 瓦町停留場横

中央醫院

ぢ 諸病 梅毒 横根 下疳 全身梅毒等 りん病 消渇

子宮病 血の道 月やく とまりたる病 子なき婦人

生殖器諸病 神經衰弱症

記憶力減衰 思考力症等 生殖器病 萎縮 遺精 早漏 夢精 發育不充分症等

わきが 色の黒き人 にきび ふきでもの

そばかす あれ性 皮膚諸疾患 いんきん たむし等症

▲病狀記し郵券四錢送れば其病を速治する專門醫中央醫院々長處方の特効新藥說明書を送る

東京市淺草區瓦町廿八番地 淺草橋通瓦町電車停留場横

中央藥院

女(乙の三)

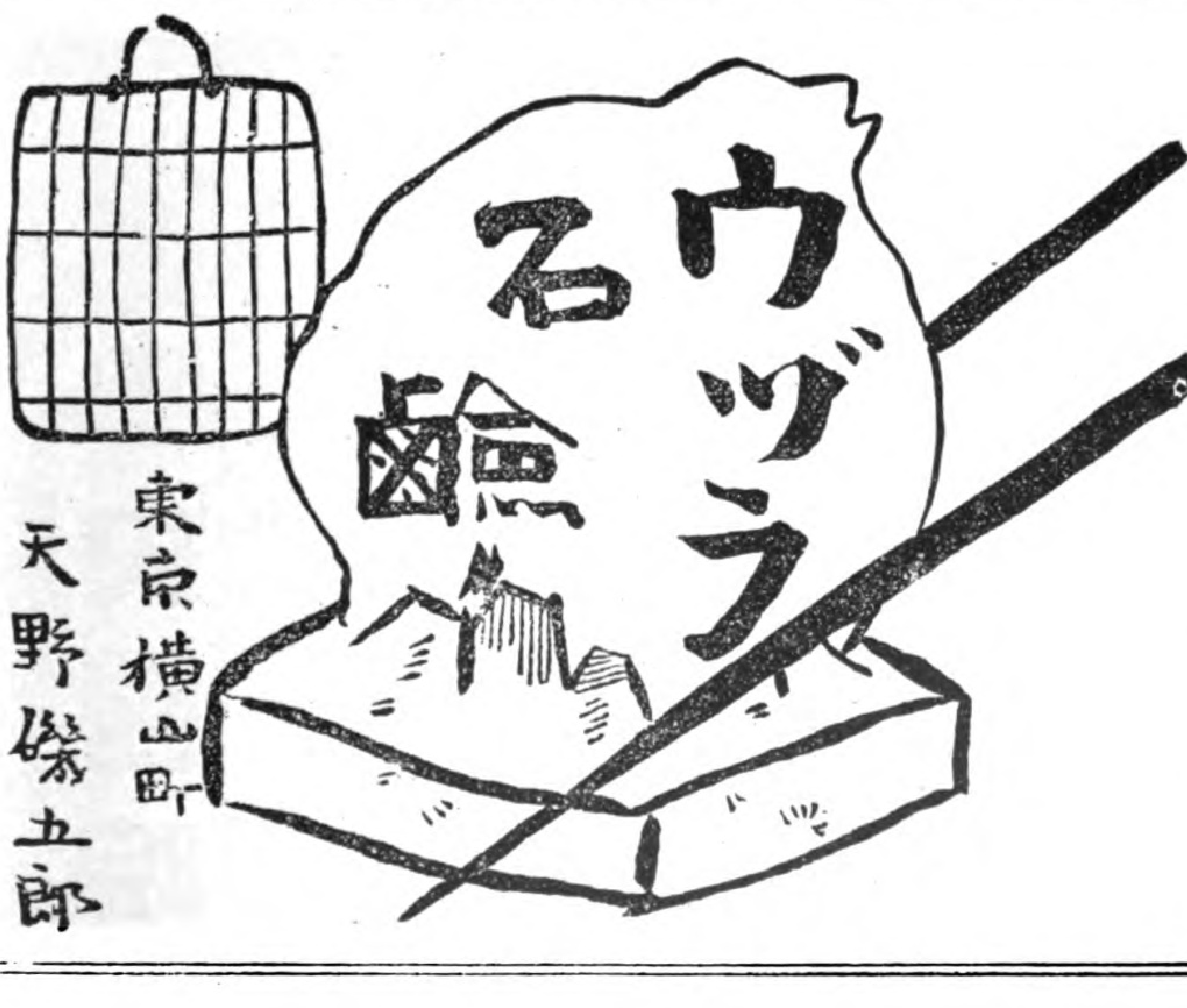
宮内省御用達

ヒゲタ醤油

伊國皇室御用

千葉縣銚子港

田中玄蕃釀造



女(乙の四)

紛蝶花



宮中御歌所寄人
中邨秋香先生著

文鑑 千草の錦

増訂八版

菊判和裝美本
定價金七十錢
郵税十錢

本書は男女學生の模範となるべき美文、紀事、紀行、論説、消息、物語體等總て數百篇を選出せられ之に加ふるに當代諸名流の文を以てせられ、特に上欄には要語數萬を載せ作習の模範と應用とに供せられしは他に其比を見ざる最良の文鑑也

帝國大學文科教授佐々木信綱先生著
宮中御歌所寄人 大口鯛二先生書

女子消息文のゆきかひ

鏑木清方意匠木版
上半紙摺
定價六十錢
郵税六錢

本書は現代歌學の大家佐々木信綱先生が多年苦心の末に成りたる消息文を優雅なる書體の師として鳴る大口鯛二先生が習字用にと特に大字に書かれたるものなり、先生が獨得の艶麗なる文章は簡單にして明瞭に而も文例盡く振假名付となし直ちに採りて實用に適す高尚優美なる製本は文と書と相俟ちて錦上更に花を添たるが如し、世の令孃淑女方必ず一本を机上に備へざるべからざる絶好の女子消息文範なり。

女子大學校教授 鹽井雨江先生著
學習院女學部教授 小野鵞堂先生書
女子大學校教授 中村春堂先生書

新體女子用文

大倉耕壽意匠木版
上半紙摺
定價七拾五錢
郵税八錢

本書は作者鹽井雨江先生が在來の書翰文の陳腐冗長、輕薄、無趣味なる弊を打破せんとの苦心に成るもの、詞藻の清新、眞情の流露、趣味の津々、眞に書翰文の好模範たり、上欄には諸種の手紙の作方をも示さる、書は斯道の大家小野鵞堂、中村春堂兩先生が靈妙の手腕を以て大字小字に書き分けられ特に振がな付にせられたる者にして其艶麗優美の筆は習字の龜鑑たり、斬新なる文章と相俟つて明治新時代を飾るの花たるべし、乞ふ江湖の令孃淑女方挾く机上の好伴侶として朝夕愛讀の榮をたまはらむ事を。

宮中御歌所寄人 中邨秋香先生作
學習院女學部教授 小野鵞堂先生書

新編手紙

女子消息文の手ほどき

男子用 木版半紙摺無類の美本
男女各一冊
定價四拾五錢
郵税六錢

本書は中邨秋香先生の新作にして書簡文獨習者の爲に通俗平易なる實用の文題百餘種を總振がな付にせられたるは他に其比を見ざる處、特に小野鵞堂先生が大字に書かれたれば習字の手本として此上もなき良書なり。

新編書簡文例

新編女子書簡文例

男子用 木版半紙摺頗高尚優美
男女各一冊
定價六拾錢
郵税八錢

本書の文例は現代の文豪中邨秋香先生の腦漿より迸出せしものなれば、一言一句津々たる趣味あり、繁に流れず簡に失せず、擬古に陷らず流俗に同ぜずして眞に今日書簡文の好模範たり、加ふるに書は筆硯界の巨擘小野鵞堂先生の手腕に成りしものなれば又習字の龜鑑として上乘の書なり、特に上欄類語數千句を掲げ書簡文を作習せんと欲る人をして自由自在に意を達せしむるの便に供せられたるものなれば、新編書簡文法式と相俟て斯道の完璧と稱すべきなり。

發兌元
東京市京橋區中橋廣小路六番
振替貯金口座四千百〇九番
前川文榮閣

(丙の一)

女(丙の二)



東京神田區猿樂町

女(丙の三)



一月　新春の献立

お正月中の御臺所の忙しさお雑煮お節、田作の献立より煮肴、煮物に至るまで一通りの鹽梅にては飽ちいお腹には喉へも通らねば色々と御工夫あそばされお臺所のお手際をお目にかけ旦那様の御感に預らんとする時

万上味淋は

是非お備になるべき唯一の調味料です、之を御使ひになれば、御趣向も御工夫もいりません、思ひのまゝにお好み通のおいしい御料理が直ちに出來ます

羽衣松



本多穆堂筆

瑞兆



河嵜蘭香畫

女（丁の三）

實用懷中時計景品付き大廉價發賣

時計の要は時間にあり時間正確ならざれば其効無し本品は有名なる瑞西時計會社特製品純ニッケル側にして構造は龍首卷細密斜子刻み機械向アンクル寶石入り四十時間持ち三十ケ年保險證明附き18形一千個限り破格大廉價一圓九拾錢にて販賣す前記の如く完全無缺精密堅牢の構造にして俗に所謂アンクル式即ち五光シリンの如き脆弱不完全なる機械と異り斯界に大完全時計の稱譽ある向アンクルなれば時間正確進遲振止の憂なし故に時間を重ずる軍人學生鐵道員等に最適當す



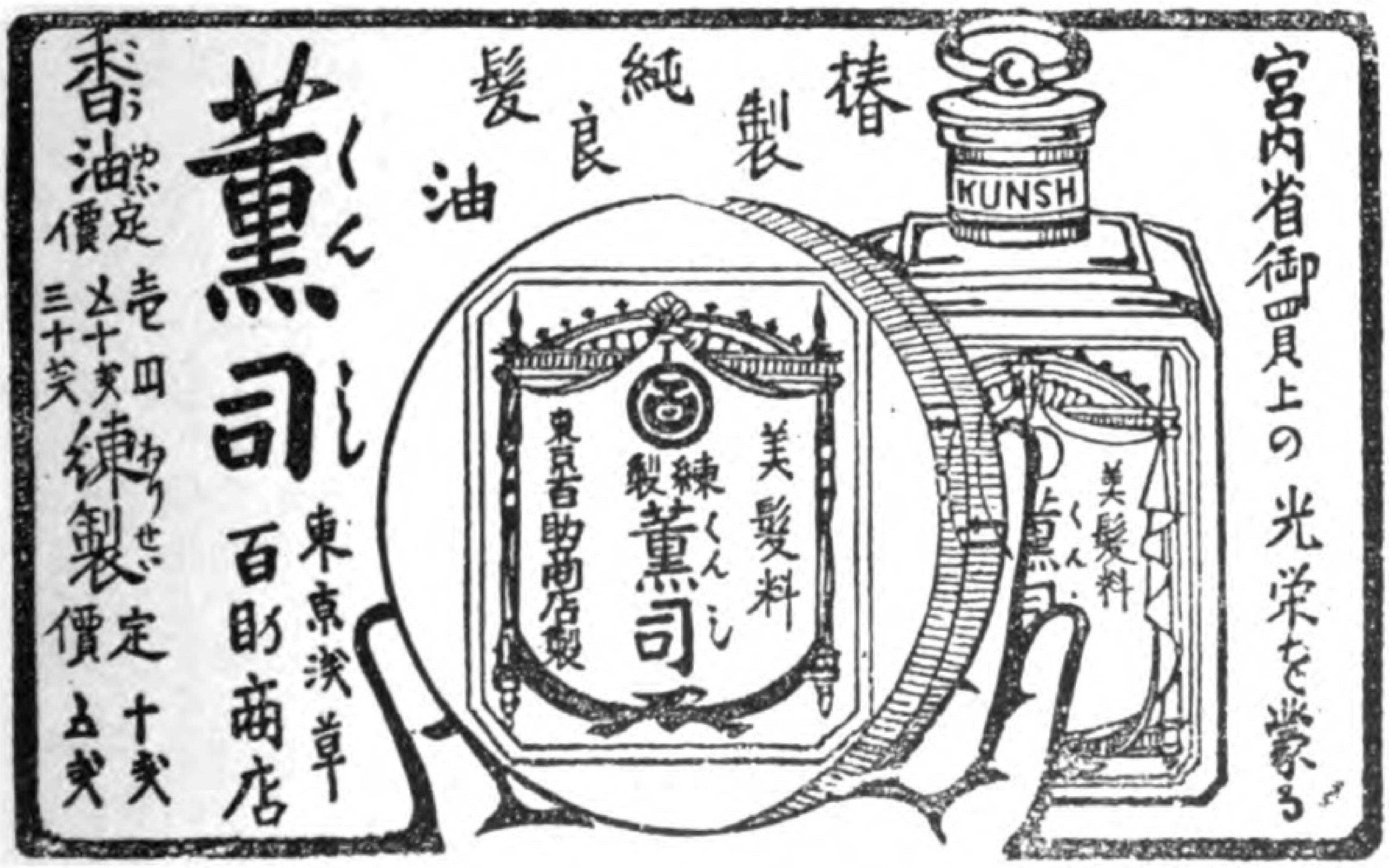
弊堂は新年御祝儀として女學世界廣告により御註文の旨御申越しの方へ景品として表面には本年の勅題松上の鶴又裏面には子の年の鼠を何れも美術的に彫刻せし時計用メタル(非賣品)及び舶來鎖の二品を進呈す●送料前金十二錢代金引換廿貳錢●滿朝臺は卅錢引換は四拾錢○爲替生玉局宛(定價表御入用は貳錢郵券を要す)

●注意 御入用の方は御來店現品御一覽の上品御購求を乞ふ尙遠隔の購客にして現品御一覽なく御購求後萬一貴意に適せざる時は他品交換亦は代金返戾す

大阪市東區上本町五丁目電車停留所前

貴金屬時計商 玉寶堂

謹賀新年



久邇宮妃俔子殿下



殿下は故島津忠義公の姫君なり

名流婦人



右　山尾子爵世嗣夫人　末子（公爵三條公美氏令妹）
左　藪子爵夫人　篤子（同　三條公爵令妹）

櫻痴全集

全三册

洋装三六判
函入上製美本
各册壹千壹百頁
正價各金壹圓廿錢
小包料各八錢

櫻痴居士の文は瀟洒にして簡明、殊に淡粧の中に絢爛の趣を具へたるは、江戸子質なる居士の特色を最もよく發揮したるものと稱して可也。居士生前作るところ、小説あり、脚本あり、史論あり、戯文あり、短文あり、長短宜しきに從ひ、繁簡趣を成し、才思の横溢せる、學識の卓越せる、當代實にその匹儔を見ざるの概ありき。唯其作品の多量、雄編大作にして、猶且散逸するもの多きを憂うべしとするのみ。今その粋を抜き、妙を集め、以てこの上中下三巻をなす、庶幾くは居士の彩筆に渇するもの、望を滿すことを得ん乎。

上編

あはれ浮世――東鑑拜賀の巻――小楠公脚本――關原譽凱歌――女俠駒形おせん――喜劇二人袴――芳谷義士譽――扇の恨――平重次郎――求女塚身替新田――新作夜の鶴

中編

人生X光線――斬奸――滑稽小説花懺悔――廻る因果――女浪人

下編

僞稱紳士――色慾二筋道――滑稽小説陰陽大和錦――車善七――仙居の夢――出放題――鳥居甲斐――高島秋帆

發兌元 東京日本橋本町三丁目 **博文館**

能筆は末代までの模範

書名	著者	冊数	体裁	定價
女子消息 文かきぶり	關根正直先生校閲 小野鵞堂先生編書	(習字兼用)全一冊	木版刷大和綴 半紙九十三枚	定價金四拾五錢 郵税六錢
高等女子 文かきぶり	小野鵞堂先生編書	全一冊	木版刷大和綴 半紙八十四枚	定價金四拾五錢 郵税四錢
手紙之文	小野鵞堂先生編書	(習字兼用)全一冊	木版刷大和綴 半紙八十五枚	定價金四拾五錢 郵税四錢
女子はがき用文	小野鵞堂先生編書	(習字兼用)全一冊	木版刷大和綴 半紙七十九枚	定價金四拾五錢 郵税四錢
新案はがき用文	小野鵞堂先生編書	(習字兼用)全一冊	木版刷大和綴 半紙八十四枚	定價金四拾五錢 郵税四錢
日用文字	小野鵞堂先生編書	(習字兼用)全一冊	木版刷大和綴 半紙九十一枚	定價金四拾五錢 郵税六錢
習字兼用 日用文	小野鵞堂先生編書	全一冊	木版刷大和綴 半紙五十五枚	定價金參拾五錢 郵税四錢
新撰女子用文	池邊義象先生著 小野鵞堂先生書	全二冊	木版刷大和綴 半紙二六二枚	定價各金六拾錢 郵税各六錢

東京日本橋 發兌元

販賣用電話 本局二六二〇番

女(戊の二)

女(戌の三)


最上醤油
元祖
上
開業貳百六拾八年

令嬢かゞみ



右 紳商八木久兵衛氏令嬢たよ子（仙臺）、左 實業家飯野盛容氏令嬢ゆき子（本郷）

令孃かゞみ



上段右、寺井糸子孃（下谷）、左、稲吉とし子孃（小石川）、下、鶴田芳子孃（本所）

文學士 阪元雪鳥君
文學士 鴻巢槇雨君 共
西村醉夢君 著

小杉未醒君
高村眞夫君 挿畫

新式解說 俳句大辭典

洋裝四六判總洋布
紙數六百餘頁
挿畫……八頁
正價金一圓三十錢 郵稅拾錢

從來刊行の俳句辭典甚だ多し。然れども皆德川時代の糟粕を嘗むるものに非るはなし。本書は著者等が新創の見を以て、四年の日子を費して編述したるもの、之を空前の快著といふも敢て過褒に非ず。本書の收容せる俳題は約八百種にして、別に精密なる繪畫一百個を挿み、天文、地文、動物、植物、人事等苟くも謳歌さるべきものは悉く之を網羅し、一題毎に例句十數を擧げて一々評釋批論せるのみならず、和歌、漢詩、英詩をも附見したり。殊に本書の特色とする所は(一)科學的說明なる一項を置きて、今日の進步したる科學的立場より、一々詳しく俳題を解釋して、最近思潮せる科學と文學との調和を企て(二)名稱の項に於いて異同を辨じ(三)歷史の項に於いては來歷沿革を述べ(四)俗說の項に於いては古來の傳說を擧げ(五)特色の項に於いては詩材としての特色を論評解剖し、以て月並主、舊套主義の迷信誤想を破却し(六)美學的觀察の項に於いては、意味、標象、記號を說き、且つ從來何人も企てざりし美學上の批判を下して、最も大膽に且つ親切に俳題の詩的價値を論評せり。されば本書は單に俳句辭典たるのみならず、和歌、新體詩、繪畫に志ざすものにも重要の參考書たるべく、一般讀者には最も趣味ある文明的辭書或は一般讀書としての功能をも有せるものたり。趣味を解せんとするものは急遽一本を購うて乞ふ之を座右に備へよ。

販賣用電話 本局二六二〇番　博文館　振替貯芝口座 東京二四〇番

女(巳の一)

家庭整理の指導

家庭百科全書

全部五十册＝每月一回發行

近時婦人敎育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尙ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、動もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には槪れ理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尙に過るか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に敎師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生達の爲にも如何に裨益の多かるべきかは、敢て多言を須いざることながら、人ごとに家庭に敎師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は最良なる家庭敎師たる目的を以て編述發行し、敢て婦人敎育の缺點を補はんと欲するなり。

和裝美本◉紙數各三百頁
石版彩色口繪一葉
挿畫十數個
正價一册金四拾五錢
郵稅一册金八錢

- 第一編 新家庭訓 三輪田眞佐子女史著
- 第二編 四季料理 石井泰次郎君著
- 第三編 裁縫指南 喜多見佐喜子女史著
- 第四編 和洋菓子製法 龜井まき子女史著
- 第五編 茶道と香道 水原翠香女史著
- 第六編 諸流生花指南 琴松巖文雅君・松幸齋理常君共著
- 第九編 禮式と作法 佐方鎭子女史著
- 第十編 惣菜料理 赤堀吉松君・赤堀峰吉君・赤堀菊子女史共著
- 第十一編 編物指南 三木とみ子女史著
- 第十二編 婦人の生理と衞生 牧野清子女史著
- 第十三編 敎育お伽噺 木村小舟君著
- 第十四編 女德の養成 前田長太君著
- 第十七編 女子作文法 遠藤ふみ子女史・松崎ふく子女史共著
- 第十八編 子女の敎養 棚橋絢子女史著
- 第十九編 家庭の趣味 文學士大森兜山君著
- 第二十編 家庭遊戲法 高橋忠次郎君・松浦政泰君著
- 第二十一編 書道手引 井田秀生君著
- 第二十二編 歌の手引 大和田建樹君著
- 第二十五編 新式化粧法 藤波芙蓉君著
- 第二十六編 室內裝飾法 近藤正一君著
- 第二十七編 衣服の調整 石崎蘆園君著
- 第二十八編 洋樂手引 前田久八君著
- 第二十九編 兒童訓話 母の知識 木村小舟君著
- 第三十編 洋食の調理 東京治庖會講師著

發行所 東京日本橋
販賣用電話本局二六二〇

女(巳の二)

婦女必讀の大全書

第七編 **育兒の務** 田村直寬君・朝夷孤舟君共著

第八編 **簡易治療法** 藤井靜子女史著

第十五編 **家屋と庭園** 内山正如君著

第十六編 **魚鳥家畜の飼養** 鹿野中晉君著

第廿三編 **刺繡術指南** 磯村大次郎君著

第廿四編 **摘み細工指南** 山田興松君著

第卅一編 **衞生と衣食住** 福田琴月君著

第卅二編 **東西名婦の面影** 高須梅溪君著

第卅三編 **婚姻のかゞみ** 河崎醉雨君著

第卅四編 **交際と談話** 福田琴月君著

第卅五編 **婦人日常座右銘** 高須梅溪君著

●第壹 國民の務め○國家に對する務め○國君に對する務め●第貳 少女の務め○父母に對する務め○學問の務め○健康の務め○友情の務め○忍耐の務め○勤勉の務め○兄弟姉妹に對する務め●第三 妻の務め○良人に對する務め○舅姑に對する務め○家政に對する務め○社交に對する務め○育兒の務め○婢僕に對する務め

第卅六編 **日用家庭理科** 一戸清方君著

◎第壹篇 風●空氣と呼吸衞生●氣候と人身●室中に於ける空氣の注意●天氣豫報と厄日●空氣利用の器械と翫具●音響と樂器●登山者の心得◎第二篇 火●住家と日光●人工照輝法●炊事に關する心得●煖具と衞生●温浴の注意●熱と仕事●眼と光線を應用したる器械●繪具と光線との關係●太陽暦の閏年と日蝕月蝕◎第三篇 水●飲用水●身體髮膚の保護と洗滌●營養と嗜好品汚穢水の排泄●水と娯樂●水力器械◎第四篇 土●地震海嘯及び火山●家屋と地盤●食物と生理●日用調度品と植物礦物●裝飾品と動物礦物●家畜家禽●水族館と魚類の二三●地球の引力と仕事◎第五篇 雷●落雷と豫防法●磁石と針と方角●人工電氣と交通機關●電氣と科學の進歩

第卅七編 **偉人の妻** 前田雪子女史著

何れの國、何れの時代に於ても偉人として世に立てるもの多く皆内助の功に待たざるはなし。本書は古今東西に於ける英雄豪傑の妻、大政治家の妻、大學者の妻、大敎育家の妻、大發明家の妻、大事業家の妻、大宗敎家の妻、あらゆる階級の婦人を收む、貞女あり、烈婦あり、才媛あり、閨秀あり、家庭の良婦あり、交際場裡の女王あり、糟糠の妻あり、賢夫人あり、尚附錄には偉人を惱ましめたる妻ありて、是れ亦一興を添ゆ、苟も良人を助けて世に偉業を企てしめんとするの婦人は、必ず一本を購ひ以て鑑を本書收むる所の偉人の妻に仰がざるべからず

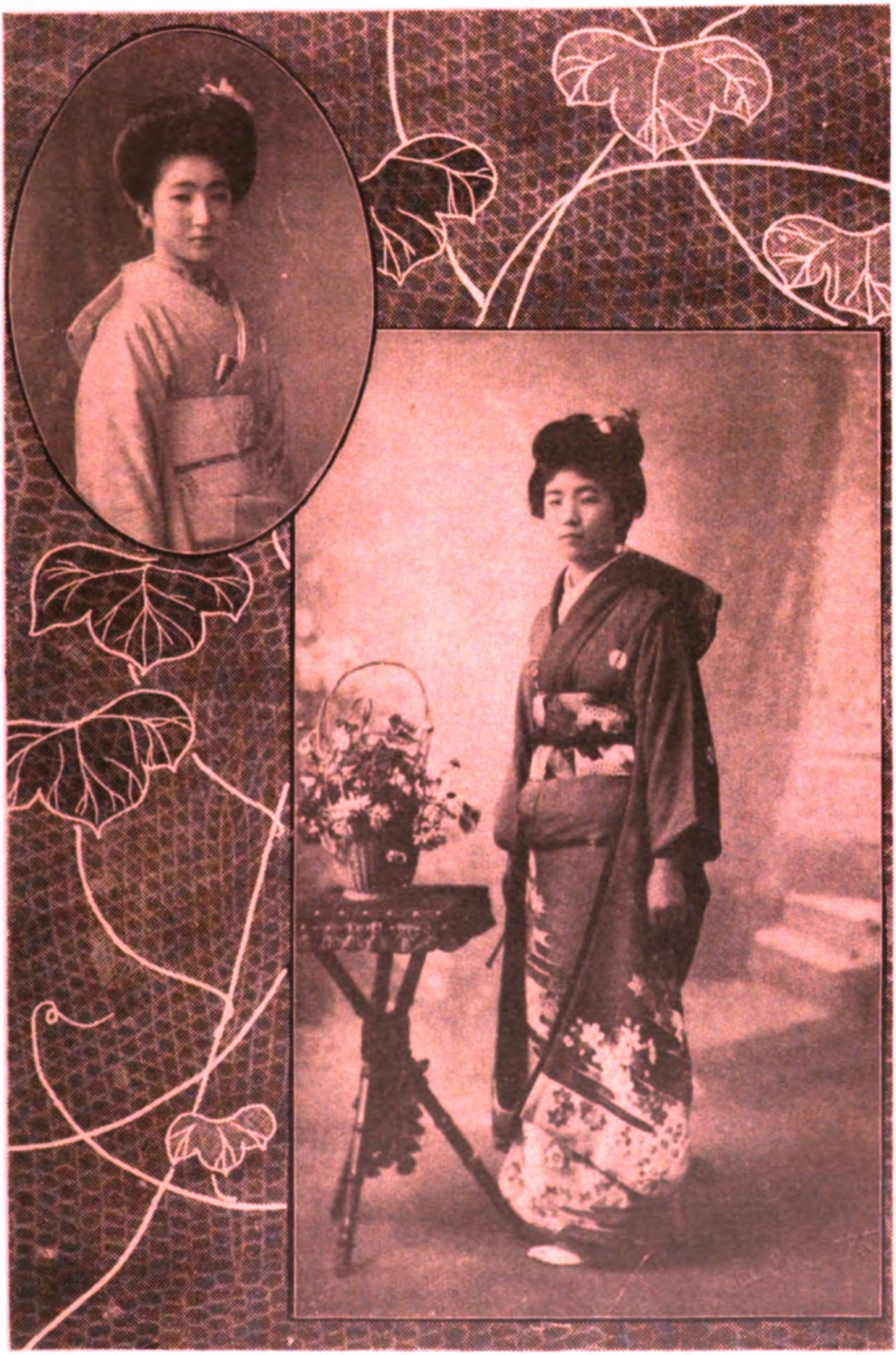
本町三丁目 **博文館** 振替貯金口座 東京二四〇番

女(巳の三)

花繚亂



花籠



右、時事新報社長福澤捨次郎氏令嬢その子

左、耳鼻咽喉科病院長鈴木重治氏令嬢愛子（學習院女子部出身）

爛然たる俳壇の巨觀

今井柏浦君編　中村不折君挿畫

最近新二萬句

■大高評

洋裝中判横綴
裝幀意匠清麗
紙數約壹千頁
正價壹圓
郵稅拾錢

柏浦氏が俳句上に一隻眼を有するは世既に定評の存し又我徒の呶々を容さゞる所なり。此書編者が新たなる努力に係り最も謹嚴眞摯なる選に依って既往三ヶ年間に於ける斯道大家鉅匠の作句其數實に貳萬五千餘を蒐集せるもの悉くこれ洗練の吟、精熟の句ならざるなく爛然として現代俳壇の一大偉觀を備ふ。加ふるに不折氏の俳畫飄逸の趣致を極めて光彩更に陸離たり。苟も俳諧に志す者文學を談ずる者豈に此書を逸す可けんや

今井柏浦君著

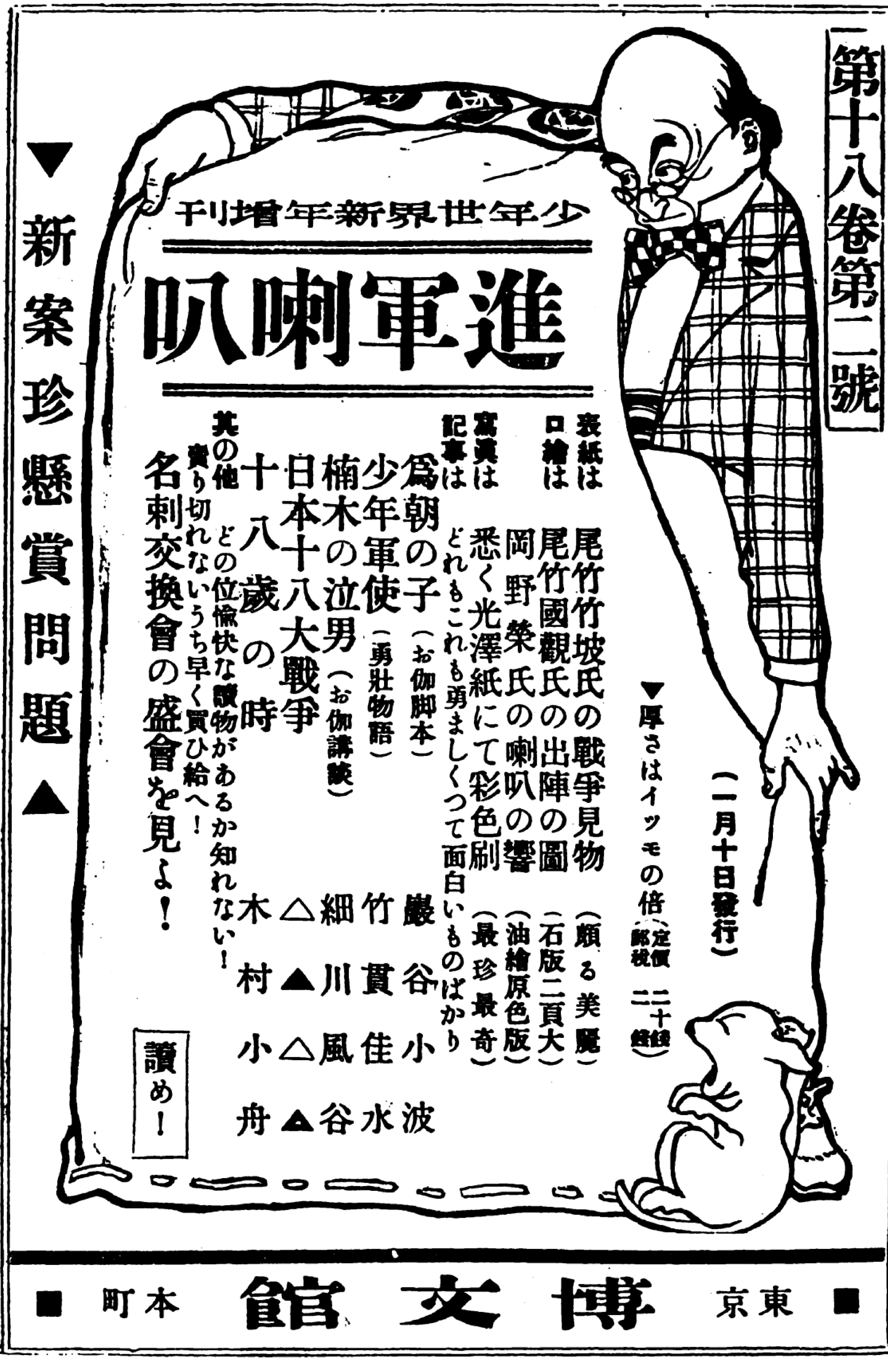
十二版■明治壹萬句　正價參拾五錢　郵稅六錢

八版■新選壹萬句　正價四拾五錢　郵稅八錢

四版■最新貳萬句　正價金七拾錢　郵稅十錢

東京本町　博文館　振替東京二四〇番

女(廣の一)


第十八卷第二號
少年世界新年增刊
進軍喇叭
表紙は 尾竹竹坡氏の戰爭見物（頗る美麗）
口繪は 尾竹國觀氏の出陣の圖（石版二頁大）
岡野榮氏の喇叭の響（油繪原色版）
寫眞は 悉く光澤紙にて彩色刷（最珍最奇）
記事は どれもこれも勇ましくつて面白いものばかり
爲朝の子（お伽脚本） 巖谷小波
少年軍使（勇壯物語） 竹貫佳水
楠木の泣男（お伽講談） 細川風谷
日本十八大戰爭 △▲△▲
十八歳の時 木村小舟
其の他 どの位愉快な讀物があるか知れない！
賣り切れないうち早く買ひ給へ！
名刺交換會の盛會を見よ！
讀め！
▼厚さはイッモの倍（定價二十錢 郵稅二錢）
（一月十日發行）
▼新案珍懸賞問題▲
東京 博文館 本町

女（廣の三）

文學士 久保天隨君著

作文資料 記事文鑑

世上幾種の美辭麗句集は、杜撰甚しくして、憑據するに足らず。圓機活法の類は、陳套に失して、役に立たず。こゝに於て、著者は、多年研究の結果、新式の排列法を案出し、新にこの書を編述せらる。通篇、數十の部門を分ち、あらゆる事項を網羅し、一字一句の贅語冗辭なく、崑山の玉、たゞ人の採擇するに任かす。この書を座右に備ふるもの、文を作るに際して、筆端毫も窘束せず、千篇立どころに成るの槪あるを得む。

全一册洋裝三六判上製紙數四百五十頁
正價七十錢
郵稅八錢

農學博士 稻垣乙丙君閱
工藤齋君著

新編 家庭の科學

抑も婦人の本務たる日常家事に於ける百般の事項は悉く科學の理に支配せられざるはなし然るに本邦婦人は槪してその智識に乏しきが爲め往々妄說を信じ鑑別を過り識らず知らずの間に不經濟、不衞生の動作をなすことあるは痛歎に堪へざる所なり著者工藤齋君は高等女學校に敎鞭を執るの傍ら理科と家事科とに連絡を付し兩者共通の資料を採て本邦の主婦たる人にその智識を授け以て婦人の本務を完全圓滿に遂さしめんことを欲したるもの即ち本書なり

全一册洋裝菊判
美本紙數四百四十二頁
正價金八十五錢
郵稅十錢

東京本町 博文館 振替口座東京二番

女(庚の四)

新郎新婦





右　紳商玉屋時次郎氏　同夫人　英　子

左　工學士宮本長治氏　同夫人　恒　子

花のおもかげ

森 律子孃







講談文庫

洋裝四六判總布特製‥‥紙數各四百五十頁

頗美本　正價（一冊）五十五錢　郵稅一冊八錢

- 武勇傳　全二冊
- 俠客傳　全一冊
- 大岡裁判　全一冊
- 出世譚　全一冊
- 名人譚　全一冊
- 烈婦傳　全一冊
- 武士氣質　全一冊



人情話（最新刊）

前編 後編　二冊

前編目次

- ◎政談月の鏡‥‥三遊亭圓朝
- ◎盲目吉兵衛‥‥松林伯知
- ◎實事譚蘇生‥‥邑井貞吉
- ◎酒井の婚禮‥‥邑井一
- ◎中川右馬之助‥‥一龍齋貞山
- ◎開國八景‥‥麗々亭柳橋
- ◎唐茄子屋‥‥三遊亭圓右
- ◎子寶‥‥柳亭燕枝
- ◎招猫の由來‥‥錦城齋貞玉
- ◎梅屋敷‥‥西尾麟慶
- ◎長崎の赤飯‥‥金原亭馬生
- ◎[illegible]‥‥猫遊軒伯知
- ◎涙と金‥‥邑井貞吉
- ◎芝濱の革財布‥‥三遊亭金馬
- ◎麹町三軒家‥‥一立齋文車

後編目次

- ◎[illegible]子小町‥‥神田伯山
- ◎搗屋無間‥‥三遊亭圓喬
- ◎梅川忠兵衛‥‥清草舍英昌
- ◎宮戸川‥‥三遊亭圓右
- ◎大阪屋花鳥‥‥一龍齋貞山
- ◎新朝顏‥‥猫遊軒伯知
- ◎さら屋‥‥三遊亭圓右
- ◎妙振出し‥‥一立齋文車
- ◎正直政談‥‥錦城齋貞玉
- ◎傾城瀬川‥‥春風亭柳枝
- ◎夜嵐お絹‥‥眞龍齋貞水
- ◎明烏‥‥橘家圓藏
- ◎返咲濱峯澤‥‥大島伯鶴
- ◎立波‥‥柳家小さん
- ◎おとは丹七‥‥錦城齋典山
- ◎有松屋美代吉‥‥三遊亭小圓朝
- ◎北雪奇聞‥‥西尾麟慶

博文館　東京本町

女(其の二)

哲學博士アーレン、ケー、ファウスト君著

社會の强敵

治癒し得べき豫防し得べき結核病

▽全一册洋裝四六判紙數二百頁△

▽正價參拾五錢　郵稅四錢△

本書は各方面より結核に就て研究し一般に之が智識を普及し結核の決して不治症ならざることを示せるものなり病人は讀て回復の曙光に接すべく他も亦之によりて如何に結核を撲滅して强健なる國民を造るべきかを知るを得ん、今や日本の結核死亡率は年々增加して一ケ年十三萬以上となり愛國憂世の士の看過すべからざる國民的大問題なり政治家教育家宗教家其他苟くも此の社會最大の敵と戰はんと欲する人は是非一讀の要あるべきを信す。

東京本町　博文館

◉見よ!!!若き男女の必讀書出づ!!!

「新刊」

結婚前後 女玉手箱

●本書は有益にして且甚面白し●定價送料共金卅四錢●振替卅五錢切手卅八錢

●目次●夫又は妻を選ぶ注意●財産と學問●血統の善惡●近親結婚●自由結婚●無理結婚●早婚の弊害●晩婚の弊害●夫婦年齡の差●美人ならぬ妻如何●妻の學問の利害●夫婦の相性●夫婦將來の和不和を前知する方法●如何なる結婚の最幸福なりや●結婚の習慣●法律と結婚●媒妁●見合の方法●結婚の贈答●結婚と衣裳●結婚式の順序●結婚當夜の心得●結婚後の心得●結婚屆●夫婦身體上の差異●結婚後夫の衞生上の注意十二件●結婚後妻の衞生上の注意十五件●月經とは如何●月經時の注意其他頗面白し●子のある法●子のない法●子を持つ月のくり方●姙娠せし事を如何にして知るか●姙娠中の心得●姙娠中の惡食物●姙娠中各月の變化●出産した時の子の大きさ●出産の日を前知する法●子を産む時の注意●如何せば安産なるか●生れたる子の取扱法●授乳の注意●出産屆●子宮病の話●梅毒の話●淋病の話●女子淋病の話●梅毒淋病の傳染を豫防する方法●夫婦の圓滿を害する種々の病氣の原因及療法●ある若き女のザンゲ談●出産の失敗談●ある女の日記等皆面白し右の外目次數十項、皆青年男女必讀の好文字委細本書に就て見よ。

發行所　東京市神田錦町三丁目　學友社書店　振替東京一六一八番

色白く美顏となる

私は色白くならんとて色々高價なる藥など用ゐましたが少しも効能なく甚殘念に思つてゐましたが、ふとした事より色も白くなりキメも細かになり殊に冬になると顏があれておしろいのつき惡しく泣きたい程でありましたが今は思ふ樣な化粧が出來る樣になりました。嬉しさの餘り色黑き方、赤過ぎる方、お顏の荒れる方に委しく御知らせ致したいと思ひますから御望みの御方は郵券封入御手紙下さいませ。

東京神田錦町三ノ二(せ號)　高柳こう子

女(辛の三)

趣味ある記事と花園の如き寫眞とは本誌の特有

日曜畫報

四六判四倍大本文（光澤紙）廿四頁●寫眞版及木版挿繪澤山●本文二色刷乃至六色刷

正價一册拾錢　郵税一錢

●雜誌や新聞にては到底企及し難き趣味ある記事と各國各方面に亘る繪畫や寫眞の着色刷は宛然紅紫白花の花園に絢爛を競ふが如し

●社會各方面の週間出來事を奇拔に皮肉に觀察論評し之に關する多數の寫眞繪畫は極めて鮮麗なれば新聞を讀まざるも時世に後るゝ憂なし

●本誌を繙けば茶前茶後の座談に窮する事なく新奇にして上品なる話題に無盡藏に特に旅行の伴侶としては天下無類の重寶なるべし

●毎週日曜日の發行なれば不絶全國書籍雜誌店の店頭を飾りて普く世人の要望に應じ得べく尚青年男女の讀物として推奬し得るは勿論なり

東京本町　博文館　振替口座東京二番

女（辛の四）

女學世界

花籠



第拾貳卷
第貳號

やまと撫子

玉かつら



夕食後、長官邸の新年宴會へとお出かけなすつた良夫を送り出してから急に家の内が靜になると お隣の歌留多のさゞめきがことさら耳についてくる、家でも花子にせがまれて双六やらかるたやら出して糸も打交じつて遊んで見たけれども 子供相手や女中相手では根つから面白くもないから、早く花子を寢し付てしまつた、いづれ今夜は良夫の歸りも二時頃になるでせう、今は九時を過ぎた所、長官邸ではあの大廣間に輝く花電氣の光りそうけて集つたフロックや 紋付羽織の紳士、春城さんの様なハイカラもあれば、良夫等は蠻カラの大將であろう、それに取すました高等官夫人の姿、其間を斡旋する鴨東美妓の妖艶な袂、花やかな席に興を添へるは餘興のくさ〴〵丁度今時分は愉快な興最中であらうに一人留守をまもる自分はつまらん等と思つて見る、毎年夫人同伴としてあるけれど、一度ものぞいて見た事もない、別に理由はない、道程が遠くて夜も遲くなるし、それに花子もある事だから自分ばかり飛で歩く譯にはゆかないんだもの。大宮様の様に

外交的の奥様で　幾度御産あそばしたつて、ご自分の出るお乳はわざとあげて終つてお子達は皆乳母任せの様な結構なお暮しならだけれど、とてもそんな眞似の出　る筈もなし、ホヽヽ、私も持參金でも、つて來る程の家へ生れて來たかつたわ。

エ、着物がつて……お氣の毒様、それから御心配御無用に遊ばせ、それは〳〵長官夫人は質素な御方、現代流行の見えつぼーとは雲泥の差ですもの、その部下に入らつしやる奥様方もたとひ簞笥の中からなる程おありなさるゝお方でも、たゞ一通りの紋服の禮装だけ、ブローチに鎖にリングに金ピカを

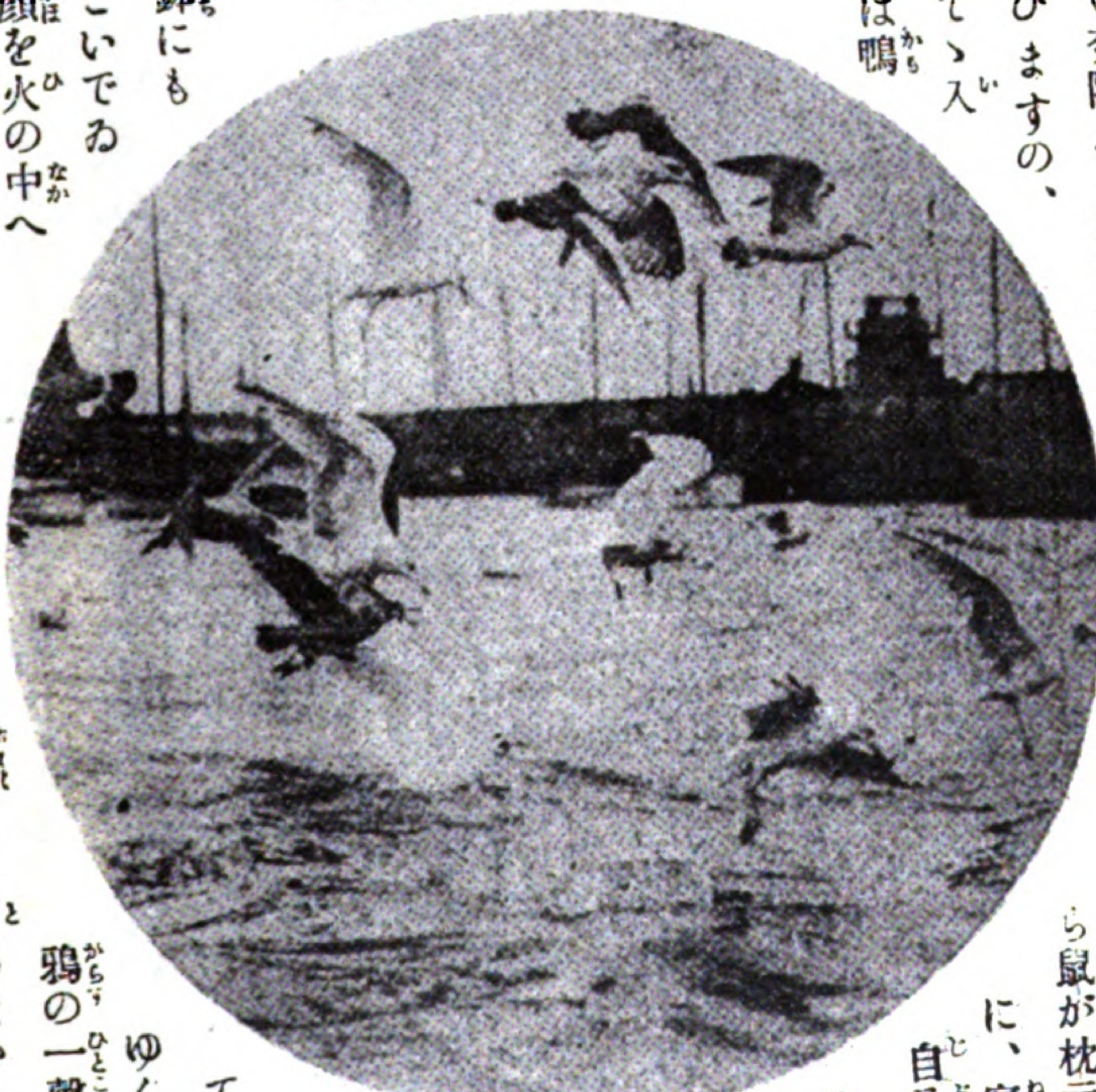


我宿の梅の立枝やみえつらん思ひの外に君か來ませる（最勝）

ぶら〳〵さして入らつしやる方は一人もないそうですよ、それで早藤様が新任で入らした當時、奥様が何でも一張羅のお立派な姿して入らして却て穴へでも入り度程に思ひなすつたつて、一つ話しに殘つてる位です　だからよくあり勝な衣服の競爭等とうるさい心配もなく、官位の上下はもとより長官邸でも御隠居様はじめ女中から書生に至るまで此時ばかりは少しもへだてのない　所謂無禮講、初めの内は禮儀いかめしき客人も次第に愉快な面白い渦卷きの中へまき込まれて終つて、さては腕角力やら綱の首引やら額おしやら笑ひさざめく歡樂のいつ盡くべきとも知れぬなかを閉會なさ

れるさうです、これも皆長官夫人が少しも官位を笠に着た顔色はなくて如才ない交際ぶりが主客共に滿足のことであらうと思ひますの、さて今夜の福引には何をあてゝ入らつしやるだらうか　去年は鴨と下駄一足であつた、拙手な銃獵者で鴨逃げただつてホヽヽヽ、而し御歸りの車上がさぞお寒い事だらう何しろ二里餘りを夜中の寒風に吹きさらされるのだから。

見ると糸は先程から火鉢にもたれたまゝしきりに舟をこいでゐる、アツもうすつてんで顔を火の中へ突込む所だつたあぶない、又前髪をジヽボケにしては後で泣顔するだらうのに。



海山の影幻の群りかな

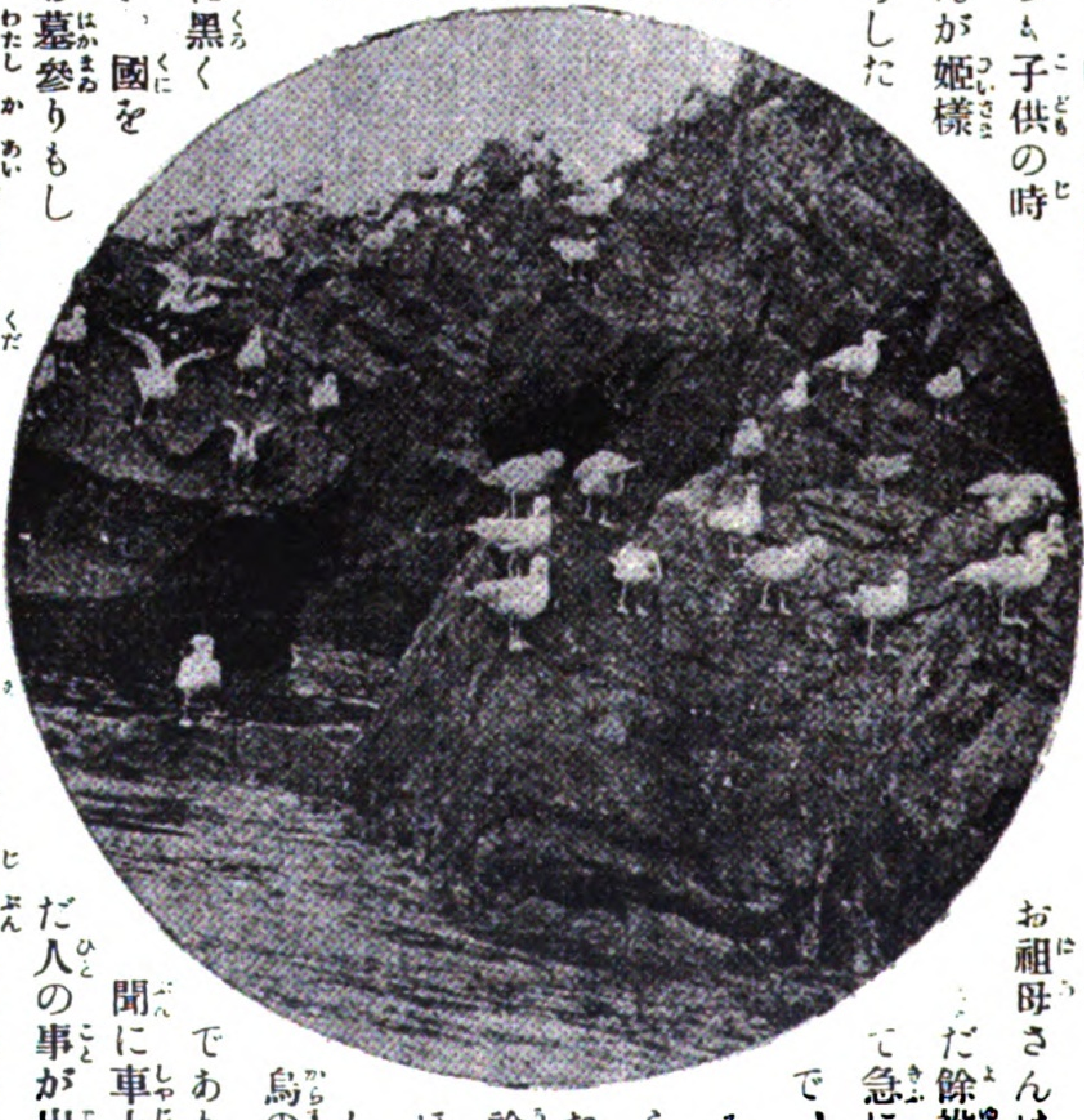
明朝は又早いからと先きへ寢ましてやる。大喜びで寢間へ入つたと思ふとはや高いびき靜になつたから鼠が枕元であばれてゐるのも知らずに、寢る間が極樂だ。

自分はまだ帶をとく譯にはゆかない羽織だけでもぬいで炬燵へ入りませう

はゞかりへと立つて戶のくゝりをはづして出ると外は晝の樣な月夜、お離れへつゞく長い廊下へ一ぱい月光がさし込んで葉もゆるがぬ庭の木は凄色にかゞやいてゐる夜は沈默‥‥折から更けゆく空に姿は見えず、さく樣な夜鴉の一聲又一聲、思はず身ぶるへして私はツト戶のなかへ入つた。

炬燵の中へ新刊雜誌を引き込んで讀んでゐるうち、

いつともなくよいあんばいにうと〱〱してゐた、暫しまどろむ間の夢にまざ〱〱と亡きお祖母さんの俤を見た、それが又いつも子供の時分よく聞されたお祖母さんが姫様附として御殿へ上つて入らした當時の腰元姿のお祖母さんであつた。さめた後もまだ目のあたり見る心地がして居らつしやるのではあるまいかとまさかそんな事がと思ひながらも四方を見廻すのであつたが、アアやつぱり夢だつた、壁に黒く自分の影の外は何者もない、國を出てからはや五年、其間お墓參りもしないんだもの生前あんなに私を可愛がつて下すつたお祖母さんだからきつと〱〱逢ひに來て下すつたに違ひない、お祖母さん〱おなつかしうございります。



春の海ひねもすのたりのたりかな

お祖母さんは私が十七の初夏にまだまだ餘裕のある六十二を終りとして急に死去されました、腦充血で、前掛もかけたまゝ襷を取る間もなく掃除しかけていらした箒をもつたまゝでおたをれなすつたのです、無論一服の藥も一回の注射もほどこす術もありませんでした、丁度ねぐらをいそぐ烏の泣聲の悲しい夕ぐれの事でありました、其三日程前の新聞に車上で腦充血を發病して死んだ人の事が出てゐました、その時お祖母さんは自分もこんなに一思ひに死度等と仰しやつて皆を笑わせて入らつしやいましたが、さては蟲の



なりかこふ籬の竹のよなこめて時なからに黄鳥のなく（隆子）

しらせといふのではなかつたかと皆顔見合せて更らに又涙をのむのでありました。

私は大勢の男子ばかりの兄弟の中に一人女と生れまして一家の寵愛をほしいまゝにしました、わけてもお祖母さんは掌中の玉の樣にして愛育して下すつたのであります、そして私の前半生を美しく色取つて下されましたお祖母さんには、三ツの秘藏品がありました、それはお宮仕への昔姫樣から頂いたといふ金の根卷きと、小紋の重ねと、も一ツは紫地へ御所車の裾もやうを縫で現はした大振袖の目さむるばかりの裲襠とであります、お祖母さんは口ぐせの樣に喜美がお嫁入りの時に私がはなむけとしてはこの寢卷きと裲襠　であるこの二品はお祖母さんの片身とおもへと仰しやつて、まだ私が七八歳の頃から引きのばす樣にして私の成人をまちかねてゐらしたのです。

そしてやう／＼私の髮が結べる樣になりますと、お祖母さんは手づから片肌ぬぎになつて結つて下されました、昔の御殿風のヅトといふ大きなお稚子髷が一

番お好きで、結ひあげてはとみかうみ、一人笑壺に入つてゐらつしやいましたけれど、其時分こんな大昔の様な頭してる者は私だけですもの、町を歩くうちにも見知らぬ人は皆珍らしさうに私の頭を振り返つてはおつれとさゝやいで通りますし、兄様や弟は眼がね〳〵つて呼ぶんですもの。もうそれがいやで〳〵、お友達がマガレット等に幅廣のリボンなんかさして活潑な姿を見ますと羨やましくつて自分ばかりはなぜこんなのかしらと思ふと悲つてお祖母さんを恨んだ事もありましたが、今から考へると實にもつたいなうございました。

又昔忘れぬお祖母さんは、素顔を人に見せるのは女の恥だつて、いつもよく朝夕に身だしなみのよかつた腰元時代のお話しをなされましたが、これには父様が反對なすつて、常には白粉等用ゐた事もありませんでしたけれど、どつか他所行きの場合はお祖母さんが自分の事の樣にして盛装をこらして下されたものです。そして京人形の様に着飾つた私をつれてあるくのが



水鳥を水の上とやよそにみん我も浮たる世を過しつゝ（紫式部）

お祖母さんの御自慢なのでした。衣服の好みも皆お祖母さん任せで、私の爲にはどんな異議にも打勝つて思ひ通りにせねば止まぬのでありました。父上樣が御上京の度毎に、御注文なさる〻品は皆私の身の廻りの物のみでした。それにまだ年々御自分に養蠶なすつては、私の爲によい衣を拵へて下されました、これ程迄私の爲に盡して下すつたお祖母さんでありますけれど決して愛に溺れる事はありませず一方秋の霜の樣な凜とした嚴格なしつけを與へて下すつたのであります。

女はいつ迄も家にゐる事の出來ぬ身體だから他家へ行つて後にも不自由せぬ位の心掛けがなくてはと仰しやつて十三の年からご飯たきを敎はりました　それからぼつ〱張物やら洗濯やら十五の年初めて高機をおりました皆お祖母さんが手をとらんばかりにして敎へて下すつたのです、又どんな極寒の朝でも食事の時冷たいご飯を終つてゞなければ溫かいのは頂けません兄樣達は大威張りで溫かいご飯喰べてる　側で私は女の務だつて冷たいのから先きへ喰べさ〻れました、つまり贅澤や放埒を戒めたのであります。


春もやゝ景色とゝのふ月と梅（芭蕉）

それにつれてお行儀も却々嚴しうござりました、夜寢るにも決して帶を離しません小さなくけ帶をきゆッと結んで寢みました、或年の夏でありました燒く樣な町の中をパラソルかしげて學校から歸りますとやれ〱と思つて袴をぬぎお包みは机の上へほり出して橫膝したま〻新聞讀んでゐますと後から入らしたお祖母さんは無言のま〻出してる方の足をいやと云ふ程

けつて御通りなすつたのですそれ以來私は横膝もした事がありませんでした　今はどうでせう、あの當時の事思ひますと實に〳〵お恥くつて一人心にせめられてゐるのです。

こんなにして嚴格な監督のもとに殆ど箱入りの樣になつて育つた私でありますけれどいつ迄も〳〵お祖母さんが玩具の活人形で滿足してゐられなくなりました暖かに春にあへば花も咲きさす鳥も啼きませう乙女が胸にみなぎる血潮も沸騰せずにはをりません、空想に美しい夢を慕ふて心はをどるのでありますものを。

當時父上が學校の敎へ子に秀才として注目されてゐた一青年がありました、その双肩のたくましさ、いつ見ても紺の單衣に紺の書生袴を裾短かに制帽に胸を張

芽柳になるや昨日は早や昔し（以兄）



つて活潑にお歩きなさるゝ男らしい氣風のはりつめてゐる姿勢は、よく西鄕隆盛そのまゝだと思ふてゐましたいつもお遊びに入らしては兄樣とも兄弟の樣にしてゐらつしやいました、其時分はたゞ好きな安樣とばつかり思つてゐました。

其後中學を終へて兄樣と共に御上京なされました

三年の後高中を卒業して御歸鄕なされました安樣、アヽ其時私は實に見違へて了ひました、三年間の都生活はすつかり安樣の蠻骨を消してしまつて全く鳶が鷹になつた樣にどこともなく備はる品位、をかし難い權威にうたれてはこれ迄の樣に平氣でお話しする事も出來ぬ樣になりました、眞正面にお顏見るのもおもはゆくつて胸のみ波立つのでありました。

安様も兄様をつかまへては。君『喜美ちゃんはすつかり大人振つて來たね女の十二三から十五六迄の變化は恐ろしいものだなんていふて入らつしやいました。

その頃からです、おあそびに入らつしやると私はただもう何といふ事もなしにうれしくつて〳〵心ではとりつき度程に思ひましたけれど表面はわざとよそ〳〵しく處女の誇をきづゝけられまいとつとめて落付いてゐました、そのくせあやしく心はさわぐのですもの其時分の私の心は自分でもはつきりと見とめる事ができません。

やがて安様は工科へ兄様は法科へと再び御上京の身となりましたが私の心には深く〳〵或物がきざみ込まれて了つて不思議に物思ひに沈む様になつてしまひました知らず〳〵の間に私は戀にとらはれてゐるのではないかと氣がつきました時のやるせない悲しさ。たゞ自分の心の奥深く〳〵秘めてはもだえてゐたのであります安様は無論夢にもご存じありますまひ、あんな方ですもの女の事など見るもけがらはしい位に思つてゐらしたのでせう。

四方の山垣外に低し庭の春　（禾水）



其間にもお祖母さんは一人私の結婚問題に頭をなやまして縁談がもち上る度にやつきとなつて入らつしやいました。

所が意外　不思議、田舎の資産家と云はれてゐる安様の御兩親から縁談の申込みがありました不肖倅も來年は卒業しますから是非御家のお孃様をと仰しやつて下すつたのです　式は卒業後としお約束だけでも決定て頂き度との御相談でありました。　私は燃え立

つ胸をおしゝづめて色にも出さず平氣を装ふてゐましたけれど、其成行き如何にと氣遣ふ心は千々にもだえてゐるのでありました。

父様はかねてより望みを囑いて入らした安様の事ですもの、一も二もなく御承諾の御模様でしたのにお祖母さんのみは頭を横におふりあそばして、頑として御聞入れになりませんといふのは、安様のお生家が平民だからであります名ある御家老の家に生れて、武士は食ねど高楊枝的の教育できたへあげられたお祖母さんの性格はとてもに開化され樣がありません、世が世なれば土下座もさすべき平民との縁組みは出來ぬとの一點張りですもの　自然こ　話しは破談となりかけてゐました刹那、お祖母さんの不幸、私の爲には殆ど犧牲になつて下すつたお祖母さんはあんなに樂しんでゐらした私の結婚をもまたず、逝つておしまひなすつたのであります、嗚呼！

けれどお祖母さんが突然の死は私の身の今日あらしめた基となりました一時中止となつたこの縁談も又々復活しました、そしてお祖母さんが餞の寝巻きと振袖の裲襠とはお祖母さんが思はぬ人の爲に飾る時となりましたが、お祖母さんは果して草葉の蔭からどう御覽なすつたでありませうか　でもきつと／＼私の心中をあはれとお察し下すつてそく罪はおゆるし下された事と思ひます。

昔のなつかしい追憶、知らぬ間に夜はふけました。

今朝春や詠み出づる歌も奥床し（紅鶯）



雪の朝

（鳴く甲斐もなき身振ひや雪の鳩）



追ひ羽子

(やり羽子や妻となろ身：みだしなみ)





店頭の會話

橋姫

▲半襟店▼

商品陳列棚のガラスを通して、色さまざまな刺繍半襟が、遠目の布ざらしのやうに並べてある。

夜目には色が判明ないといつて、細かい女はいやがるけれど電燈のひかりにパッと圖模樣を浮き出したところは、ふと足を止めてつひ見惚れるほど美しい。

小綺麗な商賣である、

女は、春衣にそろそろ氣惱みなし出し、ところへ、又慾が出て、こんな夜から半襟もほしくならう。

その繪模樣には、流行の色合をほどよく調和させて、意匠も一工風も二工風も、未だその上を行つた苦心の品が目をうばふほど澤山ある。鼠地へ細く二筋三筋の銀線で時雨のおもむきを現はしたもの、白地に濃淡の牡丹、赤地に櫻の花、籬ッ菊、寒牡丹、桔梗などとりどりに咲く四季の眺めを、うまく圖案したのが殊に目につく。

肩掛を顎ふかく、爪先きあるきの小刻みに通りかゝつた娘二人は、案の條たまぎるやうな聲を上げて その硝子戸にひきつけられてしまつた。

「あらー 綺麗だわれ」

『まッ』

と遅ればせに氣がついた方は、口と一緒に眼も見張つた。二の句が繼げないといつた風……。

『ちよいと貴方、あれはきつと何か意味があるのれ……そら琴の絃のかいたの』

『左樣れ』

と二人の目は一つになつてその半襟に集つた。金絲の十三絃に松の模樣ある 柱をあしらつた、なるほど意味のあるらしい物である、

しばらく二人は硝子の面に鼻をふいてゐたが、

『分つてよ』

と一人が云つた。

『分つて? ぢやア何』

『きつとこゝは小督をきかせたんだわ、れ左樣とおもはなくつて』

と、早熟た觀察を下した。しかし一人の方には譯が通じないらしく

『左様？』といつたきりでなんの反應もなかつた。

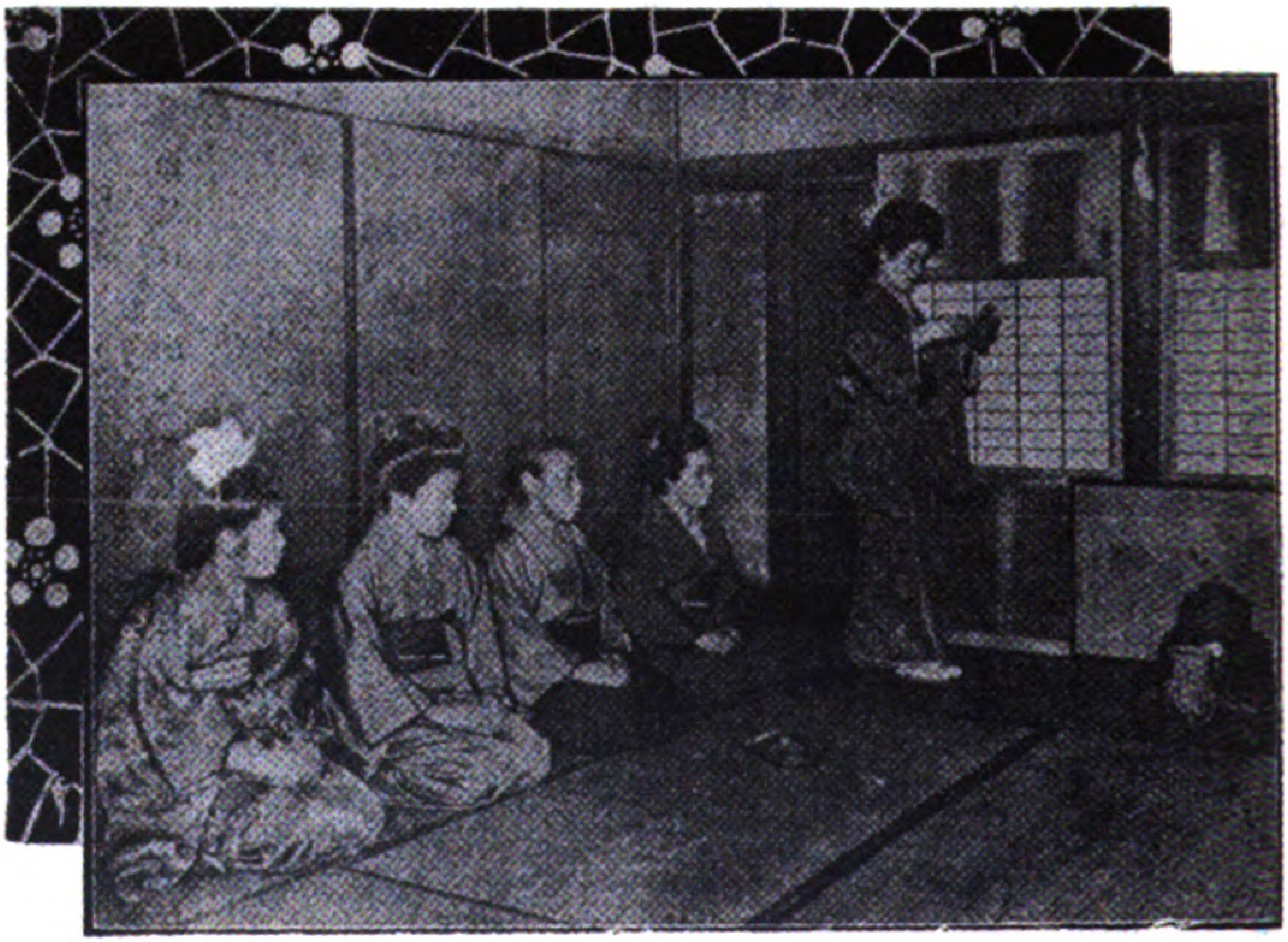
一人はしきりに、可愛いゝ博識をはこつて、お喋舌りをし出した。

『妾れ、この奏音樂殿の半襟展覧會に行つて見たのよ、半襟なんて昔からあつたものらしいのね、合せ模様つていつて天正時代には、それは贅澤な半襟が流行つたんですつて、何でも左右の模様が胸のところで合さつて一つの完全な模様になるの蝶々なんかの合せ模様がもてたんだつて事よ。

かういつて、兩袖をカッキと抱いで、『さ、さ、行きませう』と、一人を誘つて又カラコロとあるき出した。

▼繪葉書店▲

『不如歸』や『己が罪』の文句入りの繪葉書が、いつか鼠に引かれてしまひました、と云つて繪葉書店の主人は呵々と笑つた。



今年咲く若木の梅は鶯の妻ともいまだならずやあるらん（景樹）

『ホ・・・・』

と買物に這入つた、眼鏡をかけた婦人は綺麗な指を唇にあてゝ笑つた　女學校の教師らしい人である。

疊の上には、京都出來の桐を張つたコロタイプ物などが、散ばつてゐる、意匠は、鼠の次ぎには鶴の剝製をあしらつた圖などが、形をかへただけで數を占め、又しても目をさへぎる。

『こんなので、外に變つたのがありませんか』

『へ、その手で、日本物ですな』

と云つて、繪葉書店の主人は、ガタ〳〵箱をいはせて持ち出した。

『へ、これが玉章さんの』

といつて、鼠や鶴を掻きよせて、その間へならべた。淡色の粗畫であろが、その内になんともいへない趣きがある。同じ鶴を畫いても流石來俗におちない氣品がある。

『へ、これが半古さんの』

といつて、やゝ色の複雜した、風葉の『青春』や、天外の『こぶし』の挿繪で、一度馴染みのある繪をならべた。英朋や洗涯の浮世繪がかつた深味はないがどことなくなつかしい線と色とをそなへた繪である。

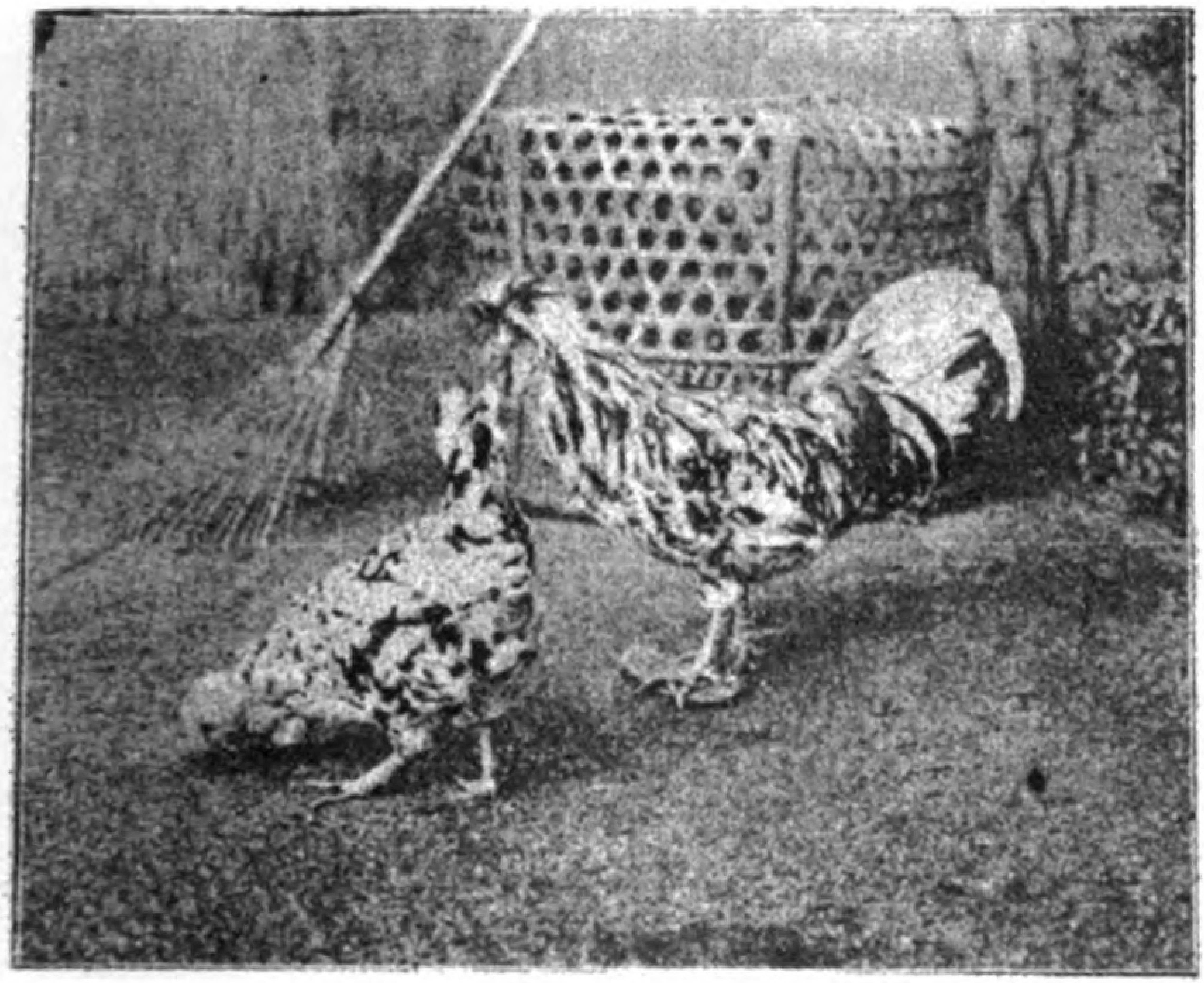
『それから、これが女流の方で、小蘋さん、花蹊さん、蕉園さん……』

といつて、主人は扇形に綺麗な繪葉書をすらりと列べた。

『ま、綺麗ですこと』

と婦人の客はその扇形をはづして、手　あげて見た。その手振りが亦いかにも小器用である。この婦人がもし女學校の教師なら、多分畫の先生か手工の先生にちがひない。

『へ、その蕉園さんのはいかゞ樣で……卻々面白い圖柄で、えい〳〵この方は女の畫家中で一番おえらいんださうでして、文部省の展覽會などでも始終賞をお取りださうでございます』



山里は萬歳おそし梅の花　（芭蕉）

と主人は、知るかぎりの智識で正直な説明をあたへた婦人はたゞニッコリ笑つて、ちよつと肯づいて見せただけで、花蹊筆の日の出の墨繪を取りあげた。

戸外を廣告の樂隊が、春早々のよろこびを煽つて通つたが、婦人客はやつぱり繪葉書を選び兼ねてゐた。

▼玩具店▲

ものゝがちや〳〵したことを、玩具箱をひつくり返したやうだと云ふが、玩具屋の前に立つと、全くその感がある。お馬が天井にぶら下り、でん〳〵太鼓鬼の面、捲卷自働車、模型飛行機さては兒童教育郵便おもちやなど燃え榮える紅葉のやうにならんでゐる。煉瓦のたゝき、見上げるやうな西洋館、大廈高樓の間に挾つた日本造の土藏など、もうみすぼらしいものに

なつてしまつた。其の銀座の大通りにあつても、玩具屋ばかりは、そんなにみすぼらしくもなく、小さい肩を張つて子供の世界を守つてゐるやうに思へろ。

柳の枝に未だ芽らしいものもないこのごろの日、厚綿の首巻をした老人が、孫も連れず只一人その玩具屋の店頭に立つて、まじ〳〵と眺めてゐた。

老人と玩具屋、この兩面の調和がかへつて面白く、なんだか物語りにあるクリスマスのお爺さんでも出かけたやうに思へた。

『やれ〳〵』

と老人は先づ感嘆して、進歩したおもちやに目を奪はれてゐたが、やがて白髯をしごきながら、よち〳〵と店に這入つて行つて、さも喜ばしさうに種々のお玩具に目を寄せては、倦かず見入つてゐた。しばらくすると、

『御主人、これは何んですかい』

と、一つの不思議なお玩具を指した。そのおもちやは 七寸ぐらゐのピール樽形から重れた人形がコロリ〳〵と、四十個も出て來やうといふ戯具であつた。玩具屋の主人は、それを鮮やかな手振でやつて見せながら、



憐活けて白氏文集ながめけり（楷亭）

『どうですお一つ、これは獨逸製でして極く最近しく輸入つたもので、へい』

と、又續けてやつて見せる。

老人は子供のやうな笑ひを浮べながら、主人の手の動くまゝに目を放さなかつたが、よつぽど氣に入つたものらしく、早速一個買つた。

それから、馬、鼠、象、鴛鴦などの絹天製の動物おもちやもあつた。草籠を脊負つた犬、布團の上の猫などの、おどけた顔が、いかにも子供に好まれさうに出來てゐた。

そこへ、上品な美しい婦人に手を引かれて、可愛い男の子供が勢ひよく這入つて來たが、老人を見つけると、

『お祖父さん、お約束のお玩具！』

と、形勢によつては、どうにでも荒れ出さうといふ風に、一寸鼻を鳴らした。

『お〻待つてゐました、玩具はチャンともう買つてあるよ』

「え買ってあるの、あゝ嬉しいな、見せて頂戴」

と子供はもうすつかり上機嫌である

『どつこい、さう容易くは見せられない、歸へるまでの樂しみに、お祖父さんが、あづかつた、あづかつた』

と、他愛もなくカラ／＼と笑ふ。美しい婦人もつひホヽと貰ひ笑ひをしてしまつた。

「お母さん、早く歸りませうよ、よう」

と子供は、いきなり婦人の手に縋りついてぐい／＼引つぱる。

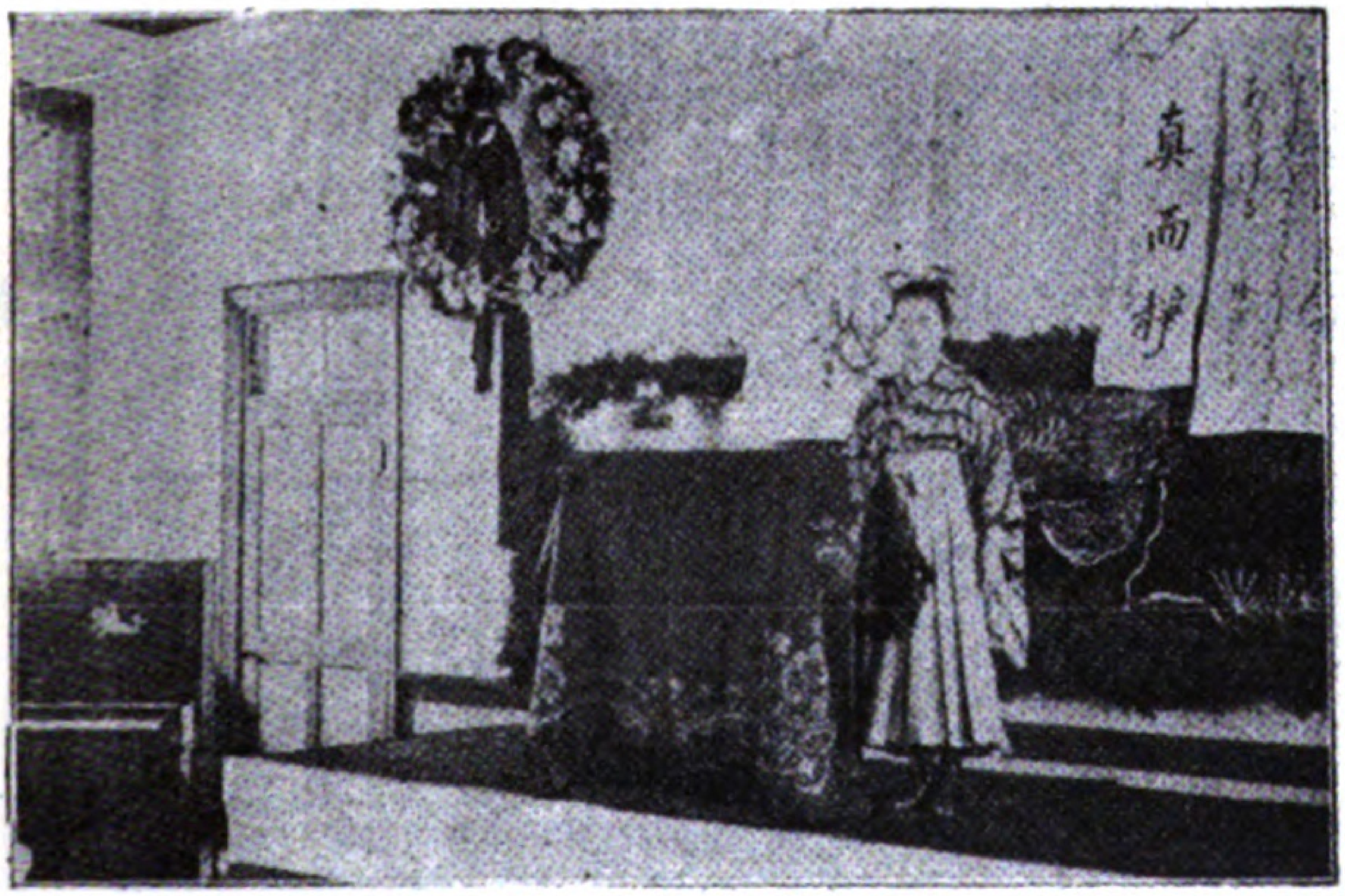
間もなく三人の姿は、煉瓦の上をさも樂しさうに歸って行つた。世に憂き運命もしらぬ人々の、スヰートな家庭、さう思へば買はれて行く玩具さへ羨しい。

銀座の柳は、こんな事からいくらか宛早くその若芽を吹くかも知れないと思つた、

▲花賣店▼

パチ／＼と木鋏の音、長閑な日に花屋の賣あこくはいゝものである。

室咲の來種の花が時雨の晴れ間、店頭をかざるなどは別に珍らしくもないが、うれしい。



京華高等女學校紀念式（其一）

根のあるものには、野梅、福壽草、寒菊、雪割草、山草の岩鏡、寒蕨と寒葱、そんなものがならべてある。このごろ、かういふ根のものが贈答用に重寶がられると、花賣店の主人が客に話してゐた。

その客といふのは、インバネスを羽被つた若い紳士、それとその若い妻君とであつた、

『その何でがす、どうも當節、まア床の間を飾らうてのは、やつぱり此奴にかぎりますな』

と花賣の主人は、野梅の一輪咲きを指した。

『ふん……』

と紳士はピンと延びた青軸の、枝の輪に畫いたやうな恰好のいゝのを立つた儘見下ろした。

『先づ新年のものとしての梅はしのづくり、摘み込みなどが素人向きで、いづれも接木でごわすな。それに福一

草、雪割草などを配置つた鉢を臺として、まア一圓から二圓位、同なじ摘み込みでも接木が古く判らなくなると七八圓からになります。』

『高價いものだれ』

『えゝ、その上となると、珍重さるゝの實生一……と申しますとつまり野梅ですな、これが亦一輪でも花が咲けば十四五圓以上際限なしと云ふ値段でさ』

『莫迦にせり上るんだれ』

『へえ、だけど旦那野梅となると、まア少くとも十四五年以上も栽培しなくつちや花が附か無えんで……高いも道理でごわせう』

と花賣屋の主人はその野梅の枝にちよいと指先を觸れながら語つた。

『その福壽草は靑梅產かれ』

と紳士は問ふた。

『いえ、以前は靑梅產の芽を珍重したものでごわすがな、このごろは前橋附近のものが多く東京へ參りますんで』

『さうかれ』



京華高等女學校紀念式（其二）

と紳士は、其の小さい鉢を手の平に取り上げた。

『貴郎、福壽草は上州邊からたくさん產るんですつて、ほんとでせうか』

と若い妻君は、背の高い良夫の胸のところで囁やいた。

『うん、上州地方では昔一人の女を產むと、すぐ樣福壽草の栽培をはじめ、桑畑なり空地なりへ盛んにつくつて、その得た金を年々積んで結婚費用に充てる習慣があるんださうだ僕の家でも今度子が生れたら、一つ福壽草でも植ゑつけやうかな』

と紳士は快活に笑つた。

『あら』

と若い細君は一寸狼狽氣味。

こんどは花賣屋の主人の方が聽手となつて、物識りの紳士の話を、へいへいときいてゐた。

湯豆腐や料亭古歌によまれたる　喬人

立杉の奥明しお山雪の塔　禾水

澁き草

夕かげ草

昨夜の木枯は、けろりと凪いで、小春の縁の暖かさ。石を投たら戞と音して碎けさうな、碧瑠璃の空高く、氣の輕い雀が、働き者のお内儀さん見た樣に、囀り囀り、濕つた土の上を獵つて居る。花壇の菊の芳烈な香りが、洗髮の鬢を、さはやかに撫でゝ行く。此髮の乾く間を、雜誌なんど開いて見るが、一頁も讀まないにもう一行〱が、すい〱と黒い棒に見えて、心は何時か別の事を思つて居る。一體何處の誰でせう？

遠い故鄕のお母樣や妹たち、散らばらに成つたお友達からの消息は、どれとて懷かしい想に胸躍らせて封を切る。其中に見知り無い文字の、「野薔薇より」として一通が、まさか刺を隱した謎とは悟らなかつた。

毒蛇！　思つてもぞつとする。鎌首を持上げて、ふつと吐く毒氣……。だけれどあんな脅迫に　縮まつて居る私と思はれては口惜しい。露身に覺えの無い事では有り……とは云ふけれど全く好い心持はしない。さやかなお月樣の面を、かすめる通り雲に過ぎないのだけれど……。

門の鈴がチリンと鳴つて、コスモスの垣のあなたにお靴の音。俄に百萬の味方を得た想。飛び立つ嬉しさ。

「お歸り遊ばせ」

とはしたなく手を突けば、靑疊の上へはらりとこぼれる髮

「やあ奧樣、又やつて來ました。」

良人の後から、のつそり顏をお出し成るのは戸田樣。あゝ、折の惡い。

惡戯者のオーソリチー、つゝましい新嫁の私の前へ



さへ、お祝とばかり、あんな厭な〳〵物を持つていらつしやるお方。多情多恨の葉山さんでは無いが、乾度覺え帳」に書き付けて、警戒しなければならないお人柄と云へば。

「あれでも世間の利口ぶる奴より、餘程性はいゝ男だ。」

と良人は仰有つた。何だか知ら無いが、一寸捉へ所の無い、ヌーボー式の御性格……と私は見て居る。

お二人のお帽子とオーバコートを、それ〳〵掛けて、お座敷へお布團お莨盆と、人手を借らず運んで置いて、召代へに立たれた、良人の後を追つて居間へ入るなり。

「あなた。」

と心の弦が切れた想。ホワイト襯衣のお胸に取縋つた。





「おいどうした、しつかり仕ろ。戸田に冷かされるぞ、獨身者はお察しが無いからな。」

「でもねえ、厭な手紙をよこした者があるんで御座いますよ。」

「何處から？」

「出所が知れて居る位なら、何んでも御座いませんけれど、名前も何も無くて、今日の午後日比谷まで出向かなければ、危害を加へるなんて書いて御座いますの。」

「弱蟲！　指でも差すなら差して見ろつて、云つてやるがいゝぢや無いか。氣の小さい。」

取り付く島も無い。さつさと羽織の紐結びながら、行つておしまひになる。

世の中には
隨分無謀の徒
がある、誰も彼も
常識を備へた、圓滿な人
であるなら、詩も無い劇も無



い、第一身の毛のよだつ出來事が、毎日新聞の紙を、埋めることはあるまい。
兇刄一閃。血！　犯罪！　名譽！
まさか....とは思ふが、必ず無い事とも云はれ無い。今日は何と云ふ惡日だらう。
ゆる〳〵湯氣の立つミルクに紅茶さして、持つて出たのは小半時してから、思ひ惱んだ顏色を、戸田樣に見られるのが辛かつた。
「まあお話なさい。お暇でせう。別に御用なんか無い筈です....時に奧樣、今の處女に貞操無しなんて云ふ論者が有りますが、どうでせうな。若し全くそんな風潮が....いや濁浪が女子の純潔を穢しつゝあるなら、僕は妻帶はしないつもりです。」
浮腰の私も餘儀なく敷居際へ坐り込む。
「まあどうして其樣な事がございませう、稀にはさう云ふ方も有るか存じませんが、夫こそ曉の星で....」
「さうですかなあ。そこで或男が配偶を見付けるとするですね、所が身分なり容色なり、學藝遊藝何一つとして缺けた處の無い、淑女を尋ね當てました、併し完全と見えるのは外見だけで、内心の缺陷を探ると云ふのは、非常な難事ですな。で一計をめぐらして其淑女に對して呼出しを掛る....。」



思はず胸をどつきりさせる。戸田様は徐ろに紙巻莨の灰を拂つて、而して紅茶の茶碗を取上る。小さな羽蟲がブーンと飛んで來て、うるさく顔の近くを廻り廻る、拂つても拂つても。

「其文句にです、何日何時、日比谷公園心字池畔の東屋に來られよ、胸間の白菊こそ余を紹介せん。此懇請に應せずば、計らざる危害御身の頭上に降り懸り、恥辱不名譽は、君一身に止らざるべし。

「まあ随分ねえ戸田様！」

えゝ憎らしい、良人もお家騒動の、若殿様見た様に大恐悦でいらつしやる。戸田様は悪執事と云ふ役廻り。



「怒らないで下さい、奥様、あなたを試みたんでは無いのですから。」

「いや飛んだお相伴さ、戸田君が試験をしようと云ふのは別人だ、もう婚約が出來て居るのに、非常に心配するからね。」

「二人前の智慧を絞つて書いた、芝居です、僕は奥様のやうな氣風なら、一も二も無く滿足するんですがなあゝ……。」

あなたの樣な方は大嫌ひと、之が良人の親友で無くば云つてやり度い。胸がぢり〳〵する。



「夏子一升買はなけりやすまさないぞ、さあ御馳走だ御馳走だ
戀草の、露も想も亂れつゝ〳〵心狂氣になれ衣の　巳の日のはらへや夕しての、神の助けも波の上、哀れに消しうき身なり。あはれ古へを、思出づれば懐かしや、行平の中納言、三歳は此處に須磨の浦、都へ上り給ひしに、其程の形見とて、御立烏帽子狩衣を、殘し置き給へども、之を見る度にいや増しの思草、葉末に結ぶ露の間も、忘られぬこそあぢき無や、形見こそ今はあだなれ之無くば、忘るゝ暇も有りなんと、詠しも理りや、猶想こそは深けれ……。

もの憂くなつて皷を膝に、ばち〳〵と火花を飛ばす埋火に手をかざす。床の白梅の香も冷たい、春寒の宵。

戸外ではどつと叫ぶから風の音、庭木は悲鳴を振絞る、ばら〳〵つと雨戸に當る砂礫。——十時半——良人は未だお歸りに成らない。

「厭な晩で御座いますねえ、火事でも無ければよろしう御座います、話に聞きましたが丸山の振袖火事なんぞも、恐ろしい風の日だつたと申ます。」

襖越しの次の間から、婆やがこんな事を云つてる。

「お歸りはお遲いだらうから、先へ寢んでおくれよ、締りや何かは、いつもの樣にして置いてくれゝばいゝからね。」

「はい、有難う存じます、旦那樣はまあどう遊ばしたんで御座いませう、殿方はお氣樂でいらつしやいますよ。私どもは外の事は忘れても、お芝居に行く事ばかりは、忘れつこは御座いませんがねえ　大さうお寒く成つて參りましたから、あなた樣お風邪を召しません樣に……夫ではお先へ御免かうむります。　お政どん、お政どん、お政どんてばよう、まるつきり正體無しだよ。」

年寄はくど〳〵つぶやきながら、政を促して寢る支

度に懸るけはひ。

颯と吹荒れる風に、リーンと鈴の空鳴。あれが待つ音づれなら、嬉しからうに……だけれど屢ゝ多い歌舞伎座……。

茶箪笥の前に片寄せた食卓の上に、取並べた夕餉の色々。花模様のお皿に、淺ましく横たはつた一片の肉もう食慾をそゝるスキートな香も色澤も、失ひはてゝ、あれではお隣の疲猫だつて、持て餘さう。切角の心盡しもあだに成つた。飛び立つ許り嬉しかつた歌舞伎座も……。

「しつかり磨いて、念入に洒落て置くんだよ、僕は大急ぎで、薄井の處まで行つて來るから。」

とソフトハットの横傾ぎも、私が申上なければ御存じ無く、周章てゝ往來の砂煙の中へ紛れ込んでおしまひに成つた。婆やは風呂を焚き付ける、髪結のお辰の所へは政が飛んで行く。二時間の後には身じまひ成つた、初々しい丸髷姿が、につこり笑んで姿見鏡の前に立つた。衣桁に懸けた無地お召の、褄を返へせば、はらりとこぼれる長襦袢の繪羽模様、帶は唐織の、良人から贈られた約婚の紀念。

「思出すねえ。」

と良人は之を見る度に仰有る……色ある衣の閃き、舞臺の外の見物と云ふ、あそこの棧敷の、配色の一種と



して、遜色は無いと自信も出來る配合。氣の早い婆やは踏脱に二足の下駄まで揃へた。十一時打つてもお歸りが無い。

「今の内に御飯を召上りまし、殿方の御支度は譯御座いませんから……私もねえ、若い時分お芝居なんて云へば、御飯もろく／＼咽を通りや致しませんでした。」

婆やの昔と若い時が始まつた、過去に生きて居る者は哀なもんだ差し當つて夫よりみじめな私の、心臟が刳れるばかり午砲が響いた悲觀しずには居られ無い。淋しい家の内にぼんやり電燈がついて夜に成つても、糸目の切れた凧は音沙汰無し。雀も塒は忘れないのに……。

又皷を取上げてポンと打つて見るが冴えて無い、朱緒を解いてはづした胴に、金沙を盛上げた、鴛鴦の蒔繪も、時に取つては見るのも厭、古金襴の袋に納める。おやお歸り！。飛んで出れば、後向きに玄關の締りをしていらしやる、



「私が致しますから……。」

と咽迄出たが口へ出ない。無言で外套脱がせ申して居間へ。何處で召上つたか、お目の邊がほんのり赤い。

「寒いね、熱いお茶！」

今突差された紙莨の、灰の中から細い烟がふすぶるのを、取るより早く夢中に投付けた。ぱつと散る火花。「えらい！君も一人前の女に成つた。大いに好い、詩的だ。」「待て居ましたわ」

「だらうと思つて、寒い夜道を歸つて來た。」

「あゝさうではないの、今朝のお約束！」

「え、お約束。さうだ！　さうだ！」

友のむつみ

（山里は正月おそし手毬唄）



甘き花

羽衣

春の野邊には百花咲き亂れ、百千鳥囀り歌ふ。再び來ぬ我世の春は。

卒業式の翌日、はや人妻となつた私は、餘りに短かかりし處女の時代が恨めしかつたけれど、かくも夫の愛を恣にする今の身となつては、空想にのみ憧憬して居た彼の時代より、遙に〳〵暖味がある。私はすみれ咲く野に、胡蝶の夢を結んで居る。

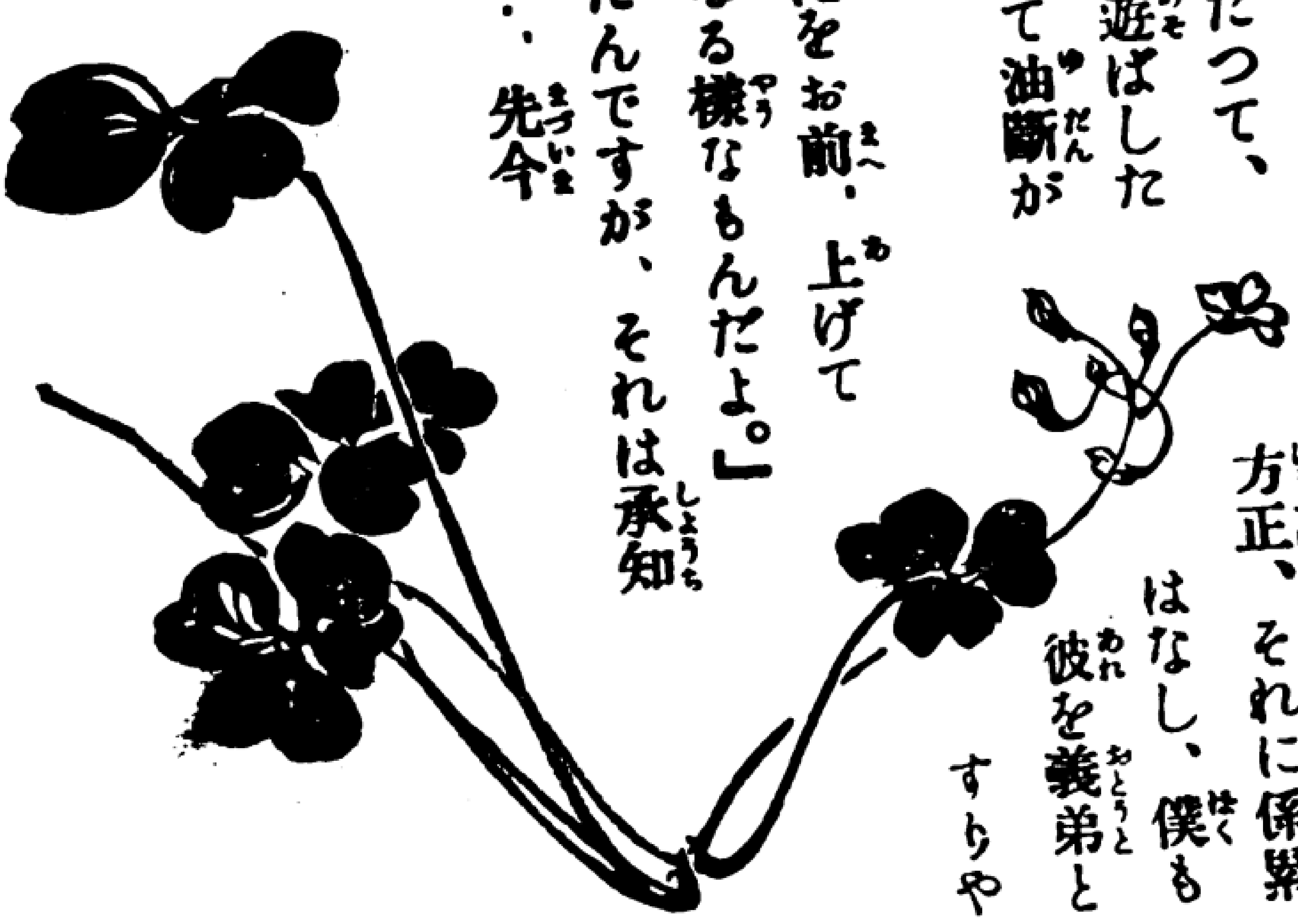
何だつて未だ二十にもならないでミセス、オホヽヽ、、極りが惡い。何しろクラスぢや私が先登第一、きつと皆さん何か云つて居らつしやるに違ひない、此度の同窓會にも行くまい。冷かされたり、からかはれたり、おまけに彼のいぢ惡の芳子さんなんかに遇つちや堪らない。

淸樣は度々、兄樣の處へ遊びに入らしつたが、私は遂しみ〳〵御挨拶した事もなかつた。いつぞや臺所ちや誰も居ないんで、仕方なしにお茶持つて出たら、もう極りが惡くてどんな方だかお顏どころか、大急ぎで兄樣のお側へお盃置いて、夢中で逃げ出して來たら、お二人で大笑ひ遊ばすのが聞えたつけ。

其後で入らしつた時兄樣に、君の妹をぜひ貰ひたいつて仰しやつたんだつて、まあ何時私をご覽遊ばしたんだらう、殿方つて油斷がならないものね。

「あんなねんねえをお前、上げて却つてご厄介になる樣なもんだよ。」

「僕もさう云つたんですが、それは承知の上ださうで‥‥、先今時あんなまじめな男は珍らしいです、學術はずつと優等、品行方正、それに係累はなし、僕も彼を義弟とすりや



仕合です。」

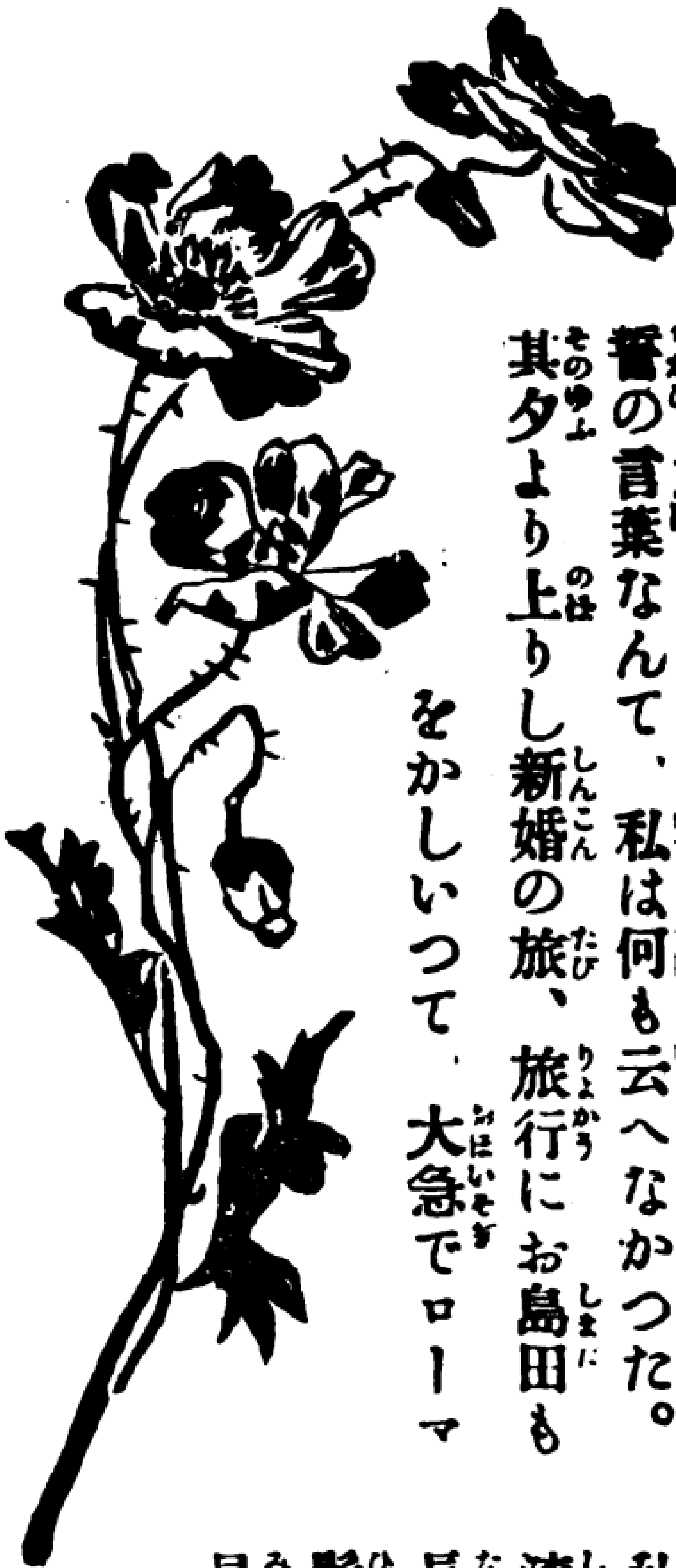
御両親と兄様とのお話を、そつと聞いた私の驚き、よく氣絶しなかつたと思ふ。

清様と兄様とは竹馬の友、小學校時代からずつとご一緒で、大學からは清様は醫科に、兄様は工科と分れて、清様は昨年のご卒業。

△

生れて始めて高島田に結はされて、黒地に私の名にちなんだ梅の振袖模様、帶は褪紅色地にお納戸のぼたんを織り出した厚板を、お立矢の字、俥を連ねて大神宮へと運ばれた。神主が彼方此方する、清様と並んで、誓の言葉なんて、私は何も云へなかつた。

其夕より上りし新婚の旅、旅行にお島田もをかしいつて、大急でローマ



に直して、髱を幅廣の純白リボンで止



める。縞お召の綿入に高貴織の半コート、前の俥に清様。大島絣の綿入に同じお羽織、黒の山高にインバネス、召して居らつしやる。後から母様と兄様。

新橋に着いて清様は、白キップを下すつた。母様つては

「梅は誠にねんねえでございますから、どうぞ何でもお叱り遊ばして」なんて仰しやるんだもの、羞しくつて母様の蔭にかくれてしまつた。清様は

「イヤ僕も子供です」つておやさしさうなお聲だしと私はそつとのぞいて見た。殿方にしてはお色は白い方、漆黒のお髪を短かく刈り込んで秀でしおん眉、切れ長のお目に金縁眼鏡、鼻筋の通つたお口のしまつた、お髭の無いせいか廿六のお年よりは二つばかりはお若く見える。

「國府津行が出まあす。」

驛夫の呼聲に驚いて、どや〳〵プラットホームへ。



母樣と兄樣とは『ちやあ宜しく願ひます。』汽笛は鳴つた。室内は只二人如何しませう、若い男の方と生れて初めて、母樣等のお顏が走つて行つた。夕日は窓よりさし込んで、室内は明るくなる、霞むは上總の山青き空、同じ水、沖の鷗はムラ〳〵パツト立つ。長閑なえ春の夕暮。目出度き門出を送りてか。

並んで掛けた二人は無言、きつと清樣も、極りが惡くて居らしつたに違ひない、うつむいた顏が熱くて熱くて、足下に目を落すと、私の空氣ざうりに並んで、桐の薩摩下駄に白茶の革緒がすがつて居る。

『梅さんは箱根は始めてなんだね。』

いきなり仰しやつたんで私はびつくりした。

どぎまぎして

『ハイ。』

『おやあ、ゆつくりと遊んで來ようね。』

『遠慮しちやいかんよ、僕あ一かう氣が付かん方だから』

『……』

『どうぞ宜しく、不束者で……』

清樣はきつとやつとの思ひで口へ出た、今時の女にも似合ない、意久地なしと思召した事だらう。私はどうして何も申上る勇氣が無いのか知ら、お顏をまともに見る事さへも……

驛々を送り迎へて、國府津に着いたのが六時、永き春の日は未だ暮れやらず夕陽當に箱根の山蔭に入らんとす、オレンヂ色の雲は遠く相模灘の天空に飛び、打ち



よする金波は黄金の花と砕く。電車はギーと音してきしり出した。一時間の後湯本に着く。兄様から福住へ電話掛けといて下すつたので、番頭が迎へに出て居た。女中はトン／＼梯子を上つて行く。長い廊下を曲りくねつて、閑静な一室に導れた。女中つてばちろ／＼私の所を見るんだもの、いやな女。お膳が運ばれる、アラ清様と差し向ひ、亦羞しい思ひしなくちや‥‥いろ／＼ご馳走があるけれど私は何にも頂けない。今日は朝からじた／＼して、お午だつてろくに食べやしなかつたもんでお腹は随分すいては居るが‥‥漸くの事で一せん呑み込んだ‥‥

翌朝はまた暗い内から目が覺めた下に降り洗面場には溫泉が滾々と湧き出して湯も水も使ひ次第、ゆつくりお化粧して髪も巻き直した。室に歸れば清様はホッと目をお覺しになつて、

『何時の間に起きたの？さぞ疲れたらう。』



『イエそんなでもご座いません。」

お寝巻にお羽織おかけ申せばアタフタとお降り遊ばす。お召し替へ揃へてお待ち申す。何だかお肌着お着せ申すのが羞しくて‥‥姿見鏡へうつる顔と顔目がかち合つて清様ニッコリ遊ばす

ご飯すましてから何處かへ行つて見様と仰しやるんでお供する。番頭が『お出かけならご案内致しませう』といふのを『イヤ僕あよく知つてるんだ』つてずん／＼行らつしやる、二人共コートなしでブラ／＼歩く、今日は二人ばかりが亦なく嬉しい。



名にし負ふ函嶺の險、空も見えぬばかりに折り重なつて谷川の淸流岩

を嚙みて砕け彼方の峯からはほがらかな鶯の音が……丁度休暇中の學生連がどや〳〵やつて來た、私はお後にかくれてついて行く。

たぎり落つる瀑布は數條の細きに分れて全く白糸をたれた樣。しぶきが顔にかゝる。



夏はさぞお涼しいで御座いませうね。』私の方から始めて口を利いた　それから　それといろいろお話して時の立つのも知らなかつた。

△

朧月夜の光は山の間から淡く射す。とう〳〵と流るる水音は春の女神のさゝやきか。靜な夜にあこがれ出た二人は坂道を塔の澤の方へと志す。

『梅さんは春の浮々した景色よりも秋の沈んだ方が好だらう。』

『でも、今夜の樣な晩は私大好でございます、』ゴーゴーと遠雷の樣な響は水力電氣の水が落ちるんだつて

『寒くはないの？　風引く〳〵といけない』てショール掛けて下さる。

花炬燵

梅咲きては新たなる年を知る、羅浮の佳人よ江南の美女よ、西南の花は雲の如く、東北の雪は花の如くに白し。

君ならで誰にか見せん梅の花
色をも香をもしる人ぞしる　友則

雲かと疑ふさくら花、西行もいひけんごとく、あたら櫻のとがの大いなる。

花の色は霞にこめてみせずとも
香をだにぬすめ春の山かぜ　宗貞

桃の花咲く山遠く、流るゝ水も曲水の彌生の空や蕎なき

臼の上に鶏なくかもゝの花　其村

おぼろ月の影いと美くしく、春の夜の一刻は千金にや値すらむ、梨花の散るさま雪にも似たりや。

世の中にとほき山邊の庵にこそ
うきことなしの花は咲けり　幸文

山吹は唐めかぬ花なり、八重咲きにほふ花の一枝に光源氏の古も偲ばれて。

山吹や宇治の焙爐の匂ふ時　芭蕉

紫匂ふ花かつら、ゆく水いとも清らかに、涙も綾どる舞の袖、春日の采女も花々し。散りたるもあまた見ゆれど咲いでんするまたながし藤浪の花　歌子

雲宮の妃、月殿の姫、浴みを出づるに似たる海棠のすがたや、九十の春を枝上に集めたるかと疑はる。

海棠に鏡立てたる化粧かな　子規



百鳥譜

曙内侍

その一

鶴は目出度き鳥の隨一なるべし。その齡千年を契りぬれば、松竹梅に添へし島臺の面影、昔も今も變る事なけれど、仙人の乘物となりて大空高く翔けりゆくは今は更にも見あたらず。こは地に自働車走り、天に飛行機飛ぶ大御代に遠慮して、我れから身を退きて隱居したるにやあらむ。さりとは和歌の浦にも鶴飛ばずなりて、赤人が歌のみ永久に遺りしこそ口惜しけれ。

鷹は其性いと雄なり。一度翼を搏つて鳴けば、百鳥みな平伏す。されど一夜の溫暖を受けし恩義は忘れず釋したる小鳥の西を向ひて飛べば、其日は餌を東に覓むといふ。是れぞ寔に任俠の粹、人間ならば男伊達なるべし。それに引換へて同じ親類ながら慾の熊鷹は、毎時も爪を磨ぎて眼を光らせ、貪婪飽くを知らざる風情、憎しとも憎し。

鷲は北海の天にかゝ、、なきてこそ、勇猛限りなく思はれて、大に英雄崇拜の感をも催すなれ。さりながら隣大國の旗章に此れを見ては、些か小氣味面白からざれど、安鉛筆の護謨の邊に眺むる時、亦た多少の哀憐無きにしもあらず。

鳶は鷲の一族なれど、性格も扮裝も甚と卑しきが上に、魚河岸に魚の腸を盗み、小兒の手より油揚を浚ふが故に、鳶など〻盗人の綽名に用ゐらる〻こと、自業自得ぞかし。



その二



烏こそ、抑も褒むべきか、貶すべきか、褒貶恐くば分ち難からめ。色黒けれど、其姓かしこく、悪口叩けど、却つて反哺の孝あり。金烏と云へば日の御子の徽章となれど、烏啼と云へば毎時も凶事の前兆となる。嗚呼誰れか烏の毀誉を決せむ。さあれ鏡山のお初は烏鳴にてお主の自害を悟り、秦川の女は唖々の聲にて遠征の夫を憶ふ。たとひ平凡の鳥なれども、稗史小説などには、無くては叶はぬ役者と見えたり。

世に鵲ほど嬉しき鳥は無からむ。七夕の夜に牽牛、織女の二星が、天の河を渡り悩める時、忽ち飛來りて翮を擴げ、難なく二星を渡らしむとかや。これに比ぶれば、家鷄の鷄鳴を作りて、後朝の別れに盡きぬ怨みを殘さしむるは、返す〲も罪多き所爲なり。鷄鍋に羹られて腹中に葬らるゝも、軈ては此等の應報にかあらむ。

鴨こそ甚とわびしけれ。萬葉、古今の昔は、己が名に『水鳥』のと云へる肩書まで添へられて、勿體振りたる狀なりしが、今は靑籠に詰められ、歳暮の贈答品に爲らるゝさへ愁てきに、靑頸は殊に旨しなど、心なき人に持囃さるゝは、何ばう辛きことならむ。さりながら喰はれむ爲めに飼養るゝ鶩の、その鳴聲よりその歩みぶりまで、一々物笑ひの種となるに比ぶれば、尙ほ些かは慰みぬべきか。

鳥の七面鳥は大牢にまさる珍味なれど、人の七面鳥は






厄介此にもなく、取扱ひにくきもの丶限りなるべし。

その三

同じ篁村に生れながら、鶯は歌を詠み、雀は蒙求を囀る。國學者と漢學者との相違さへ既に可笑しきに、彼れは信心奇特に經を讀めども、此れは浮氣三昧の踊を習ふとは、如何なる宿世の縁なるぞ。鶯の冠れる梅の花笠は、古今にも其由緒明かなれど、雀の冠れる竹の編笠は、そも／＼何人が畫き初めけむ。さるにても一は華美やかに面白く、一は剽輕にて可笑しきものなり

燕は囀り甚と喧しく、宛ら下町あたりの女に似たれど、二夫に見えぬ貞操は、大に賞すべからむ。鳩は三枝の禮を守りて、その擧動云ふばかりなく貴婦人に似て温順しきに、一旦緩急ある場合には、蹶然として我が軍の狀況を千里の外に報ずるなど、その殊勝さの程、クリミヤ戰役に赴きしナイチンゲール孃にも似たり。

孔雀の尾を擴げて自慢するは、貴婦人の晴衣着て自慢するを眞似るにかあらむ。貴婦人の洋裝せる姿は、孔雀の態を摸せるにかあらむ。誇者は權に死し、婦人は虚榮に倒る。彼の錦鷄を見ずや、その羽を



愛する餘りに、霖雨の時には栖居をも出でず居ながら終に餓死するを。



その四

鵬はその翼宛ら垂天の雲の如く、一度翅搏てばまさに九萬里を翔くるといふに、鷦鷯はその大さ掌中に隱すべき、常に生垣の天地に跼蹐するが故、獨逸語にては此鳥を垣王と云へりとかや。人間にも、裏店の一間を一國一城と心得て、妻に威張り散らす英雄もあれば、志を四海に布きて、知己を千歳の後に俟つ偉丈夫もあるぞかし。

春日うら〳〵、麗かなる春日に、麥畑より起ちて調節面白く囀りつゝ、大空高く昇りゆく雲雀は、實にこそ天使の名も空しからず、向上心の最優なるものならむ。秋風寒き末枯の野に、唯だ小走りに走る鶉は、少しも翅を搏つて飛ぶことなし。聞けば田鼠の化したるものとか。習ひ性となりたるにやと、お里のほども知

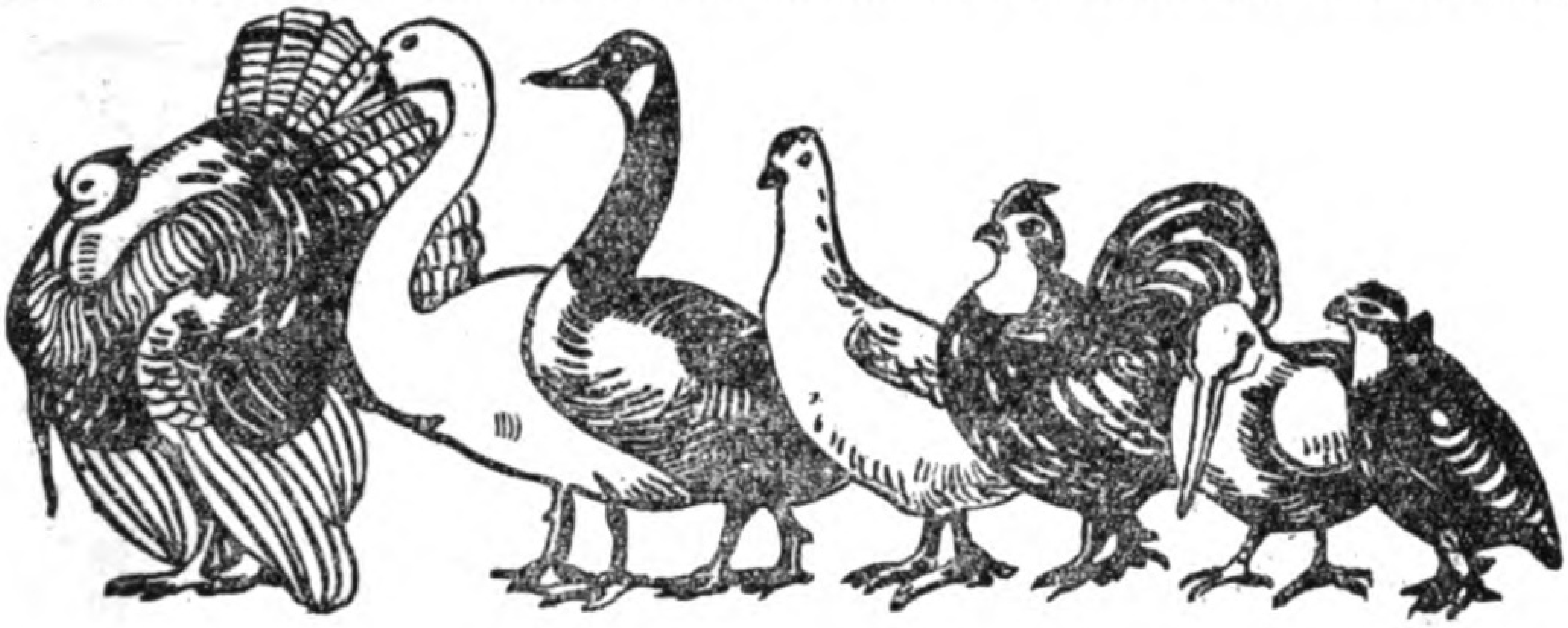
られて、哀れなるかな。

山雀はその身體小けれど、藝を教ふれば、輪を拔け、鐘を撞き、さま〴〵の所作を爲せど、信天翁は己が餌すら捕ふること能はず、偏へに雎鳩の魚を墜すを俟ちて喰ふと云へり。それにても人間の寄食よりは益ならむか、人間に無精者あり、獸類になまけものあり、而して鳥類に信天翁あり。何界にも斗屑者はあるものなり。

さりながら白鷺の、永き春日を終日に立ちつくすは信天翁の其れと異なり。片脚上げて拳作れるは、拂子の形にも譬ふべく、端然として動かざるは、覺者の坐禪を組むに似たり。彼の鶺鴒が短き秋の日影を趁つて、谷川の早瀬に尻尾を奪はれむとする危きには、比ぶべくもあらず。

その五



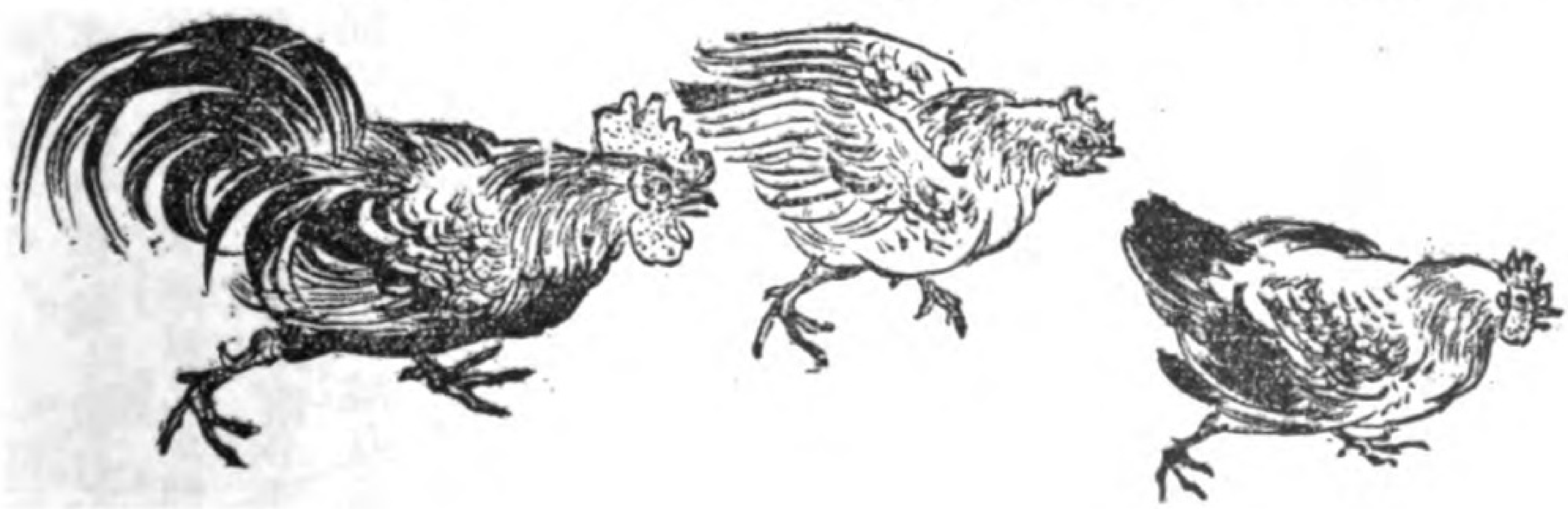


目に青葉山杜鵑初鰹と云へば、いさゝか景氣は好けれど、八千八聲血に啼く不如婦と云へば、云ふばかりなく痛まし、此は蜀の望帝國を出で、客死し、その亡魂化して杜鵑となりたるなれば、その色も、その羽も、その聲も、皆な悲痛悽愴なり我が國にも、これに似たる物語あり。昔、烏頭安潟と云へる人、陸奥の率土が濱にて死せしに、その魂魄化して善知鳥となり、雄がウトウと鳴けば雌はヤスカタと鳴きぬとぞ。哀れさは杜鵑にも劣るべからず。

鵯の鳴く音はヒステリー性の婦人の如く、その飛べる狀は狂女の直走りに走るが如し。此は如何なる人の怨靈なるぞ。

墨田川に浮べる都鳥は、業平をして端なく都の人を想はしめ、青艸湖に鳴ける鷓鴣は、顧況をして轗軻不遇の歎を發せしむ。たとひ和漢の差別はあれど共に腸九回の思ひありしなるべし。

秋漸く深からむとして、柿の葉の紅色に染まる頃、百舌の消魂しう啼ける、扨ては榛の枯葉未だ落ちず、夕風にそよ〳〵と戰ぐ折、鶫の淋しげに鳴けるなど、田園趣味の嬉しきものなら



む。殊には水も涸れたる澤邊より、俄かに鴫の飛びたつ狀、果敢なき心地の犇々と身に沁むるぞかし。

更に面白きは渡鳥の一群なり。甚と喧しく鳴きあひながら、大空遙かに飛來りて、やがて目指せる大木にことごとく宿りけるが、その狀態、宛ら村民の大擧して縣廳に押寄するに似たりと思へば、名さへ椋鳥なりけり。

その六



鴛鴦は夫婦の仲らひいと睦じく、一向離るゝことのなきに、山鳥の峰を隔てゝ寢るは、扨ても如何なる故ぞ。尾ろの鏡に映して遙かに慕ふも、却つて情を深からしめむ爲めか。

眼白の押しあひへしあひ、小さき籠の中にて仲好く睦れあふは、幼稚園の生徒などを見るが如く、實に可愛きものゝ數なり。

鳰の浮巣の、浮寢の夢は圓かならねど、夫婦相寄りて可憐しき雛を孵すよと思へば、苦しみの中にも倘ほ樂しみはあらむ。木兎引の木兎鵜飼舟の鵜こそ、唯だ苦しき思ひのみして、他の爲めには働くなれ。世の女にも、斯かる類





いと多かるべし。

千鳥の、逍灌に潮の干たるを敎へ、雁の、義家に敵の伏兵を示したるは、古來軍事上の大手柄なり。雁は自からたのむの雁と云ひながら、却つて漢の蘇武に頼まれ、音信を故國へ齎しゝも面白し。

四十雀は、一筆啓上仕り候ふと鳴くなれど、その文に認むる要事は抑も何事ぞや。行々子の、葭の中にゐて終日に囀るは、如何なることの起りたるか。今にして公冶長が耳をば欲しき。

その七

雉の我子を愛するは好けれど、蛇を喰ふは凄じき所爲なりさりながら鴆が毒には遠く及ぶべからず。聞くならく、鴆の棲むところは草木みな枯れて、唯だ毒風の吹きしきるなりとぞ。こは抑も世中のあらゆる怨恨の集合かと覺えて、咒ひのほどの怕しや〳〵。

インコが翅の美しさは、宛ら繪具にて彩色したるが如ければ、如何しても樹に棲む禽とは信じ難し。

鸚鵡は能く人語すれども、ペンギンが立つて最敬禮するには、なほ三舍を避けなむ。

今は昔、近衞天皇の御時、神泉苑の御宴の砌に、端なく宣旨を承りて、五位の位階を賜はりしが、それかあらぬか、此鳥、夜る頻りに身體を光らせて、折々人を驚かすとは怪しからぬ業なり。

人待つ夜頃に扉を叩く水鷄は甚と腹立たしけれど、山路に踏みまよひし折柄、呼子鳥に呼ばるゝ淋しさには、尚ほまさりぬべからむ。

鶍といふ鳥あり。その嘴は纔かに喰ひちがひたれば、世間の齟齬する



ことに譬へられて、可笑しさも、氣の毒さも殊更に深けれど、啄木鳥の舌は、鳥にありてこそ便利多けれ、此れが若し人間にありては、梟と共に必ず重き罪の人とやなりなむ。怕しや〳〵。



冬の池の水に流るゝ芦鴨の
　浮手ながらにいく代へぬらん　（讀人不知）

うら浦に明石の濱のはま千鳥
　立居は浪のこゝろなりけり　（季經）

吉野なるなつみの河の川淀に
　鴨そ鳴なる山陰にして　（湯原王）

蘆そよぐ隙風寒みかたそきの
　入江につたふをちの村鳥　（堀川）

置霜を拂ひ兼てやしをれふす
　かつみが下に鴛鴦のなくらん　（重保）

待人にあらぬ物から初雁の
　けさ鳴聲の珍しきかな　（元方）

鶯の聲なかりせば雪消ぬ
　山さといかて春をしらまし　（朝忠）

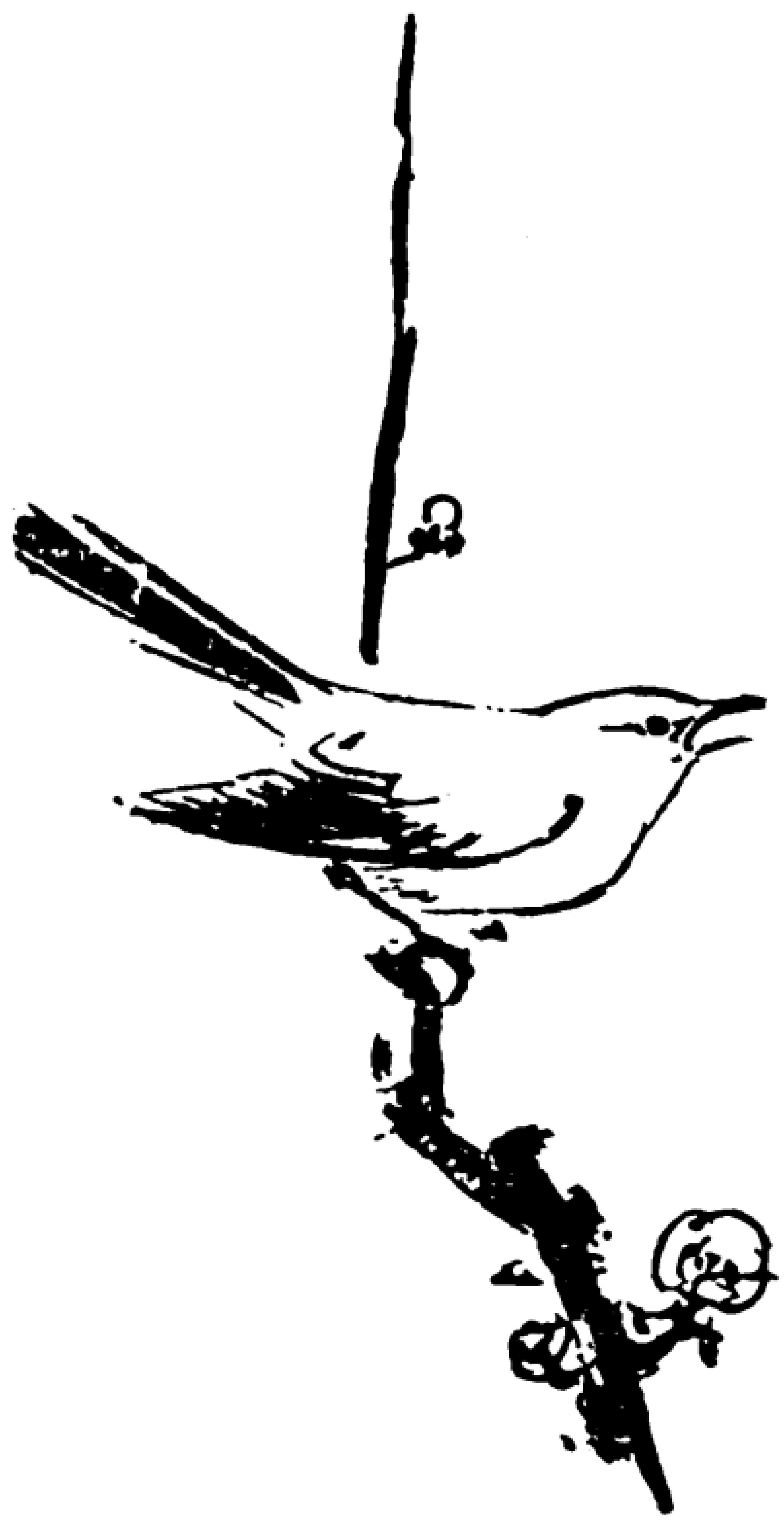
霜まよふ空にしをれし鴈かねの
　歸るさはきに春雨そ降る　（定家）

かすが野に朝鳴きじの羽音は
　雪の消まに若菜つめとか　（重之）

うら〳〵に照れる春日にひばりあかり
　心かなしも獨思へば　（家持）

夜をかさね待かね山の郭公
　雲居のよ所に一聲ぞ聞く　（持周内侍）

夏のよは槇の戸叩き門たゝき
　人頼めなる水鶏なりけり　（和泉式部）



臺灣のお正月

△開正の式

臺灣人のお正月は一寸風變りです。元日の朝未明に家長は開正の式を行ふ。之れは年々清國曆の示す所に依つて行ふので、前年は午前四時に式を始めても、本年は午前二時に取りかゝることもあつて、年々一定せざるが常である。

それで家長は先づ來るべき歳の曆を開けて見て

それで本年は午前二時に開正を爲すべしとあれば、家長は其の時刻に起き、衣を改めて觀音佛祖、土地公、媽祖、及び祖先の位牌を祀るのです。觀音佛祖といふは觀世音菩薩のことで、土地公は其の土地の神様、媽祖は女祖で四國の琴平様のやうな舟神様であります。

△神佛混淆

臺灣は神佛混淆で、右の神や佛をば門より入つた突き當りの壁際に祀り込んであります。祖先の位牌は向つて神様の左の方に同じ臺の上に安置して、水仙の花を飾る。そして置きランプは然るべく兩側に据ゑ、赤い蠟燭を點して、腦棗（アフレのこと）、生仁（南京豆を砂糖にでまぶしたるもの）、糕仔粹（粽の類）等を供へ叉竈の神様にも同様の供物を爲し、三つの茶碗に茶を注いで、之をもそれ〲前に供へ、さて最後に家長は線香の一束を取り、火を點して屋外に出で、手を扼して線香を捧げつゝ天公即ち天の神様にお禱をするのです。其の念ずる文言は斯うです。

昨年は天公のお陰を以て誠に無事平穩に暮したるが、何卒本年も亦た相變らず一家の無事に暮せる様偏にお願申します。

天公なる神様は、八百萬を統卒する所の神様であります。そのお禱が濟みたる後に、今度は神殿の前に跪いて神様に同様の禱詞を唱へます。次に祖先にも竈の神にも同じ禱言を念じて線香を供へます。これが濟むと、一家族のものは子供まで線香を取り出して、神様と祖先に供へます。それから篠竹の大なるもの三個を取り出して爆發せしめ、小さき爆竹は數限りなく鳴らせるので、正月は臺灣人の居住する附近は騒々しくて眠むることが出來ません。臺灣領有當時の如きは、音を聞いて土匪の襲來と早合天して騒ぎ廻はつた滑稽もありました。

△元日の御馳走

元日はお精進料理なのが普通です。そして先づ出來たお料理は第一に神様と祖先の前に供へて、後家族のもの共が一つの卓を圍み、長幼の順によつて着席していたゞきます。此の際食卓の下に爐を置いて情を溫ためるとの緣起を取るやうなゆかしい風があります。かくして家族は卓上に飾られたる精進料理を箸にし、砂糖や薩摩芋の入いた餅を食べて、食後は樂しく其の一日を遊ぶが、臺灣人の中流以下のものは小供まで賭博して樂しむのが多いやうです。

△年賀の禮

臺灣人も親戚朋友及び取引先の商店には年賀にまはります。そして主人が年頭に廻はれば、名刺はいらぬけれども、子供なり下男が代理を

薦める時は赤き紙に印刷した名刺を用ゐます。で年賀を受ける方では、一々客を迎へては茶を進め、盆に神前に供へたアラレ南京豆等を盛つた容器を(皿)出して客に取らせます。客は盛りたるアラレ等を摘みながら、喜むるものが子供なれば、學力は優等なることを望みますなど云ひつゝ摘み、又老人なれば、益々御壮健ならんことを祈ると云ひ、花婿なれば男子が早く御出來のことを願ひますなど言ふのが禮であります。

特に珍客が年賀に來た時は、砂糖を入れた茶を出したり色々御馳走もするが、併し只管辭儀するのが禮となつて居ります。親戚の年賀は大抵二日以後年頭に出るのが多いやうです。

△迷習と試筆

臺灣人は飯を煮た後のお湯を飲むのが一の習慣で、如何な朝でも飲まないことはありません臺灣人の飯は、吾々が蕎麥をゆでゝ食べると同じやうなわけで、飯をゆでゝ笊にて揚げ下に殘つた湯を食後には飲むのですが、元日に限つて之を飲みませぬ。これは此の湯を飲めば其後外出する時旅行する折などに雨に遭ふとの迷信からです。また内地に行はれてゐるやうに、元日は必らず箒を以て掃かぬことゝし、若し掃けば貧乏になると言つて、元日より五日までは、塵は部屋の隅に掃き貯めて外に捨てず。この風を堅く守つて居ります。元旦の試筆は、萬事如意と云ふことを長さ一尺幅三寸位の赤紙に書いていたします。

△吹正と乞食

平時は鼓吹と云つて臺灣特別の音樂隊であります。この音樂は銅鑼とか、臺灣式の喇叭、橫笛等にて一隊を爲して居ります。これが前に述べた開正の式を行ひ始めると、遣つて來てお目出度い樂を奏します。で正月にやつて來る鼓吹の一隊をば吹正と呼んで居ります、これは丁度萬歳やお獅子の類で、家々を巡ぐつて家戸附を貰ふて歩るくが、大抵の家は始め一回は五錢位與へるが、次からは僅しか與へません。のみならず餘り執拗く來るのを避ける爲め、門を閉して置きます。其外五日間の正月中には乞食が遣つて來るが、其様は榕樹の枝を執つて紅糸を以て一厘錢を貫きたるものを枝に結び着けて、口に吉祥の語を唱へて各戸に錢を乞ふて歩くのです。其言ふ句は、

新正大發財、錢銀湧々來、一文分年々春、狀元子、舉人孫、一文分生男子孫、

と云ふ臺灣人の誰も欲する金と男子との出來る重寶な文句です。

二日三日は格別の行事なく唯だ遊び暮して、四日となると、この日は神様が降還する日であります。即ち十二月二十五日には竈の神は煙に上つて天にある上帝に朝賀して、其の家に起りたる年中の出來事の總てを上帝に告白し、此四日になつて再び下界に還賀するのですから、各戸は神様を迎ふる爲めに、香を燻じ、燭を點じ果物を供へて、爆竹を鳴らし、金紙を焚き、神馬、駕馬と稱する紙製の馬形人形を造りたるものを焚きます。其煙が縷々として天に登ると、神はこの煙に乘つて下界に降るので、即ちこの正月四日は新に接する神を迎へて祝ふのであります。正月五日まで樂しく遊んで、六日よりは平常の如く業務に就くのすで。

懸賞繪合

答案に關する詳細は
中段に記してあり



＊＊＊＊＊

繪合せの標準 これは草花と人事とが丁度合ふ樣に割當てありますから、上段の花に下段の人物をとり合せるのであります。

懸賞の方法 は人と花とを正確に組合はされた方を當選者となし、當選の方へ十名を限り、金貳圓づゝの賞品（圖書切符）を贈ります。但し當選者十名を越ゆる時は抽籤法により、若し十名に滿たざる時は次點者を順次繰上げて數に滿たす事。

解答〆切 は二月十日限りで



せ花と女

解答は葉書に限る
二月十日〆切



あります、

當選發表 は三月一日發行の本誌で發表致します。

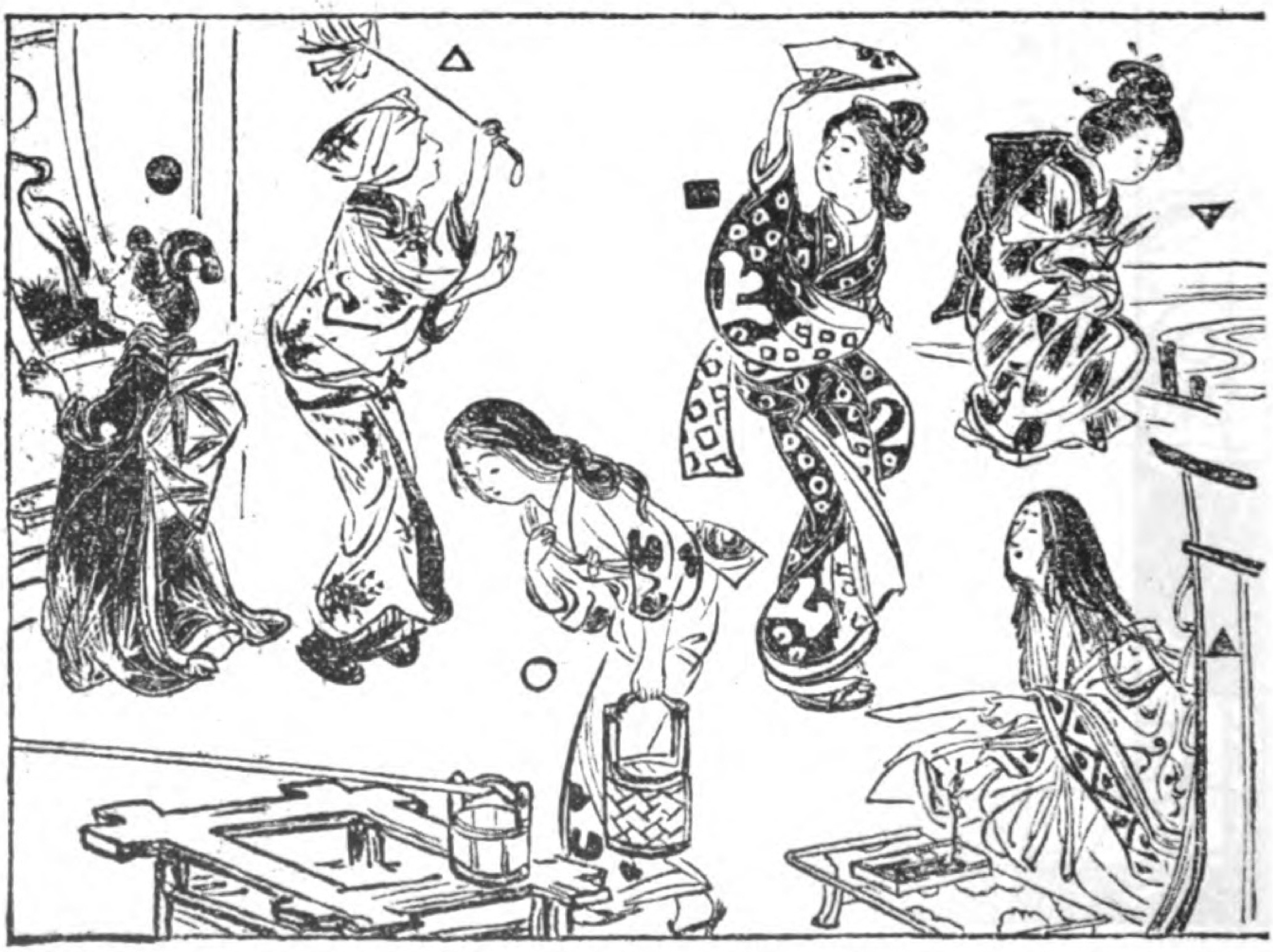
解答用紙 は葉書の事、但し左の通りの書き方順序に願ます。即ち列記せる花名の下の×の所へ女の側にある印を記入するのです。

（用紙葉書）

(福寿草　×)	(朝顔　×)
(梅　×)	(萩　×)
(櫻　×)	(コスモス　×)
(藤　×)	(菊　×)
(あやめ　×)	(山茶花　×)
(なでしこ　×)	(水仙　×)

住所　　姓名

＊　＊　＊　＊　＊



子爵夫人の淑徳

保科子爵夫人武子の方は、故北白川宮能久親王殿下の姫君に渡らせられ、御母は富子殿下、御當主成久王殿下、竹田宮恒久王殿下、小松輝久侯、有馬賴萬伯世嗣賴寧氏夫人貞子の方は、何れも御兄弟姉妹で入らせられます。

學習院に御通學中は、聰明なる御性とて、凡ての學科に拔群の成績にて、最優等の月桂冠を得させられましたが、御卒業後も研學の御志深く、國語は申すも更なり、外國語にも非凡の御天才で居らせられると申しますことに感に堪へぬのは、常識の誠に圓滿に御發達を遊ばさるゝ事であります。

御情け深くゐらせられて、學習院御在中など、同級の人の内で缺席者でもあるとそれをお氣に遊ばして、彼の方は御病氣なのですか、早くよく成ればよろしいが、などゝ仰せられるので、御諚を拜して感泣することがあつたと申します。

學習院卒業生の團體から成立つて居る常盤會の爲めには、何くれとなく御力添へになり、先日畏くも皇后陛下行啓遊ばされた砌りには、夫人は常盤會の代表者として、御前に奉迎の辭を述べさせられました。

子爵は帝大法科御出身の秀才で、名門の家に人となられた學德優秀の貴公子でおいでになります。

宮家から御降嫁遊ばされた御方は、奥方樣とは申上げずして、君樣と申上るがならはしですが、夫人はそれを御許し遊ばさず、たゞ奥樣と申上げる樣にとの仰せださうで、まことに御謙遜でゐらせられます。

平常の御召物は、まことに御質素で、御召使の人々にも、決して分に過ぎた華美といふ事は御許し遊ばされず、御自身にも銘仙か糸織位の品を御用ひ遊ばされるさうで御座います。

御髪はたいてい束髪ですが、いつも手輕に御自分でお結び遊ばすので、外出の時などに、お側からおてつだひ申上げる位のもので、大抵のお側の御用を、人委せに遊ばす樣な事は遊ばさぬとうけたまはります。

誠に武子夫人の如きは、活きた教訓を與へらるゝ御方と申上げてよろしいでせう。



四つの花

玉露女

殘菊（武家の娘）

……住むや誰、訪ひても見むと、たそがれに、寄する車の、おとづれ、絶えてゆかしき中垣の、すき間求めてかいま見や…………。

それよ光る源氏の若君が夕顔を訪ひ給ひしも此たそがれ……今宵もいかで彼女に逢ひたや。さるにても黄金白銀。最早いさゝかも……。淋しき胸のやる瀬なや。

離家の茶室の縁に力なく柱に倚りてつぶやける、夢之丞の魂は。管絃の音さへ浮き立つ巷の邊に早や飛び行けるを。袖垣の此方に佇みてつく〴〵と見やる妹、露野と呼びて二八の花の高島田、紫矢絣の小袖の下より雪かとまがう白衿の氣高さ――。小さき音に庭石ふみて。

雪「兄上樣。嘸かし御退屈と存じお茶を差上に參りました。」

人知れず館を脱けて……とも思ふ矢先きの折惡く。
と眉はひそめど去り氣もなう。

兄「よくぞ心注かれて……まづ入らせ。」

會釋して靜かに內へ、

露「それにしてもよう御辛抱遊ばされて、今日はお出ましも無う……父母樣にも御喜びで御座います。」

物語りつゝ美しう微笑みて帛紗さばきもつゝましう一服の別儀の香あたゝかう進め參らせつ。

露「お好きの時雨も持參いたしました。」

兄「結構のお服加減」と夢之丞は詮かた無氣。

露「私もお相伴を致します」茶碗を變へて自服の一碗潔う呑み終りしが。つと寄りて。

露「兄上樣!!!露が臨終の言葉ようお聞き遊ばせ。兄上樣御放埒募りて日に〳〵惡しき御行跡。御病氣の父君樣お心柔しき母君樣の涙ながらの御諫めも何處を風の御舉動ひ。殊に高い聲では申されねど一昨夜廓に通ふ土手の許にて繪にあるやうの若武士の黑二羽重の羽織着たるが一人の町人の持てる黃金を白刄におどし奪ひ取りしが。其羽織の紋所は月夜にしるき丸に二引と町人が訴へしと今朝叔父樣の御物語。今は此渡邊の家もこれ迄。一刀に切つて捨てむと父君樣のきつい御怒。それ故に母樣は妾が居間に御出にて。」

「夢之丞は魂が入れ代つて居るなれば若しや父樣に御手向ひもせば一大事、また『一刀に切つて』と御心强うは仰せども。肉身の我子を殺して何で父樣が御病氣にさはらぬ事がありませう。と申して。中へ入つて命乞ひもならぬ今更ら。父樣には何れへか行方しれずと申上げてどうぞお前が兄樣を毒害——エ、お驚き遊ばすな母樣の仰せなれど何とて妾の手にかけて、そんな事がなりませう。思ひ定めて私は今此お茶に毒を入れて頂きました。

さあ妾あればこそ渡邊の家も絕えはせじ。と母樣父樣も思召せ兄上樣も幾分かお心のゆるみも致さむ。私亡き後に兄上樣御量見違ひの遊ばさば此家はどうなりまする。お兩親樣はたれがお世話を……。」

呆れつ惑ひつ氣も魂もそゞろに淚流して打詫ぶる兄

が膝に抱かれてひたすらに悔悟を追りつゝ見上る眼も早や誰そ彼れ：：見る〳〵花は散り行くよ。

鐘の音消えて暗き一室に松風の音のみたぎる。紫矢絣の下はあはれ覺悟の白無垢。殘菊秋更けて夢より淡きものか。

緋牡丹

（若奥様）

枕許の目ざまし時計は例によつてオールゴール賑やかに、春爛熳の花の色。と鳴り出した。

困つたもんだ。昨夜鏡花様の高野聖を讀み更けつて今朝はまだなか〳〵眠いんだのに。



夜着の中へ時計を入れて音の聞えないやうにして見やうかとも思つたが考へなほしていや〳〵ながら起き上る。

「今朝は馬鹿に遅いぢや無いか。」

「其代り昨夜は早く眠た」とよく落語家は云ふけれど私は夜は何時迄でも平氣で起きてるが朝は若し無人境か何かであつたら自分の好きだけ眠て居るとしてもまあ三日三晩位は目を開きたくない、と思ふ程ねむい。

などゝ考へながら米澤絣の綿入羽織はをつて湯殿の方へ廊下を傳ふ。

と突然横手の電話室でチリチリヽヽヽ。

「モシ〳〵何誰様で‥‥オヤみい様、私今起きた處よ大變お早く何の御用？」

「あのね今日は天長節でせう明後日は日曜でせう！それでね明日一日を怠けるとして三日續きで箱根へ行かうつて云う事になつたの。蝶様も是非一緒に連れて行かうつて聞かないんですよ。私は勿論大賛成ね、蝶様も賛成なさいよ。」

蝶「さうね私は大贊成つて程には行かないわ小賛成位の處よ」

み「何故？」

蝶「だつて御夫婦のお伴は何だか」

み「これは怪しからない事を仰有るのね、それぢや私達と一緒はおいや？」「一寸兄様蝶様がいけません!!!」と電話口で呼ぶと此度は勳様がお出になつて、

「二人限りぢやつまらない何卒行つてくれ給へ」ですとさ、寄る邊ない獨り者の私を何彼と柔しう慰めて下さる此二人の志に遂ほだされて行く事に定めてしまふ。

それならば其積りでと急いで仕度して新橋へ車を着けたのが午前八時。婦人待合室には「丁度來た處よ」とお二人が。

落附いたルイザか可愛らしいローマかと思つたらまあ今日は珍らしく水の垂れさうな丸髷。紫紺地角通しの綿入に大島お召の半コート。美しい表情に水際立つた其姿は花柳の人のかりのよそほひしたかと見えてあまりに意氣だ。

蝶「宿は何處に遊ばすの」と伺ふと勳様が、

「洗心樓がいゝんださうです。さわらび女史がチヨーカンダーとか云ふ其怒つてるやうな笑つてるやうな女も見度いんださうです。」

「あのモザリナの名畫よ」とみい様。

蝶「ア、出張所のおかみさん」私も未だ知らないんですよ。」

汽車の走る兩側の家どんなさゝやかな伏屋も草の軒端に日の丸の旗を出して祝意を表して居る。あゝ日本

はいゝ國だ。

みつさわらび様つて非常に美しい方ですつてね此間のあれを讀んで私思ひ出した事があるのよずつと前の事ですけれど、矢張り人と一緒に湯本へ行きましたでせう。蝶様御存じだつたでせう夏でしたわ。さう〳〵お盆の十六日の夜でしたわ二人して塔の澤迄電報打ちに散歩かた〳〵坂を下りたの。水の上を螢が美しく飛んで山百合の甘い香が涼しい風と一緒に身に浸みました長い袂の單衣を着て。まだ私は子供でしたわ。中途迄行くとあんまりいゝ心地でぢつと片道へよつて佇んで居ましたの。すると洗つたやうな月が出て其まはりの雲がそれは〳〵きれいに輝いて畫にでも畫きたいやうなのでつひ見惚れて居ました時。丁度下から上つていらしつた三人連れ。夜目には黒い洋服で脊の君らしい方の腕に助けられてつッ〳〵と行き違つた其後からお伴らしい男の人が行つたのですよ其美しいお姿と云つたら…月影淅びた其氣高さ今でもまざ〳〵と目に殘つて、どうしてもあれがさわらび様のやうに思はれて仕様がないんですよ。」

あこがれるやうな瞳をして熱心に話すのを勳様も微笑んで聞いて入らつしやる。

みい様の目はどうしてこんなに美しいのでせう對ひあつて話して居るとほんとに仁丹の廣告ぢやないけれど精神爽快を覺えます。「人と一緒に」だつて御自分の脊の君を人だの兄様だのつて困つた駄々ちやんだ。ふむべき道をふんでかたの如く洗心樓上の人となつた。お乳を上げた乳母が今でもお附きして居て昔の口くせがなほらぬので外のお召使もつひお孃様々々つて呼ぶのを此處へ來ると御かみさん始め女中達が奥様と云ふのでみい様例になく小さな聲して返事するしほらしさ。それでも誰も居ないと。

「もう何時でせうお腹の時計は二時過ぎよ」

なんて云ひ出す。

蝶「何故私を誘つて下すつたの」と聞くと、

「二人きりぢや恥かしくていやだつて柄に無い事を云ふもんですからね」

と動樣仰有る。

み「アラだつて此間でこりくしてしまつたのですよ二人限りで初めて電車へ乘つたので何だかいやでしたから遠くの方へ腰かけてましたら銀座へ來ると「一錢おくれ一錢」つてどなるんですもの私困つちまつて。何だと思や新聞を買ふのですよ」

動「アハ、、、あんまり氣取つて居ましたからね。それはさうと風呂へ行きませんか」

み「イヤ。私目をまはすといけないから御飯頂いてからにしませう。アノ蝶樣其內遊びませうね。いゝ物持つて來ましたのよ實は・・・・」



十九の奥樣唐織のパック探つて取り出したのまあお手玉!!!

疊に散つた緋縮緬、緋牡丹の花瓣のやうなのを眞白の手におさへて燭然!!!

幸多き從妹よ。君が生涯。とこしへにスウイートなれ。

あゝ私は獨身を守る體!!!。

白蓮（未亡人）

松風か浪の音？訪ふ人もなき柴の戸を夜更けてたゝくいぶかしさ。

枕そば立てゝ聞けば微ながらも正しく

「姉樣!!!　お姉樣!!!」

羽二重の夜のものかいやりて靜かに立ち出でし藤尾はする〳〵と戸を開きて

「お入いりなさい」

有明の燈火脊にしてすつと立つ。眞白き寢衣に紫の細帶きとしめて無地御召の被布の胸を合す。ぬば玉の夜の庭に白く浮ぶ姉が面影に息せき走り寄る小夜子の亂れし髮のあたり凝と見て。

「一人？」と落付いた物言ひ。

其袂の下をくゞるやうに内に入いつた妹は坐しかねて緣の暗がりに佇む。

またする〳〵と戸を閉てゝ寢所に隣る居間の障子引開け籠洋燈引寄せて厚きしとねを進めむと、

「小夜さん此方へいらつしやいな」

小夜子は道行き脫いで面はゆ氣に座につき樣

「お姉樣御機嫌よう。あの。私、とう〳〵參りましたわ。此間中からの手紙讀んで下さいましたでせう。どうかお姉樣の傍へ置いて下さいまし」

藤尾「よく分つて居ます……幸雄さんはどうします」

小夜「エヽ幸雄の事を思ふと胸が裂けさうになりますけれど未だお誕生前ですし乳母も居りますしどうも私は傍に居られる身ではないんですから今の内に別れたら力彌も自分の子のつもりで育てゝ吳れませうと思つて。私一人の子では無しお父さんの血も交じつて居るのですもの大きくなつたら又どんな人になるか」

藤「さう。それであなたは唯一人の子を力彌のやうな敎育もない女の手に殘して來たのですか」

小「…………」

藤「私の傍に居て私と同じ身分になりたいと仰有るが。私は毎日〳〵何を目的に何を面白く暮して居ませう。夫が藝者狂ひに家を外にすると云つてもまだ滿一年も留守は續きますまい。一年も辛棒しない人に長い

長い一生を世を捨てゝ送れますか。辛い事もある代り幸雄さんと云ふ子寶もあるぢやありませんか。思へば三年の昔道彥様が亡なつた時私は貴女と同じ二十年でしたが此世の望を皆捨てゝ有髮の尼と定めたのです。毎日々々木をきるばかりが業の男や、海に入るばかりが仕事の女を見て花も咲かぬ山奥、鳥も鳴かぬ海の底にも馴れては何の不安もないと悟つていつそ都に遠い静かな住ひをと此地に風月を友として居る私の此淋しい胸は若いあなたの心には映りますまい。まあ〱今夜は此處へ泊る事にしてゆる〱語り明しませう。浮かれ心の夫を持つた妻が心得べき身たしなみの仕方や夫に仕へる方法をよく敎へて上げませう。何卒死んだ氣になつて今度は歸つて猶三年も辛棒して下さい。三年過ぎても未だ辛ければ又いらつしやい餘命は二人一緒に暮しませう。」

　手紙に書けぬ數々。三月に一度位歸る夫になつかぬ幸雄の生憎むづかるを煩しとて夜の寢間迄はるかにへだてゝ眠る事。人に媚ぶる艶なしとて多くの召使の間く前にて「力彌なぞ見た眼にやお前なんか見られた態ぢや無いぜオイ」と口ぎたなく云はれし事など何くれ語りて……。

　と涙の目に見上ぐれば端然と坐してもてなしの茶をいるゝ。憂き世は泡沫の夢とあきらめすませる汚れなき姉が面に云ふべき事も得云はぬ小夜子は、ホと太息して。

小「あゝお姉様は白蓮のやうな……。」

火桶にかける名香の烟ゆる〱圍る中に嘗て都の社交界に其名隱れなかりしピアンスト秋月藤尾は淸く笑みぬ。

「ホゝ小夜さん、
　何を恨み何を嘆くぞ世の中は
　　たゞ朝顏の花の上の露。
人の何ぞと問はぬうち消えても露は汚れがない。澄むだ胸にして歸してあげませうね。」

外には月の澄み昇る？砧の音の遠く聞ゆる。

黒薔薇（女優）



輝男様お久しう御座いますことねえ。

御歸朝の事は今朝の新聞で承知致し絶えて久しいお姿も紙上で拜見致しましたの。昔に引かへ打ち上つた御風采。お立派におなり遊ばして私おうれしう存じます。

イエ〳〵厭味ではは御座いませんあなたも御出世遊ばしたが私も今ぢや押しも押されもせぬ帝國の女優で御座います。櫻川花子と申せば知らぬ人も御座いますまい。御よろこび下さいませ。

人間は何が藥になるか分らぬもの。私も女學校卒業後家庭敎師迄して。貴君の學資を貢いだのに捨てられた!!!。其時そりや死ぬ程泣きました否死ぬにも增して嘆きました。

けれども今考へれば可笑しう御座いますわ。二白線帽角帽がどんなに有り難かつたのだか衣は骭に至り袖腕に至るとか何とかの書生さんに隨喜だかいもがらだかの涙を捧げて樂しい未來を夢みて居たのはホヽヽヽ。我ながら可愛らしいぢやございませんか。おたまぢやくしも蛙になり。

生れた子も三年たてば三歳になりますものネエ。貴君が私を捨てゝお金持ちの御養子になつて洋行なされば博士とやらにもおなりになりませうともねえ。世の荒浪も知らぬ私もこんな女優になりましたもの……。下らない事にあくせくして居た昔とちがひ此頃はほんとに面白うございますよ。

昔で思ひ出しました。昔私が。さう〳〵春雨の細細と降る夕でした庭に咲き亂れた紅薔薇の色の美しさに熱い口吻して貴君へ送りましたら暗い下宿の机の上では花が黑く見えるつて仰つて其赤く見える。明朝が待たれると云ふお手紙の中へすみれの花を入れて下さいました。うれしくつて〳〵。大事に押花にして置いたのが色があせて來たのでまた私から。

色あせしすみれを取つて捨てむにはあまりに弱き我心かなつて申上たのを覺えてはいらつしやいますまいねえ。思へばお互に若うございましたつけねえ。

今では例の「やは肌に」でございますよ若い人のあたゝかい血を吸ひますと兆血が黑くなりますの、ホヽホヽ私の口の中でゝ。

オヤ〳〵私はまあ新聞を半分見てこんな手紙を書いたけれどあなたには歴きとした奥様が添いて入らしつたのねえ。さう〳〵お金持ちのお孃様が……「不日歸朝の祝宴をかねて結婚披露會を催す」とちやんと書いてありましたわ。それぢや其奥様が此手紙御らんになつて、こんな貴君のお目から見れば蟲けらの様な女でも若しも「情けない昔を知つた」とお泣き遊ばすとお氣の毒様ですからやめませう。ほんとにいたわつておあげ遊ばせよ。女は心の弱いものですからねえ!!!。

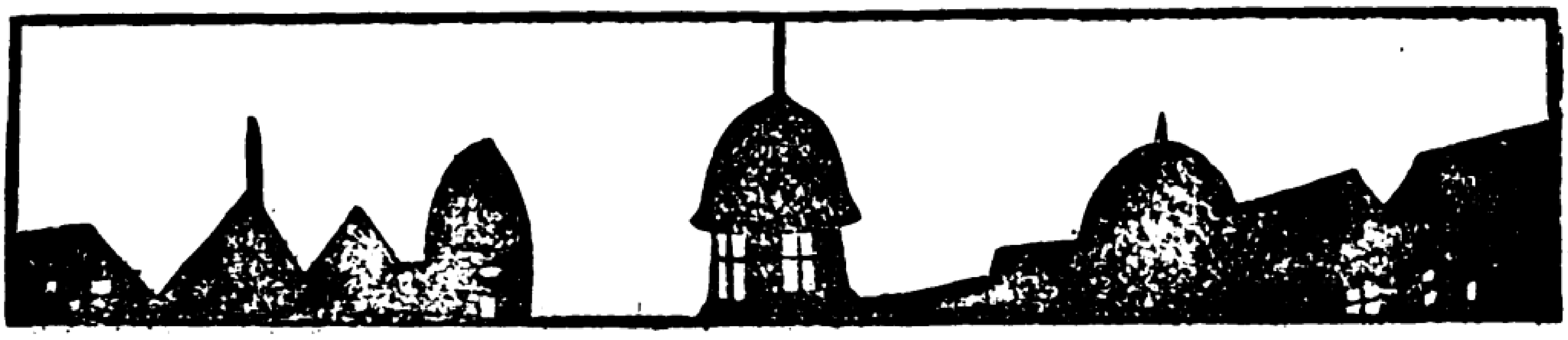
そんなにビク〳〵遊ばすな。めつたに手紙なんか差上てお邪魔なんか致しませんよ時々は上げるかも知れない!!!柔しい薔薇の花にもとげのある世の中ですからそれではこれで失禮。

戀捨てゝ我頬の涙冷えし時
花は黑きに咲くと思ひぬ

黑薔薇

輝男様御許に


ちご桜の女
桃の女
野菜の女
けしの女
月見草の女
牡丹の女
尾花の女



燈火のもと

紅梅

△風采堂々

至つて風采のあがらぬ某男爵、ある時知るべの方より園遊會に招かれ、服裝なども念入りに着なし、さて、意氣揚々と自働車にて押しいだせしが、なほ、心おかるゝふしありてや、受附の前に名刺をさし出して曰く、我輩が本人ぢやぜ。

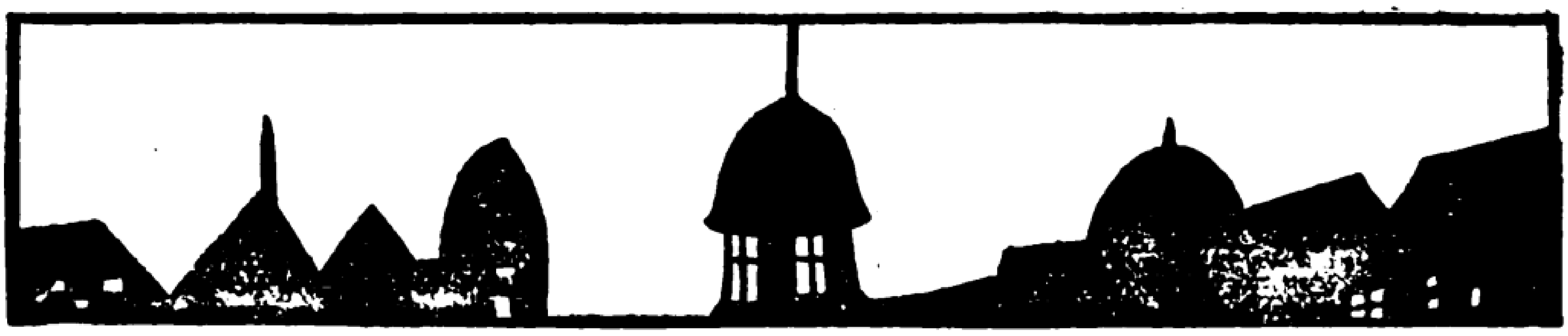
△大學生と裁縫屋

某大學生、長襦袢を仕立屋にたのみしに身丈を記しおとしありしゆゑ、あるじ早速宿をおとづれ、書附に身丈がおちておりましたが、何寸お召しになりますかときけば、學生困じはて、どうでも見計らひに願ひますとばかりいふに、他の處は見はからひでも間にあひますれど、お丈ばかりは…といひかけ、御平常おめしは一體何寸になつて居りませうかと問へば、はゝあ僕のですか、平常にも他ゆきにも、いつも三丈だけ着ますよ。

△自信と地震

女學生、卒業式にのぞみ、衆の前にて答辭をよみあぐる事となりしに、子よりも親が先を案じ、よく心を落ちつけてね人前で恥をかゝぬやうにねと、くれ〴〵も云へば、マアそんなに御心配下さらないでも…私にも相當の自信と云ふのがありますから…といひ〳〵壇上にのぼりてよみいづるや、詞とともに、紙もつ兩手のしじうふるへがちなるに、招待されたる親は氣もそゞろにて、歸り早々、それごらん、自信も何もあつたも





のではない、彼様にがた〳〵震へてさと云へば娘笑ひながら、あら、震へるのもつまり地震のうちですわ。

△驚ろきの度合

昨夜の地震はずゐ分大きう御座いましたねえ、實際にびつくりして、私一時はとび上りましたよ。といふそばから、少したらぬ女の、何誰だつてあれには驚かされましたわ、何だつて貴女、唐突なんですもの。

△大　阪　風

改築後の本郷座を見物せし女づれの一人、平土間が二人割なるを見て、オヤ〳〵今度から大阪風に成つたんだねといふ傍から、他の一人、ナニ、みんな小一なのかも知れないよ。

△奇問に奇答

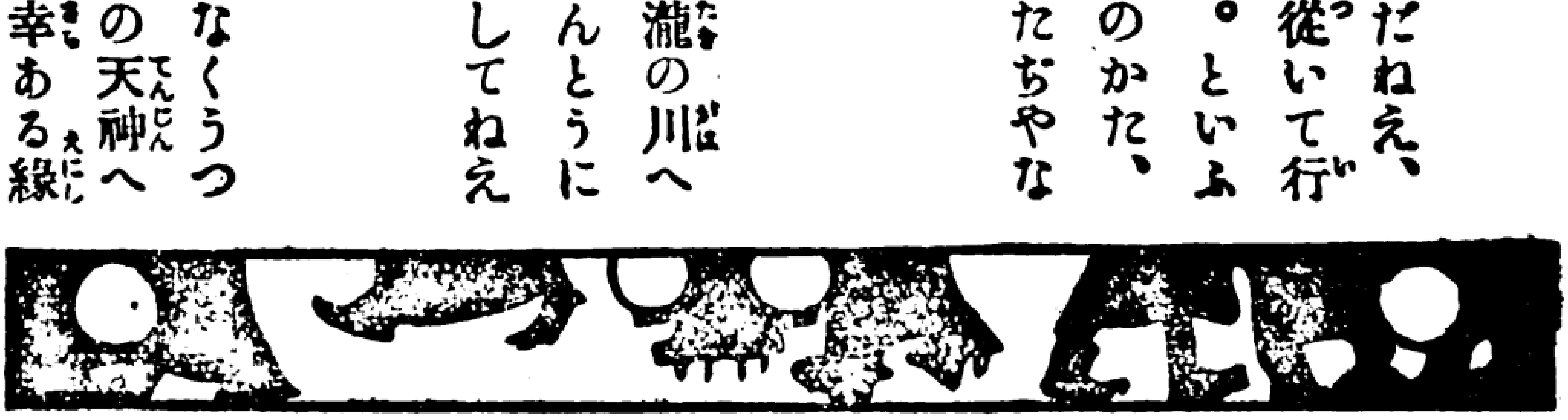
母ちやん、お隣りの子は幸福だねえ、他所へ行くのにも一々乳母やが従いて行つてすゐぶん大切にされてるよ。といふに母親、お前だつて、生れてこのかた、煽風器の風にさへ當てずにおいたぢやないか。

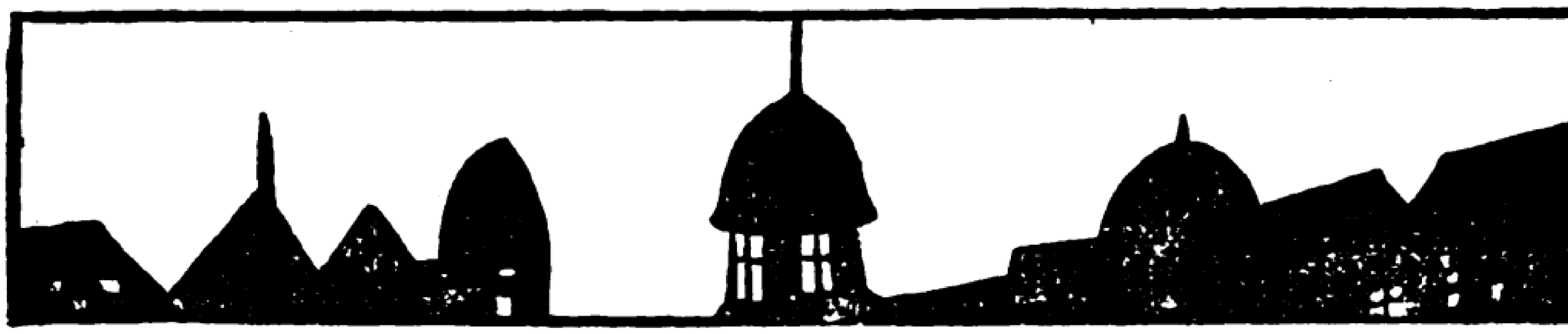
△紅葉の滿開

裏長屋の内儀曰く、此の間、瀧の川へ誘はれて參りましたが、まあほんとうにねえ恰度好いあんばいに滿開でしてねえ

△玉　の　輿

京の五條に、初音とてならびなくうつくしき娘住みけり。つねに北野の天神へ願をかけ、何とぞしてわが身に幸ある緣

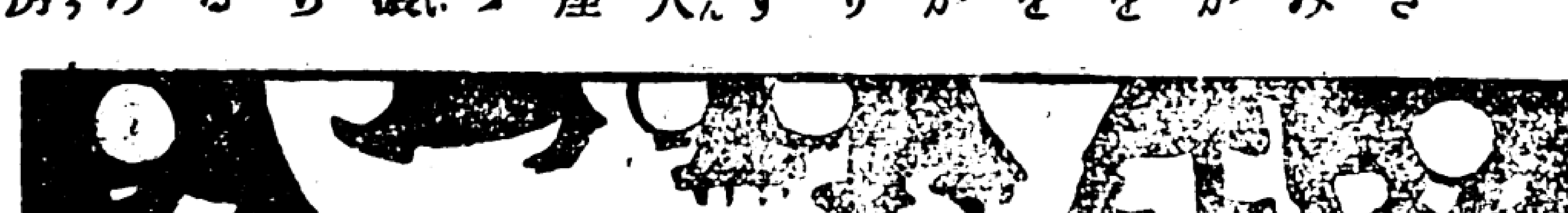


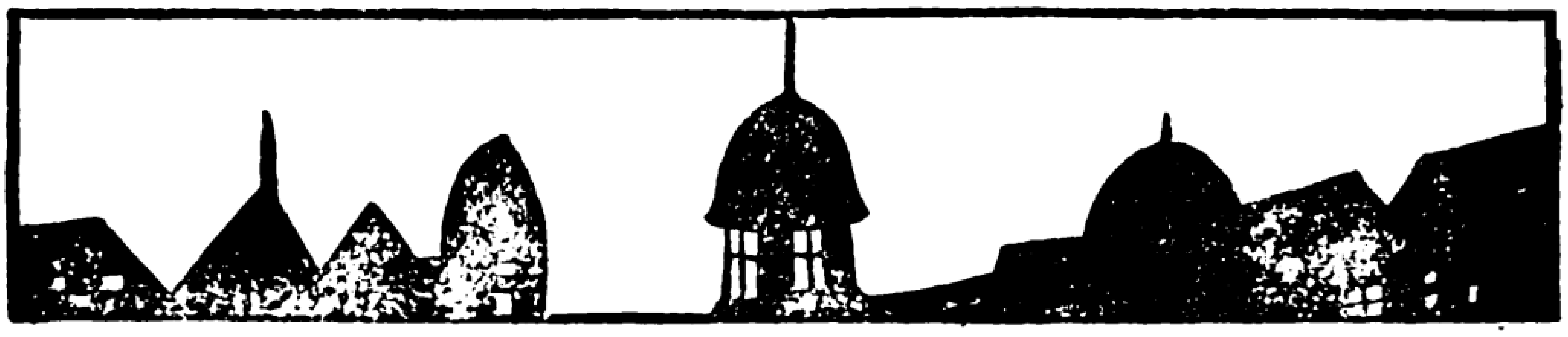


そさづけたまへ、このねがひ叶へて給はらば、わが名に因みて、梅をひと本納むべしとて、ひたすら祈りすごしけるに、いくほどもなく、さるやんごとなき君に見出され、俄にのぼる玉のこし、兩親もろとも、榮ある月日をおくる身となりしより、近きわたりのものども、みな噂しさゞめきて、此上なう羨みあひにけるが、わけても、ながらく隣りに住ひけるみにくき娘、われも彼のきみにあやかりたけれど、そも何神さまに願かけやうぞと思案のうち、母親はかたはらより膝をすゝめ、初音どのは、わが名に因せて梅の木をあげたれば、そなたもおこんと云ふ名にかよはせ、これより伏見の稻荷さまに詣で、鳥井のわきへ茶の木でもうゑて見やれ。

△茶の湯の稽古

井のうちの蛙は大海をしらずとや、さる下男、向島のわたりに、風流を樂しみつゝ餘生を送る人のもとに奉公しけるが或る時あるじの、隱居、心あひたる友を五人ほど招き、濃茶をたてゝ供しけるをふすま越しにまばたきもせず、不思議がほにてうちながめ居たるが、客のかへりし後にて、もし御隱居樣、茶の湯と申すものは、一つ茶碗にてあのやうに、五人がたべあひましても大切ないもので御座りますかと、恐る〳〵問へば、隱居ほゝ笑み、さてもよくぞ心つきし、あれは濃茶とて、昔から呑みまはしにするが禮ぢやといはれ、げに、かゝる家につとむる有難さ、もの一つ覺えけるよとうちよろこびつゝ我が部屋に入り、そりふし女房





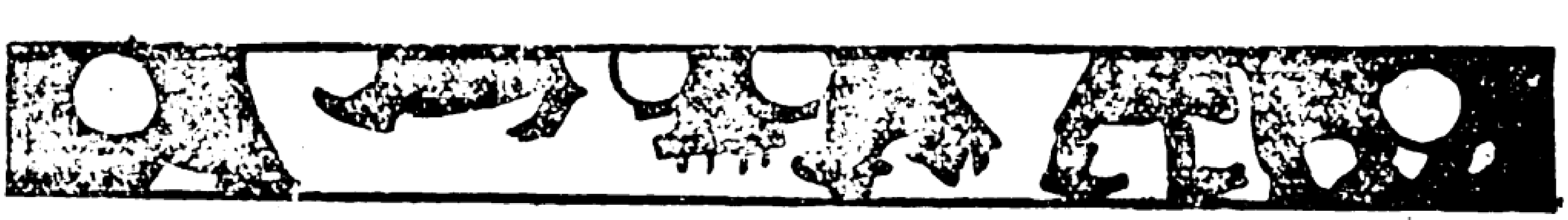
の大きやかなるせんべいを求めきたりて先づおのれが端をくひかきてより、二人の子供にかはる〴〵喰べさせ居るを見るや、思はず知らず聲をかけ、さて〳〵素早いことかな、そなたはいつの間に茶の湯をならふた。

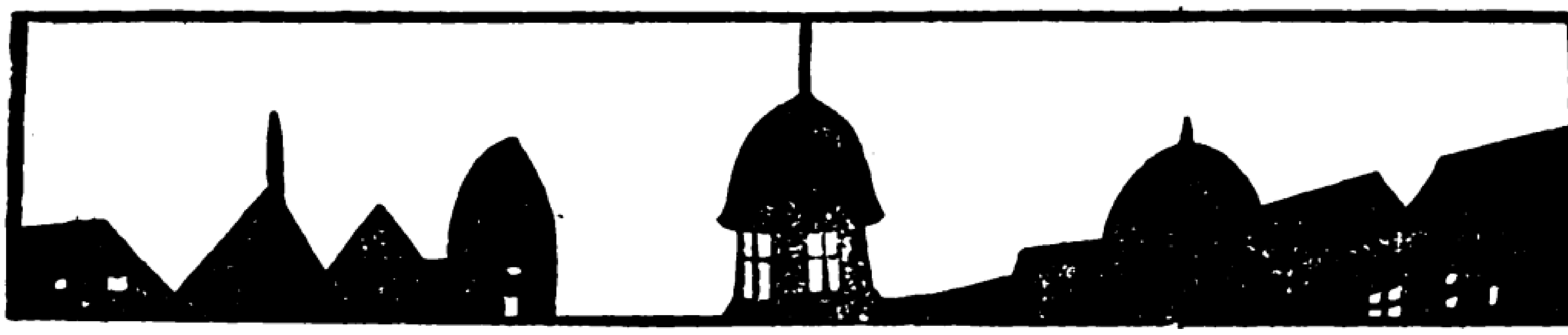
△鬼の角のみいら

山里よりいでゝ初めて江戸に入りし若者、とある橋のほとりにて一本の鰹節をひろひ、はて、見馴れぬものよと不思議さうに、うちかへし〳〵眺めつゝ、宿へかへりて主人にむかひ、今日路すがらにて、かやうの珍らかの品を拾ひたり、ものゝ名のいまだ何とも分らねど、御主人は一體何と見らるゝとて、自慢がほにさし示せば、あるじは可笑しさをしのび、げに得がたきものをひろはれしよ、これこそ鬼の角のみいらぢやといふに、若ものはなほよろこび、いづれ珍物には相違なし、國へのよい土産になりますと、ほく〳〵ものにて、やがてうや〳〵しう紙につゝみて手箱のうちへ納めけるが、後くにへかへり鼻うごめかしつゝ人々に見すれば、何さま奇妙な品ぢや、寺へもていて寶になされといふ折から、中にても分別ありげの老人まかりいでなんぼ珍しうても、ものゝ役に立たねば効がないといふもの、何と皆の衆、この角形を紙におして、各自の門に貼りつけ、雷除けにしたが好からう、成ほど尤も至極のおもひつき、道理で山家の家の戸口にはそんなものが貼つてあるやうぢや。

△甲冑の飾り物

貧しき家の子、五月の節句に、富豪の





子の許に呼ばれけるが、床わきに飾り立てある鎧かぶとを見て曰く、あれ、あそこにおまつりが立つてゐる。

△鼎の說明

おなじ兒の、寺まゐりに行き、三つ脚のかなへを指して、母ちやん、あれは大きな蝶蝶のぬけがらだよ。

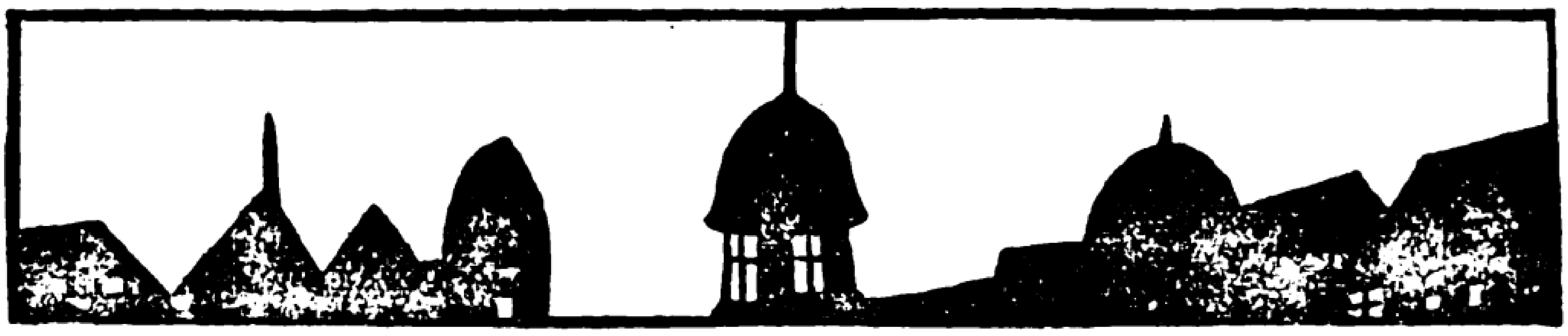
△騎兵と花菖蒲

さみだれの絲の、いとゞ亂るゝ夕まぐれを、强行遠乘の演習とおぼしく、世田谷野砲兵聯隊の兵およそ三十騎、ひげうるはしき青年中尉の指揮にて、二列行進の各個速足、歩度を延せし駒の太腹に、蹴あげし泥もおびたゞしく、外套の裾まで淋漓にぬれそぼちて來かゝりたるが、花のさかりの堀切へまはりこしと見え、そのうちの七八人、むらさき、白、しぼり、とり／＼に美しき水珠を生む菖蒲をいく本か、手綱にもちそへ、ひたすら汚さじものと勢はりつゝ、拍車を入れゆくやさしき心ばせ……そりふしの行きずりにうちながめて、われは云ひ知らずうつくしと思ひぬ。

△ハイカラと猿

山ふかく住ひける男、ある日連れ立ちて木こりに出かけしが、折ふし、見馴れぬ洋服姿の男二三人手に／＼ステツキをたづさへ、けはしき崖ぶちを草鞋にて踏みしめつゝ、あへぎ／＼のぼり行くを、はるかより小手をかざしてうちながめ、あれ／＼、又唐人猿が這ふて行くわ、早く見よ、消えてしまふぞ。と高聲あげてよび立つるに、他の一人が伸び上りはて





さて、つひに見ぬ奇妙な猿ぢやといへばかたはらの老いたる男、ナニ、もう十何年か前の、そなたらがまだ子供の時、あの猿が此の道を通つた事があるが、その年には、この山の栗の木がみなえらく實をもつた、さては今年も栗が好からうよ

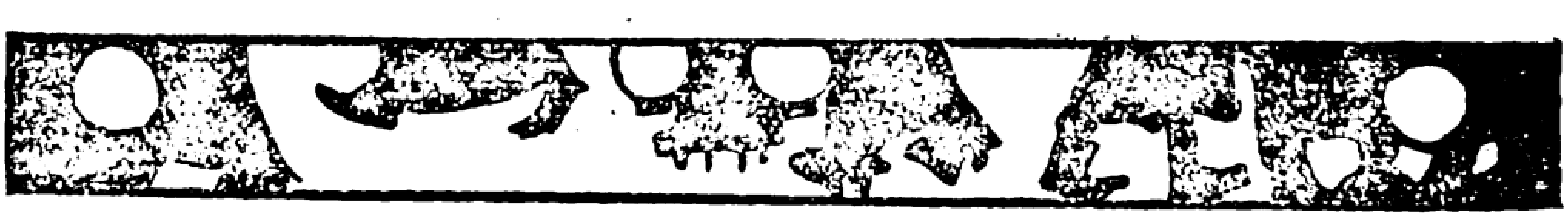
△鰻の孫

男ふたり、語りあひつゝ行く路すがらの小みぞに、小さきどぜうの群りゐるを見て、先の男、おゝ〳〵、大きな蛭が居るなといへば後の男、いや、これは蛭ではあるまい、どぜうぢやと、互ひにあらそひてはてしなければ、さらば、此の先の知るべの老人が物知りなれば、其處へいてきゝ正し見むとて、つれだちてかしこにいたるに、老人わけをきゝて、いや何方もちがふ、ありやうなぎの孫たちぢ

やと、事もなげに云ひすつるに、ふたりは顔見あはせ、どうやら解しかぬる詞なれど、つねより理きはめゐる人の云ふことなれば、多分に違ふこともあるまいと、合點して引きわかれけりとぞ。

△人情の違ひ

知己の某西洋人の妻君が出産したところ、双子でしかも夫婦子といふので、之が日本のむかし堅氣でいふたら、蓄生腹などゝけちをつけるに引換へて、私の妻は神様から一時に二人の子供を與へられました、しかも男と女とです。私共の一家は此二人の家族を新らしく加へられたのを感謝して居ます。私は二人の子供が泣き聲を聞くと雲雀と鶯との音を一緒に聞く様な氣がしてほんとに愉快ですと答へました。

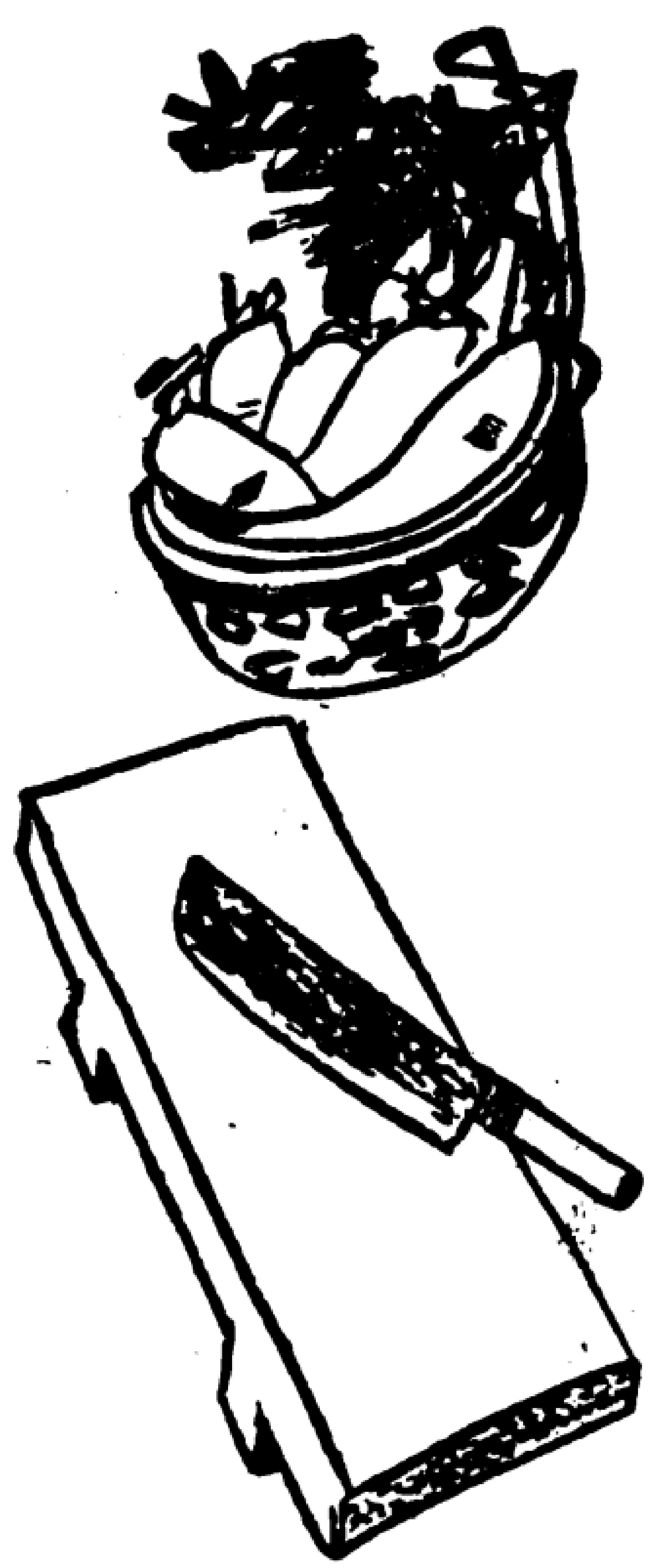


雪の日(一)



雪の日(二)





女學生の寄宿舎生活

世良田唯子

女子青年會寄宿舎の舎監世良田唯子女史は、陸軍少將の令妹でフエリス女學校の御出身、堅き信仰を基礎として遊學の妙齢女子を愛育さるゝこと十年一日の如く寄宿生の慈母として慕はるゝお方です。

▲箱入娘は同情心乏し

女子が寄宿生活をいたすと自墮落になり冷やかになつて美しい特性を失ふと云ふのが世間の定評のやうですが、これは寄宿生活が悪いのではなくつて寄宿舎の組織が不完全の爲でせう。良い寄宿舎ならば嫁入前に一度は共同生活を味はせて置いた方が良いと存じます。母親の側より他寢起したことのない娘はどうしても同情に乏しいやうに思はれます。下婢は人に使はれる人間と考へて、自分とは別種のやうに取扱かつたりお友達の病氣や心配事についてもさして同情を持たぬと云ふやうなことは我家を離れた經驗のない女子に多いと存じます。勿論親御の躾方に依つて左様とばかりも限りませんけれども親の膝元を離れた淋し味を實地に味ふたものでなければ我身つねつて人の痛さを知る本當の思ひやりがないのでございます。古巣を離れた乙女が一棟の内に寢食を共にする互ひに頼り少き身を愛しみ合ひ、身分の違ひも何も打忘れて姉妹のやうに交り、病氣の折なぞは同情の涙を注いで看護いたし合ふ女子の美德は教へずして養はれるものでございます。

▲自治の精神を養ふ

親の膝下を離れますと隣を愛する情が湧くばかりでなく、自治の精神が養はれてまゐります。手帳一冊

リボン一かけ買ふにも母様に寄かゝつて呑氣に暮して居たのとは違ひ、定められた小遣ひの内で一切を始末するのですから自然と腹がしまつて經濟の工夫を考へるやうになり品物を撰ぶ眼も開くのでございます。一度旅へ出て金錢の有難味を感じたものはお母様に不足ばかり云つたことを眞から悔ゆるにちがひありません。而して利己一點張りでは世間の交際が出來ぬことも自然に氣がついてまゐるやうでございます。

▲一と目で分る

初對面の娘さんでも、親の膝元でばかり暮した者と共同生活をしたものとは直に分ります。共同生活を爲たものは何處となく圓滿で談話の要領を得ますし、第一決斷力がよろしうございます。箱入の娘さんは内輪のやうで居て、下婢なぞに對する様子に傲慢のところがあります。

◁育兒の經驗▷

生れて三ヶ月目頃から嬰兒は段々可愛くなりますが、それだけ教養も大切になつて來ります

▲人形扱ひ　あまり嬰兒が可愛ゆいので良く寢入つて居る子をわざ〳〵抱き上げたり頬ずり又は接ぶんしたりして起す様な母親は珍らしくない、又若いお父様もお役所から歸ると是をやつて喜ぶ、親心無理ならぬことでありますが、是は嬰兒を人形扱にするので、生育の上に少からざる害を及ぼします

▲嬰兒と遊ぶと云ふことは良いことで又子供も非常に喜びますが、併し時には斷然中止せねばなりませぬ、例へば夕食後直に戲れ騷ぎますと其爲に終夜良く眠れなかつたり、夜泣きするものです、子供は人形と違つて神經を有し且つ其感じが鋭敏なものですから、養育はたゞ可愛い一方では却て子供の爲になりませぬ、夫から生れて三ヶ月目頃からは著しく智識の曙光を認めますから、この頃より相當な數課を始むべき時であります

▲嬰兒の教課　先づ消極の習慣をつけることです、若し適當な時期に適當な教課を與へず、飲食を正當な時にならしめず、時を考へずに子守歌を謠ふたり寢た時に寢かさないならば、將來取返しのつかぬ不幸を招きます

▲寄宿舍の食物

寄宿舍の舍監が一番注意すべきは生徒の食物でございませう。新らしくて滋養分のある副食物を具へることは申すまでもなく、間食も衞生に害のない範圍で成るべく生活に滿足を與へたいと存じます。寄宿舍なぞは、幸ひに定費組織で、賄料の低い割に食費に餘裕がある方ですか

ら、家庭的に取扱ふ便宜がございます。私は始めから一番新鮮な魚類、肉類を撰ぶことに注意いたし、日々綿密にしらべまして、假令三度が二度に減じても最上の原料を撰らぶと云ふ方針に定めました。それからお八つは毎日必らず用意しまして、生徒達が學校から歸つた時に分けるのでございます。而して歸りの遲い事務員には歸つた時に、取ときのお八を出します。又分配の餘りがあれば、夜分皆に分けると云ふ風にいたします。食慾の壯んな年頃には、赤くならんだ水菓子堆たかくもられた餅菓子に眼のつくのは誰も同じことゝ存じますから、衛生のゆるすかぎり好きさうな物をお八に供へて不滿足のないやうにいたします。毎日の獻立は一週間交代の當番がいたしまして、全體の寄宿生からの要求に應じて、祭日のお赤飯、彼岸のおはぎ、おすもじ、又はお月見の團子なぞ家庭的のものも拵へるのでございます。私への到來物があれば、半かけづつでも全體に分け、外出の歸りには、心ばかりの土産で小さな生徒を悦ばせるやうに心掛て居りますが唯どんな食物でも食堂に打寄つて食べる規則は嚴しく守らせて居ります。

▲立働らきの勵行

寬嚴は車の車輪の如くで、若い女子を寬に取扱ふばかりでは、乾度我儘自墮落になりますから、當番の規則は嚴重に勵行させて居ります。この青年會寄宿舍は、明治三十九年の創立で、只今納戸町を此處の安藤坂に生徒を預かつて居りますが、その種類は、女子高等師範、津田英學塾、女子職業學校、其他美術、音樂高等女學校、裁縫學校などの通學生達で、中に會社へ通勤の女子もございます、出入りの時間は名々異つて居りますけれども、朝夕の炊事、ふき掃除、その他の雜用を順まはりと定め、時間の有無にかゝはらず、當番の責任を勵行させます。明日は早出ですから當番が出來兼ますと申す事務員などには「朝早いのなら、今晩の內から都合をなさい」と申して夜なべに掃除位いたさせて置ます。支那婦人なぞは隨分困難らしうござ

いましたが、追々慣れるにつれ悦んでいたすやうになりました。不なれの人や夜業をいたす人なぞは自然缺目も出來ますが、それは此方で充分我慢いたします。唯勵行と云ふ精神を養ふ趣意ですから情實で規律を枉げさせぬ事にいたし、新來の女子には一番始に、このことを約束して置きます。

▲親切の印象

親切と云ふことは人に深い印象を與へるものと、母校の教師が毎々申されましたが、私が唯今以て一番身に泌みて居るのは、教師や學びの友からうけた愛情でございます。この印象さへあれば過ちの淵に陷る氣づかひは少いでせう。寄宿生にもどうかこの印象を與へたいものと存じて居ります。

△精進の説

司馬江漢の隨筆に下の如きことあり精進と云ふ事は、生臭きを忌みさくる事にあらず。殺生戒とて生きたる者を殺さぬ事なり。獸魚の類。目鼻口皆人に似たり。魚聲なしと雖も獸は聲あり。これ人に近し草木元より生類と同物。然れども人に似ず。出家女犯を戒しむ。子を生まざるは戒しむるに及ばず。色慾に迷ふが故なり。子は己の體なり。人間の迷の基。愛欲は去りがたし。故に子無き者悟道に入り安し。女子經水の後。めくり終りて十日過ぐれば孕まずと。

○嬰兒を揺る事

嬰兒が泣いたり、むづかつたりすると、不知不識の内に抱いたり揺へたり、「よし〱」と口癖の如に云ふて揺り動かすのが常である、又は心なき子守が背に負ふて遠慮なく跳ね廻る爲めに、背の嬰兒の首が顚つて居るのを見ることも度々である。加之嬰兒が笑つたとか、可愛い顔をしたとか云ふて抱いて揺り動かして喜ぶ人もあるが、嬰兒を揺ると云ふ事は善き事ではない、何故なれば其爲めに背骨の関節をゆるめ消化を害するものである、又もし幼い頃にかくなすならば、後には可成大きくなるまで揺り動かさなくては寝ない様な習慣が付いて甚だしく困却するものである、無論靜かに嬰兒を床の上に寝かせて自然的の形に置く事は最も大切なることの一つである。俗に母親方が熟頗が非常に手の懸るものだと思ひなさる方もあらうが、其原因の大部分は多少手のあるのと珍らしいのとで抱きかゝへる故である。其の爲めにあたら可愛い子供を手数のかゝる、病身な虚弱なものにする事を考へれば、如何に恐ろしき事ではないか、世の母たるもの大いに気を付けて嬰兒を延々と靜かに寝かす様勉めねばならぬ。



巷の噂

△令孃の先見の明

内田外相夫人正子樣は、大和の豪農土倉氏の令孃で、原六郎氏の夫人とは御姉妹の間柄です。初め京都同志社に學んで新教育を受けられて、天運幸多き身の、加ふるに稀に見る美人です。すらりとした丈かつこう、飽く迄艷やかな白いお顏色、漆の樣に黑く長いお髮――表情に富んだ大きな黑眼がちの双眼、透き通る樣なお擧全くおうつくしい方です。同志社卒業後直ちに米國に留學し、彼地で新進の敎育を受けられたので、光りある玉はいやが上に研かれ、貴い輝きを細腰の胸に抱いて歸朝された。土倉氏の令孃で、美人で、洋行歸りの淑めといふので、結婚の申込は雨の降る程あつたけれども、孃はいつも頭を振つて、

『父樣、私は未來の大臣となる人の妻にでなければ決して嫁きませんから。』

といつて容易に結婚の同意がなかつた。氏の令孃の選んだ耳人が、今の外務大臣子爵内田康哉氏です。

任地米國から歸朝されて間もなく、十一月三日の天長節夜會に、氏の夫人のハイカラ振りと人々が注目して居たにも拘らず、白繻子の夜會服つゝましげに、日本婦人としての優美な特長をなして失はぬ應接振り、殊に子爵の母堂を勞はつて、

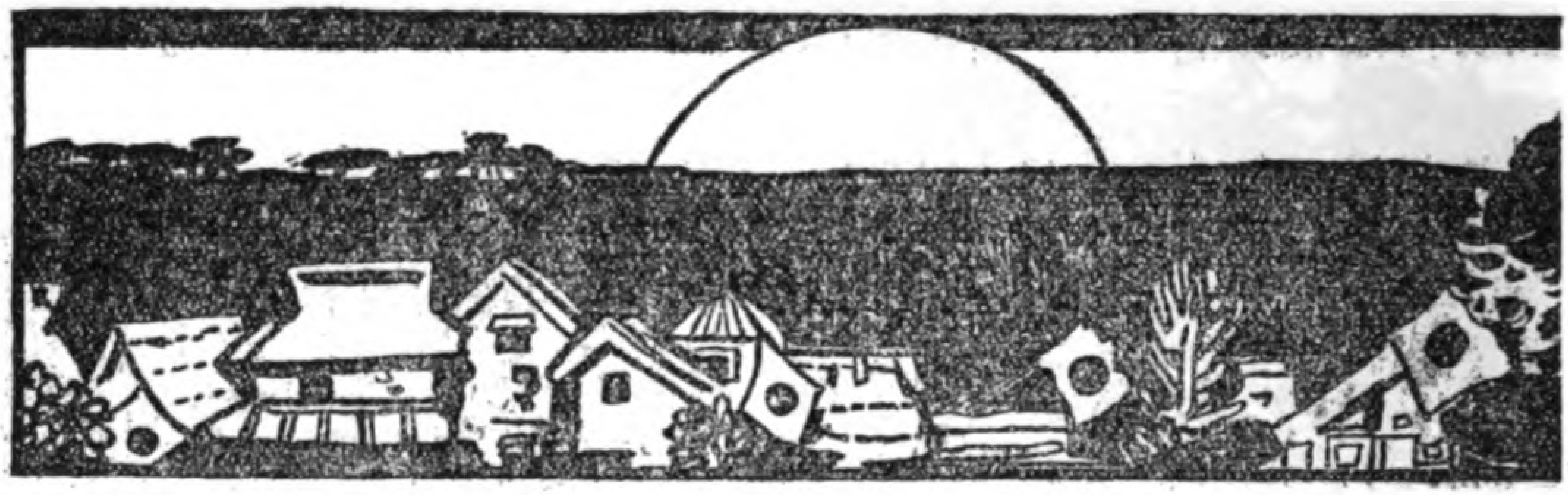
『お母樣、もういつも御休みの時刻で御座いますが、お眠くは入らしやついませんか。』

と氣を付けられるいぢらしさには、皆々感心したとの噂さ。

△敗け嫌ひな夫人

大倉喜八郎翁の愛孃で、高島小金次夫人は、敗け嫌ひな江戸つ子氣性の方で、面白い一つの癖がある。自分の腦つて居る車を後から拔かれる事が毛蟲よりも大嫌ひなので、車人もよく御意の程をかしこみて走つては居るものゝ、つひ一寸した間に拔かれでもするが最後、御氣嫌の斜さ加減一通りならず、直ちに御暇が出るさうな。それで同家の夫人用の車夫は、足の屈竟なのでなくては、御抱へにならないと聞て居る。





△子女教育の美談

鍋島侯爵の令息が、麻布中學に入學された折侯爵家では令息を寄宿舍に入れて規律ある舍生の生活をさせる事ときまつた。仰せかしこまつた三太夫は、羽織袴鹿爪らしく、江原校長に面會して、令息入舍の依頼をし、扨て當家若樣御入舍の上は、御食事萬端注意して云々と申入れた。元來素直な素六翁は、氏の挨拶が氣に入らないで、『我輩の寄宿舍は決して下宿舍でないから、客筋に依つて特別の取扱ひをするなどゝ云ふ事は絶對にお斷り申す』と云ひ切つたので、三太夫面目を失し卒々歸つて復命すると、何と思はれたか、夫人榮子の方は早速に馬車を命じて外出された。

夫人の馬車は麻布中學にとまつた。夫人は江原校長に面會を申入れて、扨て召使ひの者の失言を詫びて、ねんごろに令息教導の事を依頼されたので、校長も夫人の禮の厚く、しかも子女教育に熱心なのに感じて、快よく諾したといふ事は、美談として一部の人の語り草となつてゐる。

△お姫樣の炊事係り

西園寺侯爵令嬢新子樣は、侯爵の一人娘掌中の珠、後にも前にもたつた一人の御子樣として生れながら、幼少の時から父の侯爵の思召で神田の佛英和女學校に入學して最も平民的の教育を受けられたせいでもあらう、至つて常識に富んだ方である。

先年女子大學附屬の高等女學校に在學された時には、同校内の寄宿舍に居られたが、雜務をいろ〳〵配當して立働く内でも、新子姫の炊事係が大好きで、時間が來ると、白の前掛甲斐甲斐しく、馬鈴薯の皮もとれば、大根も切る、といふ風で、ちつとも侯爵お姫樣らしい樣子はなかつた。毛利家から御養子を迎へて麻布に新家庭を作られてからも、至つて平民的な家庭の主婦として、幸福と希望の充ちた朝夕を送つて居られる。

△同窓會の名物話し

或時、跡見女學校の寄宿舍に居る仲よしのお雛樣のやうな二人の生徒が、餘念もなう遊んで居るうち、ふと家へ歸り度くなつて、まだ稚





な氣の前後の考へもなく『おうちへ歸つてまゐりませうよ。』と二人連れで學校の門を出た。

外泊に家へ歸る時には、何時も迎ひ車が來る二人の令嬢は、家へ行き度いのが一念で、足にまかせて小石川から京橋まで歩いて一人の友の家へ着いた。時ははやたそがれ時。不時の歸宅に家の人は大に驚き、電話で照會するやら、一さわぎの末、遠來の無邪氣な二人の客人は、再び書生に送られて、學校に返つてた。そして無斷で學校を出たとの事で、校長の君から大變なお小言を頂戴し、可愛さうに其夜は二人離れ離れのお部屋でいと小さき夢路に入つた。其の一人は今の池田子爵夫人妙子樣、一人は森律子孃でした。

△親の情

或時女子大學に教授の親睦會があつた席上で、愛息を失つた鹽井教授は、憂愁の雲深く閉ぢこめて、俯き勝ちに膳に向つて居た。其の隣りは快活な川瀬ドクトル夫人で、

『まあ鹽井さん、あなた御子樣が失くなられても、そんなに深くお悲しみになつては、後の爲によくありません、もう御あきらめ遊ばせ私のうちの子供を一人差上げませうか。』

と慰める積りの慰安の言葉を、鹽井教授は何と思はれたか、

『僕は貴女の産んだ子なんぞもらつても仕方がありませんよ。』

とにつこりともせずに答へたので、双方に氣の毒だつたと或人が言つた。

○

昨年十一月號本誌に掲げました『巷の噂』の中乃木大將夫人に就ての事は事實が相違してゐると同夫人から申越されましたから右の記事は取消をいたします(記者)

起きもせず寢もせで夜を明しては
春のものとて眺めくらしつ　業平



支那で見た事聞いた事

藻集陽子

▲往來の女はお婆さんばかり

御承知の通り、彼地の女は男に顔を合せませんから七八年も居た間に女と口を利いたこともなければ、往來で餘り見かけもしませんでした。田舍へ往くと、罂粟の莖から鴉牙液を搾るのが女の仕事ですから、罂粟畑には年頃の娘や、若い女房が出て居ますが、男が通るとヒヨツと花の下へ頭を引こめて了ふ。茶店にも飲食店にも影も見えない。併し見たくもない皺くちやのお婆さんは都大路を平氣で歩るいて居るので、よく支那はお婆さんばかりだと云ふ人があります。

▲上流婦人の娛樂

支那婦人はこんなに年中閉こもつて居ますが、割合豪らいものもあります。殊に上流の婦人は詩文に堪能で書畫や刺繡の技にも長て居るやうですが、見聞が狭いために嫉妬偏執の念が强いのは已を得ぬことでせう。烈女傳式の節婦も內幕には大分無理往生があるらしく、一族の虛榮心から殉死を迫まられることもあるのださうで、何にしろ氣の毒な境遇です。併し彼等は邸中に花園を作り、又は舞臺を具へて宴會の折に俳優を呼んで芝居を見る位の娛樂はやつて居るのです。

▲紅い婚禮行列

支那では一口に葬式を白事と云ひ、婚禮を紅事と稱へますが、全く婚禮行列は紅いものです。花嫁の駕輿は日本の山車屋臺のやうに花々しく紅い裝飾で、長持、鞄、その他の手道具に紅塗、數十人の附添男子も狩衣式の紅衣裳・實に見ものでありますが、便利なところこれらの道具、衣裳一式を日本の葬儀社のやうなところで貸すのださうです。併し行列支度は借りものでも經

葬其他になか〳〵多額の金が要るので、未婚の青年は結婚費用をセッセと稼ぎためて居ます。

▲不思議な廣告看板

男女七歳にして席を同ふせず訓の本家でも墻を越ゆる秘事は、何國も變らぬ習ひでありませうが、唯一つ變つた風習があります。甚だ申上げにくいことですが北京の通りには墮胎專門の看板を掲げる醫者が澤山あるし、これに關する賣藥の廣告が殆んど辻々に立つて居ますが、上下とも一向平氣なものです。そして出產を制限して母體の安全を計ると云ふ考へから公然の夫婦間にも應用すると云ふことです。併し田舍はこの風習に犯かされぬと見えて、汚い鼻垂れ小僧がウヤ〳〵良野に遊んで居ました。但しこの弊風も目下は大いに改まつたことゝ思ひます。

▲玄關番は株式組織

官吏の門番には必らず號房と云ふものがあります。名刺を見て客の身分をしらべ、取次をする役目ですが吾々が主人公に面會を求める場合には、この號房に若干の賄賂が要る、素手で名刺を出しても決して通じてくれません。呉服屋の番頭が令孃の注文品を持參した時でも矢張號房に進物をしなければ、今日はお孃樣が御病氣です位で門前拂をされてしまふと云ふ風です。それで顯官の號房は大抵株式組織になつて居て、五六人の組合がこの株を買ひ號房に住みこみ、純益を配當すると云ふ仕組ですが、株主は皆懷が溫かいから每日鴉片を呑んでごろ〳〵晝寢して居るのを見うけました。

▲出世すると親屬が寄つて來る

私は一度或機會に武官の試驗を見たことがありましたが、四十間の馬場に直徑二尺位に束ねた藁を立て、受驗者は馬を乘まはしながら之れを射るのです併し遠方から狙ふのではなく、殆んで矢尻が藁束にふれる位のところで放つのですから百發百中は當然です

それでも馬が跳ねたり、手元が狂ふたりして射損じるものがあるので、矢張試験の價値はあるのでせう。その他重い鐵槌を持上る試驗法もあるさうです。文官の方は例の七字句五字句の作文が主な課目で秀才、擧人、進士と云ふ順に位が上つてゆくのです。(近來の試驗はもつと進歩して居ます)御承知の通り二夫婦、三夫婦が一家庭に暮す風習ですから、其中の一人が進士にでもなれば、一族は羽振りが利いて喜こぶわけであるが、矢張り互ひに疑つたり嫉妬したり悶着がありがちのやうで、折々は又艶種や醜聞も外に洩れるです。特に一人出世すれば遠緣も友人も蟻のやうに寄つて來て厄介になると云ふ風ですから、家庭内の紛紜は免れないことでせう、尤も近頃は文明の輸入と共に家庭も追々改良されつつあるに違ひありません。

△支那婦人簪の好▽

女と花とは因あり緣あり花の様なとは何よりな形容詞なるが婦人が身を飾るに生花を使ふは泰西と支那の婦人に尠く日本にては紙又は絹製花簪のみ用ひて生花を應用する者は僅に近來女學生の一部に限るが如し ※

一月、水仙	二月、丁香花
三月、桃、李花	四月、梨花
五月、柘榴	六月、蓮華
七月、牡丹	八月、桂花、海棠花
九月菊	十月、九花
十一月、蠟梅花	十二月、梅花 ×

×月令に依て簪の花を定め、各々造花と生花とを巧に應用して装飾とするが、中には随分振つた物が無いでもない、例へば蘭の花を針鐵で一本横ならべに繋ぎ、日本の花櫛の如く髷の前にさす如き、天然の香に頭の鬼氣を拂ふ徳をも備へ、見た目も甚だ品格高く、一月の水仙、五月の柘榴又同じ趣味に富で嬉しき物なり、而して支那婦人は年老たる人反つて若き人々より華美なる花を用ひて紅きをすら多く使用するといふ傾向である、

樹十種を詠み込める歌

しゐてまつ、つきひもすきぬ、かならずとちぎりし君や、こゝろかへせし。

△椎　△松　△楓　△杉　△楮　△柿　△桐　△樫　△柏



教務室より

芙蓉

A、増刊を難有う!。

K、什麼致しまして、全部御覧遊ばして、御苦勞さま、内藤さんのがなくつて御失望!。

A、内藤千代子つて僕あ大嫌ひ、名を聞いても蟲唾がでゝ、一高だの角帽だのつて浮ずつてばかり。

K、あんなこと!華族系に頼みもしないのに一々御丁寧に朱線を引いて下さひましたのは誰名!。

A、あれは實際よかつたですもの松平鏡子の街はづれがてんでなつてやしない、閑話休題なんて文字使つて……。

K近頃の、松平さんて昇天の勢ねえ、ほんとに十七の人としたら甘いものですよ、此度の女繪師なんてよく出來てるぢやありませんか。

A、さう僕も女繪師の方が街はづれよりいゝと思つたんですよ、三等の價値は充分!

K、未だ御年がお年だけ筆にお若い所がありませうけれど慥かに未來のある方らしいのね、才に任せて浮調子に筆をすべらしたて所なんぞ少しもありませんもの、どの御作にも苦心の痕が歴然と見えますわ。

A、だが筆遣ひだつて才氣だつて内藤千代子には及ばざる遠しですよ。

C、今度は玉露さんのもないやうですね、此前の耳夜には落膽しましたけれど……。

K、あの方御筆は確かなものね、灰汁の抜けてる事は一等でせうよ、内藤さんほどの熱はないけれど、いつかの思ひ出の記のよかつたこと!

C、紅梅つて方春の曲から引き續き御活動ねえ、こんどの菊の宴は何だか春の曲の燒なほしみたいで餘り感心しませんけれど、お美津さんの境遇だつて炳然しないし……。

K、あの方もお筆は御自由なものね、前の千鳥はよかつたぢやありませんか、あの御姉樣は氣に入りましたね! 紅梅さんは純下町式の意氣な姉さんらしいのね。

C、野菊樣は近頃意氣消沈でゐらつしやるのね、私あの方の落ついた床しいお筆振が好きなんですけれど。

K、上原さんもすつかり隱れてお仕舞ひ遊ばしてね屹度お嫁きになつたからよ、あの當時花散里樣々つて大騷



ぎしてゐらつした方も有るやうでしたけれどあの方の
お作つて内容の拙まらない物ばかりでしたれ藝術的
に價値のある作品なんて餘りなかつたやうよ……なん
て一つぱし批評家氣取でホヽヽ。

C、私磯千鳥さまも大好きで御座いますわ。

K、和文なあれ丈お書きこなし遊ばしてそれでハイカツ
タ文章も御上手なのだからなか／＼の御腕よ、御造
詣の深い事は一等でせうよ。

C、逆境と順境に愛なき夫の妻をお書き遊ばした葉子
さまつて如何な方でせうれ。

K、新らしいお名れ、なか／＼利かぬ氣の奥様らしいけ
れど、旦那様の憎らしいつたら私あんな境遇に於
かれたら死んでしまふ。

C、でも貴名お年寄が好きつて言つてゐらつしたんぢや
なくつて！　ホヽヽ

K、もう眞平よホヽヽ

C、草籠の秋雨様つて近頃よく隆様隆様つて出し
てゐらつした彼の方でせうか。

K、左様らしいのれ、御健筆だけれど私蟲が好かない
わ、其人々の個性がすつかり作の上に現はれるもの
れ。

C、さう言へば私仍旦、鏡様だの花かゞみ様だのが
好きで御ざいますわ、お筆は於て其人が懷かしいのれ。

K、幾時でせう？　先刻からむきになつて饒舌つて……
M様、お添削はまだ？　大車輪れ。

M、えゝもう飽いちまひましたの、また全部脊負された
んですもの。

K　だから校長との合持は眞平なんだわ、御自分ぢや
いゝ氣になつてさ！。

C、シイッ！　長いものには卷かれよですつて、大概に
してお歸り遊ばさなくつて、降りさうよ。

A、Kさん愛兒が途中で待つてるからつて申しました
よ。

K、ホヽヽ嬉しいことれ、早く歸りませう……。

M、ホヽヽヽ、……。

草十種を咏み込める歌

たにふかき、くちはをそらにふきたてゝ
をきところなく、さへろこからし

△菊　△茅　△蘭　△蕗　△鑿
△荻　△蘚　△栗　△菖　△辛子



繪もの語 花籠

太田三郎

白百合

越前の國の或る驛路に、一人の美くしい女馬士がありました。ある時、ふと乗せた客の若い旅人と、折しもの村雨を畷の辻堂に避けたのが嬉しさの始めとなつて、終に離れがたない仲となりました。

男は、雲の色潮の光に憧れて、旅から旅に漂泊ひ歩るく繪師でありましたが、一たび醉つた初戀の芳烈な甘さに、燃ゆるやうな藝術の熱も鈍つて、其儘其處に其女の里近い宿に、草鞋を解いて了ひました。

かくて、二人は花鳥の歡樂濃やかな日を續けました。女は其家の門に夜毎々々咲き匂ふ白百合の花を挿して待ち佗ぶる心の標象としました。宵闇の濃き紫に仄白い夢のやうな色、男はそれをしるべに草深い野の露を分けて、しどろもどろ唯只管に通ひ通ふのでありました。

併し由來戀は涙に陥り易いもの、二人のそれも終には其例に洩れませんでした。或夜男は何者かの戀の妒刄に斃されて了つたのです。可憫さうに女は、それと知つて氣も心も亂れ果て、空しく待ち明した其夜の花を持つた儘、何處へか徘徊ひ出て了ひました。

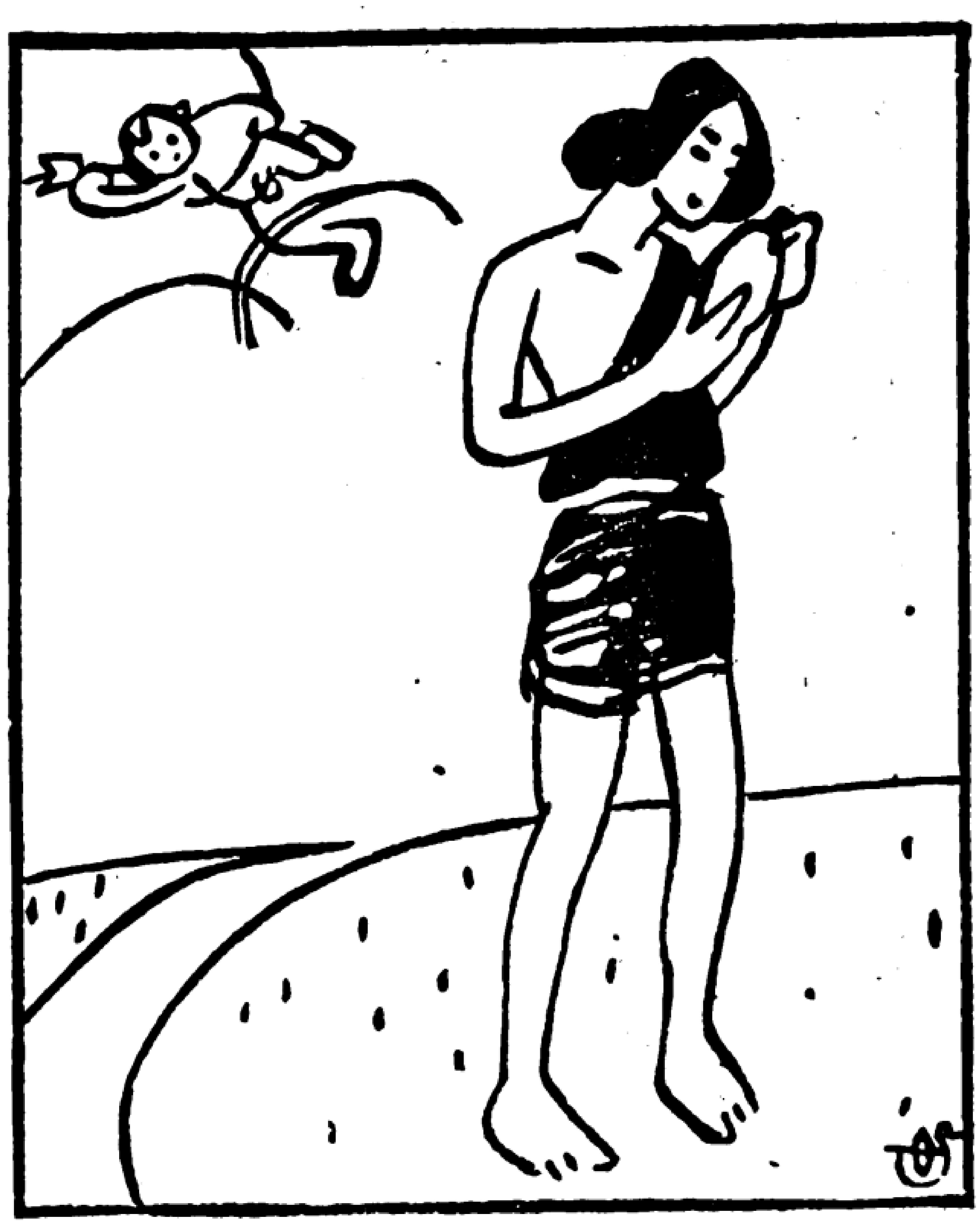
後、二日ばかり過ぎてからの事、其里のとある川に浮び上つた美くしい骸があります、――見ると其ふくよかな胸乳には、雪白の百合が一莖ひしと抱かれたまま、寂しい薫りを放つて居るのでありました。

ヴエヌスの鏡

美の女神ヴエヌスが、或時花鮮やかに草柔かい下界に下りて、囀る小鳥に戯れながら彼方此方馳け廻つて居る中、不圖胸に挾んだ鏡を遺しました。それは世の凡ての物を美くしく映すといふ極く大切な品でしたが、嬉戯に熱した女神は、少しもそれに氣附かないで、軈て其儘黄金の雲の彼方に去りました。

處へ一人の青年が、羊を追ひながら通り懸りました。さうして綠の草の中に何か知ら光り輝くのに目を留めて、我知らず夫れを拾ひました。と、こは如何に其小さな物の奥には、年若い人が居て、ぢつと此方を見守つて居るのです。而も輝き渡る其顔の美くしさ、青年はもう羊のことも家のことも、自分の事も忘れ果てゝ、唯一心に其艶容に見入るのでありました。

すると、此樣を雲の切れ間にちらと見たのは、美神の子のクピドです。小さい神は聡くも事の次第を見てとりました。さうして己れの影の空しい美くしさに憧れ渡る青年を憐んで、ひゆうと放つ白銀の矢先鋭く、鏡を微塵にして了ひました。



今、ヴエヌスの鏡と呼ばれる花は、其時のその破片が化して爲つたのだと、云ひ傳へられて居ります。

朝顔

何れの御時にか、都に一人の姫君がありました。生生した其面輪は、丁度水から出る朝の光の、清い高い匂ひにも似て、眩ゆい許り艶やかでしたので、誰云ふとなく、朝の顔の姫君、朝顔の姫と呼び囃すのでありました。



と、茲に又其頃なにがしの君といふ、楚々たる風姿の公子がありましたが、何時しか此佳人才子は、恥しい思ひを交し合つて、夜毎の夢を樂しむやうになりました。

併し花開いて風雨多し、匿し難い嬉しさは、おそくも姫の繼母に覺られて、二人は堅く其逢瀬をせかれました。加之、姫は無殘にも何處へか捨てられました。

公子はもう身も世もあらず悶へ苦しみましたが、終に堪へ兼ねて、墨染の衣に樣を變へて飄然都門を出でました。して、櫛風沐雨ひたすら戀しい其人を探めました。けれど悲しい哉探める人は影も無くて、慌しい春秋ばかり空しく幾返り幾返りいたしました。

すると或る日の事、其日も亦失戀の公子は、沈む心を勵まし〱、疲れた足をとある山路の奥深く踏み入れます、と不意に傍の叢から、嘗て見た事の無い美くしい花草がする〱と這ひ出て、優しい蔓を旅の衣に絡ませました。で、審つて其根の邊を掻き分けますと、こは如何に其處に小さい墓があつて、朝顔塚の三字が、痛ましく露に濡れそぼちて居るのでありました。

ラウウエンブルグの夜の百合

獨逸の國バルッの山里に、アリスと呼ぶ少女がありました。恁うした部落に稀な美くしさは、村の若い衆達の眼を惹いて、色々と云ひ寄る者も尠くありませんでした。が、少女はさうした言には耳もかさないで、唯一人の母を大切に、清い穏やかな朝夕を送つて居りました。



ところが、或る時其美貌が、不圖ラウウエンブルグの公爵の眼に留つて、是非にと權勢を肩に望まれました。けれど潔白な母娘は素よりそれを肯じません。終に渠等は執拗な其欲求に堪へかねて、ある尼寺へ隠れて了ひました。併し公爵の思ひは切れません。遂げられねば、愈ゝ慕るのが此道の例、暴れ狂ふ心猿の貴族は、或る日其權威を以てして、强て彼女を其城に拉し來らしめた。

泣き沈む少女の不憫しい姿が、城門の前に見えたのは、其夜も央ば過ぎた頃でした。待ち侘びた公爵は、見るなり颯と立ち上つて、情に堪へぬ双手にひしと美くしい體を抱きました。と、不思議にも其亢奮した筋肉には何の手應へも無くて、少女の姿は曉方の淡い夢のやう、すうと何處へか消えて了ひました。さうして其懐しい足跡からは、見る〳〵一莖の百合が生ひ出でゝ、清い薰りを放つのでありました。

其花が後の世にまで傳はつて、ラウウエンブルグの夜の百合と稱へられるのであります。

菊

奥州のとある里に、非常に睦じい兄弟がありました。ところが弟は、已み難い或る事情に依つて、どうしても筑紫へ行かねばならぬ事になりました。

昔の奥州と筑紫、それは宛で雲と泥の距りです。不知火凄く燃ゆるといふ筑紫、阿蘇の山絶えず地の怒を吐くといふ筑紫、其處へ弟は行かねばならぬ、山を越え野を越え八重の潮路を掻き分けて、日の本の國の果へ行つて了ふのです。今別れては何時か又相會ふの期がありませう。行く者留る者、それを思つては、別ち兼ねた手と手の上に、又更に熱い涙を振り灑ぐのでありました。

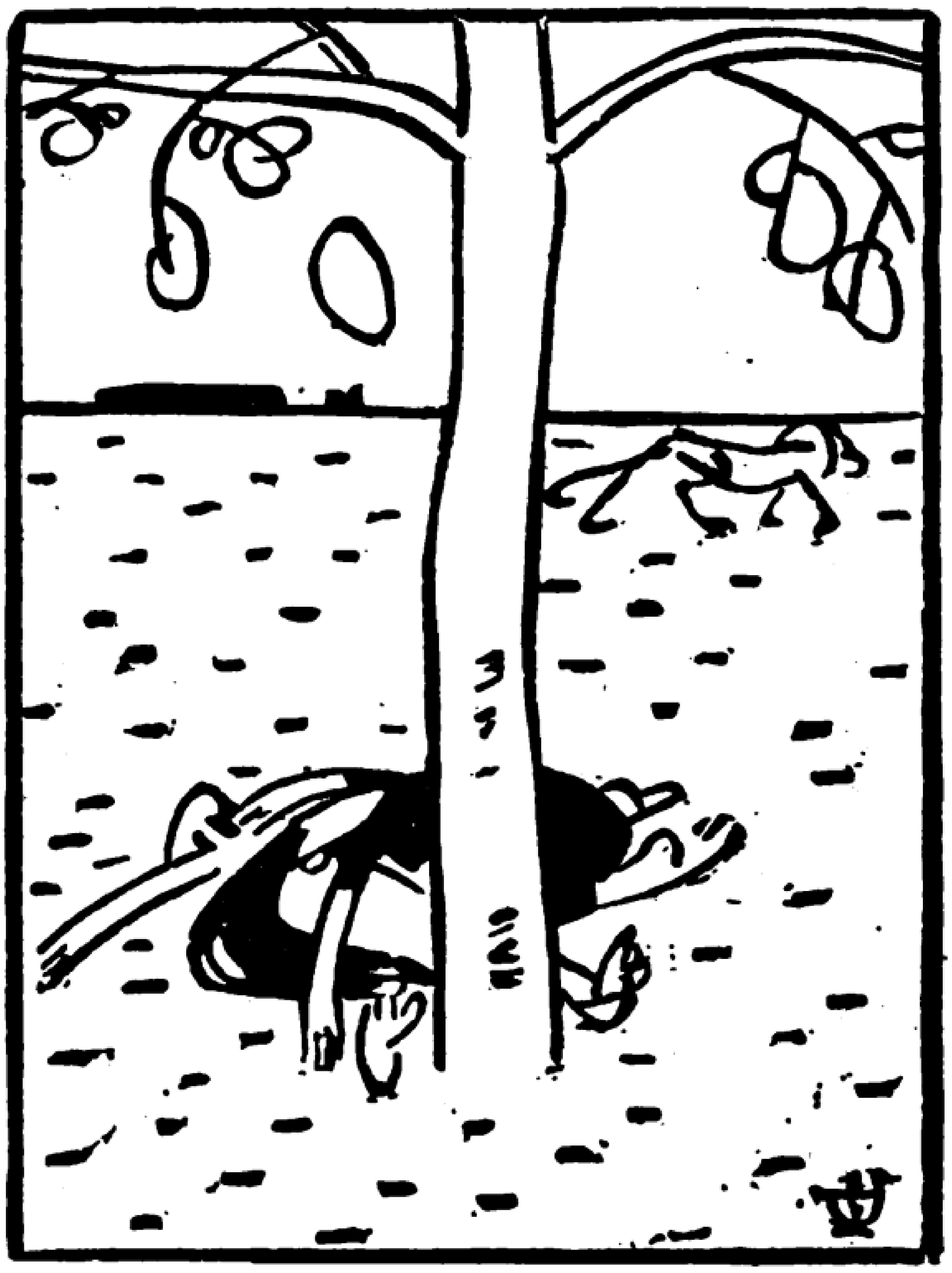
が、所詮離たでは已まぬ運命は、軈て二人を門の内外に分ちました。兄はもう腸も裂けるやう、人眼も恥ぢずひた泣きに泣きましたが、不圖思ひ附いて、折しも庭に咲き亂れる菊の一本を掘取つて、慌しう弟を呼び留めました。



「では、せめて……せめて、これを戀しい時に互に面影とも見やう。」

恁う云つて、それを二つに割いて分ちました。

斯くて割かれた菊は、海山幾百里彼方の土に植ゑられました。が、不思議にも其菊は、葉も枝も東の方の片々に許り生ひ繁つて、花も亦その片枝にのみ咲き盛つたと云ふ事であります。



桑の實

美男美女ピラムスとチスベは、うら若い胸の紅の思ひを、郊外のとある白桑樹の下に語らひ合ふのを、例としました。

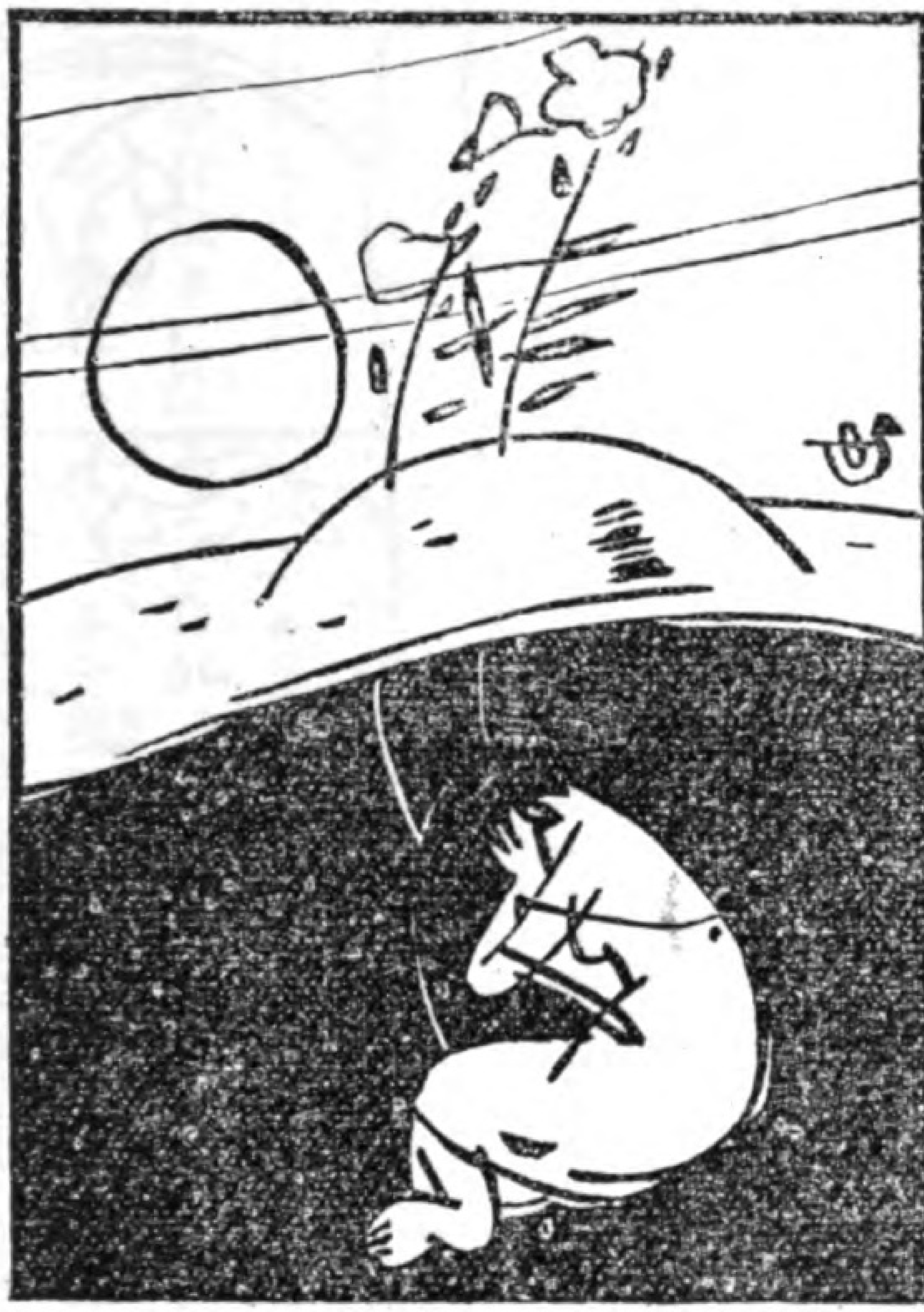
處が或る夜、チスベは件の場所に男を待つて居りますと、折から其處へ、人を屠つて間も無い獅子が、腥い血を顋に滴らせながら來懸りました。女は驚いて、思ず落した被衣を拾ふ暇もなく、倉皇と彼方の森に逃げ入りました。

飽滿の獅子はそれを追はうともせず、唯落ち散る被衣を寸斷したのみで去りました。が、裂かれた其衣は痛ましくも、二人の命を奪ふ種となりました。時に遅れて息せき馳け附けたピラムスは、血に染みた見覺えの衣と怖ろしい猛獸の足跡とを、折しもの夕月に見て魂つぶれ、終に絶望と悲歎の刄に胸貫いて了つたのです。

其處へ戰々として併し嬉しさの胸躍らせて、チスベは歸りました。ところが樂しかるべき樹の下は、此痛ましい光景です。彼女はあなやと許りどうと倒れて、少時心を喪ひましたが、軈て漸く開けた瞳に映る被衣の片に、直ぐそれと知つて、男の刄取るより早く颯と迸る芳血と共に、情人の屍に纏れ伏しました。

今、桑の實が紅なのは、其時傍の白桑に染みた血が其儘、永久に悲哀の形見と殘つたのであります。

待宵草



若い女なら其美貌を奪ふほど慘めな事は、恐らく人の世に又とありますまい。往昔、四國の或る山里に花のやうな少女がありましたが、其少女が不幸にも重い疱瘡に罹つて、終にその痛ましさの極みを、己が身の上に見ねばならぬ事となりました。

すべて大方のうら若い女達が、命よりも何よりも惜しみ庇ふのは、其瑞々しい顔ばせなんです。彼女達の小さい胸は、二六時中たゞ少しでもより美しくありたいの努力に搖いで居ります。彼等可愛らしい小鳥の群は、おれが爲には時に死の危險をも敢て冒して悔ひません。美貌はそれ程までに彼女達にとつて、價値の高いものなんです。であるのに薄倖な四國の一少女は、一朝にしてすつかり夫れを掠め奪られて了つたのです。其心苦しさはどんなでしたらう。

それからと云ふもの、彼女は一室に閉ぢ籠つたきり、日を泣き夜を泣きなき暮して、一歩も外へは出でませんでした。唯餘りに氣の結ばれる時折には、人の面も分ち難い宵を待つて、そつと家近い野に逍遙ふのを、せめてもの慰めとしました。――する中明け暮れの涙は終に彼女の命を奪ひました。

其盡きぬ恨みの塚の上に生ひ出たのが待宵草です、で、此草は今猶うす紫の宵々にのみ、花咲くのであります。

袈裟物語

嵐溪



雪を誘ふて、谷の小川は音を得立てず、さしもの那智も今日ばかりは垂氷せんばかりなり。

文覺が慈救の大願より、瀧籠りすること三日にして遂にはかなくなりぬ。俄に不動明王の御使なりとて二童子舞ひ下りて彼が幽冥の行に力を合せて以來、吹き來る風も寒からず、落ち來る水は湯の如く、……………苦行を餘所に瀧壺の中に此世の夢路をぞ辿りける。

△涙潜々

塒にかへる野烏の、暮れ行く鐘を誘なふて、前栽の遣り水音しめやかに、軒端の風のサラ／＼と、やがて落ち來る紅葉葉の一つ二つ並の里の秋色今正にたけなはなり。

今宵しも左衛門尉が奥座敷、銀燭の光りまばゆく、便坐靜かに盃をひける凛々しき武士の、瞼ははや微醺を帶びて、いとゞ樂しげなる樣も興ありげなり。そこに侍れる美女は、水も滴らんばかりの薄化粧、衿もとにかゝる後毛の二筋三筋、扨ては面貌の優に勝れてうるはしかり。

鴛鴦の契のかねごとに、秋の長夜の更け易く、玉山倒れて、華胥の夢溫かく、渡は甘き寢に他愛なかりき。

あはれや更け行く秋の夜寒の、ひし／＼と身に沁むも厭はで今更に、夫の寢顔つく／＼と見遣るひとみのさても何うれひてか庭に時雨る萩生の露、やがて帳臺ふかく良夫を臥さしめて、密かに湯殿に忍び入りし袈

我が心の中、今一時を過しなば、恐ろしき刄のひらめき己が身の上にかゝるらんと思ひては、流石にあきらめし身も亦一としほ悲しさの増りで、髪梳づる手も震ひ勝に、幾度か頬を傳ふ泪のしづく、溢れ〳〵て、あはれや身も世も亡びなば……、

△深夜の悲劇

高殿の燈火消えて、如法闇夜の床の中、袈裟は濡れしうば玉の黑髪男様に結ひて、烏帽子をまくらの許に置き、夜の物ひしと被げども眼は冴えにさえて幾たびか寢がへり打ちぬ、

ころしも秋は十月の霜ざかり、うてなの内は寂として、物おと絶え葉末を照らす月のひかりに、今よひこの高殿に忍び入る戀の奴の微笑やいかに、閃電！　凄慘なる燒刄の匂ひ。蟲の音はハタと息みぬ。

幾巡せる階廊を黑き人影の夢かとばかり、翳す劍のひかりは、隙間もるともしびの如く、流れ〳〵て奥座敷へと逼り寄りぬ。

―萬籟寂として霜さゆる眞夜中、月光くだくる前栽の飛び石づたひ、血汐したゝる頭をさげし人影は、石を飛び〳〵やがて萩生の蔭へと消え亡せたり。

△橋上の瞥見

花の吹雪に打たるゝ駒の、染め分け手綱かひ繰りつつ、南をさして馳せ下る雄々しの若武者一騎、これぞ渡邊黨の一つ星、遠藤武者盛遠とて生年とつて拾七歳紺紫濃の直垂に、黑糸縅の腹卷着け、烏帽子に、銀の蛭卷二筋通しの長刀さげし扮装こそ、いともはなやかなれ、右手に打ちふる采配は當日渡邊橋の橋供養に、辻々のつはものどもを警むる奉行のしるし、上西門院北面の荒武者共も、この少年の指圖には、何とていなむよしもなし。

斯くて麗けき春の日のにぎはひも暮れそめて、どつと人なだれのひとしきり、群集どよめくたゞ中へ、しづかに乘り入るゝ金蒔繪の女の網輿、蘭麝の匂たゞよひて、さてはいづこの貴人ならん、芳紀は花の二八時

そよ吹く風をすだれに受けて、憎くや誰彼時の白く浮き出でし鶯の影チラリと馬上の盛遠が眼に映りぬ、眉は青黛、唇は丹花嬌態いともこゝろ憎し、馬上の武者はおもはず知らずこゝろそゝりて駕を追ひ行きぬ、駕は渡邊郷へ通ふ畷みちの、とある門をくゞりぬ、さては我が一門左衞門尉亘が愛し女よな、まがふ方なき我が從妹ぞ、阿都磨ぞ、今の袈裟御前なりけりな、

△荒武者の脅迫

籬の花はいたづらに行く人の手折るに委せど、うたてやな高峰の雪は掬ぶによしなし、馬上の少年に遣りがたき苦悶の色あり、馬はすご／＼ともと來し道へと引きかへしぬ、



花老いて夏は盛りぬ青葉の色うつらひてふたゝび秋は來りぬ。

心の駒のかけくるひて、戀のもだえに堪へかねし盛遠は叔母なる衣川が館を訪づれぬ。

侘びずまゐの殿作りをかしく、時じくに黄金の花咲き匂ふ、あるじは館の名そのまゝの衣川とて、袈裟御前が母人なり、未だ消えやらぬ殘んの色香は、枝折戸に咲く萩の花なまめかしく、ほろゝ散るはなびらを馬蹄の塵と踏みしだきて、叔母上！スラリ拔き放ちたる氷の刄を、衣川が胸のあたりへさしつけぬ。

我が爲め憎や讐、いざ命給へ――日頃戀の炎に燒きつくされて、今や空しき骸十七、如何に長命むさぼる

とも、ゆめまぼろしの世に何樂しからん想ふ愛女はあだし男にかしづきて、我は夜な〳〵ひとり寢のさびしき夢、未だ振り分け髮のうなゐのころ、親に別れて他家に人となりしより、母戀しのをさなごゝろにこゝの叔母上のなつかしさ。さては行末は阿都磨と蓮のうてなの末長かれと契りしものを、固き約束も今更むかしに返さんよしもなし、おめ〳〵生きながらへんも心憂し、許させ給へ、いまこゝで叔母御ともろとも差違へて。

衣川はさすが女なりけり、霜さゆる刃の光恐ろしく今眼のあたり血縁の甥に逼られては、悲しさいとゞやるせなく、落つる涙を振り拂ひ

「否とよおん身がこゝろ根のあはれさは、この叔母もよく知りつれど、並の里の權威にはいなみかね、餘儀なく阿都磨は遣はしたれ、少しも御身を厭ふとにはあらずかし、いま二た刻をたちなば阿都磨を此處に具し參りてん、やよ盛遠よ、やがてほど經て忍び來よかしと、其の場は漸くなだめおき、文の使ひを並の里の袈裟が許へと送りけり。

△少女の惑ひ

戀しき母のおん消息、取る手おそしと披き見れば、ところ〳〵に涙のあとのにじめるさへ、をとめごゝろの胸とゞろきて、絶えて見ぬ生みの家の戀しさより、母の安否のこゝろもとなく、その夜の中に衣川の館へと、馳せ行きぬ。……先立つものは母の泪、娘の顏しげ〳〵と見まもりては亦もせき來る涙とゞめあえず、袈裟が手をとり、幾度か言はんとしては切なき胸のとどろくばかりなり。さてしもあらず委細は口傳に、袈裟のをどろきやいかならん、天緣熟して亘に嫁してより、朝夕慕ひ參らするだに、甘き密言はさても妬むか花に嵐！　月に村雲！

連理比翼のかたらひ濃やかなりとはいへ、たらちねの母のおん身の大事にはいかでそのまゝ。小さき胸に問ひつ、答へつ、袈裟は苦肉のはかりごとをぞめぐらしける。露よりもろき舌三寸に、北面の强者を欺かん

とす、さても危し！

係蹄に懸りし鳥二つ、その一つは免かれぬ命なりとかや。生きて貞節を全うせんか母のいのちは今宵かぎり、さればとて愛男を餘所になすこと心の悶やいかに。

淋しき笑はそが双頰に上りつ、されど芙蓉のまなじり露閃めきて、並の里の蟲の音いよ〳〵繁し。

△對座の密語

盛遠は其の夜忍びて衣川を訪づれぬ待ち設けたる袈裟はいそ〳〵と座に請じて、よそ目には何の苦もなき水鳥の、エヽ妬きしや帳臺深く垂れこめて短檠のもと對座の密語。

はかりごとは、斯くぞある、心得たまへ、洗ひ髮の亘



うまひを見すまして一刀の下に、さすれば妾はおん身のまゝになり申さん、ぬかりたまひそと秋波一閃、さらば！

盛遠の胸やいかに、腕はいひ知らず戰きぬ。

＊　＊　＊

その夜高殿の悲劇に戀しと思ふ袈裟が頭、盛遠の悔恨やいかに、今さらに紅眸生けるが如き袈裟が儚なき姿を見ては猛き武士も腸九廻しぬ。あはれ夜半の嵐に散りそめし花十六の春、永久にうらみはつきじ！

紅梅や見ぬ戀つくる玉簾　　芭蕉

茶師の戀やあらしの花衣　　蕪村







はつ春

松平鏡子

新らしき光を背に受け乍ら
　馴れたる暗に直急ぐかな、

戸を繰ると霧が一ぱい――。日光がさゝれば未だはつきとはわからぬけれど、煙を一塊叩きつけたやうに、上下が滲すりとぼかされて、そこいらは暗の領分、一重へだたつた向側から、新らしい曉が步一步と進んで來るのだと思ふと此樣ことを云ひ乍らも、矢張待たれますわ。嬉しいんぢやないんですけれど……

今朝は早くから門も八文字に大きく開いて、開けつゞいた大玄關に、衝立と名刺受、學校へ行く人が多いから、仄明るいうちにお雜煮を祝ふ。

何と云ふこともないんだのに、妙に新らしい感じが湧く、もうみんな活きいきした顔して、突當るやうに歩いてはお芽出度うの取變へつこ、新聞の初刷は紙數ばつかしあつても廣告が多くて平常と大して、讀出があるとも思はれない。

――お湯に入るゝ私は晝間お風呂に入るのは嫌いだ眼に明るくつて逆上ちまつて、さつぱり洗ふ氣にもなれやしない、弟・達の散々あばれた名殘が、流しのはめに隈をとつて、目新らしく濡れてみえる。

うすら暗い更衣室の隅に、脱ぎ捨ての着物の袖を通すと、ぞつと身に沁むやうな衣の冷さ！

ゆあみして泉を出でしやははだに
　ふるゝは惜しき人の世の衣。

…………………。

光るむかふの家の屋根の瓦を眺め乍ら、筆投捨てゝ窓に凭つた。あら兄さまが庭で呼んでゐらつしやる。廊下から庭下駄つゝかけて出てゆくと







「何してたの？」

って訊きなさる。

「御年始狀書いてましたの、でもねあきて了つたゝんですから……何見ておいで遊ばして？小兄さま」

「むかふの路を角兵衛獅子が通るよ、路が悪るくつて歩けないんだ、角兵衛なんてものは、元日から來るもんかい！」

「知りませんでしたわ、私」

畑を越してあちらに細い道路が、霜が融けたのでふみかへされて、まるで田圃のやうなのを角兵衛獅子が三人連れて、行きなやみ行き悩み日和下駄の一足拔きに、太鼓叩くのも忘れてあるいて來る。

「もうぢきうちの方へ來るよ、僕は面白い事をさせて上げやう、あんな小さい癖になか〱上手だねえ」

なんて仰しやるから

「よく御存じね、御覽遊ばしたの？」

「あのお子のはまだ見やしないけど、あの位のはいくらも歩いてるよ、遠くからでわからないけど、可愛らしさうな子だな」

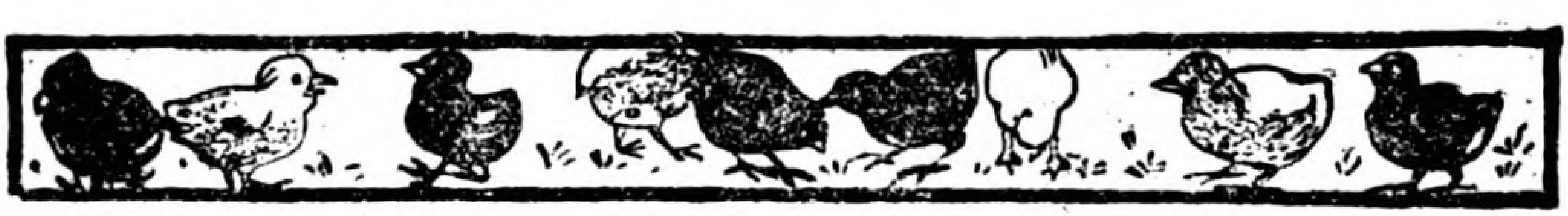
風があんまりなくつて日が暖かくつて、ほんとうに好いお天氣、山茶花の花がぬかるみに散つちまつて、誰が踏んだのか淡紅色の瓣に、無慘たらしい下駄の歯の跡……ばさ〱と雞の羽ばたきが近くに聞える。

「僕は三元日すむと銀座の方へ行くけど、鏡ちやんおまへも一諸に行くかい？」

「連れてつて下さる？」、珍らしいわ、雨が降るかも知れないのね。前觸れが大きくつてお流れになつちまふと世話なしだけれど……」

「心配しなくつてもいゝよ、いつも出多羅目だと思つてら、僕にもちつと買ものがあるんだから、他に誰か一人なら連れてつてもいゝ」

枝折戸を力任せにゆすぶつて、片足あげて小







く蹴る。

「こはれて了やしないの?」

「餘計なこつた、大丈夫だ」

「今年こそ兄さま、帝劇へ一遍連れてつて下さいましなれ、年暮の文藝協會劇が見たかつたんですけど、一言も云はないでたんですもの」

枝を延してゐる松の、手近い葉をり乍らいへば

「どうしてかおまへこの頃芝居が好きになつたねえ、誰かにかぶれちやつたんだよ屹度!、女のくせして出て歩かなくつてもいゝんだ、行きたけりや大兄樣に賴むといゝぜ、僕あ當分行きやしないよ」

愛想氣もなく云ひ放つて、駒下駄の先で土をしやくい上げつゝ

「子供日へ行かうか、みんなつれてつてやるぜおまへと二人して帝劇へゆくお金がありやみんなして有樂座へ行くなんて譯なしだよ……れ鏡子、今度におし、いつでも見られるぜ、帝劇は長いんだ、

有樂座だつて永久いんだわ、變り目があるものを……とおもふけれど、眞面目くさつてゐらつしやるのに、私が串談ごかしにも云へやしません、默つて私も葉を引つ切つちやむしつてゐる。

「家へ入らうか、鏡、もう先刻の角兵衛が來るぜ、あつちから一まはりして我邸の方へ來るんだから……」

「入りませうか、日は當つてゝもやつばり冬は寒いわれ、お炬燵に行きませうよ小兄さま」

うながしたてゝ、大きくふんでゆく人のうしろから、路を選んで歩いて行く。と……あつと思ふまに足すべらして、縋るものもなく橫ざまに……泥に埋れた足もとを眺めた眸に、緣を見上げた時、兄の姿はそこにはなかつた。

ふ つ か









梅が佳い匂ひ！、私は今日ほど梅の高い香をかいだことはない、縁側に腰をおろして、しもどけの庭や、庭を越えたむかふの畑の霜枯れた大根の葉を眺めてゐた……羽子の音がする。

書き初めするからつて妹が迎に來て與れました……下駄を脱いで十疊へゆくと、最早八千代が筆とつてゐた、行書で書いた六つの文字が平常に似氣なくよく出來てゐるとおもひ乍ら、緋毛氈にすれ〳〵に膝をつく。

ふだん見かけない大い硯には、墨が八分目ほどに、滿ちてゐた、唐紙の巻いたのがいくつもおかれて、みんなかく人の方をみつめてゐる、壁にそふて、幼ない筆の惨んだのが三枚ばかりはられてあつた。字くばりを定めて、こんどは弟が太い軸を提る。

紺の制服着た見たやうな人が坐つて居る、と思つたらまあ柳津の多一さん！、久しいこと、よくねつて聲をかけると、鏡ちやんですか、お芽出度うつて聲が涼しい。あんな元氣の好ささうな顔してるけど、あの人は何とも思つちや居ないんでせうか、口惜しい事悲しい事の數は多いだらうに、よくまあ我慢してゐらつしやる、學校へやつて貰ふつたつて書生代りなのではあるし、あの小父樣の皮肉には、拳の震ふ時もあらう、もうお十九、亡い父さまや母さまに、この勇まし氣な態度を見せてあげたい、見違へる樣に延びたなりかたち！、變つた日には御自分でも、思ひ出されてどんなにか……。

「鏡子來てお書き、さ」

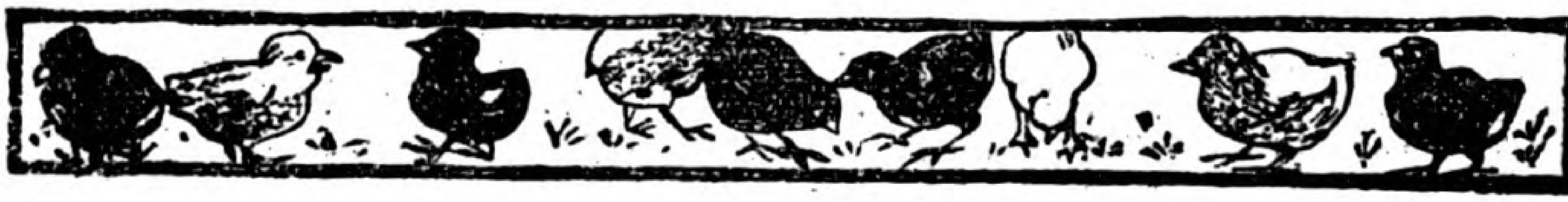
「つて大兄樣が、新らしい唐紙をのべて、文鎭で、おさへ乍ら、筆持つて待つ。

「鏡ちやん書くんだよ、君の番なんだぜ」

小兄さまは毛布の皺を延しのばし。

「何て書いたらよくつて？」

「定めたつてどうせ云ふ事聞きやしないんだから、可いさ何でも、好きなんで」、と仰有るの







で
「君が代なら可いでせう、君が代はお芽出度から……」
字くばりを定めて頂だいて、筆を取る手が震へてどうにもならない。
「私一枚きりで可いわ、澤山よ、もう！」
下手なものを幾枚染めたつて同じだと思つて、席を立つ、
「兄様もうあつちへ行つちまつて可いんでしやう、私は最早濟んだんですから」
「うゝむ僕が書くんだからおさへてなくつちやいけない」
「云はれてとう／＼一枚すむ間神妙に坐らせられる、八千代に代つて貰つて、そこ／＼に逃れて部屋に歸つた。
昨日の靜けさに加へた今日二日の賑はひ、廣野原があるだけに、かすかにも凧の上鳴り、綠は先刻、羽子板抱へて出かけたけれど、一體何處でついてゐるんだらう。

……………
……………、
庭の砂子は金銀の、
玉を連れて敷妙の、
五百重の錦や瑠璃のとぼそ、
硨磲のゆき桁瑪瑙の橋、
池の汀の鶴龜は、
蓬萊山もよそならず、
……………
……………
……………

お彈初だわ、誰でせう、撥の冴え。節ましい程澄み切つて、整のふた節まはしや、屋敷街の奥ぶかい庭の中から、長唄の三味線の音が洩れやうとは思ひも寄らなかつた。下町らしい感じがされるうれしいの！。
……根下りな、つぶし島田の艶なのがかう俯







むいて、白い手首にまつわつて颯と滑つて緋縮緬の襦袢袖も零れやう、……會ひたいわ私、その人に……。

私も島田に結つて見うかしら、年老けて見られるのは厭だけれど……。下町に生れて來たらよかつたんです、帳場格子のある大福帳の懸つた薄暗い店に人と成つた女だつたらもつと華美な生涯だつたかもしれない。あゝあの格子戸造り紅い燈火の影に爪彈きの音の洩れた、婀娜な家がおもはれる……懷かしい過ぎし夜のさま！友の一人は雛妓であつた。

△三日

「叔母樣ですよ、叔母さまですよ」

呼ぶ妹の、けたゝましい前ぶれに、急いで立ち出る玄關先、叔母樣と進さん、お雪ちやん勵ちやん芳枝さんの五人連れ！。

「今日は……お目出度う」

「早々から呑氣でせう」

ホヽヽヽと華やかに笑ひ捨て、叔母さまはコートを脱ぐ。腰巾着の小さい組は木戸を開いて庭へと走つた。

平生紺飛白の、嚴つい羽織召してゐらつしやる進さんが、いつものあれを脱ぎすてゝ、木綿乍らも一帳羅引つ張つた。今日紋付の改たまりやう、始めて袴衣來た太夫さんみたいだつて一言云つたら、もう坐らぬ先からの高わらい。

「賑やかな方達ねえ……ま、おめでたうようこそ」

つて、かあさまも晴々しい笑貌をお見せになつて

「でもよく遠い所を誘ひ合して來られましたね珍らしい」つて云ふと

「いゝえ途中でぶつつかつちまつたんですよ、偶然とね、僕は市が谷へ寄つて岡澤からお小さんを、三人引つぱり出すと、市街電車がこんで







ゐたから甲武で來たんです、鏡ちやんが藤岡の叔母さまがゐる居るつて云ふから……それ迄は全く知らなかつたんだ、けれど……僕お叔母さんの澄まし込んでる顔見た事がなかつたもんだから……」

「進さんて方はまあ、好加減ばかし仰有る。いくら何だつて電車の中でげら〳〵笑つちや居られないでせう、すましこんでやしない、當然の顔してたんですわ」

叔母さまが云ひつくらうのた

「どつちがどつちがか分明やしませんれ、進さんも人の好い方ぢやなしお登志さんの氣取らないつて云ふのも受合はれませんから」

つて笑ひ乍ら母さまは、お茶を注いだり、お屠蘇の道具を出したりなさる。

「かお樣お汁粉はどうでせうれえ、少し甘味過ぎたかもしれないんですけれど」

重たいお鍋のつるを持つて、臺所の障子のかげに、身を隱して母を呼ぶと

「まあ鏡のお手際で、一碗宛食べて見ませう」

母さまもお立ちなさる

「お餅は私燒きませう、鏡ちやん金網を借して下さいな」、叔母が七輪の前へかゞまうとするのた。

「あら、お召物が汚れますわ、さ叔母樣、あちらへお出で遊ばしてゝれ、私燒きます」

「汚したつて泣きさうな着物でもないホゝゝゝゝ內うちも同じ事ですわ、此樣片づいたお臺床に私も置いて戴」つて、いつかなきかない樣子を見て

「ちやうち〳〵ですかられ、どうせ樂屋は知れ切つてるんですから、あつちの火鉢で燒いて頂戴ー、お登志さんと鏡と二人で、恨みつこなしですよ……」

切だめの中に、お餅わけてもち出して、お座敷のまん中に陣どり乍ら、さし向ひして二人で







焼きましたの。ぷーとふくらみ上るのを箸でおしつけて裏返す。

「大變靜かね年取つて音なしくなつたわけでもないんでせう？お留守？

「いゝえみんな居りますわ、たゞ武ちやんがれえゝもうぢき歸宅るでせうよ、小さい人はなうあそこに、一かたまり！お見えになつて」

小さい人が、あちらお縁の靴脱のむかふがはにお下髪や一分刈の頭集めて話し合ふてゐるうしろの、すつと越えた植込の中を、進さんと小兄さまと二人連して……

「また玉蟲を見つけやうとしてゐるんですよ、屹度」

私が叔母に小さく囁やくと、うなづいて莞爾、ガラス越に障子越に、庭のかなたを眺めやる。

……………

「進さん、進さん、小兄様、いらつしやいましな」

大きく手を擧げて、縁端から斯呼ぶと

呼び手が好いと張合があるけれど、鏡ちやんぢや大抵お係しが出來る、屹度しみつたれなもんなんだらう」

憎まれ口を仰有りつゝも、やつぱり急いでお出でなさる。縁先の人達も奥座敷に呼び入れて火鉢やら座ぶとんやらを直して、お菓子と蜜柑との大きい紙包の傍へ、お汁粉のお盆をくばつてゆく。

「こりや素的に甘い、此奴あ甘い」

つて、小兄様は進さんをかへりみつゝ

「誰だか馬鹿におごつたなあ」

「あくど過ぎて？、鏡ちやんがお砂糖入れ過がたんでせうよ」

「うすめると好いわよ、兄さま」

傍から注意して上げるのを、

「恐いつて云やしないぢやないか、餘計なこつた」







だから憎らしいっていうんだわ、此頃は目だつて口がわるなくつてゐらしたやうだ。
「鏡ちやん、お前と先刻話ししてたのはどこの人だい」
お汁粉なすゝりく。
「彼方。あら兄さま知つてらつしやる癖に……御存じないのまだ？、村田さんの鶴江さんつて仰有る!?、白粉の濃い割にしちや好い方よ」
「白粉の濃いのが厭な人つて法があるかい」
「だつて兄さま、眞白いのお嫌ひだつて仰しやるから……」
「俺がそんなこと知るもんか」
せつせとお代りしちや召し上る、二の句がつげなくなつて了つた。
「僕の誕生日が十二日だから、閑だつたらやつて來給へつて進さんか仰有るのを」
「晩餐會なの、御馳走はあさんだらうれ、番丁くんだりまで夜風に吹かれて、いつかみたいにお豆腐盡ぢやあ……君の許ぢや豆腐が好きだれ僕あ腹が悪くなつたら行くかもしれないよ君」
「御馳走あるさそりや、その代君は何を持て來て吳れる？」
「さうさなあ、僕は燒芋を十錢もおごつて上げやう」
十錢と仰有つたところが素晴しい、私また三錢とでも云ふかと思つてたわ。
「やき芋は御見當違ひかもしれない」
私の方を見てお笑ひなさるから
「進さんはれ、あんころ餅ですよ、糸切團子の甘いのだのれ、叔母樣!?」
「馬鹿云つてら、僕なんてそんなもの」と云つたが話頭を轉じて、
「叔母樣にや何祝つて上げませう、矢張お芋ですか」
つて進さんは鹿爪らしく訊く。









「さうれえ、食るものは一度つきりだから、私は殘る物がようござんすれ」

「いゝえお芋は可いんですよ、身體の血になります、肉になつちまへばもう取れつこないでせう、皮むかないで食ふと餘計滋養分になるんです」

ほんとうに兄さまは碌な事は仰有らない

「緣の奴れ、いつか母さんに香水を上げたんですよ、それはちつたあ氣が利いてるけど、ろくに使はない中から毎日〳〵ハンケチへしめしに行つたり、リボンにつけるつて貰つたり、大方一人占しちまつたから……」

「一瓶十五錢の見切品だらう」

つて冷評浴びせられたのを聞きつけて、緣は座敷から怒りに出張して來る。

「私はれ、本氣になつてお覗して上げますわ」

つて申し上げると

「當にならないけれど、まあ樂しみの中に交くつておこう」つて憎らしい。

「勵ちやん逢はれ、みんなして一つ宛自働車が欲しいので云ふのよ、私は蓄音機のもつと上等のがほしくつて堪らないわ」

なんて八千代が云ふ、いつぞや聽いて來たマーチが、ひどく氣に入つたと見える。

…………。

五時が打つた時、少し早いけれど一同して夕餉の膳に向ふ、みんなよく口と手とを働らかす、全く西洋流だつて大わらい。

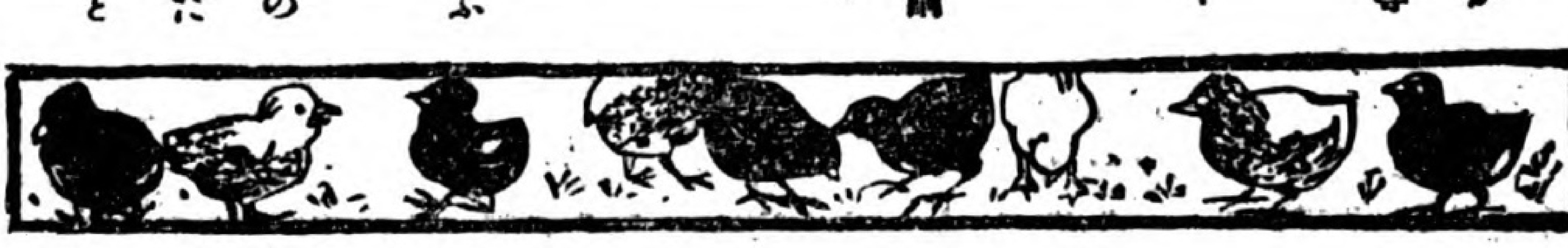
日が暮れかゝる……星の小さなまたゝき—

「もうお歸り遊ばすの？」

つて、うす暗い緣側に、叔母の背後に凭り添ふて訊くと

「えゝもうこんなに暗くなつちまいましたもの私は御飯を濟ませたから好いけれど、ばあやだの下女を相手に籐岡が如何して居ますやら」と

心もとなさまうに









「また今度、七草まへに二人して上りますよ。そしたらゆつくり！、鏡ちやんもそのうちに、日を見てお出かけなさらなくつてえ？、かあさんにお願ひしてね、宿りがけにでも」

微笑みつゝ、私の髪の毛掻き撫でゝ、

『どれ、もうほんとにお暇しませう、私此家へ來ると長くつていけない、たまに姉さん許へお乳呑みに行くんだらうつて藤岡に冷かされたけれども、小さい時から母がなかつたから、姉妹でもまるでかあさんのやうな氣がされますわ、可笑しいのねえ」と唾をのんで

かあさんは？　さう。進さんも何ならご一處に」

「僕はゆつくりして行くつもりだつたんだけれど、市ヶ谷のが居るから歸らなくつちやならないだらうな」僕も亦來るとしやう」

進さんも腰を浮かせる。

…………●

「またお寄り遊ばせな叔母樣！進さんと屹度何卒れ、おまちしてますから」

「氣をつけてお歸りなさいよ」

「有がたう」「失敬します」「皆樣に宜しくれ」「左樣なら！」「さよなら」「またいらつしやいよ」

「歸る人見送る人、まち〳〵に交る聲の中に、私もおくれて式臺を下りて十數歩、たよるともなくたち出でゝ、門の扉に袂をまかすと、外を透しみた。

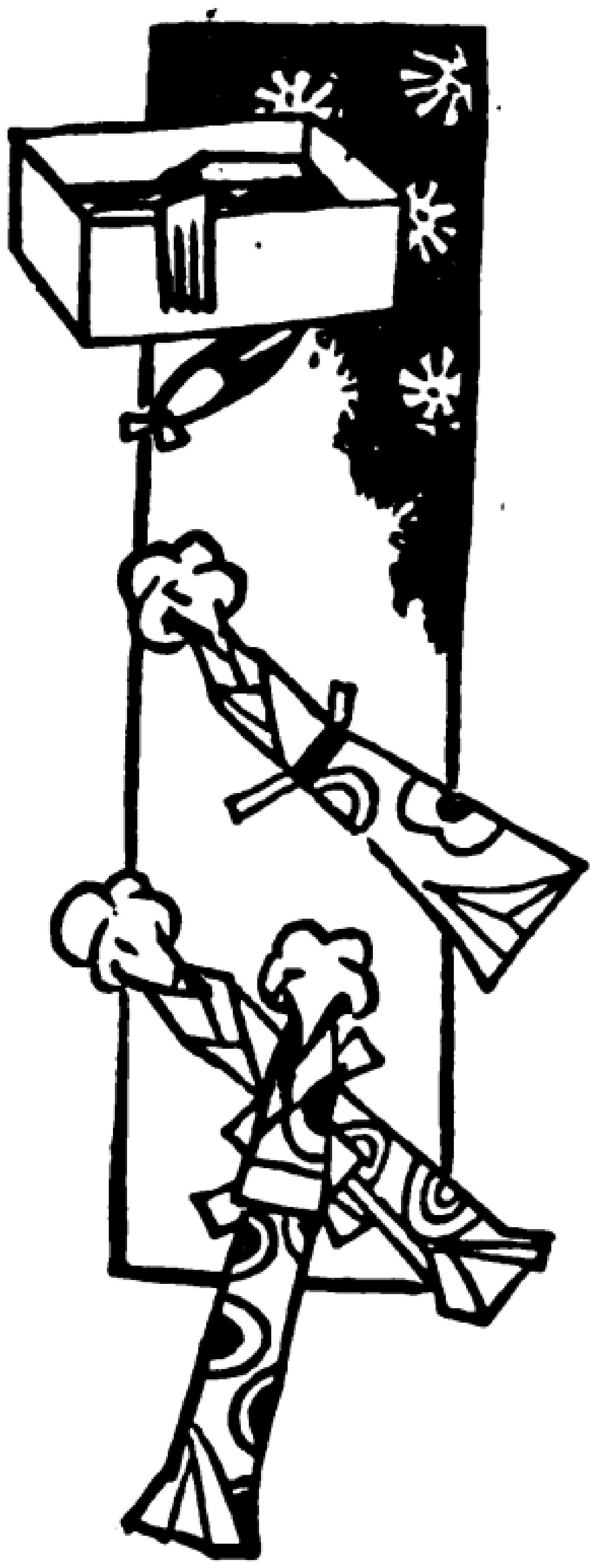
冴えた月に、我が影は濃くうつろけれど、人の姿は何かにまぎれて……あれ、土の中から蟲が啼く……さやうなら」

つぶやいて、自分の聲に胸轟かせつ。

戸外の月と、洩れ出づるわが家のともし火との間に立つくせば、そや〳〵と風が吹いてゆく囁きの木の葉を一枚むしつて、意識もなく唇に當てた。

…静寂を破る。歌留多の聲もない。（完）





白瓜と青瓜

小布施　とし子

庄次は小作人の子でありました。彼の家は土着の百姓であります。勿論百姓といふものが一旦落ついた自分の土地を離れて彷徨ふといふことはよく〳〵の事情が起らない限は決してないことであります。自分に土地を所有する力の無いものは他の土地を借りて作物を仕付ます。そして相應に定められた金錢や又は米や麥の收穫の一部を地主へ納めるのであります。此が小作料であつて、私の間に授受されて居る租税であります。それで小作人の懐にする處は其の收穫のうちから自分の食料までも減じて見ると、立派な體格を有つた一人の働きが實際何程にも當らないのであります。然し彼等は四季を通じて殆んど田畑の仕事にばかり屈託して居るのですから衣類の節約が極端に行はれて居ます。それから食料といふても、第一には鹽を買ふ外には自分の手で作つた物で十分に滿足することが出來ます。それからどんな姿にも雨戸が有れば住むに事を缺くことはないのであります。

恁んな狀態でありますから消極的な身の持方をして居れば案外に苦勞のない生活がして行けるのであります。彼等には幸にも非望を懐く者はありません。彼等の身體が鍛錬された鐵のやうである如く、彼等の心にも頑强な或物があつて彼等を抑制して居て呉れるのであります。

庄次も恁ういふ小作人の仲間で殊に心掛の慥な人間でありました。彼の老つた父は毎年夏の仕事には屹度一枚の瓜畑を作りました。其の畑からの收益で一年間の家内の小遣錢に充てるのが例でありました。固より面倒な丹精が要る代りには蔬菜の栽培程百姓の仕事と

して利益なものはないのであります。其内でも瓜類の栽培は又格別なものであります。前の年の秋からの心掛で麥の間には瓜の種を蒔きつける場所をぽつ〳〵とあけて置きます。爽かな涼しい風が麥の軟い穂先を吹いて、空氣にも土にも潤ひを帶びて來ると、庄次の家の瓜の種も麥の明間へ二葉を開いて來ます。段々眞直に射し掛ける日光が十分の熱度を與へてくれますし麥はまた周圍から大切に保護してくれます。それでも非常に敏い赤蠅がそつと來ては軟かな子葉を舐め減すので、爺さんの苦心は容易ではありません。虫を除ける爲に瓜の葉へ灰を掛けて遣つたり、幾度か失敗しつつ敏捷な蠅を殺したりしてやるのであります。

麥が刈られると周圍はからりとして如何にも晴々とした心持で、瓜の蔓が威勢よくずん〳〵と伸びて行きます。蔓の先は軟かでそしてすつと頭を擡げて居る處が、見るから心持のいゝものであります。然しそれでも十分の監督がないと赤蠅は依然舐めて畢はうとするのであります。瓜の蔓に處々へ開いて行く葉の間から小さな花がぽつ〳〵と見える頃になれば、瓜畑はもうだん〳〵心配がありません。

麥藁が一杯に敷かれて蔓は其褥を這うて居ます。殊に威勢のいゝのは西瓜の蔓で唐草模樣のやうな葉を一杯に開きます。小粒の實が初は然程にもないのに、少し大きく成つたかと思ふと一夜の中にも滅切と太つて幾日も經たないのに抱へて重い程になるので有ます。丁度靜かな沼の水に荇菜の花が泛いて居るやうに黃色な小さな花は甜瓜であります。一番に捌けのいゝ西瓜と甜瓜とが餘計に作られてある畑の隅の方に二畝三畝白い花が此も靜かな沼の水に泡が泛いたとでもいふやうに、ぽつちりと開きました。其處には白い瓜が成りました。白い瓜と隣合うた畝には此も地味な花が見えました。そこには深い青みをもつた瓜が成りました。それで孰も大きな形を横へましたが、其うちでも青い瓜は一層大きくて丈夫相でありました、白い瓜の白い皮の下には白い快い肉が包まれて居ますし、青い瓜の青い皮の下にはほんのりと青い爽かな潤ひを持つて居

ます。孰も他の西瓜や甜瓜のやうに甘い味を持つて生の儘稱美されるものではありません。

然し二つに割つて鹽で壓す時には其齒切のいゝことが涼しさを添へるやうで、西瓜や甜瓜のやうにどうかすると飽きられるといふやうなことは嘗てないのであります。それから更に酒粕へ上手に蓄へられゝば迚ても西瓜や甜瓜の遠く及ばない價を保つて珍重されるのであります。白いのは白瓜で青いのは青瓜であります。隣合つた青瓜と白瓜とはずん／＼手を伸ばして其細いくる／＼と卷いた髭のやうなもので、互に握り合ふばかりに成りました。



さて隅から隅まで注意を怠らない爺さんは伸ばさうとする蔓の先をみんな穢い爪の先で摘んで棄てゝ畢ひました青い瓜も白い瓜も伸び出した葉の間に椎の實のやうな瓜の形を見せて、其の側に立てた尻に花が開くと其處から、爺さんは蔓の先を摘んで畢ふのであります。さうすると其の小さな瓜が必ず滿足に生長して行きます。さうでなくて氣儘に任せて置くと小さな瓜は

どうかするといゝ加減の大きさに成つてぽろ〳〵と落ちて畢ふのであります。

瓜はかうして始終窘められて居ますが、一方には又一番必要な肥料といふものが爺さんの周到な用意で幾ら吸うても吸ひ切れない程十分に與へられてありますそれで生氣の衰へない瓜は何處からでも蔓を吹き出します。爺さんは又根よくそれを摘んで止めます。かうして白瓜はどこまでも白く、青瓜は油ぎつたつやゝかさを保つて、共につゝましく麥藁の上に横はります。兩の瓜は只相隣して互に見合うて居るばかりでありました。爺さんは瓜がいゝ加減の大きさに成れば其瓜を蔓から切り放して粗末な籠へごろ〳〵と投げ込みます成熟した兩の瓜はかうして爺さんの無雜作な手によつて每日數多の結婚が成立つて居ました。

暑い日が麥藁の上に横はつて居る瓜の腸までも熱しては、夜の涼しさが冷たく潤しました。瓜畑の周圍に蒔かれた玉蜀黍はすつくりと立つて美しい瓜を守つて居ます。玉蜀黍の莖には横に竹を結んで自然に垣根が造られました。穂先のざらけた玉蜀黍は何事にもざわ〳〵と騒ぐのであります。瓜畑の隅には疾から小舍が建てられて、小舍には不相應な大きな蚊帳が吊られました。爺さんは每晩そこへ起臥をするのであります。瓜の番は爺さんの役目で瓜を市場に運ぶのは庄次の日每の役目であります。闇の夜が續いてそれから月の夜が續きました。或晩爺さんに何かの故障が有つたと見えて庄次が小舍の番をすることに成りました。

瓜小舍に泊るのは何といつても夜は眠い庄次に、適した役目ではありません。然し庄次は眠いからといつて眠ることはしません。彼は瓜が盗まれるのを惜むよりも、若しも盗人が踏み込んだとしたならそれを捉へなければなるまいといふのが懸念なのでありました。彼のこゝろは盗人を逐ひ出すのさへ厭なのでありますか彼はそれ程穏かな生れた儘の眞直な性質の人間であります。

庄次は血を吸ひに集つて來る蚊を避けて古びた蚊帳の中にぽつねんとして居ました。だぶ〳〵にたるんだ

蚊帳の天井は坐つた彼の頭に觸りました。そして又暑くなると蚊帳から半身を出してぼんやりとして居ます月は番小屋の短い廂から覗いて居ます。瓜畑は凡てが薄霧で掩はれたやうにほんのりと明るく、且つ白く見えました。其中で殊に白く美しいのが白瓜でありました。庄次は恍惚として白瓜を見て居ました。

するとも恰も上手な鍼醫が銀の鍼を打つやうに耳の底に浸み透る馬追蟲の聲が、庄次の這入つてゐる蚊帳に止まつて鳴きました。月の位置が移るに從つて夜は凉しく沈んで、一體に身にしみ〴〵として來ました。庄次は到頭蚊帳の中へ身を横へました。何の爲に吠えるのか犬の聲が鋭く聞えます。遠くの方、又近くの方の村落で唄の聲が聞えたり止んだりします。若い村の男等はどうかすると夜はうろ〳〵と其處らを彷徨うて女を探しに歩くのであります。彼等はそれ相應に女に好かれやうとして服裝に心を苦しめるのであります。何處の村落にも兵隊歸りが彼等の間に異色を帶びて居ます。それが彼等の風俗を變化させるのであります。併しながら庄次はさういふ仲間と表面は甚だしい疎遠はなくてもそれに感染れるやうなこもとは苟且にも



ありませんでした。彼は八釜敷い爺さんの躾を受けて幼少の時分から農作に我が趣味の全部を奪はれて居たのであります。

この夜彼れは自分の職業の趣味といふ事を理窟なしに感じて居ました。庄次は番人といふ責任を考へて居たので平生とは違つて眠くはならなかつた、で毎日行く市場のことなどを考へて居ました。夜が深けるに隨つて空氣の涼しさが一しほ沈んで身にせまつて來るかと思ふと、周圍の蜀黍の葉は猶更にこの番人を眠らせまいとするやうに酷くざわ〳〵と騷ぐのであります。時々其度毎にだぶ〳〵の蚊帳の裾が吹きまくられて、彼れの頬をさすりました。そして耳がだん〳〵冴えて來ますと、彼はすぐ自分の小舍に近い木戸口のあたりに何かは知らぬが、こそ〳〵と音がしては又止むのを聞きました。彼れは心の所爲かとも思ひましたが、さうでもありません。併しその物音は別段に近づいて來るのでもなく、又去らうとするのでもない樣でした。庄次は少し恐ろしく成つて蒲團を被りました。さうして又そつと耳を澄ましました、すると何となくかさかさといふやうな音が聞えるのであります。暫くたつてそれが止んだと思ふ頃庄次は目を開いて見ました。少し月の光が疎く成つたと思ふやうでも、まだ瓜畑には一杯の明るさであります。蚊帳越しではありますが彼の目には白い瓜がやつぱり目に映るのでありました木戸の外は垣根のやうな蜀黍が遮つて何物も見えないのであります。で間もなく夜が明けました。

翌る朝になつて庄次は畑を隈なく見ましたが瓜は一つも盜まれてはありません。次の夜も又番をしましたが、さういふことが有りました。庄次には合點が行きません。彼れは人からよく能くいひ觸らされてるやうに貉か狸の惡戲ではないかとまで思ひました。然し誰にもいひはしませんでした。

然るところ其の次の夜は元のやうに爺さんが泊りました。木戸口のこそ〳〵といふ音は爺さんの耳にも響きました。耳敏い爺さんは凝然と枕を敧てました。これまで數次かうして惡戲好な村落の若者の爲にちらさ

れた例がありましたからか。爺さんはもう非常な怒氣を含みました。窃と蚊帳を捲りながら飛び出しました。棍棒を手にすることは咄嗟の間にも忘れませんでした然しながら爺さんの驚駭はどんなでしたらう。其處には慥に人が立つて居ましたけれども其人は遁げたり隱れたりしようとは致しません。唯蜀黍の傍に身をよせて居たまでゝあります。固より盜人ではありません。では何人であつたらう。それは爺さんが思ひもよらぬ地主の娘のお杉さんでありました。彼れが絶體の服從を甘んじてゐる地主の娘でありました。



朴訥で罪のないそして自分の權利を守る爲に恐ろしい頑強な力を有つて居る爺さんは、蚊帳から飛び出すと共に、非常に劇しい惡罵の聲を曲者に浴せ掛けたのであります。そして盜賊としてお杉さんを手荒く捉へたのであります。更に爺さんの恐怖がどれ程であつたでせう。其地主に向つては殆んど絶對の服從をすら甘んずるばかりに物堅い爺さんの頭は馴致されて居るのであります。彼は只管お杉さんに詫びるの外はありませんでした。さうして彼は夜の中にお杉さんを其門に送りました。彼の正直な狹い一徹の心は昏んでしまひました。彼

は夜の明けるのが待遠でたまりません。「飛んだ申譯のないことをして與れたなア」といふのが思案に餘る爺さんの口から庄次へ浴びせた強く鋭い小言でありました。

庄次にはそれが何の事であるのかサッパリ解りませんでした。庄次は常にない爺さんの顔色を見てこれは容易なことではないと合點しました。がしかし彼は何にも言はず默つて居ました。さうして自分の務に赴きました。

爺さんは轉げ込むやうに地主の戸口を跨ぎました。

「私もこんな年齢に成りながら、遂そんな心配もあるまいと、迂濶に油斷をした許に取り返しのつかないあなたの娘さんへ傷をつけまして、懲せと申されゝば野郎は手でも足でも打ち折りますが、どうか此から娘さんの方もお氣をつけなすつて」と彼は呼吸も喘々として冷たい汗を流しました。此だけいふのに幾度堅唾を嚥んだか知れません。彼は庄次がお杉さんを誘惑したとばかり思ひ込んで畢つたのでした。お杉さんは昨夜も庄次が居ると思つて瓜畑へ忍んだのだと一も二もなくさう極めて畢つたのであります。

爺さんは只一筋にさうおもひ詰めたのだから、その心には庄次の口から一度どんな姿にも事實を吐かせやうとする餘裕さへ起らなかつたのであります。彼は只地主から非常な譴責を受けたいのでありました。怪しからぬ事だ、不都合千萬な倅だ、貴樣の仕つけがよろしくないからかういふ事を仕出かしたのだと散々に叱られてさうして自分自身の噪ぐ心を落付けさせたいのでありました。これが爺さんの心の願ひでした。

爺さんの詫言を聞いた地主は有繋にそんなことがあつたかと一度は駭いたのでありましたが。どうか世間に襤褸を出したくないといふ考が第一に其心に湧きました。そこで地主はそつとお杉を呼んで聞いて見ましたが、お杉は俯向いた儘萎れて何にもいひませんでした。爺さんからきつぱりとした噺を聞かされた地主の心にはもう直ぐに「判斷」がつきました。さうしていつそのこと、そんな事に成つたならお杉は庄次へ嫁に

遁らうといふことに極めたのであります。

庄次は見處の有る人間であるといふのが地主の心を動かしたのであります。併しながら今の儘では行つた娘も可哀想だから、どうにか食つて通れる丈の田畑も其身に附けてやらうといふのであります。尤も其の事は其日の内に極つたのではありませんが、段々と家内相談があつて自然とさう成りました。

さてさうなると、まづ第一に爺の意志を確めねばならぬから、招んでその趣を腹藏なく打あけて相談に及びました。けれども爺さんには今地主から言はれたことがどうしても眞實として請取ることが出來ませんでした。律義な爺さんにはどうしても身分が違ふからといふ恐怖が先きました。併しながら、地主の言ふ事がすつかりと解つた時に爺さんは地主の前に熱い涙を溢して泣きました。

さうして家へ歸るまでは何だか足がふら／＼して心はまるで雲の中にでも住んでゐる樣でした、歸つて庄次にこの話をして「飛んでもない、此を忘れるやうでは人間ではないから」と叱るやうにいつて聞かせて罷てそこでも嬉しいといつて泣きました。

庄次は突然な出來事を聞かされて無垢な青年に通有な一種の慄ひを禁じ得ませんでした。庄次はこれ迄お杉さんと何の關係も無かつた許でなく、彼の心には平常少の疚しい心をも抱いて居るのではありませんでした。兩人の仲は芽出度取結ばれました。お杉さんは田舍で生れて田舍で成長した女であります。貧しい家の嫁として勞働するのに心から何の不足も訴へません。事件は恁うして互の僞なき心から無雜作に決定して、あとは再び沼の水のやうな平靜の狀態が長く續きました。夫婦の間には子が幾人か生れました。爺さんの死後二人は依然として瓜を作ることを止めませんでした。瓜畑には每年沼の水に浮んだやうな地味な小さな花が開きました。荷車を曳いて行く庄次は強健な肌膚が暑い日に光りました。それから荷車の後を押して行くお杉さんも白かつた頰が日に燒けて脊には何時でも小さな子が首をくつたりと俛れて眠つて居ました。只夫婦が市場へ曳いて行く籠の中には青瓜が油ぎつたつやゝかさを保つて白瓜が依然として美しい白さを保ちながら微笑んで居ました。

有田の眞藤



△老女の感吟

檜垣の嫗は肥後國の遊倡なりき。年老いて筑後のしら川といふ所にかすかに住み居たりけり、其頃大貳藤原の興範といふ人此國に赴き、柴の戸扇にたちより、水をこひけるに、老女は檜桶に水をもたらしつゝこの歌を讀みけり。歌の心は、われもわかき昔はこゝろときめきたるものなりしが、かく老の身となりしわびしさよと、處の名によせて、『しら川の』といひ、又『水は汲まで』と、『三輪組むまで』と二つをそへて詠みしなり。三輪組むといふは老人の腰かゞまりて左右の膝をたて、顔を膝のうへにのせやどしたる形のことなり。此歌後撰集雜の部にのせあり。

△母の一念子の病を癒す

眞藤は紀州の有田の邊の郷士の妻女なり、ひとりの子をもち、寵愛淺からざりしが、其子俄に目を病みて見えずなりぬ。醫師を求めて様々に療治なせども少しもしるしなかりき。詮方つきて子を抱きて粉河寺に詣で、七日の間參籠して觀音の慈悲を願ひ、泣く〳〵此歌をよみけるに菩薩の感應ありしにや滿願の曉の夢に、栴檀勳陸の香の薫御堂のうちに滿ち、觀世音の御顔より大光明を放ち、子の眼をてらし給ふと見て、程なく、病癒えたりとなん。

檜垣の嫗



綸島の海女



△孝女の果報

照田姫は摂津の國天王寺のほとり阿部眞鹿といふものゝ娘なり。母は三歳のとき世をさり、繼母に育られしに、其母に子二人出來て、照田を憎むこと一方ならず、かたちの美しきを憎みては松葉を焚ていぶし、又は膳をかまへて山に捨てんと計りき。この事を父眞鹿人に聞て大いに怒り妻を去らんとしたりしを照田は種々なだめて押しとゞめぬ。後十五歳の時、夏のはじめ田を植ゑてゐたりしに、その頃の大臣なにがしの君が熊野まうでの歸りに立ちよりてこの事を聞き御車にのせて、都に連れ行き、玉輿の人となせしかば、やがて父眞鹿も召されて、親子諸共幸多き身となりしといふ。

△綸島の契り

海女は播州綸島の漁師の娘なり。行平中納言さすらへの身なりしとき此の島に遊びて釣りを垂れ居りしに、汐汲む女の中にみめかたち美はしき女子ありき。中納言言葉をかけ宿はいづくぞと問ひしにつれて海女この歌を詠みたり。中納言もいと哀れを催しわりなく契りを結びたりしが歸りて後、思ひわづらひて亡せしといふ。此の島は弘法大師が舟をつなぎしとき、島司が尋れて、空海といひしに海には空くならずして歸り給ふは如何と問ひけるに、大師は、我に奇妙あれば難なしとて一筆の綸をかきて與へたり。島司これを海に投ぜしに、後磯の石に悉く綸の顯れし故綸島といふなりとぞ。

阿部照田姫



實園子



△賤の女の述懐

實園は京都堀川に住めるまづしき者の娘なり。松殿基房公、初詣の歸るさに見染めてしばしかよはせたまひけるが、程へておとづれもなくなりぬ。實園すこしもこれを恨みず、人の心は飛鳥川淵瀬かはるはつれの慣ひと、侘びつゝ暮らしけるが、ある夕暮、松殿より迎ひの御車まゐりぬ。實園嬉しとも思はず、今こそは日頃の心をも示さんと、丈にも餘りたる黒髪を切り白き薄葉につゝみ、此の歌をかきそへて御車をかへし、尼となりて世を送りしとなん。なみ／＼の女にはあらざりけり。

△氣健な婦人

正子は美濃の國、芝原の里のものなり。十六歳にて同じ里の大井氏に嫁し、女子ひとりまうけしが、十九の年、夫にしのび妻ありてとかく忘らるゝを怨み、子を連れて親里にかへりける後ち京に上り、和歌を小澤蘆庵に學び、其外茶、香花等女禮一と通り修め、薙刀の業に至るまで學びぬ、其後故鄕に下りける時、もとの夫、忘れがたくてや、中だちして文などおこしたるも

あきに遇ひて枯にし物を今更に何おどろかす荻のうは風

と詠みていらへもせざりきとなん。後母に逝かれ、女子に先立たれしを悲しみ、二十八にて尼と成りぬ。

矢部正子



都の烏玉



△空閨六年操守の人

烏玉は都七條の者なりしが、ある侍のもとへ嫁し、婚禮の翌日、夫遠國へ使することありて別れければ、烏玉夫をおもふて朝夕忘るゝひまなかりし。かくて年をかさぬれ共、たえて音信なきほどに、つひに病にかかり床にふし食事さへ稀なりければ、姿おとろへ、色うせけり。さて六年程すぎて、夫やうやく役をはりて歸りけるに、妻女の有様を見て驚き嘆じ

かくのみに有けるものを猪名川のおきを深かめて我おもひけれ

と詠みければ、妻これをきいて枕をもたげ一首の歌を詠みたり。そのせつなる思ひあはれ深し。

菟名日處女



△身をすてゝ愛に報ゆ

うなびをとめは攝津國芦屋の里の產れにして、容色ならぶものなかりき。二人の男思ひをかけて乞ふてやまざりしかば、父母は何れを聟と定めかねて居たりしが、或時その父二人にむかひ、彼處に水鳥一羽ありこれを射たまふ人を聟にせんといひ出しける。二人は悅びて弓矢をつがひてこれを射けるに、一人は頭を射、一人は尾の方を射たり。こゝに於て女は思ひわづらひ、此歌をよみ生田川に入水して去せ、二人の男も諸共に水に入りて去せたり。土地の人女を中に、男どもを左右にして塚を築き、をとめ塚といへり。古人のよみし歌あり。

芦のやにうなひをとめのおくつきを行來に見れば音のみ流るゝ

女の表情と表情術

附　能面に現れたる女の表情

齋藤羽雪

△表情といふこと

「表情」といふことばは、昔は無かつたもので近年になつてから盛んに行はれる新言葉の中の一である。

表情とは、喜怒哀樂の情を顏色に、或は態度の上に表はすので、腹が立てば額に青筋をたて、眼玉を三角にして見るからに恐い顏をする、喜べば眼を細くし奧齒の三枚目まで現はしてニコ〳〵とやる。悲めば眉の間に聊か縱皺をよせ、俯眼になつて如何にも萎れたやうな顏容になる等、是は人間の生れから備つたことで、犬猫でも少しく悧怜なのは、主人の顏色を見て怒つて居ると見れば、尾を垂れたり、すくまつたりする程のものであるから、何も今更仰々しくいふべき程の事でないのである。

其の何でもない表情とかいふことは、頻りと八釜しくなつて、今では或る女子の學校の如きは、殆んど學科の如くにして、表情の仕方を教授して居るといふことで、婦人間の談話の中にも、「何子さんは御容色もよし、相當の教育もおありなさるけれども、表情の乏しい方ね」などゝいふことを耳にする樣になつた

△武人の妻

處で日本では昔は、男女に拘らず、今の所謂表情といふことは餘り行はれて居なかつた。男子の如きは喜怒を色にあらはさず、心中如何に悲哀に滿されても少しも悲しさうな顏を見せず。白刄骨を碎くともジツと耐えて聲さへ立てないのを男らしいの、丈夫の魂のと稱した程で、婦人でも士人間に於ては例の『喜怒色に現はさず』を尙んだものである。『仙臺萩の御殿場』で政岡が自分の實子の千松が、八汐の毒刄にかゝるのを現在に目擊しながら、茲ぞ忠義のしどころと我慢を

するところを「涙一滴眼にもたぬ男まさりの政岡が忠義はせんだい末代まで又有るまじき烈女の鑑」云々としてある。是は義太夫本のことで申さば作り物ではあるけれども、兎に角日本の習慣はさういふ風のことを尊んだのは事實である。此表情を抑制して顔色に示さないといふ一種の耐忍力は、日本の武士氣質として尊重されたものであるので、此抑制は善いことであるとか、又宜しくないことであるとかいふ議論は別問題として、今の表情の研究といふことは要するに近來の輸入物で、日本の古來の習慣を打破ることになるのである。

△表情とお世辭

理窟は兎も角として偖實際のところで、人様から結構なものを頂いても、聊か嬉しさうな顔もせず、「喜怒色にあらはさず」で佛頂面をするのも變であらうから相當に笑顔を造つて御禮を述べるのは素より禮義で、それはいくら昔の人でも相當にしたことであらう。けれどもこれが極端に表情しては却つて失禮になる追從になる。寧ろ端然として禮義を正した方が上品であるやうに思はれる。追從とか、世辭とかいふことは言葉の上に現すことばかりではなく、今の表情も過ぐれば、追從にもお世辭にもなる。更に一歩を進ては人を侮蔑したやうにもなる。

△耐え性と衞生

近頃佛國の交際社會で、何時何者が、發明したか、不明ではあるが人物判斷の面白い方法が流行して居る。其原理一切秘密にされて誰一人知つてゐるものしない。

茶碗や酒盃の持やうで人物判斷

（一）茶碗と茶托とを左手に持つて、右手に箸を持ちかきまはして飲む人は滑稽な人物で、わざ〳〵ぶる人である。
（二）コップを右手に持ち斜めに前方から鼻先に持つて來て飲む人は注意ぶかい眞面目な中流紳士である。
（三）コップを顔面と九十度の角度に持上げて酒を飲む人は忙がしい實業家氣質の人だ。
（四）コップを卓上に直立させ、手に持たず、首を下げて飲む人は十人並でこれと云ふ深い理想のない人、併し氣樂に平和にくらすであらう。
（五）右手にコップを持ち、左手を其下方にひろげてしづくを受ける人は酸いも甘いも嚙み分た人で反省の強い人。
（六）コップの底を鼻より上の方に倒にあげて呑む人は好事家であり又は物事を根掘り葉掘り奥底まで立入る事を好む人である。
（七）兩手でコップを押へて飲む人は吝嗇家、又は利己主義の人だ。
（八）右手の大指を下に他の四指を上にしてコップを押へて飯む人は平和な人であるが然しお話が大好きな人だ。

可笑しい時には散々に笑ひのめし、痛かつたり、悲しかつたりした時には、大聲揚げて泣き出すべきは自然で、それを抑へたり堪へたりすれば衞生に害があるなどゝいふ人もある。處で或る產婆の話によれば、日本の婦人はお產をするときに如何に痛くとも辛抱して堪へるので比較的安產をするが、西洋の婦人は大聲を放つて泣き叫んだり、甚だしいのは其良人の惡口まで云て泣き狂ふ人すらあるので、其爲めに却て產が重くなるといつて居る。其泣くのは自然にかなふかも知れないが、それでは却て衞生に害あるやうな結果になる。

△能に用ひらるゝ女の假面

能樂は芝居と違つて、大抵假面を着けて所作をする。中には直面と稱して假面をつけず素顏でするものもあるが、それは男の現在物即ち「七騎落」とか「小袖曾我」とか云つたやうな曲許りで、其類の外は大抵假面を着ける。殊に女即ち鬘物となると、現在物でも必ず假面を着ける役者は男子であるから是非もない次第ではあるが、兎に角假面を着けることになつて居る。

然るに能樂は、一曲の中前後二段に區別され、前「シテ」が出て、色色所作をして、それから中入となつて、更に裝束を着替へて後「シテ」になるものが多分であるが、その中にも前後を通じて同一の假面を着け只裝束だけを代へるものもある。女物の中では「三井寺」、「櫻川」等の如きは即ちそれである。又「鐵輪」、「葵の上」、「紅葉狩」等は、裝束も假面も前後を異にするものと又は假面許り取替へるものもあり、尤も以上三曲其他是と類似のものは、前段が普通の女で、後段が鬼女の本體を現はしたり、又は嫉妬の餘り生きながら鬼になつたり、又は生靈になつたりするのであるから、是には是非共、「般若」の假面とか、「橋姫」又は「生成」の假面を着けなければならぬ次第であるけれども、前後を通じて同一の面を着ける「三井寺」、「櫻川」、「玉葛」、「羽衣」等となると、悲しい時にも、喜んだ時にも、木で彫つた面であるから、少しも顏で表情することが出來ないので、只所作で以て其意を示すより外はない。然るに其所作と云つても、芝居のやうに頭を振たり體を曲げたり色々な細かいことをするといふではなし、喜んだ時には「ユウケン」と云つて、扇を以つて二三度胸の前で輪をかくやうなことをするだけの所作をする許りであるし、悲んだ時には「シオル」と云つて、片手なり、又は時として諸手を眼の前に蔽ふだけのことをしたり、或は「クモル」と云つて、稍か面を俯向けるだけの極めて簡易な動作をするに過ぎないのであるけれども、それだけのことでも上手な樂師が勤めると、喜んだ時の假面の顏が、如何にも嬉しさうに見えるし、又悲しんだ折には、同一の假面が如何にも泣いて居るやうに見えるものである。

△故らに誇大の表情をする必要はない

木で造つた能の面でさへ、勤る樂師の意氣組次第で色々に變化して見えるものであるから、素顔ならば殊更に眼球を動かしたり口を曲げたりしなくとも、心の色は自然と表はれること言ふまでもないのであるから、如何に表情術を研究して、心にもなき僞りの表情をしたからとて、注意深き人の眼からは一目して化けの皮を見破らるゝは云ふまでもなく、嬉しいからとて、矢鱈に嬉しい表情をすると色情狂でもあるかのやうになつて了ふ、近來は人と應對をするのに、いやに西洋人を氣取つて、頭をかしげたり、變な横目を使つたりするハイカラ婦人など往々にして見受けられるが、御當人はそれで頗る得意で居るかは知らぬが、我々の見た目には、如何にも下品で、誠に氣味が惡いことである。

又動作にしても、西洋式を尙ぶ婦人は、快活なテキハキした、惡く申せばお轉婆を喜ぶが日本の婦人とし日本の衣服を着けて、飛んだり跳ねたりは頗る恐縮の次第である喜怒色に現はさずの流儀は姑く措いて、誇大な表情とお轉婆な動作は、日本婦人に適しない日本婦人には能面のやうな上品な顔付と同じく能樂式の沈着な優美な態度が上品である。

婦人の貞操判定

すべて生命を有する者は男も女も小兒も或る狀況に應じて其身體が一の磁石の樣に成る、眞正なる磁石の針と成るのである。此の理から研究を重ねて米國の一ドクトルは標記の妙術を發見したのである。まづ人の身體が全く横へられる丈け廣い板を取り、之を支柱の上に戴せる、其板の中央には穴をあけて、支柱の尖つた頭にはめて、顛覆せずに支へるやうにする。それから板の上に試驗に供する人を平に仰向けに寢かす。其兩足は眞直ぐに伸ばして其兩腕は胸の上に組む。板上の被試驗者は虛心平氣になつて、如何に成行くかを待つ。板が廻り始める。幾廻りも廻つてから靜かに或る位置に停止す。此時試驗されたる人の頭部は北に向ひ足は南に向ふ事。全く普通の磁石と同一である。但し普通の磁石の針は普通の場合に南北の方向は一分一厘も間違はずに止まるのであるが、人間は男女老幼によつて多少之に變化がある。之れによつて、種々の判斷が出來るのだとの應用判定術は

（い）男子は頭部が殆んど正確に北に向く

（ろ）女子の頭は眞直に北に向かずに左方へ二度或は三度偏る

（は）未婚女は既婚女よりも偏倚する度が多い

（に）然るに不義を實行した婦人は非常に左方へ偏倚する。大抵八、九度に達するのである

但し最後の場合、即ち姦通罪の場合には其犯罪實行後廿四時間以內位にて試驗すべく、これを經過するに隨つて、平生に復するといふことである。

* * *

春の七草と花言葉

花　栞

花ことばとは一口にいへば青年男女間に行はるゝ一種の風流事であるで、其起原に溯つて考ふるに、最初は矢張り男女間の戀の秘事を語らんが爲めに行はれたらしく、從つて之れに關係したものが花言葉の大部分を占めて居ると云つても差支ないが、前後漸次其範圍が擴大されて、現今に於ては眞面目に贈答品にも用ひられるやうになつた。

我國でも近頃は西洋花卉栽培が盛になると共に、花ことばに關する智識も漸く昂まつて來たのは、諸種の機會に於いて眼にもし耳にもするところである、依つてこゝに正月の花について其形態を列知し得る程度の簡單な説明を加へ、兼れて趣味の方面から之れを觀察し、同時に其花ことばをも記して、見ようと思ふ。

福壽草

正月の草花としては先づ第一に福壽草を擧げればならぬ、この草は側金盞花、報春草、元日草、上州草、福人草、黄金花など云ふ、異名があるが寒氣を犯して宿根から莖を生じ、初めは苺のやうな薄皮を纒ひ莖頭に青、白、黄、紅等の花を開く、花には一重と八重がある、新春早咲の株などの根深めとし、又は



草に之れのみを鉢植として正月の床飾には殆んど無くては叶はぬものになつて居る。

野山にもこれがあるかや福壽草　葛三
福壽草この外の名のあらばあれ　自來

北海道の蝦夷人の間では、雜草には殆んど名を命けることが行はれないに拘らず、この草のみは「クノウ、ノンノ」なる名を與へて殊の外之れを珍重して居る、と云ふのは、昔漠々たる狹霧立ち迷ふ中に「クノウ、ノンノ」と呼ぶ美しい姫神が御在したが其中姫も年頃に達したので父神の選みで地なる土龍の神と結婚することを餘儀なくされた、日ならずして盛なる結婚の式を擧げる日となつたが、姫神は其聟君を好ましからず思ふところから、儀式最中に脱と我家を後に身を匿した、が遂に怒り狂ふ聟君土龍の神の手に捕はれて、責め苛まれた果に、親には不孝、夫には不貞の罪重ければ、此儘草になれと憤怒の餘り唾を吐きかけた、ところが姫神の體は見る間に一莖可憐な花と化つた、それが福壽草であつた、蝦夷人がこの花を「クノウ、ノンノ」と呼ぶものはつまり此神話から來たのであると云ふことである。

花ことばは「悲しき追憶」の意である、一體西洋でこれをアドニスと呼ぶのは、昔野猪の牙にかゝつて食ひ殺されたアドニスの血から生じた花だから、其名を取つて斯う呼ぶのだと云ひ傳

へられて居る、此花ことばも或は其邊の消息を洩らしたものではあるまいか。

水仙

冬から早春にかけて可憐な花がさく、花や葉の形狀などは今更くだ〳〵しく說明する必要はあるまい。

本草綱目には「水仙宜卑濕地、不可缺水故名之云々」とある、水仙と云ふ名は畢竟此處から起つたのであるらしい、又水仙を金盞銀臺とも云ふのは花の形狀が銀の盃托に金の盞樣のものを載せて居るところから來たのであらう、其他雪中花、黃王花等いろ〳〵の異名がある。

水仙の根は婦人が乳首の傷んだ時に山葵卸しに卸してよく塗りつけると效能がある、又根を碎いて汁液を絞り出し、この液に乳汁を和して眼に注せば突眼を瘉すとも云はれる、併しながら過つて其根を食すれば暴瀉するさうであるから水仙は毒草と藥草を兼ねて居るのだ。

この水仙には面白い神話がある、昔ナーシッサスと云ふ男が水に映つた己が美容に憧れて、泉の側を立ちも得去らず、遂に其の畔で死んだが其跡に水仙の花が咲いた、そして花の中央にある金盞狀の部分は、思に悶へたナーシッサスが淚を湛へたところだと云ふのである。



花ことばは「自愛心」の意を含んで居る。

　水仙は冷たき花の名なりけり　　失名

芹

芹は春の七草の筆頭に數へられて居る、好んで水濕地に生え、獨特の香氣を持つて居るので、五六月頃莖頭に傘を擴げたやうな繖形花を着けるけれども、花としては殆んど全く發用するものはなく、主として其香氣を愛して一種の蔬菜品として珍重せられて居る。

昔は芹を煮ることを芹燒と云つた、で其方法はよく洗つた芹を適宜に切り、鴨、雉子等の肉と共に、醬油と酢とを以つて煮るのださうである、がそれは兎に角之れを芹燒と云ふに就いては一寸面白い話がある、例の狷介を以て聞えた大久保彥左衞門が、ある時老中溜間を過ぎると、其頃賀惠伊豆で通つた松平伊豆守其他二三の人々が盛に芹燒を食へて居る、それを見た彥左衞門はつと立ち止つて、

「豆州貴公は智慧者で有名だが、煮て食ふ物を何故芹燒と申すか承りたい」と奇問を發した、併し豆州も然る者襟を正して、

「[illegible]豆州の如きものに何が辨りませう、それは然うとお目にかゝつたが幸、一寸伺ひたい儀が御座る、と云ふのは外の事

では御座らぬが、殿中相傳へて大久保老人は旗下の肝煎りだと申すが、豆州不幸にして未だ老人が肝を煎つたのを見たことが御座らん、之れは如何で御座るか」彦左衛門も之れにはグツと詰つて返答も出來ず、知らぬ風をして、行き過ぎて了つたとか。

薺

地の底の雪引出す根芹かな　　貞室

花ことばは「剛毅」又は「勢力」の意である。

薺はやぺん〱草とりにけり　　柳莊

之れも亦春の七草の一である。

薺を又の名ぺん〱草、又は三味線草と呼ぶのは、其實の莢が一寸三味線の撥に似てるより出たのである、雜草に雜つて路傍畑地至るところに叢生する、其嫩葉は食用に供せらるゝが、花は小さい、白色の拜四瓣花で花穗長く、宛然油菜のやうに下から順次上の方に咲き上る、この花を陰乾にしたものは、臥床の下に布いて蚤避けとなり、葉は赤痢病に効能があるさうである。

この花のは、「余は汝に對して全力を捧げん」と云ふ花言葉である、戀に盲せる者、又は戀を遊戯視してる男、又は女が善く道樣なことを云ふ。



はゝこ草

春の七草の中で御形（又御行）と云ふのは即ち之れであるが此異名は葉の形が幣帛に似て居るから附られたのださうである。新春の野面田畔に、枯草の中から白い毛茸を粟むつた莖を抽き出し、黄色の小さな花をつけるが、花は白天鵞絨のやうな葉と對映して、誠にしめやかな、野に置くには餘りにいぢらしい姿である。

この草の嫩葉は餅や團子に搗き混ぜると香氣が搭いて色もよくなる、依つて又の名白ヨモギとも云ふけれども、今では多くヨモギを使用して居る。

三日の夜のもちゐはくわしわつらはし
きけば淀野にはゝこつむなり　　實方

花ことばは「毒も安靜し得ざる記憶」の意である。

はこべら

葉は濃緑色、莖は多くの枝を生じて蔓延し、三四月頃小さき白花を開くのである。此莖から搾り取つた液汁は瘡に塗つて特効があると云はれ、又葉は金絲雀の餌や、擂餌の香味に用ふる、春の七草の一である。

花ことばは「集合」又は「會」の意、之れは其枝葉が叢り生ず

るところから起つたのであらう。

暮る日を見に出る垣の蘩蔞哉　乙耳

耳菜草

春の七草の一なる「ホトケノザ」はこの草を云ふのだとの說がある、尤もこの「ホトケノザ」に就いては宛かも秋の七草の朝顏に於けるが如く諸說區々で、或はホトケノザだと云ひ、いやタビラコだと云ひ、やれ稻だ紫雲英だと一定して居ない、けれども現今では、多くこの耳菜草又はタビラコを用ふるやうである。耳菜草は雜草であつて、莖葉共に細い毛茸を持つて居る、春の末つ方葉叢から二三寸の莖を出し、小さい白色の五瓣花を開くのである。

鳴鳥も踏まぬ草なれ佛の座　乙里

花ことばは「質樸」を意味する。

蕪

春の七草の一なる鈴菜はこの蔬菜を云ふので、其形態に至つては極めてありふれたものである故、特にくだくだしく述べる必要はない。

手の力そゆる根はなし蕪ひき　千代女

花ことばは「博愛」を意味する。

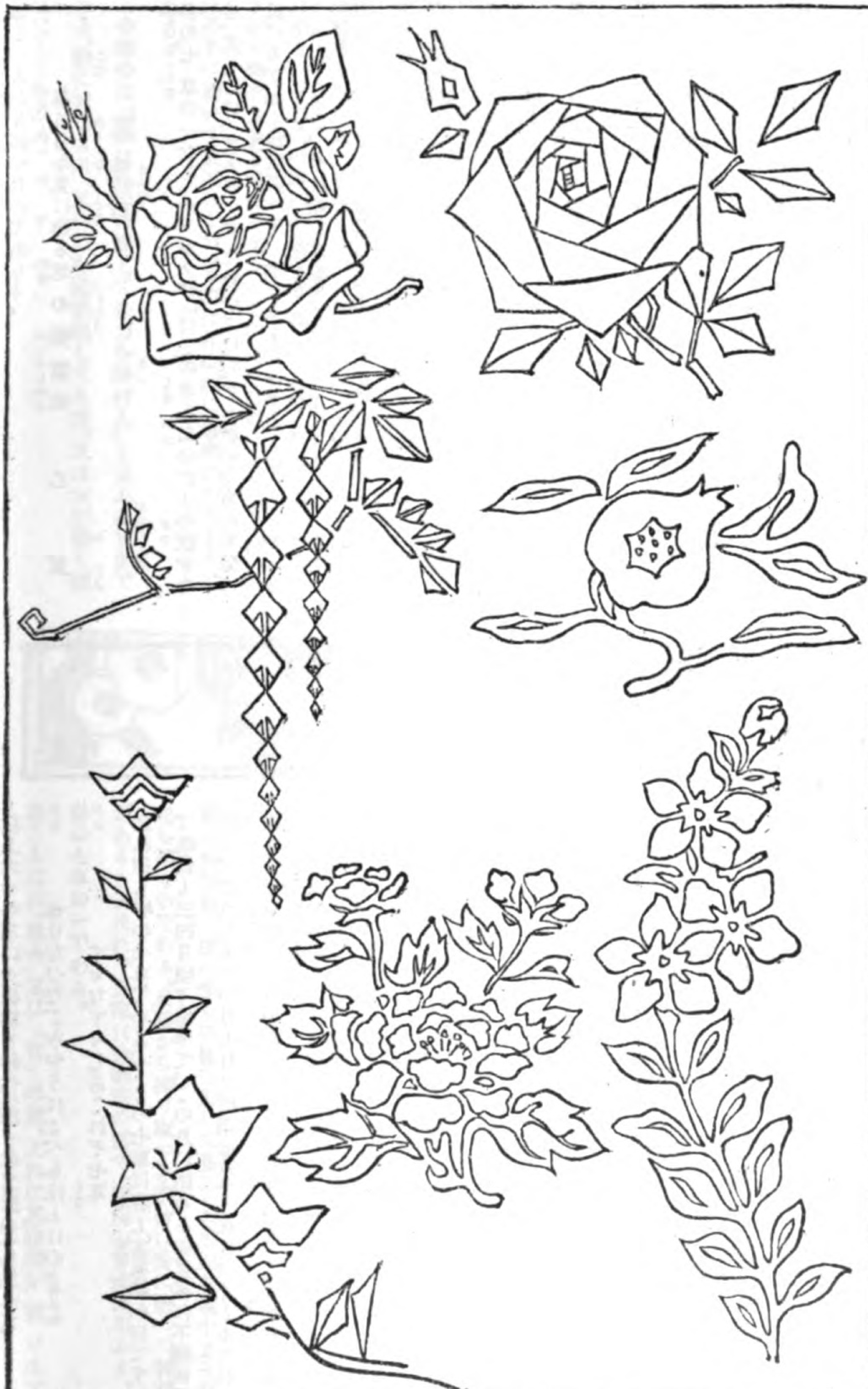


以上六つの草に大根即ち鈴代（須々代又鈴白）を加へて

せりなづなごぎやうはこべらほとけのざ
すゞなすゞしろこれぞ七草

之れ即ち春の七草である、でこの七草は若し其花期を以てすれば孰れも三四月頃であつて、この月に納めるのは甚だ不穩當である。けれどもこの月七日は所謂七草で、花はなくとも之れを揃へて七草粥を作るのが例になつて居るから、この緣起と結びつけて其花言葉を考へるのも面白からうと思つて、かくも記した次第である。

一體正月七日を人日と稱へて七草粥を祝ふことは、支那が始まりでそれから朝鮮に傳はり、我國に傳來したもので、一日を鷄日、二日を猪日、三日を羊日、四日を狗日、五日を牛日、六日を馬日、七日を人日、八日を穀日と云ふ風に、それぞれ人類に密接な關係のある動植物を以て各日に配合し、就中人間の日を最も貴重な日として祝つたのである、で我國では何時頃から始つたのかと云ふに、本紀通證と云ふ書に「傳曰醍醐天皇延喜十一年正月七日若菜を供することを定む」とあるから、此時定められたのであらう、其以前宇多天皇の寬平二年正月十五日、主水司より七種の粥を始めて獻じたとの記事が日本史にあるけれども、それは十五日で七日では無かつた、この七草粥を祝ふと諸々の邪鬼疫病を拂ふと信ぜられて居る。



△薔薇花

△柘榴

△桔梗

△藤

△牡丹

二百人の生徒を收容する銀校の寄宿舍

未央柳



銀校の寄宿舍

×

サラ〳〵と軒端を渡る風にふと目が覺めた、窓のカーテン仄白う夜はもう明けてゐるが起床の鐘は未だ響かぬ。

遠く炊事場に炊婦の立働く物音のする外、三棟の舍は何曉の夢に閉されていとゞ靜に、枕を並べた吉井さんの、夜着に半埋めた心地よげな寢顔が一しほ白く見える、まだ十六歳の一年生の方は何處となくあどけなく可愛い〻處がある、起きれば仕事は山ほどあるのに、覺めた身體を床の中にぢつとしてなきやならぬのも一つの苦痛だ、あゝ起床の鐘が待遠しい、これが試驗でもすんで心のゆつたりした時とか遠足にでもいつて疲れてグッスリ寢込んだ朝とかに容赦もなくカンカンと響く時は憎らしくも思ふが、けふ此頃の樣に忙しい學期末など時間が來ねば起きられないのがもどかしくも思はれる、ほんとに人間は勝手なものだ。

カン…………第一の音が鼓膜を突くともう私の身體は床をぬけてゐた衣物を更めて床を上げて洗濯

物抱えて井戸端へ急ぐ。

「お早う御座います」「お早う御座います」

部屋を出て廊下を右往左往に行違ふ人達の挨拶も云ひつ放し、聞きつぱなし、夢境をいでゝ現世の人となつては誰も彼も分時を爭ふ激しさ。

今朝はまだ盥が一つもふさがつてゐない、まるで何誰も洗濯に入らつしやらないんですもの、ほんとに現金な、試驗が初ると洗濯場や理髪室がすいてくる、これで試驗が濟むと我も〳〵と一時に押しよせて洗濯場はさながら、戰場の樣を呈するといふさわぎ、二百の生徒に十八個の盥。

「伴さんあなた盥がお明きになつたら私に貸して頂戴な」

「私もう眞木さんにお約束しちやつたの」

「ぢや眞木さんの次でもようござんすわ」

「あら眞木さんも次の方がきまつてるでせう」

「まあぢや中川さんあなたのお後は？」

「私ももう次の次まで條約濟なんですよ」

「仕樣がないわね何時になつたら盥が明くんでせう」

後から來た者は洗濯物抱えたまゝ井戸端に立往生といふ有樣そのくせ試驗のある此頃はこんなにすいてるんですものねえよく先生が「人には寢入死といつて寢たまゝ逝つてしまふ事がある皆さんも今夜寢むまでどうもなくても明朝はもう亡き魂になつてゐるかも知れません、もしそんな時に押入によごれ物が突込んであつたりすればほんとに死恥をかくといふものです女は常に身だしなみをよくしていつどんな事があつても何時押入を開けられても恥かしからぬ樣心掛けねばなりません、試驗で忙しいからとて洗濯物を溜めて置くやうでは學科が出來ても女の價値はない者です」と仰つたお訓諭下さるお言葉を皆尤だと承るのだがさて實行する人はやはり少いらしい。

ドー〳〵〳〵ポンプの口から落ちる水に、湯氣の立つ汲みたての水は暖かい、洗濯板でゴシ〳〵洗ふとブク〳〵泡沫が湧く。

「まあ山崎さんお洗濯？」突然頭上の理髪室から聲が

降る見ると細井さんが櫛を拭き〳〵のぞいてる。

「感心でせう、でもこんな時でなきや私の洗濯する時ないんですもの……こら此あぶくが色々な色に光つて綺麗よ」

「眞實ねえ。蟲眼鏡で見た蜻蛉の複眼見たいですわ」

「オホ………」

ザブ〳〵と雪いでは流し〳〵。

雪白のシーツ二枚、縞ネルの寢卷、晒布の襦袢、キヤラコの足袋、二本の竿に一ぱい干したが朝日に榮えて翩々と飜る。心地よさ白いものは洗ふに骨が折れてもとり込む時は心持がいゝ。



濡れ手拭き〳〵上つて來るともう洗面處も理髮室も人の影だにない、一人ゆつくり手水を使ふ鐵管をめぐつて出る水の冷いこと、箱の中に一夜汲置きの手がヒリ〳〵する位だ、髮を卷き直して紙屑籠提げて炊事場へ行くと其處の小黑板へ炊事番の土井さんがしきりと今日の献立を書いてゐる後に立つて見て居ると。

朝、雪月花一度に見する……。

晝、西洋料理（フーカデンエッグ）

晩、五目飯、鯛の潮汁、

書き終つて振り向き樣「御馳走があるでせう」

「さうねえ、朝のなんですか雪月花一度を見するなん

て」

「ホ…洒落たのですよでも時候はづれですわ」

「どうせ美味物ぢやないでせうよ洒落て誤魔化す位だから」

「まあひどい」「ホ…」高笑してると先生がお通りなすつたので其儘室へ。鐘が鳴つて點檢がすんで食堂へいつたら朝食の副食物は卯の花だつた。

漢文の先生は几帳面で必ず順番にお讀ませなさる、そしていつも四人位にきまつてるので他の學科の試驗がある時なぞ皆が自分の番に當つて來る處だけしか豫習て行かれない處が今日はどういふ風の吹きまはしか番狂はせにどん／＼進んだのでさあ大變風下の私等は大恐慌を來した、例の皮肉なお叱り伺ひ度くないと他人の講讀してゐるのを聞きもせず自分の處を豫習してやつと切り拔けたが冷汗淋漓ゐゝ油斷大敵々々々々、

六時間目には又舍監から昨夜のお料理でサン／＼油をしぼられた、ゆふべの當番はイロハ順の中川さんから十人、お吸物はまづ結構との御評を得たが、オムレツを燒くのに無鐵砲に燒いていつたので初のは大變實があつたが終へ行くほどうすぺたくなつて冷めてはならぬと思つて一等後で燒いた舍監の分は殆卵ばかりだつたとの事「我田引水の樣だけれど舍監のを後で燒くなら初に材料を分けて置いたらいゝでせうあなた方の家でだつて主人へ實のある處をつけてお客樣に殼許のを出しはしますまい、それに村田さんが肉ひきで指を切るやら騷ばかりひどくて…今日も事務室でお孃樣方の割烹は仕樣がないねえつて笑はれました」舍監からかう仰られても一言も申開がありませんこんなでも卒業て行く私達、よしや頭腦は充實してゝもお料理の下手なお嫁樣ばかり出來るでせう笑談ぢやないちと注意しなくちや…

×

日曜日の空は美しくも晴れた、風が非常に冷い！、

「一寸あなたお裁縫出來上りまして？」

「どうしてなか／＼、まだ明日出す幾何さへやつてな

いんですもの」
「ほんとに忙しいのねえ圖畫も出さなきやならないし宿題は澤山あるし明日の試驗なんか調べてないんですよ困つてしまひますわ忙しくて」

出會す度にこんな事ばかりいつてる人達でもお天氣の好い今日を舍に籠城してるものはまあない、籠の鳥の放された樣に三三伍々校門をいづる紫紺の袴、編上げの靴、暑さ寒さも何のその、さして行くのは父母の膝下同胞の家?九時頃には舍内はひつそりしてしまつた。

訪ふべき家をも持たぬ私は午前中にシャツのミシンを掛けて圖畫の下書を畫いた。



大きな食堂にチラリホラリ淋しい晝食をすまして運動時間をテニスコートに下り立つたが氣乘りがしないのですぐよして花壇から裏門へ廻つて見た。秋を我世と燦爛たりし菊も花顏漸く衰へては霜にも撓む風情、小町が末路をも偲ばせる痛ましさ、コスモス紫苑の見るかげもなき樣よ紅葉も散り初めて冬を迎ふる校庭には紅玉累々たる梅もどきのみが美しい裏門によりて見渡す門田の稻は刈り干されて野は寂しくなつた城址の一本銀杏も半散りうせて。あゝ松原の向を上り列車が

走つて行くよ。

二時半までと時間を切つて圖書室で春曙抄をひもとく。

「源氏の中將は青海波をぞ舞ひ給ひける片手は頭の中將容貌用意人には異なるを立ち並びては花の傍の深山木なり入方の日蔭さやかにさしたるに樂の音おもしろく……」我魂の書中に溶解け行くよと覺えて知らず〳〵頁を重ぬる時入口の扉が開いた「あの山崎さん先生が舍監室へつて仰いました」と吉井さんのお聲だ。

舍監室といふ聲に長閑な夢を破られた心地の私は「すぐ參ります」とかるく會釋して立つたが胸はもう不安の浪が打つてゐた「舍監室へ」此言葉は舍にある者の耳には警察からの呼出狀のやうに響くので過失なき身も後めたさにかへり見られるのであるあゝ舍監室は慈母にも等しい先生のゐます處なるに何故か長い廊下を曲つて折れて重ね草履のキチンと揃へてある板の間に兩手をつく。

「何か御用で御座いますか」

「お山崎さんこつちへお這入りなさい」文机の傍に小紋縮緬の召物縫つてらしつた舍監は何やらあたりお探しなすつて、

「今ね、これがあなたん處へ來たんですが此差出人はどういふ人ですか」、何だらうと驚きながら御手が放れたそれを見ると何のこと、お喜多さんからの繪端書だつた。

〇〇郡の〇〇村と明瞭にかいて池之端、喜多、と苗字と名前が行を別にして書いてある、寒暖計が零度以下の寒中雪の中を足袋も穿かず飛び廻つてた其氣性をあらはす文字は墨くろ〴〵と骨太な健筆、疑へば男文字とも見えやう裏をかへすと夕陽落ちんとする枯野の道を夢二式の女が行く處の繪の傍に細かく「夕日は消えて風寒し、むせぶが如き雁がねや、櫻紅葉も散りはてゝ、秋もやがては逝かんとす、慕しき君よ今いかに故郷戀ひておはするか」と新體詩めいた事が書いてある、私は何氣なく

「これ私の小學校のお友達で御座います」と申し上げ

ると
「男の方ですか女ですか」私も思はずほゝゑんで
「女で御座います池の端喜多子と申しまして」
「オヤ池之端つてのは苗字なんですか」目を見はり給ふ
「ハイ左樣で此村の村長の娘で御座います」
「あゝさうですか私は又ね、池之端つて東京の池之端かと思つたもんで喜多が苗字だと思つたから苗字ばかり書き放してどういふ人かと不審を起したんです、さうですかそれでわかりました」
「隨分活潑な人だものですから」
「ほんとにねえ亂暴なかき樣だもんだからそれに文も妙ですね今度忠告しておやりなさい女は女らしくおかきなさいつて、えよう御座んすよ持つてらしつしやい、此頃の女學生は亂暴だねえ」
終りは獨言の樣に仰る。
舍監室を出た私は思はず苦笑した、だつて○○郡○○村とまで明白にかいてあるものを何も東京の池之端なんかに附會しなくてもいゝぢやありませんかそれも假入學中の生徒ならいざ知らず三年も一つ舍內でお世話下すつた私ちつとは氣心もおわかりになつてさうなものを、
些細な事にも先生の疑惑を買ふ私等はつまり信用がないんだと情なくなる、それは先生も百何十人といふ妙齡の女をあづかつては責任も大抵ぢやないのに生徒の一顰一笑にもみ心を配つて下さるは有難い事なんだけれどあまりに人格を無視なさる時はすまぬとしりつつ慷慨の念にも驅られる樣になる。

×

けふは私の巡り番、夜の默習が終つて點檢がすむと提灯を持つて舍內を一巡、特別室の戶締を見て步く、棟を別つた作法室は廣くて氣味が惡い樣だ。
病室には堀さんと森さんが寢てゐらつしやる堀さんは熱があると見えて室長の松村さんが枕元に坐つてせつせと冷してらつしやる、こゝは艶消硝子の戶に斜に

月が射して一層淋しい感がする。

どのお部屋もお寢みなすつた頃を見計つて舍監に申上げる。一室から順に御巡視なさる後から入口の障子を閉めて行く。

今迄ぼそ〳〵しやべつてらしつた方もお草履の音がするとハタと止めて神妙らしく眼を瞑つておしまひなさるが私が障子を閉める時分には又パッチリ眼を開いて顏見てニッコリなさる方もある。

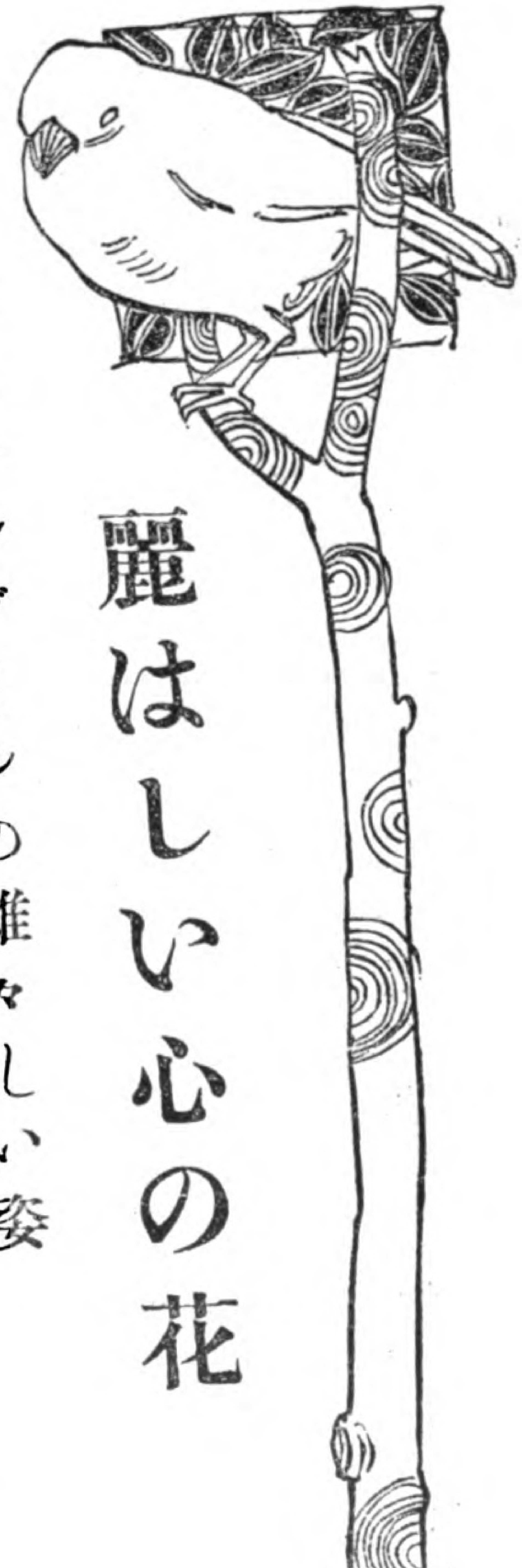
先生はおみ足がお早いから四五間づゝ後れる。俄然ガラ〳〵〳〵ッ窓のあく音にビックリすると二十五室



前の窓の締りが怠つてあつた、舍監は開けたまゝサッサと行つておしまひなさる。

室長の伊藤さんが飛び起きて來る、先生の無言の御行爲は時々膽を冷す。

炊事場から便處から隈なくめぐつて舍監室の前の電燈の栓をパチンとひねると舍は忽ち常暗！提灯をお渡しして御挨拶して暗い廊下を室へと辿る、跫音が大きく響く足袋を徹して路の裏がしむやうに冷い外は佳い月！、オヽ故鄕の父母も今頃はお寢みになつたであらうか。



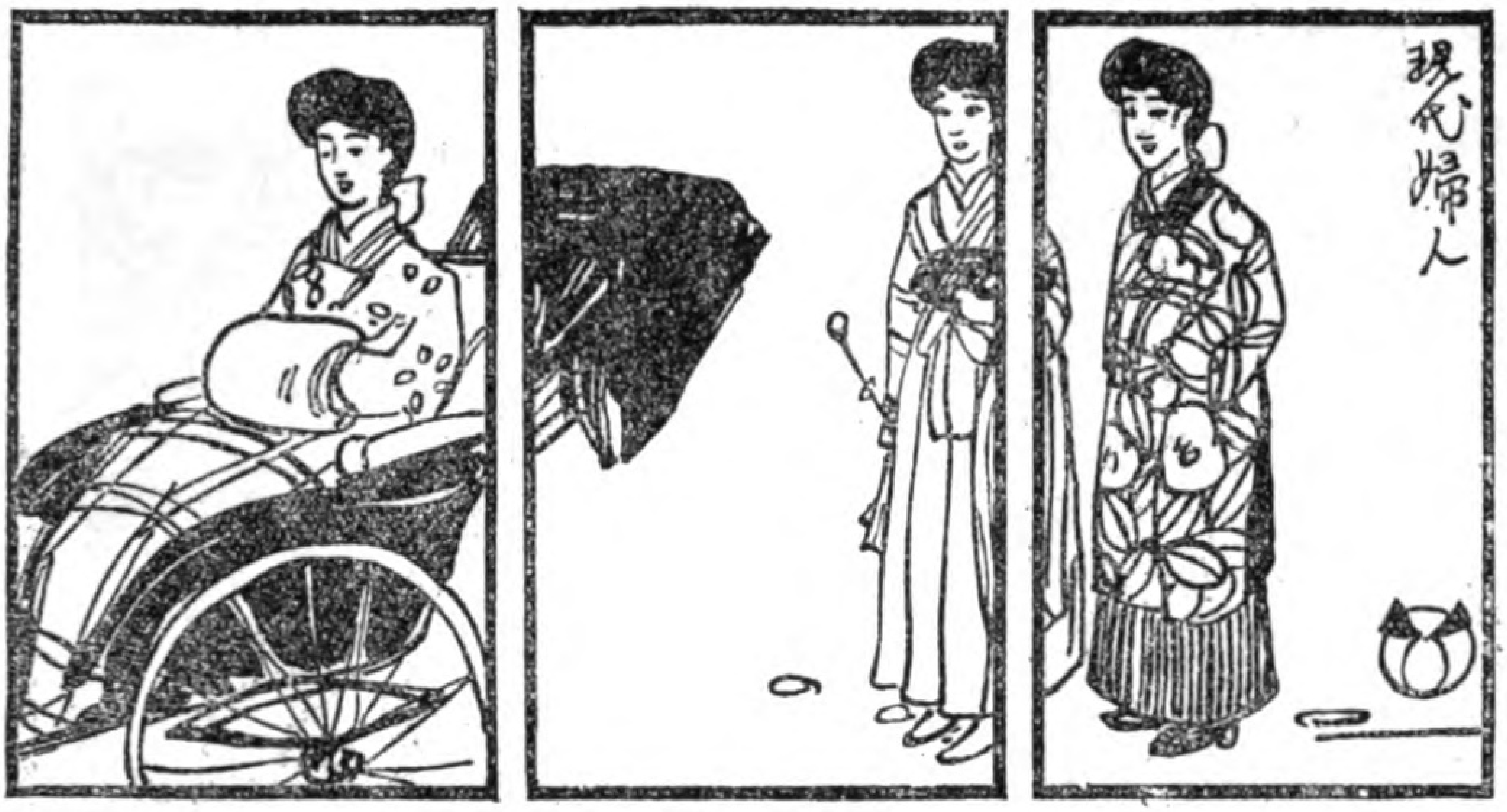
麗はしい心の花

ナイチンゲールの雄々しい姿

阪部清子

○

十九世紀の後半で、婦人の仕遂げた最も大きい事業と言へば誰しもフロレンス、ナイチンゲールの事蹟を想ひ起さずには居られぬ。近頃婦女界といふ雜誌で讀者の崇拜する女性の投票を求めた事があつたが、集つた答案の三分の一强は皆一樣に、ミス、ナイチンゲールと記してあつた相である。之を以て見ても女史がどれ程世間の渇仰を受けて居るかゞ分るが、千八百五十四年クリミヤ戰爭が破裂すると同時に、風にも堪へぬ軟弱い身を以て、遠い土耳古の空に、愛の權化の樣に傷病の兵士を劬つた女史の振舞は、どんなに當年の若い人達を感奮せしめた事であらう。その健氣な美はしい行が、今日の赤十字社の基ともなり先驅ともなつた事は固より申す迄もない。



人並すぐれて長壽を保つてゐた女史は、晩年を靜なダアビイシャーの片田舎に引籠つてからは、滅多に姿を顯はした事は無い、其住居を旅行案內で知つて遙々見に來る旅行者はあつても、蔦に包まれた古風な家の窓からは竟にそれらしい影の見えた事はなかつた。

豫て寢臺の上から動く事の出來なんだナイチンゲール女史の訃報の傳はつたのは一昨年の八月、九十回の誕生を祝つてから間もない事であつた。ジョージ陛下は特に優渥な弔詞を賜はれたが、女史半世の美はしい事業が世界の人々の印象から去らぬ限り、遺骸を葬つてあるハンプシャーの墓所も常久に花環の香を絶えせぬ事であらう

……

△麗らかな田園に育つた乙女

幼時の逸話

後年平和の使徒と呼ばるべき、ナイチンゲールは今より九十二年前、伊太利の花の都、フロレンスに產聲を擧げた、即ち兩親の伊太利旅行中に生れたのがそれで、兩親は此の可憐な女兒に幸あれと生れた都其儘の名を附けたのであつた。

フロレンスの父親は富有なダアビーの地主で言はゞ模範的の英國紳士であつた。よく理の分つた敎育のある人で、自分では「慈悲深い方ではない」と公言して、小作



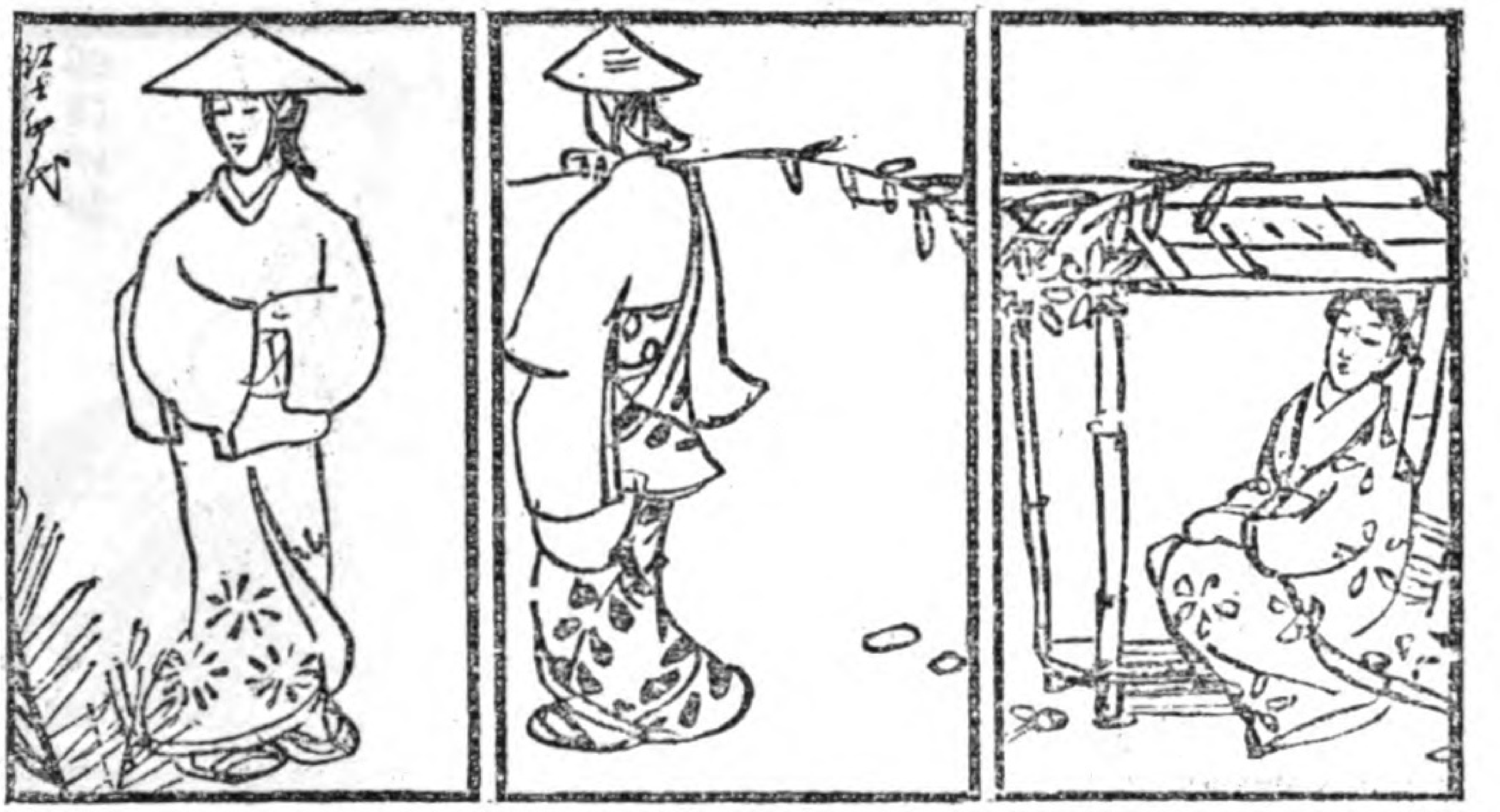
人等の無心を彈ね附けても、而も公共の事業には金を惜まなんだので、自費で小學校を維持して只にも等しい月謝で村の子供を教育した。此の事に就ては永く村民が德として、若し此人のお蔭が無かつたら迚も今日丈に讀書の出來る者が出なかつたらうと話し合つてる相である。然しフロレンスの受けた美はしい性質の感化は、情け深い母親の方から直接に來て居ると言つて差支が無い。

　ナイチンゲール夫妻はフロレンスに生れると間もなく英國に歸つてダアビー市に近いリーハアストと云ふ處に住んだ。此家こそフロレンスの一生とは斷つ事の出來ぬ緣の糸で結びつけられて居るので女史がクリミヤに立つたのも此處からである。平和な晩年を送つたのも此處である。

　此リーハーストの家と言ふのは芝草の生えた日當の良い丘の上にある昔風の建物で、薄色の窓掛の掛けてある窓の見え難い迄に、周圍には色々の樹が茂つてゐた。それにナイチンゲール夫妻共に園藝に深い趣味を有つて居たので、春の半になると牡丹やプリムラや雛菊や勿忘草などが到る處に咲いてゐた。

　フロレンスの同胞と言へば一つ違の姉一人。何不足の無い家庭に育つ此二人は誰からも羨まれた。

　フロレンスは何方かと言へば内氣な物優しい子で、姉の毀した人



形の手を涙ぐんで接合せて、それの乾く迄側離れず看護をしてゐる樣な事もあつた。

茲に彼女の幼時に可憐な逸話がある。

十歳前後の事であつた。或日近所の牧師と一緒に野を歩いて居ると、馴染の羊飼が羊を呼集めやうとしても集まらぬので殆ど持餘して居る。理を訊ねると大切の番犬が惡戯者に石をあてられて足を折つて終つたのだといふ。そして言葉を繼いで「何れ助らぬ物なら一思に殺して遣らうと思ふ」と言つた。さお生物好のフロレンスは溜らない。如何かして此憐な犬を救ふてやらうと、獨で羊飼の留守宅へ行つた。見ると足を折られた犬は息もあへかに床下に寢て居る。フロレンスは子供心に、傷口を濕布する事を思附いて有合した布で療治に取掛つたが、滿更骨迄折れて居たのでも無かつたと見えて、犬は餘程元氣附いた。そして主人が、少しでも苦痛を短くして遣らうと犬の首を絞める繩をさげて歸つて來た頃には犬は苦痛の内にも尾を振る迄になつて居た。

此可憐な事件は口から口へと傳はつて、醫療等に就ては全然智識の無い村人は一種の奇蹟の樣に感心し合つた。

こんな自由な田園の生活の内にも嚴しい父は娘二人の教育を忽にせなんだ。フロレンスは幼い時から明晰な頭をして居て、殊に外







國語に驚くべき才能を持つて居た然し父から教へられる面倒な拉丁語よりもフロレンスの心を惹いたのは友達から借りて讀む小說で二人の姉妹は隙のある毎に花壇の蔭に椅子を並べて、顏を上氣させ乍ら讀耽つた——

△賢き女の感化

こんなにして何不自由なしに十七の春は來たが。フロレンスは見聞の廣い點から言つても氣立から言つても、狹いダービイの婦人仲間では一方の明星と仰がれて居た。然し一方からいへば同情の深い無邪氣な乙女に過ぎなんだので當時流行し出した素人寫眞に熱中して、指先が藥品で汚くなるのも構はずに、犬や雞や家畜をレンズに入れて喜んで居たのである。

處が廿の聲を聞く時分には彼女の考も漸く定まつて來て己の使命を漠然と悟る樣になつた。看護婦の事業は今でこそ當然の事の樣になつて終つたが當時は未だ廣く行はれて居らなんだので、方々の病院では殆ど何の素養もない、而も一般に身持の惡い女を附添人として使つて居た。こんな附添人に看護せられる病人こそ悲慘なものであるが、それを救ふには是非とも敎育のある、そして品性の高い看護婦を養成せねばならぬ。フロレンスは其處へ眼をつけた。

其後女史は或人の紹介でエリザベス、フライと呼ぶ婦人に遇つた



此人はフロレンスと同じ樣な考を抱いて各國の監獄や病院を視察し後倫敦で慈善事業の爲に小かな看護婦養成所を設立して居た。此二人の會見の模樣は知るに由ない事であるがフロレンスの心の内に萠して居た美はしい芽は之が爲に多大の養を受けた事は疑もない。

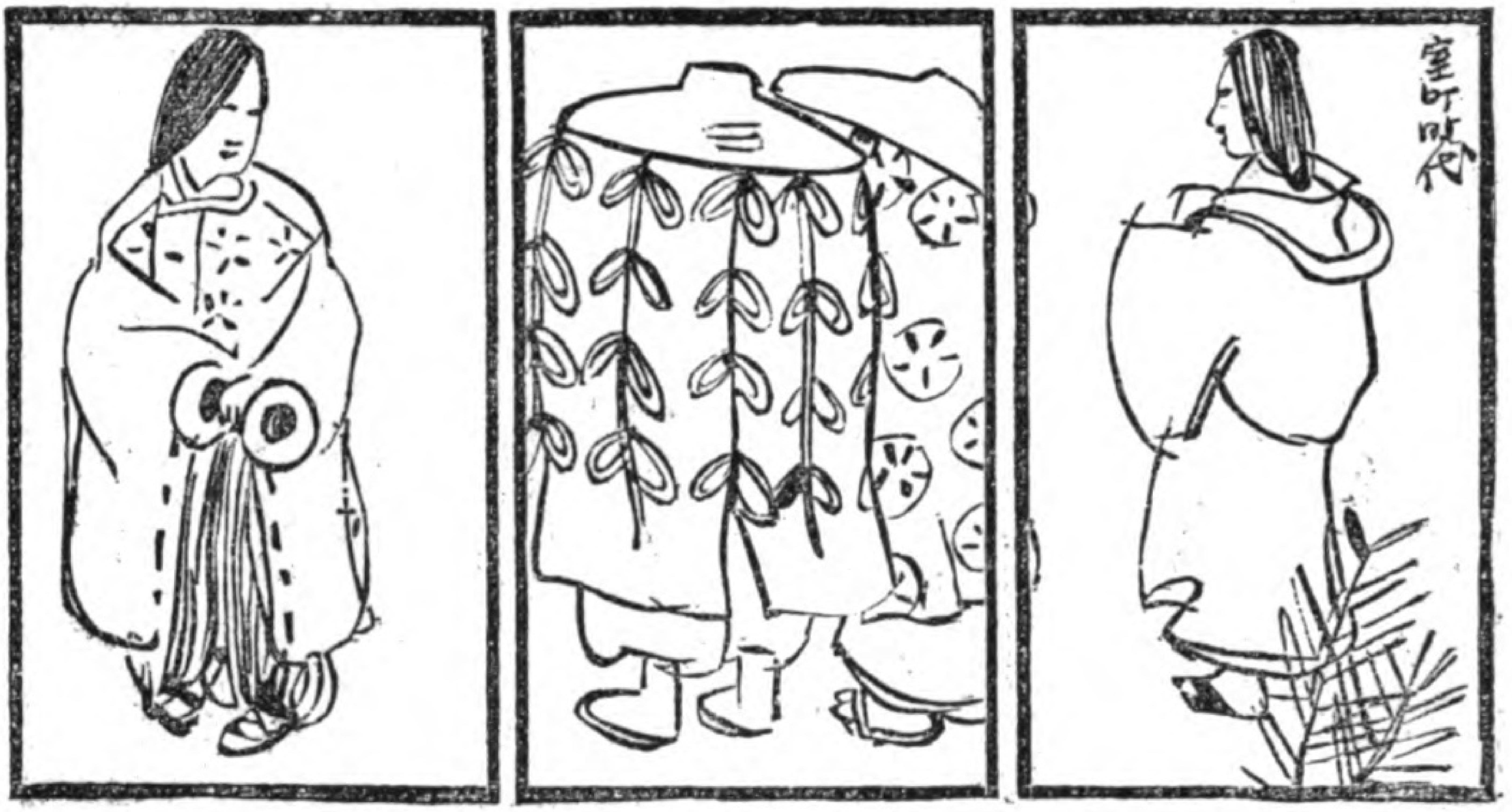
△萬人を魅する厚情の人

立志の動機

果然、數年後フロレンスは病院事業見習の爲單身大陸に出發した當時は病院事業と言ひ救濟事業と言ひ英國は遙に大陸諸國から劣つて居たので、殊に英國從來の看護婦と言へば十中九迄酒呑の莫連者揃、少し身分のある婦人は言葉を交すさへ恥ぢた物である。女史は大陸の各都市を順次に歩いて見て人々の企て及ばぬ注意深い眼で專ら救濟事業を視察した。

斯うして獨逸のカイゼルベルト迄來ると、プロテスタント派の牧師フリードネルといふ人の建てゝ居る慈善病院が眼についた。フリードネルの下には同じ宗旨中の信仰の堅い婦人が献身的に働いて居るので、その樣に深くも感じたフロレンスは遂に其一員になりたいと申込んだ。これが恰度廿九の時であつた。

此處に働いて居る人達は多くは土地の者で、而も百姓の女であつた故、此氣品只ならぬ一英國婦人



が其仲間へ入つた時、皆どんなに驚の眼を峙てた事であらう。それも其筈當時は此處に於てすら我から望んで貧民の患者を劬はらうとする中流以上の婦人は無かつたのである。フロレンスは皆と同じ樣に粗末な淺黃色の看護服に白い胸當をし、上靴の裏が眞黑になる迄立働いた。そして食事にはコーヒ用ふる贅澤をさへ許さぬ、殆ど尼寺にも等しい生活にも能く堪へて只管患者を劬つたが、生れつきの情深い人を魅する樣な性質は間もなく人々の尊敬を一身に集めた

其後女史は獨逸を去り、巴里に見習中、到頭健康を損して再び我家へ歸らねばならぬ事になつたが全快すると直倫敦に赴き、當時財政上の窮境にあつた婦人救濟院を引受けて經營した。處が力弱い體質は過勞の爲に亦も損はれて再び再親の溫い看護を受けねばならぬ身となつた。

△世界に耀やく事業の始め

公生涯の發端

斯うして千八百五十四年の春は來た。此年はフロレンスの半世にとつて最も紀念の多い年である。豫て露國と英佛との間に紛糾を斷たなんだクリミヤ半島の風雲は益益怪しくなるばかり、到頭三月の廿七日になつて談判は不調に終り露國を相手に英佛土の三國は開戰を布告した。世間は急に色めいて







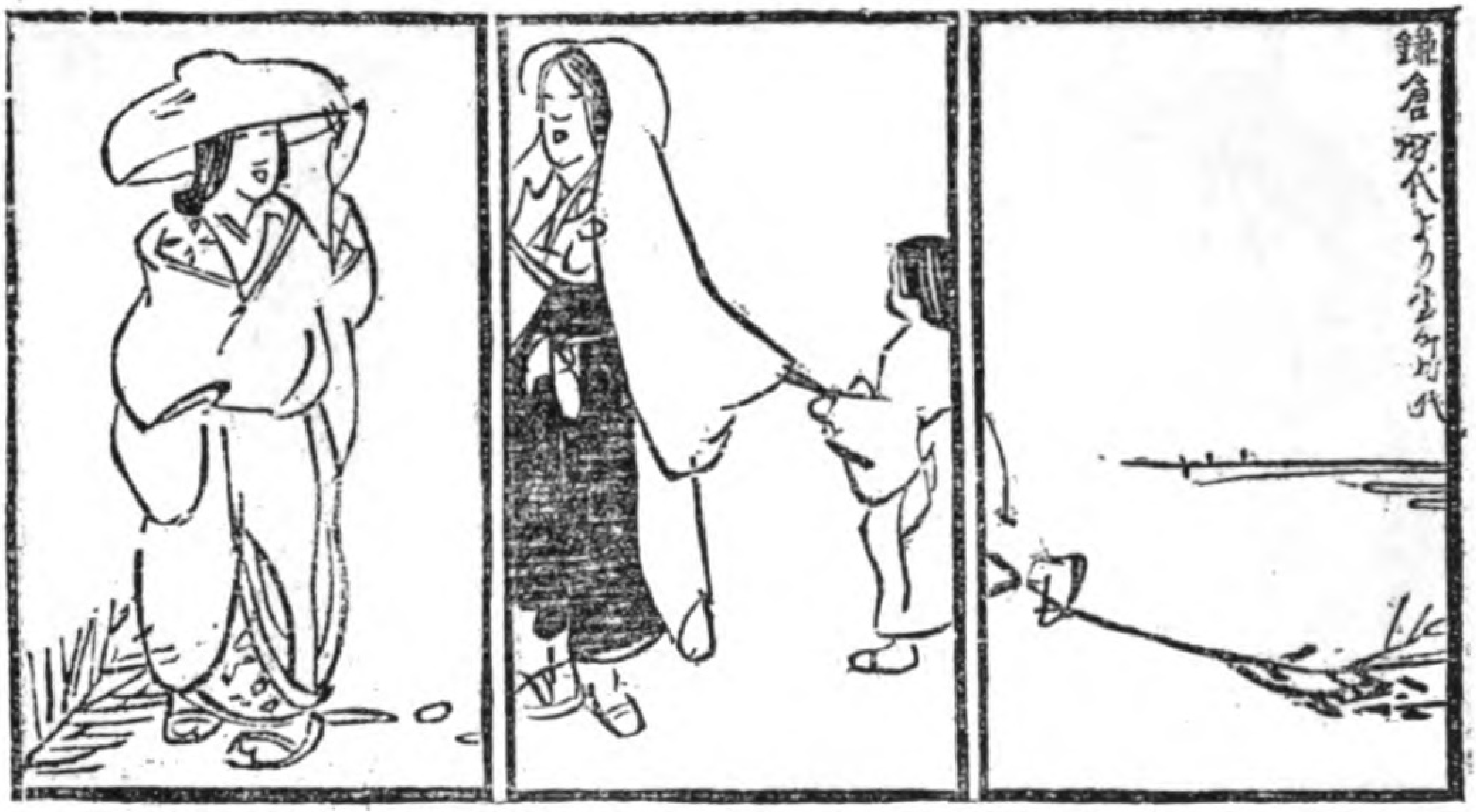
來て。ドウバー海峽を隔てゝ英佛の兩國共に戰備に忙しかつた。軈て數日經つと英國艦隊は波羅的海に出發したが、女皇は輕船に乘つて態々之を見送られると言ふ騷ぎ英國民は上下の隔なく、かの奈翁戰爭でウエリントン卿の齎した花花しい勝利を夢みて居たのである

　暫くすると土耳古からアルマの戰捷の電報は屆いた。而し其爲に英軍には數知れぬ死傷者が生じた其上悲慘な事には英軍には之丈の負傷者を收容する準備がない。第一衞生材料が足らない。軍醫が足らぬ。手當さへすれば助かるべき兵士も見す〳〵怨を呑んで死んで終う有樣、それならば佛蘭西の方はと言ふと各他の慈善團體から出た看護婦が多數に我身の危きをも忘れて遺憾なく負傷者を手當をして居るのである。此爲に、英國の野戰病院の失態は一層際立つて見えた。

　こんな風で本國では方々から非難の聲が高まつたが、數少い醫員を送つた處で間に合はぬ。と言つて醫員の手助をする看護人を送らうとしても平生其養成に冷淡であつた英國では至難の業である。

　其内にも戰地の慘澹たる有樣は毎日の樣に通信されて、人々は野戰病院の記事を讀む毎に思はず顏を掩ふたが、到頭タイムス新聞の從軍記者は遂に斯う絶叫するに至つた――

　英國にはスクタリの野戰病院へ



來て、此苦んでる兵士を看護する事の出來る女子は居らぬのか、英國の女は此危急の秋、こんな美はしい仕事を見て起つ事が出來ないのか、見よ佛蘭西は全力を盡して篤志看護婦を送つて居る、彼等は皆負傷者の寢臺の側で、男子の與ふる事の出來ぬ慰藉を與へて居るのだ。我々英國人はこれ程迄に犧牲の精神に於て佛蘭西人に劣つて居るのか……

此記事は少からぬ反響を與へた當局の方でも看護婦を送らうとしたが、それを率ゐる丈の人格と經驗のある婦人が見當らぬ。幸な事には陸軍大臣は豫て知合の間柄であつたので、フロレンス、ナイチンゲールに其羽白の矢を立てた

而し玆に一つの困難と言ふのは、假んば此新しい團體を送つた處でスクタリの病院從來の看護人の中に混へては何等の効果も無い事第一それは見識のある女史が承諾し相もない。其方の交渉が甘く附くと陸軍大臣は計畫を打開け、懇懃を極めた長文の書翰には女史を以て此重任を果す唯一人の女と迄推稱した。

これが抑ゝ女史の公生涯の初である。以下はフロレンスの名を棄てゝミス、ナイチンゲールの姓を以て呼ばう。

女史は猶豫なく承諾した。家族の人々はその健康を案じて居るに關らず此手紙の屆いた即日返書を認めた。それは十月の十五日うす



ら寒い日がイウカリ樹の蔭に落ちる時分であつた。

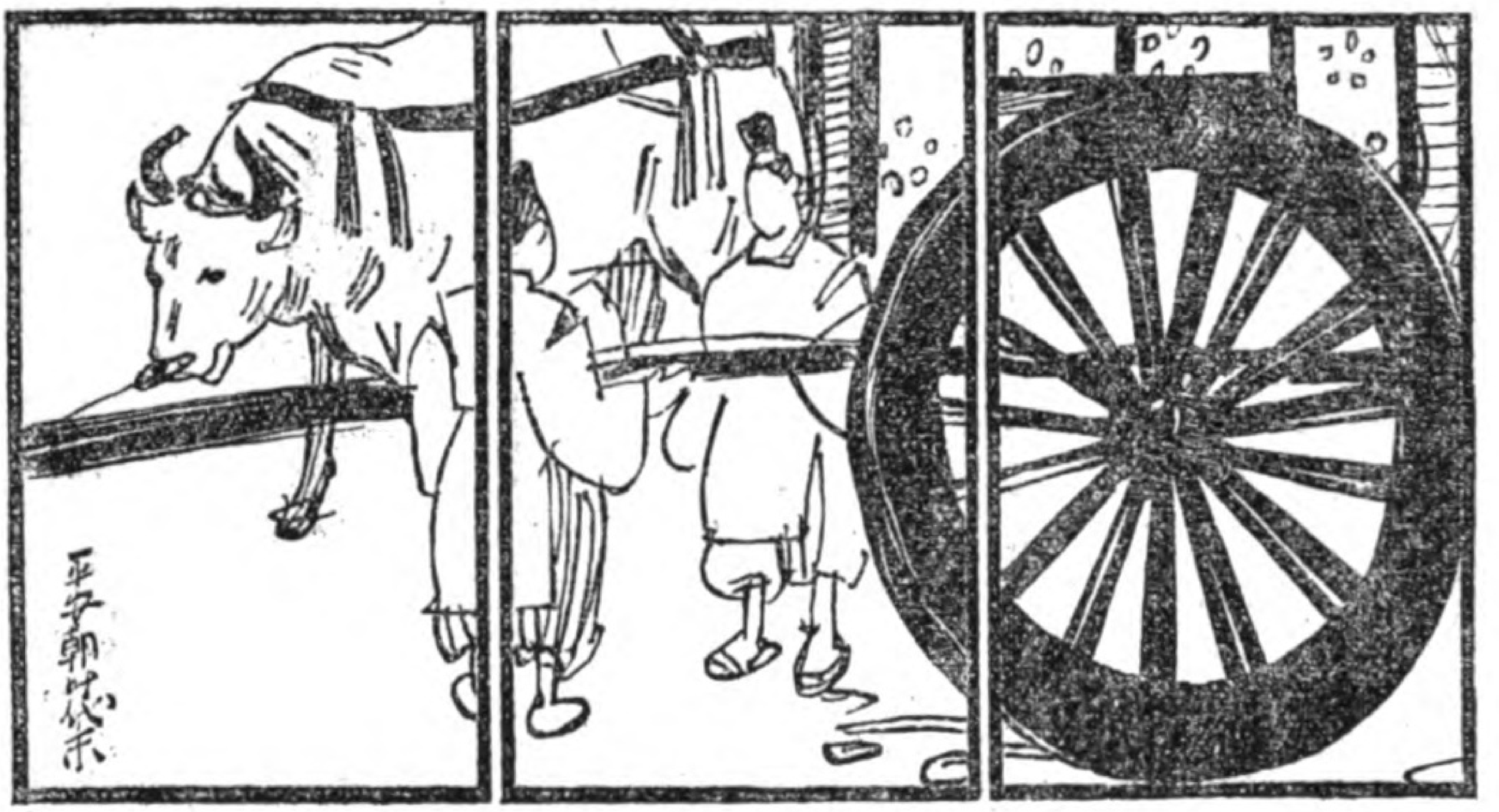
△潜んだ婦人の天性

賞讃と冷笑の諸聲

一度此事が公にされると社會の視線は一樣にナイチンゲール女史に集つた。新聞紙は爭つてその人となりを稱へ且つ看護の道の經驗は固より獨佛伊の三國語は自國語の樣に話せる事をも記した。

記憶せねばならぬ。當時は歐洲に於ても婦人の能力が今日程は認められなんだ時代である。それ故此破天荒な企に就て、唯さへ保守な英國の社會から反對の聲の出たのも無理はない。或識者は野戰病院に婦女子を使ふの不可を論じたゝうら若い女が……子供をすら育てた事の無いうら若い女が……兵士を看護する？ある一部からはこんな嘲笑もあつた。亦一方では看護に役立つか否かの問題は別にしても、男でさへ堪へ難い此劇務にどうして女が堪へ得られやう。一ケ月程すればきつと看護に行つた身が他の看護を受けねばならぬ樣になるは必定。若しそれ以上の成績が得られたら、それこそ奇蹟だ。と言つた。

けれどもナイチンゲールこんなに我身が社會の注意の焦點になつてるのを心附かぬ樣に落附いて出發の準備をして居た。處が女史が戰地へ出發すると言ふ事を聞くと同時に、篤志看護婦になり度いと



の申込は、毎日陸軍省の圓卓に堆高くなつた。然し其申込者の多くは切傷一つ洗つた事の無い貴婦人連で一時の氣まぐれに過ぎないのである。戰地へ行つて其日から役に立つ看護婦を募ると言ふ事はまして容易でなかつた。

陸軍省では種々の手蔓を求めて加入を申込む貴婦人を斷はるのに一方ならず苦心した。

其後南阿戰爭の出來事であつたが、ケープタウンの病院へ或貴婦人が訪問した時、一兵士の顔を洗つて遣らうかと言ふと兵士は情な相な顔をして。

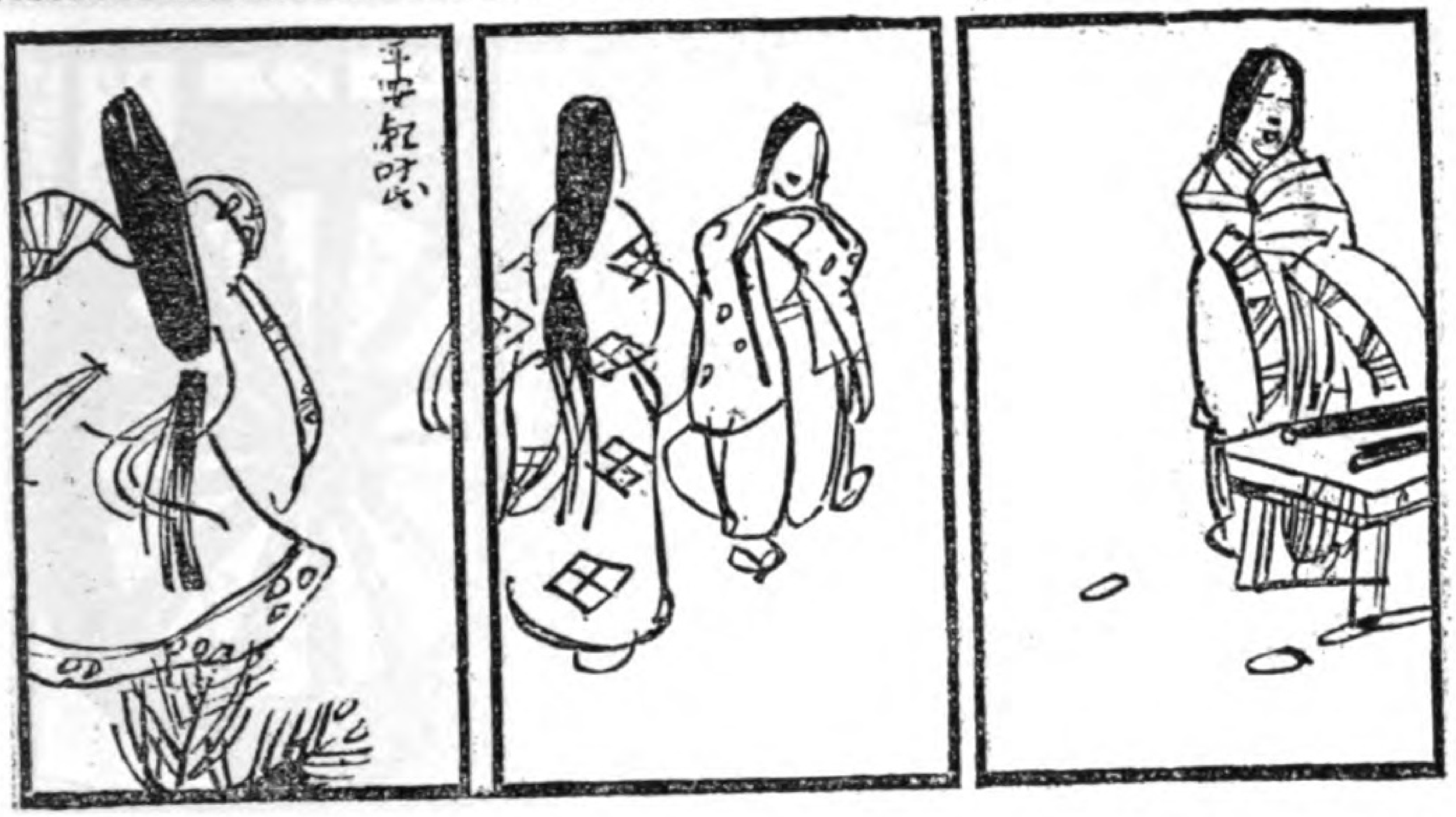
「何卒今日は御免下さい、顔を洗はせろと仰る貴婦人の先約が十四人もあるんですから……」と答へたのが、未だに一つの語艸になつてゐるが、こんな事が無い樣にと充分吟味したのであつた。

第一回の募集では美事失敗した――。

戰地では日毎に殖える負傷者が救の手を求めて呻吟してゐる。それでナイチンゲールは新敎と舊敎との兩方の救濟院から經驗のある人々を募らうとしたが、すると新敎の坊樣が承知しない。ナイチンゲールは戰地の兵士を舊敎にする積かと詰つた。亦一方には政府から指定された女史の下風に立つのを快しとせぬ婦人もあつた。

これがせつぱ詰つた此時の出來事である。

然し兎に角にして博愛の名の下



に一身を犧牲に供しやうとする篤志看護婦の一團が得られた。十月廿一日…秋から冬へかけて霧の深い倫敦の晩を僅な見送人に送られて、停車場のプラットフォームに立つた三十八人の一團があつたこれこそ後年愛の權化と謳はれた「天使團」である。それを率ゐて居るナイチンゲールはと見るとクエーカーでも着さうな黑の衣物を着て、顏には何時もの樣に淑な微笑を湛へて居るのであつた。行く者も送る者も共に生きて再び遭へるとは思つてゐない、車窓の下に佇んで居る人々の眼には自づと涙が湧いて來るのであつた。

△天使團の出發

次の朝黎明に一行の乘船は佛蘭西のブロンニユに着いた。此處では前晩倫敦出發の光景の淋しかつたに引代へて大變な出迎を受けた

アルマの戰役では佛人も英人も同じ敵に向つて互に助け合つて戰つたのではないか。あの熱し安い拉丁民族の國民がどうして此美しい英國婦人を歡迎せずに置かう女史の一行が艀舟から降りるや否や、白い頭巾を被り、派手な上衣を着た土地の漁夫のお上さん達は我先にと手荷物を奪ひとり、各自重い包を腋にしたり、大きい鞄を荷つたりして停車場迄搬んで呉れた。そして一行が列車に乘込むのを狹い窓から重合つて、覗いて居たが、どの顏にもどの顏にも口に



する事の出來ぬ誠意が表れてゐた。

斯うして天使團は巴里で一晩泊つた切り其疲の收まらぬ内にマルセーユに向つて出發した。マルセーユからスクタリへ、地中海の船路は彌が上に荒れて一時は一行の命が危くさへ見えた。

漸くにして其心配から免れ、綿の樣に疲勞した身體を休める暇もなく、クリミヤ半島の陸地では數知れぬ仕事が、女史の來るのを今か今かと待つて居たのである……

△山なす負傷兵の看護

戰地の慘狀

ナイチンゲール孃に率ゐられたる三十七人の天使團の到着の日が地中海の風波の爲に遲れて居る間に、一方クリミヤ戰爭の方は益々烈しくなつて行つた。

天使團が倫敦を出立して四日目にバラクラバの役があつた。超えて十一月の五日――一行が土耳古の土を履むか履まぬ内にインカーマンの接戰があつた。

これ等の負傷兵は黒海を小船に積まれて悉くスクタリの野戰病院へ後送せられるのである。その病院と言ふのはボスホラス海峽を見下してゐる丘の上に在るので、此戰爭が始まると同時に英國政府が土耳古より借受けた建物であつた。若し晴渡つた秋の日に此宏大な病院の二階の窓から遠く海峽の向側へ眼を遣る人があつたら、白



銀の都と呼ばれてゐるコンスタンチノープルの塔や建物が低い地平線の上に美しい繪の樣に浮んでゐるのが見えたであらう。けれ共今は此病院の周圍はそんな平和な空氣に包まれて居なんだ。間斷なく小さい艀舟で搬ばれる負傷兵は餘儀ない者の外は擔架等には乘せて貰へぬ。汀から病院迄峻しい坂道を喘ぎ乍ら登られねばならなんだ。それ許か病院が收容し切れなくなつてからは、死亡者が出來て病室に空地の出來る迄外の者は何時迄も屋外の泥濘の中に捨置かれた。これが負傷兵許なれば兎に角チブスや虎列剌の患者も其中に居るのである。病院前の坂道は絶えず重傷者を搬ぶ擔架と死者を搬び出す擔架とがすれ違つて往來した――而も一度足を病院の中へふみ入れたら其有樣には誰しも身慄せずには居られない、

さしも廣い病院も病室といふ病室は寢臺となく床となく患者一杯長い廊下には足のふみ場もなく兵士が呻いてゐる。

無論病服など着て居る者は無い連日の戰鬪で塵まみれになつた軍服の儘、埃で固ばつた傷口の苦痛に悶えてゐた。病院の中には水を容れる器さへ無い、蚤や虱は容赦なく半死の病人の上を匍ひ歩いた

夜が來ると廣い病室の所々にはほんの申譯許りに麥酒罎にさした蠟燭が點されたが、黄色い蠟燭の火が其傍に寢てゐる少數の人々を



照すに過ぎない。どの室もどの室も壁の無い熱臭い空氣に滿ちてゐる。

――これが初てナイチンゲールが病院を見廻つた時の光景であつた・・・

△弱い身體に雄々しい心

意外な嫉妬の聲

ナイチンゲールは英國を出る時から戰地の混亂に就ては豫め覺悟をして來た。そして負傷兵の待遇法を根本から改良せうと美はしい空想を描いてゐた。而し來て見ると全く豫想とは比較にならぬ程の甚しさで改良等は愚な事、息を繼ぐ間もなく潮の樣に押寄せて來る負傷兵を如何する事も出來ない――。

其上肝心の病院や醫師の方では遙々と故國から出て來た一行を別に有難くも思はぬ。言はゞ力弱い女等は邪魔にこそなれ役に立たうとは豫期して居なんだので、それに、兵士が戰地で苦しむのは當然の事、それを今更人道呼はりをするのは女々しい事と、皆こんな考を抱いて居る。

こんな風に總ての事は皆ナイチンゲールに反對する狀況にあつたので、言はゞ女史にとつてはそれが好個の試金石であつた。

之はクリミヤ戰爭が終つてからの事であるがナイチンゲールの名許り高いので同じ樣に戰地へ行つ

て立働いた人々の中に、女らしい嫉妬の聲が起つた。自分達も同じ樣に病者の看護に從事したのでは無いか。數知れぬ負傷兵の臨終の床に侍つて最後の水を汲與へた慈悲の心に如何して甲乙があらう。それに一方丈を愛の權化の樣に謳歌し、他方は軈て忘れて終ふとは世間も餘り不幸平だ——と斯う言ふのである。けれ共ナイチンゲールは犧牲の精神に於てこそ之等の人人と變りなけれ、彼女には普通の婦人に無い見識と抱負とがあつた元々女史は一個の篤志看護婦として土耳古三界迄來たのでは無く、出來るならば病院の組織を根本から改めやうとして來たのである。此弱々しい上品な・そして何方かと言へば引込み勝のナイチンゲールの心には雄々しい自信が潜んで居たのであつた。

一行はスクタリへ着くと荷物の紐を解く間もなく病院を見廻つたが眼に觸れる事一として不滿を感ぜぬ物は無い。病院内の不潔不規律は固より負傷兵取扱上の不親切等見るに堪へぬ物があつた。當時戰地では虎列剌が流行して入院中の負傷兵にも之に罹る者が多數にあつたが看守人は碌々世話もせずに息のある者を死亡室へ搬ぶと云ふ有樣。亦毎日廿人以上も同じ病院の中で營養不良の爲に死ぬる者があつた。而も之が貯に不足があるのなら格別、充分に滋養物を與へる事が出來るのに、政府の許可の無い事を楯に病院の監理者はそれを給與せぬのである、ナイチンゲールは再三交渉の結果遂に全責任を皆自分で引受けると迄言つて貯の一部を開かしめた。何を言つても好都合な事には女史には陸軍省の後楯がある。其内に段段女史の美はしい人格が病院當局者の間にも理解されて萬事圓滑に運ぶ樣になつた。

△深情に對する非難の聲

斯うしてナイチンゲールは一方に不備の點を政府に上申して施設の改良を計ると共に、他方では少からぬ私財を投じて憐な傷病兵の衣類や食料の改善を計つた。そ

して他の看護婦と共に時としては廿時間以上も勤務を續け、或は軍醫に見放された患者を内密に看護して危い死の淵から救つた事もあつた。

ナイチンゲールがこんなにして哀な人々を救つて居る間に本國の一部では亦も非難の聲が擧つた。それは外でも無い、小心な宗教家連の反對で、些細な教派上の考から、ナイチンゲールの手を經ては慰問品を送るなと迄言つた僧もあつた位、けれ共初から女史の行に興味を持つて居られたビクトリヤ女皇よりの御親翰は之等の誤解を跡方もなく打消して終つた。

△身顫するほどの慘狀

其内に翌年の新年は來て、聯合軍は露軍の死守するセバストポールの要塞を圍んだ。兵士は峻烈なクリミヤの冬と戰ひ乍ら七日の内の五日迄吹曝しの塹壕工事に從事したが、手も足も凍えて咄嗟の接戰に引金を引く事すら出來なくなつた。其頃となつて負傷兵の數こそ餘程減つたが。負傷よりも流行病よりも恐ろしい凍傷の患者は續々と後送せられた。これ等の患者の酷いのになると洋服も靴も傷口へこびり附いて強て脫がさうとすれば肉が附着してとれて來るので油を塗つては少し宛剝さねばならなんだ。

軈て英國からは新らしく五十人の篤志看護婦が屆いたが、一時、ナイチンゲールは其等の人達と共に五千人以上の負傷兵を引受けた平生から病身な女史がよく是丈の心勞に耐へたと云ふのは不思議と云より外は無い。ナイチンゲールは毎晩診察が濟んで軍醫が部屋へ退いてから寢臺と寢臺との間を、手に蠟燭の火をなびかせつゝ上靴の微な音をも忍ぶ樣にして見廻つた。そして水を欲する者には水を與へ苦痛を訴へる者には思遣の深い言葉で色々と云ひ慰めた。されば唯さへ氣の弱つて居る病人は此無趣味な病院でどんなにナイチンゲールを便にした事であらう。追々と全快に近く者は女史と訣れる日の迫るのを悲んで跡に殘る戰友の身の上を羨ましく思つた。



女官のお正月

九重の大奥に奉仕する女官達は、高倉典侍を始めとして典侍二名、權典侍五名以下掌侍、權掌侍、命婦、權命婦の外に女嬬、權女嬬、雜仕、針女等の判任女官たちは澤山あります。これらの方々は平生宮城内の女官部屋に居らるゝのでありますが、その部屋內は又各々の局々に分れて、官等の順に從つて別々のお部屋があります。

△お正月の御仕度

明け暮れ尊きあたりに奉仕し、自分といふものは全く忘れて誠心を捧ぐる女官達は、その平生は云ふまでもなく、宮中に御儀式のある場合には、常から事に慣れてはゐらるゝものゝ、些少も過失のなかれかしと思ふ氣苦勞から、又その忙がしさは想像も及ばぬ程である、ことに新年の御儀式の折など、兩陛下が御座所に出御まし〳〵給ふ前の御用を、落ちなく勤め申さればなりませぬ、出御の御準備も平生の幾倍といふ御用であります、されば女官達は殆ど徹夜で元朝を迎へらるゝのであります。

△元日の忙しさ

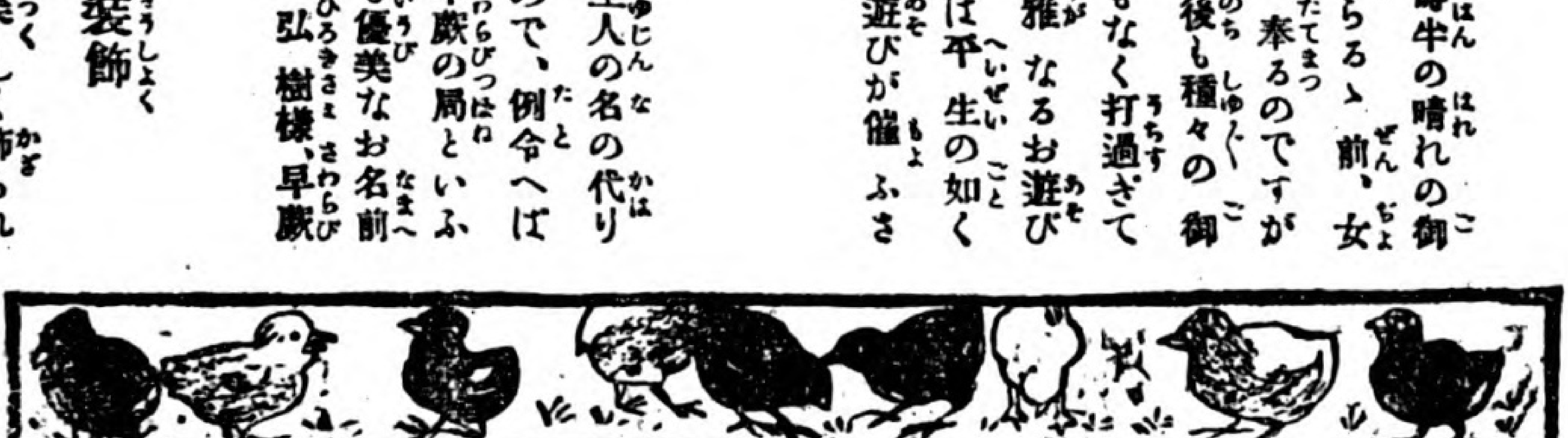
さて元日となつて、兩陛下には七時半の晴れの御膳濟ませられて、御座所に出御あらせらるゝ前、女官達は御内儀の内で拜賀の禮を述べ奉るのですが百官の拜賀も濟みて入御あらせ給ひし後も種々の御用で元日は終日殆ど休息のひまもなく打過ぎて仕舞ひます、二日頃より思ひ〳〵に高雅なるお遊びが催されますが、それも一日の務めは平生の如く濟んで後、お部屋に歸つていろ〳〵の遊びが催ふされます。

△女官達のよび名

女官部屋中のお局では、局の名を主人の名の代りに呼ぶのですが、何れも雅やかなもので、例令へば高倉の典侍の弘樹局、柳原典侍の早蕨の局といふ樣に緋櫻、小菊、藤袴など、いづれも優美なお名前で局々に仕ふる下役の女官達は皆弘樹樣、早蕨樣といふやうに呼ばれます。

△美々しき部屋々々の装飾

局の主人は自分の部屋を思ひ〳〵に美しく飾られ





ます、この部屋の装飾が女官達の新年に於ける一つの遊びで、又お互に誇りとする所ですから、新年の装飾のためには競ふてその前々から高價の品物を買ひ入れるといふ鹽梅で、恰も下々の人が他家に劣らず飾り立てると同じ有様であります。

△着飾りの競爭

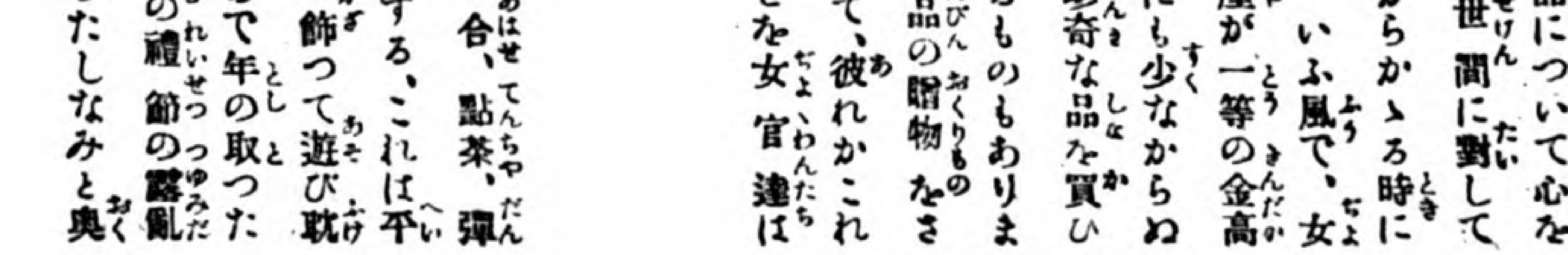
長髪に長袴の女官達は部屋に退ると、髪はそのまゝですが、衣服は各自の好みに應じて着替へられる、これが又競爭の有様で、それは〱たゞならぬ苦心をされる、兩陛下からは時々高價の服地を給はりますが、それ以上に女官達の買入らるゝ品物は少なからぬ額に達するのであります、年末になつて女官部屋に近い商人の控所には、都下に有名の呉服店員が詰め切つて御用を達してゐます。宮中に奉仕する身は下々の女子に増して身の嗜みに心を籠むべきは云ふまでもありませぬが、身を飾ると云ふ女の天性はこゝにも遺憾なく發揮されてゐます。

△心を碎いた贈答品

部屋の飾り付が出來て、着物の競爭に敗けぬ準備が出來ると、今度はお互の局は贈答品について心を籠められます、これ等の局達は廣く世間に對して見榮を張るといふ機會がありませぬからかゝる時に際してお互に競爭の樂しみを盡すといふ風で、女官達の買上品は何と云つても呉服屋が一等の金高を占めるが化粧品、菓子類、道具類にも少なからぬ金が拂はれます、中には窃に西洋の珍奇な品を買ひ入れて置いて、このときの遣ひ物にするものもあります。さて女官達の實家では不意に珍品の贈物をされて、何を答禮に贈つて好いか困じ果て、彼れかこれかと擇りに擇つて品物を贈ることなどを女官達は此の上もない樂みにしてゐられる。

△種々の遊びごと

雙六、追羽子、歌骨牌の遊びから歌合、點茶、彈琴の遊びは年々の例によつて催されまする、これは平生でも爲るところで、新年には殊に着飾つて遊び戯るといふ風です。その無邪氣さはまるで年の取つた子供のやうです、併しこの間にもお互の禮節の露亂れぬは流石に高貴の務めにある人達のたしなみと奥ゆかしくおもはれます。




はらの女
秋海棠の女
睡蓮の女
若葉の女
白蓮の女
桔梗の女
菜の花の女
向日葵の女

卒業前

若栞



晴れたりな一碧萬頃。心暢かに氣も清々しい大空のにほひ。今日も佐保子さんと野中の路を學校へと急いだ。幅三尺足らずの畔道には、小指ばかりの若草が、敗殘の姿いたましい枯草の中から萠えいでゝ、弱々しい内にもかくしたる「力」をひそめて居る。

鯨の脊のやうな帶江の連山、塗つた繪の具のかはかぬ樣な鎭守の森、黑褐色の田の面には麥が二三寸、今も草雲雀が、朝日の光をイッパイうけて、サッと舞ひ上ると早や長閑なしらべ。

あゝ此のどかな景色も、もはや二月の後には見られないのかと思へば、何となく、はかなさ、淋しさが胸に迫る。云ひ合はさねど同じ思ひの佐保子樣も無言のまゝうつむいた頸の白さ。…露ながらの乙女椿の葩一輪、香も無う前行く君が肩に落ちて….

第一時作法。準備室で帶を結んで居ると渡邊先生が、「マア貴女方何ですね　女が身じまいする處を開けはなして…、帶は御自分で結ぶのですよ。人にして貰つて何になります?」

朝つぱらから散々のお小言。

今日は煎茶のたてかた。道江樣、紫矢絣に高浪織の御み帶、キユッとしめて、澄まし込んだ御顏、一擧手一投足おろそかならぬ御振舞。

常はキヤッ〱とさわいでゐらして、「私、多血質の好標本よ。」などゝ得意がつて居らつしやる方と何で思ひよう。

「ネエ、あのスマシ方、マダム振りが見たいわ」とは初枝さんの惡口、

此方は去年の八月エンゲージなすつたとか未だお人

形でもほしさうな方ですのに。

　三月には式をなすつて妾達が裁縫所へ行かうか専攻科にしようかとさわいで居る時分には、今の樣にスマシ込んでお姑樣や脊の君にお侍へなさるかと思へば、何だかお可哀さう。四時間目歷史「フランスの革命」を習ふ。

　ルイス十五世が死にのぞんで「朕が後には洪水とならん」との言葉通り、混亂又混亂、花の巴里は地獄の巷。

　ルイス十六世の慘な最後！　少女シアーロット、コルデーの義烈！！　ジロンド黨の華ローラン夫人！！

　おさへど止まぬ乙女心の高まる情緒あふれては涙となりて、巧なるメロデーに夢現となり想像を恣にして革命の悲劇を視て居るものを、時を報ずる無情の鐘に、あはれ、我をして甘い現實に歸らしめるのであつた。

「いつもお元氣なのに今日は殊更にねえ――辨慶の火事見舞宜しくでしたわ。」とは道江さん。

「私はあのむちが恐かつたのよ、吉岡さんの頰をお見舞しさうでハラ〳〵して居ましたの」

長い廊下に噂取り〳〵、私一人、花園に逃れて、痛いほど香の高い水仙にキスした。

　晝食後最後の文學會のピアノ連彈、ドナウ川の漣、ガボツトとをみて頂く。

　裁縫の先生がお休みなので例によつて自修、けれど兎角口の方が働きすぎて困る。寄るとさはると卒業てからの噂、鏝をとりにゆけば、又、こゝでも火鉢會議！！

　蓮ちやんは、話にうつゝをぬかして　お召の重ねの紅絹裏を焦したとこぼして被居た。

和歌兼題　月前梅　初春

　四時歸宅、みれば机の上に磯菜さんからのお便。其一節に

「人に優つた事をしようと思へば人より一歩進まねばならぬ。お互に今は修養時代品性修養のみならで文章に於ても今が大切な修養時代。私は人の樣に萩香さん

とか〇〇さんとか、そんなに人にもてはやされなくともいゝ、大器晩成、殊に私達は他の人とは違ふ。とても一日筆を取つてゐる事は出來ない、學問といふ大切な務があるのだもの けれど今、心の中にひそんでゐる、或る力ある芽を蟲の食はぬ樣風のさはらぬ樣育てゝやりませう。ね美津樣たとへ、一つでも牡丹のやうに大きく美しく咲かしたい。花數が多くとも山吹の、實の一つだに、なきぞかなしきではつまりませんわ。そして常に一歩人より進んで、新らしき或物を見出して人の爲神の爲に一生を送りたい。限りなき生命と人はいふ。けれど私は心からそれを信ずる事のできないほどプーアな女ですの。けれど〱靈のみは幾百萬年も、我以外の我になつて小さくとも世の光、地の鹽となりたい‥‥云々」

はげしき感情の、思ひは紙にあふれ〳〵て、望えられざりし若人の赤きなやみよ。今や醒めつゝある女！

友の衷！ アヽ、六年前泣いて別れたあの無邪氣な磯菜さんとはどうして思へよう‥‥、「鹿兒島には‥‥櫻が咲いてよ、南國の春をお偲び下さいナ」と最後に小さく、開けばハラリと櫻の二片‥‥‥。



△△日

「貴女方はもう僅かですね。もう、短時日で卒業。と

云へば、慾も得もなくなつて、復習も豫習もしないで只未來の事をア丶かかうかと憧憬れるといふ傾向が從來ちよい〳〵見えてゐましたが、今度だけはそんな事のない樣にといつも祈つてゐるのですよ。

もう、一生涯學校生活はないのですからねえ、今の内しつかりして下さいよ。それから、先の卒業生には金華園を殘していつた組もありましたね、皆樣も何か殘して下さいよ。水鳥は立つても跡をにごさぬ、何も外にのぞむ所はないけれど、よい習慣を殘して下さい。物質的の事をのこすのは易いけれどよい習慣をのこすのはむづかしい事ですよ。」

とやさしいクラスの母樣はかうおつしやつた。

ア丶、もはや、こんな事を云はれるようになつたのか。卒業期は未だ〳〵と思つてゐたに……一年の時には四年の人を羨んで「私達はまだ四年も通はなければならない」と云つてゐたその昔が戀しい。手に取れば何の彩なし蓮華草四年になれば無邪氣に飛んだり跳ねたりしてゐる一年の人がなつかしい。

詩を想ふによき午下り、綻び初めた梅林の、芝生に横たはりたるたをやめの、響うれしき詩の一節、高やかに吟じ給ふは校中きつての美人――愛子さん。夢みる眸、石竹色の雙頰、二尺にあまる友禪の袂かろく肩に荷なうて……。

スーツと白鳩が飛んだ、五羽――六羽……、ロングフエローの、かの詩の如く感じたまひてか、うら若き瞳をあげて、行くへ見わたす横顏に後れ髮の二條みすち靑き空白き鳩とぶその下に君今たてり思ふことなく……。テニスコートには、早や二三人のはしやいだ聲にまじつて、泉先生のお腹の底から搖り上るようなベースのお聲。今一勝負も濟んだらしい。さゞめく聲、拍手のひゞき。

「え丶、卒業しても乾度々々庭球しに參りますわ」

「何に、あてになるものか、道で逢つても知らん顏する誰かさんはナア」

「アラ先生、又彼件をいつて……御免なさい、先生、あの時、私は夕方なのに眼がわるいのでせう……」

今の元氣はどこへやら消え失せて、青菜に鹽のしほれ樣近視六度の上遠野さん、又からかはれて被居る。泉先生もお人が悪い。まさか心理學の實驗でもあるまいに、人を困らしたり、皮肉つたりして笑つて居らつしやるのだもの……お晝の休み時間花壇の奥の梅林と、アカシヤめぐる運動場との中間、渡廊下に頬づゑついて此二樣な異なる有樣を視てゐたのは佐保子さんと私。

一は華やかに青春の春をたのしみ、一はおちつきて未來を憧憬したまふ美し君。

同一の敎育方針にて、同じ敎科書で、同じ先生に敎へられ又、同じ試驗の問題に頭をなやました二人であつて此樣に違ふのだもの五十の、クラスメート、どんなにか變るだらう。

中には富貴な身の、何不自由もなく、一生を順境に棹さして次第に登る位山、平凡な生涯を送る人もあらう。

前の卒業生にもあの人がと、あやしまれるほどの方が○○第一の財產家に嫁して入らつしやる方もある。けれど、神は公平なり。こんな方には精神上の滿足は得られない。

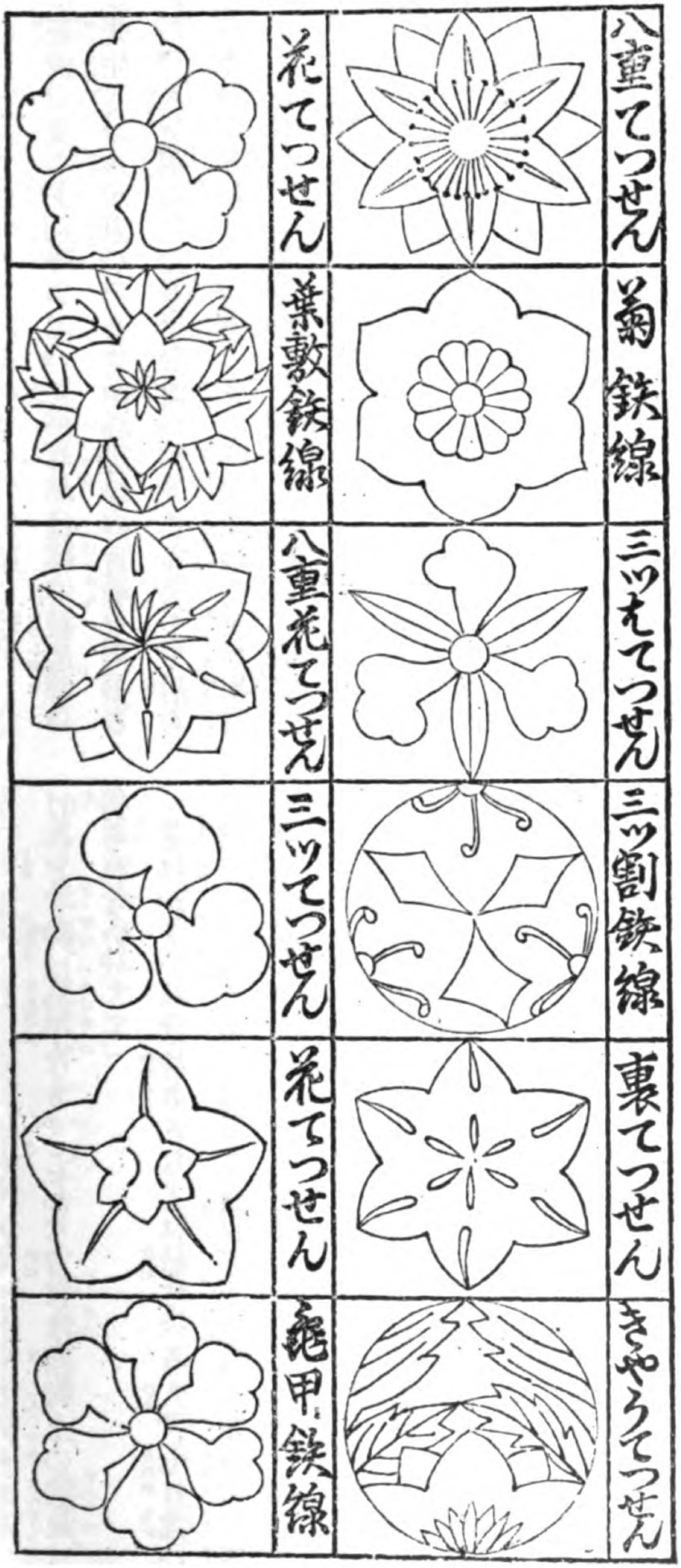
それかといへば桂さんなどは敬すべき人。七日違ひに父母お二方を失なはれて後は、三歳になる妹のお俊ちやんを育て、弟さんの一人前になられるまで高師にいつて、一生を育英に捧げるといふ殊勝な御決心。

御兩親の手の内の珠、目に入れても痛うないと、溫室の花のように暖かい家庭に人となつた漣ちやんでさへ、きたるべき運命や何？　人間萬事塞翁が馬、禍福糾へる繩のごとし、どんな境遇におたちなさるかわかりはしない。

けれど、都の方のように、「私の良人は外交官よ軍人よ」と、さわぐ人もない。只、處定めぬ萍の、よきにあたらば緣づいてといふのが多いらしい。

平和なお城下、未だ醒めきらぬ封建の、昔氣質の親達の子だもの、皆の考の平凡なのも久しい因襲の然らしむるところであらう。

鐵線の意匠



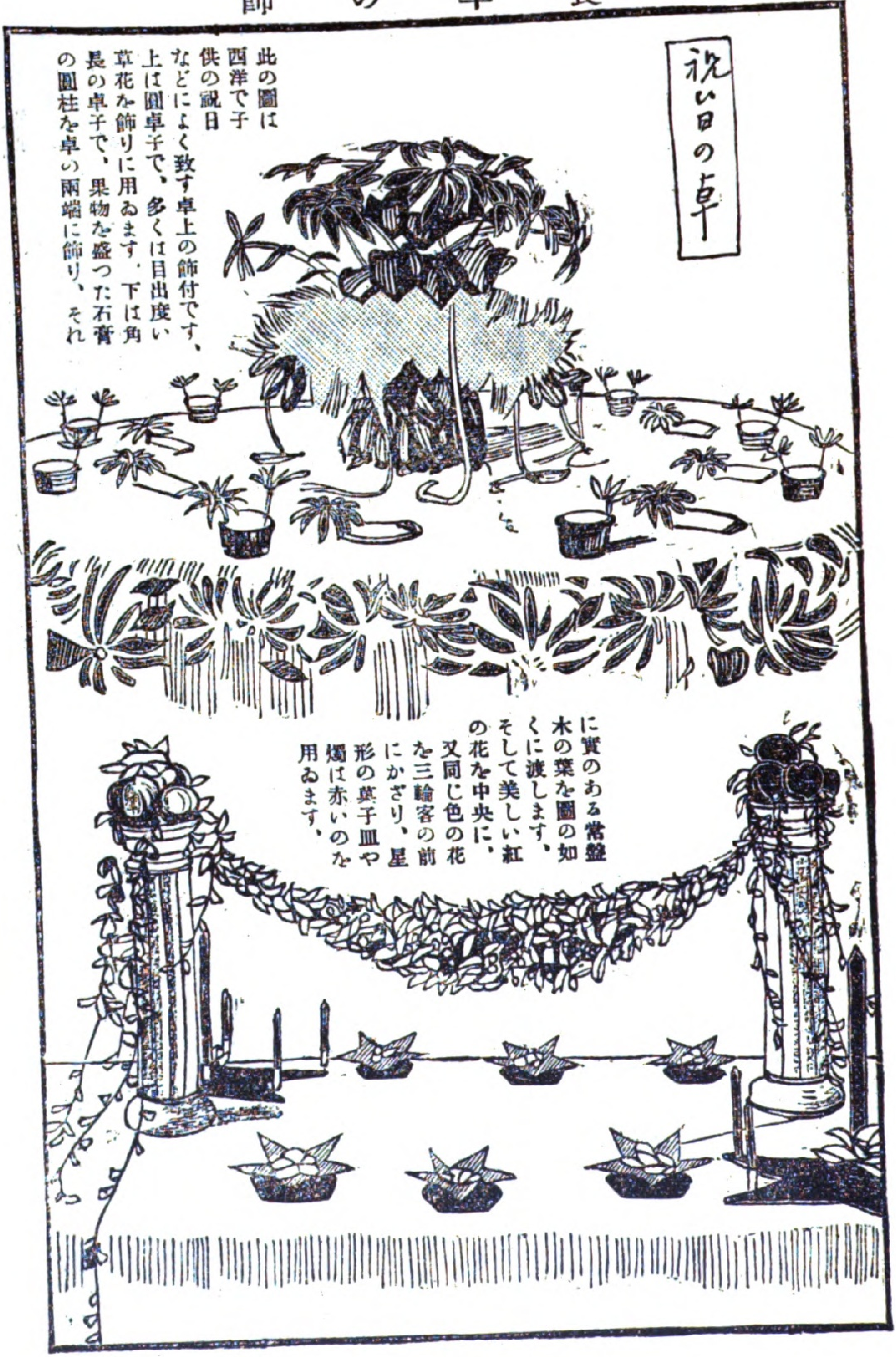
ア、順境に、逆境に私等の運命の手は今や、展げられてわが前にあり。今のたのしき「笑」の内に、泣くべき日の静かに培はれてゐるのではあるいまか。堅き氷は霜を履むより至る。わかやぐ青春の夢さめやすうして、事はなし難し。かくて、刻一刻、登りゆく卒業のいたゞき。

あゝ時よ!!　運命よ!!　我をして、とこ永久に若からしめよ、乙女十八春長うして……。

筆とれば畫意思ふ句や春の風

芙峰

食卓の飾



此の圖は西洋で子供の祝日などによく致す卓上の飾付です、上は圓卓子で、多くは目出度い草花を飾りに用ゐます，下は角長の卓子で、果物を盛つた石膏の圓柱を卓の兩端に飾り、それに實のある常盤木の葉を圖の如くに渡します、そして美しい紅の花を中央に、又同じ色の花を三輪客の前にかざり、星形の菓子皿や燭は赤いのを用ゐます、

着物の着やう

着物のきこなし一つで女の姿のよし惡し、性格の如何な無言の中に語り分けるものでありますから、衣服の着樣も綿密に研究すれば却々趣味のあることでせう、私は平常着でさへ思ふ樣に着こなしが出來ませんが、人樣から教はつて精々自分の不格好を補ふ爲め、柄相應に引張り廻して居ります。

まづ芝居でも、衣裳は其人物の性行を説明する所の無言の役者でありまして、包まれてる其衣裳に、自分の魂が入つて居ればこそ本當の役者それを私のは衣裳許りが無言の役者で、魂は自分ですからお耻しうございます、夫れは兎に角普通世間の風俗に見まするに、着物は大抵着る人の氣分を現はすもので、身形のキチンとした方は氣性の引締つた方、又ダラケた人は姿まで締の付かない氣分を露して居りますさうです、寢衣で居る時と禮衣で居る時とは、我れながら氣心の變るものでございます。

○日本と西洋の美

いつか私が或夜會の席に列りまして、熟々と西洋婦人のいでたちや擧動を拜見致しましたが、其美しい肉體が透いて見えるやうな裝ひ振りは全く天然の美を現はすのが、趣意であるらしく思ひました。日本の方はそれと反對に、如何にしても格好よく其身を裝はんかといふ點に焦心して居られます、例へば瘠せてる人は肥えて居るやう、又肥えてる人は成るべく細つそり見えるやう、背の低い人や高い人皆それ〲の着こなしによつて人柄に見せ得ることが出來ます。

○肩幅の廣い人と窄い人

肩幅の廣い人は、召して居る半襟を、成るべくはゞびろ〲して、掻き合せますと、勢ひ着物は襟元より遠ざかつて、羽織の襟との距離が、接





近しますから、其人の肩幅がさほどひろいものとは思へなくなります、又狹い方は半襟をそれよりは反對に細く出して合せ、着物を深く着ますれば自然と肩幅によゆうあるかの如く見られます。

○肥た人と着物の仕立方

女は大概肥えてるよりは痩せて居たがる者でして、私などもすらりとした方をお見受け申す度に、何といふ美しいお姿だらうとお羨ましくて堪りません、切めては着物の着こなしに依つて其れらしく見せも出來やうか、衣服の身幅の狹いのを着たなら、前から見ても横から見ても少しはホツソリと見えやうか、なぞと其樣事まで思ひました、處が是れは實地に於て全然反對となつて了ひ、身幅の狹い着物は動もすると前がはだかつて、愈ゝ身體が太く見え、踊の時などは尚更ら直きに姿が行燈の形になつて、誠に見惡いものでございます、夫では何うして肥つた人が程のよい格好に着こなすかと申しますと、其仕立方を反對に廣くするより外はございません。

○腰紐で襟先を挾む

普通は前が六寸五分に後ろが、七寸五分ですが、其れを六八と申して前を六寸に、後ろを八寸に仕立てた着物を着ますとソレ身幅がタップリして居りますから、前の合せ工合も緩やかに、右の腰迄樂々と纏はれます、そこで腰紐は腰の骨の上で堅く縛り、其紐で上前の襟先きの處を挾んで見込みますと、腰が見事に極つてさも〱其人がすらりとした形に見えますし、又踊ればとて前がはだかるなどの不體裁もなく、擧止動作とも大層淑かに見られます。



○脊の高低と裾模樣

能く外國人が、日人婦人は比較的背足が短かいと申すやうですが、姿を作るには何しても帶から裾に至る迄の餘裕が欲しいのでございます、



しかし又すらりとしたにも程があつて、程を過ぎるとノッポ抔と申されます。又背丈けには衣服の模様柄が大關係を持ちまして、竪縞は高く、横縞は低く見せることは誰方も御存知でありませうが、其他帶の締め方も與つて大變力のあるもので御座います。別けて裾模様抔を召した時、一番目に付くのは腰でありますから、腰から裾の間に餘裕を見せませんと、衣服が何分引立ちません、脊の低い方は殊に注意して常のよりは帶を少し上げて締めませんと、格好が好く取れないやうに思ひます。

○帶の締方と拔襟

帶にはブラ下げ、お太鼓矢の字などいろ〳〵結び方に依つて其人々の身分を現はすことは判りきつて居りますから、夫れは省くといたし繻珍とか厚板とか、又は綴錦抔の帶になりますと、男の力を藉りなければ到底女子自身には結ばれず、實に始末に困る事があります。併し斯う致しますと氣も慌らず、帶も痛まず樂に女一人で形よく結べる方法がありま す、ト申せば頗る秘傳物でもあるやうに聞えますが、大方は皆さんが御存知でせう、其れはグル〳〵と巻いて一ッ上下に引かけて結びませう、其時に細い紐を以てグッと解けぬやうに、括し付けて置くのです、斯うしてさへあれば緩む心配はありませんから、幾らでも氣に向いた格好に結べ、そして出來上つた後で此細紐を引拔きさへすれば宜しいのでございます、此他拔き襟につきましても皆程度問題で、粋は何うしても拔き襟でなければ調和しませんが、左ればとて脊中迄覗かれるのは卑しく見えます、又被り過ぎるのも女學生なら結構ですが、娘風としてはコヽくなります、其れも髪容の釣合がありまして束髪の時は總じて拔襟にならぬやう、日本髪ならば被らない程度の拔襟が出ず入らずの人柄な所だと存じます(森律子孃)

半襟と帶あげ

△半襟の色と模様

此の頃、流行してゐる半襟では、先づ鶸縮緬の鼠がゝつたもの、又は華美な藤がゝつた濃い地色に、御所解模様といつて、菊紅葉松等に霞か



繧どりをあしらつた極上品な模様を平糸で刺繍したものでせう、彼の花や紅葉を、ポッテリと出した模様は廢れ、小さい花紅葉を數多く出したのが一般に歡ばれますから、自然前の御所解模様等が流行して來たのでせう。

△染模樣より刺繍が流行る

そして染模樣や絞りは如何も安つぽく見えますので、何れも刺繍をしたものといふやうになりました、刺繍も今年は一般に襟元を賑やかにしやうとする所爲か、光澤ある平絲でもつて刺繍をなし花や紅葉でもごちや〱と多いのは百位もつけます、或る方面では白許りの平絲で小さい花等を澤山刺繍してかけるのもあるさうです。



けれども中には餘り多く刺繍をしたものでは、價額が嵩むといふ考へから、染出し模樣の其處此處に少しづゝ刺繍をあしらつたのを用ゐる人が澤山あります。

又今年は、地色に黒がぼつ〱見え出して來ました、尤も今年の黒は赤味を含んだ瑠璃色、又は茄子色、ぬれ羽色といふ風なので、在來の黒とは少し趣が異つて居ます。

それから、縮模樣の半襟も、大分見えて來ました、これは縮刺繍を施すか、絞るかしたもので、刺繍ならば、すべて芥子縫、絞りならばバラ疋田であります。



△始めて出來た色目返し

バラ疋田には普通に絞つたものもありますが色目返しといつて、今年始めて出來たのもあります、此の色目返しは着物に襟のかゝたのを着た人に、能く映りますから、多くは粋向になつてゐますが、中にはさういふ風をしない人でも、かけてゐられるのを見ます、殊に赤目返し等は、地が黒であるに拘はらず、隨分若い人がかけてゐられます、他の呉服物は一般に澁色になりましたが、半襟は澁色では餘り引立ちませんので、



今一寸色はとまりになつて居ます。

△流行の帶上げ

帶上げは引續き普通鶉縮緬が流行してゐますが、しめ工合がいゝといふ處から、當今では一般に絹縮を用ゐます

色合は、黑と淺黄又は赤鼠、淺黄に赤又は鴇色、鴇色に紫といふやうなとり合せにして横縱又は斜めに、段々に染分け、其處へパラ疋田絞りや何かで美しく見せたのが今流行してゐます、絞りは一般からいへば廢れたのですが、此の帶上や腰帶には今迄と同に流行してゐます、

流行の髮形

○目下東京で、有らゆる階級を通じて最も多く結ばれる髮は束髮で、其次は丸髷、島田、桃われ、銀杏返し、マガレツト、ローマといふ樣な順です、其の他唐人髷、結ひ綿、島田つぶし等は、極稀に見る處であります、

○さて今年の束髮の形はといひますと、餘程日本風になりました、從つて束髮でも髮結の手を借て、手際よくきれいに結ふ事が流行して來ました、畢竟これは今日迄の束髮が、兎角西洋向で、帽子を用ゐぬ日本婦人には、適した結方ではなかつたのです、それで色々工夫した結果日本化した束髮が出來ました、そして髮をきれいに結ふといふ事から、自然に自分で結つては、前髮鬢の工合から結ひ上げた髮の形迄なか〳〵髮結のやうに手際よくは出來ませんので、勢ひ髮結に結はせるやうになりました、

○日本髮は昨年あたり迄は長い髱が流行しましたが、今年は何方かといへば餘り長くない上品なのが流行します、尤も粹向では相變らず髱を長くする樣ですが、髷は一般に丸く締つて來りました。

流行の生花

生花にもいろ〳〵の流派もありますが先づ大體の行き方は池の坊古流、遠州と三通りに分けられます、其中で一番形を造つてさま〴〵に曲りくねらせる





◎遠州流

は何方かと云ひますと東京よりか地方向の花になつた形があります、少しも枝を矯めず造らずポーツと眞直に生ける

◎池の坊

は東京市内でも山の手に固つて行くやうですが、下町で流行つてゐるのはこの池の坊と遠州の間を行つた形の

◎古流

でせう、斯云つたところで無論この流行すたりが何時までもこの通りといふ譯でもなく山の手だから池の坊ばかり、下町だから古流ばかりと固められてゐる譯でもありません、ざつくばらんに云へばこれも女の嫁入道具で、稀には本當の好でお花のお稽古をしたいとなつて流派を選ぶ時、遠州では派手過ぎる、池の坊では澁過ぎるからまア中を取つて古流にして置きませうと云つた氣風が出て來た譯であります、近頃器用な師匠は池の坊でもいくらか枝を矯めて、古流めかして花を造つたりする人もあります、この枝を矯る事に付て

◎生花を知らぬ人

は生花といふものは只矢鱈に枝を不自然な形に曲げて形を造るものと心得らるゝ人が多いのですが矯め方にも方式があつて最も自然に叶ふやうに出來ゐるは無論であります、例令ば菊などのある季節でありますれば一にも二にも菊を使ふ菊の旬だから眞の菊だ、夏の菊は旬はづれだから行の花だ、その中でも時の菊を本當の眞の生け方にしやうとすれば野生の菊はどういふ風に花がつくかといふ事から理窟をつけて行く、つまり季節の菊はどれだけでも高く伸びて花を頂上に持つから、眞直に高くと生けて花を上へつける事になります、けれどもそれは本當の羽織袴の客を待つ時の事でありまして見た目には決してよいものではありません、



◎着流しの來客様

でもあらうといふ時にはつまり畵伯の畵そら言で大輪の花を、止めか何かに付けます、も一つ碎けて縞の羽織の客などですと枝もすつと流して花もあ〱らひに据ゑると云つた風です、即ち花の出生を訂して生ける、といふのが大根になる譯ですから、

◎生けた形

も必要ですが形にばかり流れずに花の自然を第一に心掛けるのが本當でせう、其の證據には秋

◎葉蘭

を生けるには必ず一枚枯れ葉を流して添へます、夏は蜘蛛の圍にからまれた形卷葉といふものを見せます。

◎萬年靑

などは東西南北に葉を出すものですから、矢張四枚を抱合せるやうに古流では持つて行きます、それから冬季では葉の下に花を鑑いて霜除け葉と名付けたり花の下へ葉を流して霜受け葉などを見せます、只一つそなれだけは稽古に使ひよい花ですから、逍つて生える自然に背いて眞直に生け天地人の役枝を初心者に呑込ませる方便としてありますが、本當に生ける時は矢張り流して生けるものです、近頃下町で





◎投げ入れ花

といふものが非常に流行り出しました、これは生花のやうな役枝とか方式を離れ、又コミを使はず文人畵の趣を取つて花の取合せで見せて行くのです、例へば蘭と竹と梅と菊を合せて四君子を見せ、松に薔薇を添へて不老長春を現はすと云つた風でありまして、方式がないだけに却て工夫の要る六ケ敷いものであります。

苦痛を知りそめた 乙女の記

花かたみ

母様に離れ自宅に離れて、私は旅に出ましたの。一夜宿り、姉の家、同じ帝都の中をゆくに、旅だなんて大袈裟なと、何卒笑つて下さいますな、たとへそれが五分にせよ十分にせよ、また一日にせよ、他人のうちでないにしても、別れは別れ、勝氣な様でも母のふところ子、よそでは臆病の私ですのに……。

托された西洋菓子の折と、果實の籠と、新聞紙で一重くるんだ上、メリンスの風呂敷でも一度包んで、家を出たのは午後の三時頃でしたらう。弱りかゝつた光線は、茄子色の洋傘でさへぎられて、目にはよくも當つて來ぬ。——電車で、片路一時間を費します。

變つたのは、姉さまが丸髷に結つていらしつたのと和夫がめつきり大きうなつたのと、庭の木の葉が落ちて坊さんみたいになつてゐた事でした。

翌朝は、みんなに先だつて床を出ました、薄暗い湯殿に、電氣をひねつて顔を洗ふ。

さんざ寝坊をなすつて、やつと八時半過ぎあはてゝ起きてゐらした義兄様が、

「今日は鳥撃ちに行く約束をして來た、十時迄にステーションに行かなければ、つて、まるで私達が罪でも犯した様に、早く〳〵とせき立てた上句、それでもどうやら間に合つたが「到底時間がない、車にしやう、汽車の都合もあるから」つて、早速治助のもとに急使がとぶ、威勢の好い、紺仕立の、燕のやうな治助は玄關にまはると、義兄様は式臺を降りられた。

靴をおはかせしやうとする初の手をさへぎつて、

「好いよ、譯はないさ、僕にだつてはけます、今日はそれどこぢやない、鴨打ちに行くんだからな」

さも愉快相に、靴の紐〆め乍ら、造作もなく云つて退けられる。

「鏡ちやんはゆつくり遊んでゝ下さい、えゝも一晩宿

つちやどうです、何母様が戀しくなつた？ハヽヽ、ハ歸りたくも待つてるさ、僕が旨しいのを澤山お土產にして來る。夜おそくとも送つて上げます。」
「有難う！、御待ちして居りますわ。」
「ぢやあ行つて來ます」つて、鳥打帽を片手に一振り轅棒は上つた。
　車輪は音もなくすうつと走る、一轢毎に轉りゆく木立のかげ、その黑塗に金紋の濃さ。
　日當りの好い八疊の緣側近く障子によせて、裁縫なさる姉さまの傍らに、私も坐つて、針箱の掃除をしたり針挿の針を並べてさしかへたりした揚句、小さい抽斗から見出でた千代紙とつて、ゆつくりと鋏を入れて切り剗ざきました、まだ小さくあつた時、よく簑蟲の衣をぬがせて、友禪縮緬や羽二重やの中に、新らしい衣服を着てゆくのを、身じろぎもせず見守つて居た事もあつた。
　同胞の中にきはだつて、容貌と氣性との反對を荷ふて生れた姉妹は、四つ違ひで一つ屋敷に育ちました、音なしいねえさま、利かぬ氣のいもうと、美くしい姉は面長で、醜い妹の顔は圓かつた。
　こんごらかつた扱き糸ほぐしつゝ、色を雜へて結びつける寄木細工の糸卷に、ふえて、ゆく糸の目を算へ乍ら、私は一人微笑ましたの。
　姉樣お手傳ひして上げませうねつて、紅の無い友禪モスの、一つ身の小さい筒袖を縫ふ、白い小町糸を通し乍らも、これが紅の勝つた、華美な大模樣であつて吳れゝば好いと思つた、男の兒のは何をしても引つ立たなくつてつまりません。
「默りで居ないで、何か面白い事でもお聞かせなさいな」
つて姉さまが糸をしごく〳〵。つと返して針を拔くと鋏を當てゝふつつり！。チップで留めた小さい鈴が可愛く鳴る。

　　ひと度は京の土產の塗下駄の
　　　鈴の音に笑む少女なりしを

わたし達が、漸々振分髮の頃は、鈴のついた紅塗の

木履をよくはきました、臺の高い、駈け出すと全然駒の蹄のやうな、けたゝましい音がした。

一つの話柄の緒が出れば、それから夫へと話題は盡きない、いくら何だつて肉親の姉と妹ですもの、如何したつて違ひます。

今頃、義兄さまは如何遊ばして被在しやるだらう、旨く仕留めてお歸りなされば好いけれど、鴨に命を惜しむ心のあるうちと、翼の有るうちは私には何とも受け會はれぬ、



ほんとうにお止しなされば好かつたこと。

晝食は上は三人きり、和夫は可成よくたべる、險呑な手付きしながらも、一人で頂くつてきかないんです御飯が云へなくつてごかんかあ樣つて事をあーたまつていひますの

お膳が引いて卅分ばかり、長火鉢の傍で話して居た時番町の進さんがゐらした。

「嫂さん！」男の人は聲が多きい、進さんはのつぽうだから尚更よ。

「兄貴は？」

「お留守！」また例年の癖ですね、鳥うちにゆきましたよ」
ねえさまはお茶を注ぎ乍らに仰有る。
「惡い癖だ、嫂樣こそ好い災難さね、とれやしないんでせう」
「さうでもありませんよ、此間も何鳥だかとつて來ましたし……」
「鳥市と特約がしてあるんだ。僕ア兄貴が彼店へ寄つてるのをよく見ますよ、入り口で番頭の、此ころよく此家へ御用聞きに來る、……佐吉ね、彼奴と話をしてました」進さんは義兄さまの裏切者、いけない方ね、義兄さまがお聞きなさるとまた「進は嘘つぱちばつかり云ふ」つて仰有るわ。
刳盆の上に積み重ねられた林檎を取つて、ねえさまは美くしい指先あやつりつゝ、わけもなく皮を剝かれるむいたのはきつかりと四つに割つて種を抉ると、ガラスの鉢に入れてお進めなさる。
「鏡ちやんは何日來たんです」つて訊くから
「ゆうべよ、でもまだ明るい時刻でしたわ」
お茶菓子がどら燒であつたばかりぢやあない、私は林檎を餘り好かぬ、で、お菓子の方を摘み乍ら御返事すると、
「宿れるんですね、こりやあ珍らしい、此間までとまられなかつたでせう、かあさん子でしたねえ、嫂さん！」
「眞實に鏡子は弱むしでしたのね」
なんて、ねえ樣迄が相槌を打つ。
「松平の母樣は、鏡ちやんを一番可愛がつてるんでせう」
庭にはもう、花の數も減つてゐた、涼しいと云つた風も節過ぎては、たゞさびしい、冷たい！、木にいくらかの惱みを見せてゐるばり……。
「可愛いんぢやないんだわ、可哀相なからよ」
手布の端を弄び乍らいふと
「何故？　なぜ」
つて、せはしげになじりかゝる。
「路を歩いたつて電車に乘つたつて……人にふりかへ

られゝば、自分を笑つてゐるんぢやあないかと思ふ不安、それも何の爲でせう、鏡の無い國に生れて來やしまひし……」

思ひ切つて云ひはつて、袂の先を嚙み〳〵めると、うつむいた私の膝に、意識もせぬ涙……。

「馬鹿な事を云ふもんぢやあない」つてお二人とも押しつける樣に仰有りはするけれど……美くしい衣の彩さへも、裝へば醜さを增すものと知つては、優しい慈母の言葉に反いて迄も固くかたく拒みもします。兩親に似ぬ子、同胞に似ぬ子、姿のみか顏のみか、あゝ心まで……。



「私一人ぼつちで好いんだわ」

自暴氣味に、投げ捨てるやうにいふと

「馬鹿な、鏡ちやん！、つまらぬ事を云ふもんぢやあない」

「僕は鏡さんを一人ぼつちだとは思はれない、美千ちやんより八千代さんより一番君がみんなに可愛がられてゐるんだよ、美千子さんなんて、鏡ちやんでなくつちやあならないやうにしてゐたぢやあな

いか、それを何です！美千子さんに似て來たつて云はれるせ」

似たつて好い、似たつていゝ、私は似ても好いんです、闕やしませんわ、暗い半生ではあつたけれど、二度迄の戀を描いた、美千子さんの歴史は美くしいものだつた、戀に泣くのが何でせう？。

かりそめの足跡さへ知らぬ少女の身、詩めいて考へられるのも、私の幼稚な爲でせうか。

人の言葉はよくも聞こえず、私は膝を見守つた儘、だまつて林檎に齒形をあてた。

山の手の冬は靜かだ、けたゝましい自働車の叫びもいくつかの家並を越えて聞え來れば、ほんのかすかな音のみで、何處かで新築の鑿の響、とん〳〵と腦に食ひ込むやうに、傳はつて來る夫音ばかり。

兄貴が歸宅つたらまた來ます、明日にでもと進さんは、三時半ごろお歸りなさる、

やがて四時も打つて、それから時計の針もまはつたけれど、兄もかへらず、先刻寢た和夫の眠も覺めぬ、ゆるやかに黃昏ゆく天地、靜かな空氣！沈默の邸は堪へられぬ程寂しい。物足らぬ……物足らぬ……。

「歸りますわ、私」、云ひ出して包を寄せると

「ま、も少し待つて頂戴な、鏡ちやん！、宿るのが嫌なら歸つてもいゝ、好いからねえ、兄樣のお歸宅りなさる迄……まあ御飯でもすませて……」

あはてゝ云ふ姉さまに、あの優しい姉樣に、つまらないつて云へませうか、物足りないなんてどうしていへませう？「また來ますから、ね、姉さま！」

「宿るつもりで私は居たんですよ、姉さまの當をはづさせないで下さいな、よ、も少いらつしやい」

歸り度い譯ぢやあない、あきたんでもない、只寂しいんだ、もの足りないんです、坐つて居るのも厭、立つてゐるのも厭、置場もなく意味もなく不圖思ひ付いた心が、もう風呂敷のゆるみをしめては、今更どうもしやうがないんだもの。

「今度伺つてよ、義兄さまには、私からすぐ、手紙を上げますから、ね、惡く思はないで下さいな」

下駄つゝかけて內玄關の、たゝきに降りる。
「惜いのねえ鏡ちやん！またゐらつしやいよ」
えゝつて振り仰ぐと。障子に寄つた姉樣の眸が、しんみりと潤んで見える、濟みませんわ、堪忍して下さい此樣やさしい人に迄我儘な…心を傷て歸るのも罪深い業、私の氣もすみませぬ、別れるなら機嫌よく別れたくて「ねえさま！」何にも氣に遊ばさないで頂戴よまた我儘が始まつて、ねえ、笑つて了つて下さいな、又來ます、屹度伺ひ升から、二三日中にどうしても………」
踏み出した足が引き返して、突いたしなやかな膝に手を置く。
「またゐらつしやいよ、母樣に宜しくねえ、鏡ちやん何も氣にしないでお歸り！」
寂し相に片頰に笑んで、美くしい眸を伏せて
「二三日うち？」待つてますよ」
「さやうなら。姉さま！」
格子を閉めて小刻みに數步、振返へれば、大方の葉は落ちて、梢はかつきり明るく見える、さらばよ木立！
折角來たんだのに、一重の隔てをおいて歸るのが惜しい、氣の弱い方だから、胸を痛めて居らつしやりはすまいかしら、濟まないわ、姉さまに……。
輕くなつた包みを抱いて、私は其處に立ち止つた。
帝都には鴉が多い、いづこより何處へゆくか同じ方角へむけて、鳴きしきりつゝ羽をのす。
豆腐屋の聲が露路に消えると、風一陣！身に沁むやうな夕べの寒さに、思はず絹肩掛の襟かき合せた。



花くらべ

友のおとづれ

多香子

眩然眼を奪ふやうな金冠一線でもない紅の燃ゆるやうな紅の焔一たゞこれ青春の花、小さい乙女の胸は、美しい憧憬と芳はしい情緒に燃え立つてゐます。けれど、咽ぶ裾野の流れに添ふて後れ咲きに匂ふ名無草は、誰れも見返るものはありません。胸をよぎる情熱の閃きもハートに刻むピンクの印象もない朴純な田舎乙女を飾るものは、たゞ文の葉、花の音づれ。

△小夜子様から

其後は、お變りはございませんか。随分御沙汰致しました。たか様卒業すれば家事及精神の修養を主とせよとは、度々師の君の仰せでしたけれど、よわき女にはそれも出來かれて、かうして毎日〳〵退歩して、ふとした事にも涙催す若い青春は、もう衰へて行くのでせう。おゝ寂しいぢやございませんか、現實の世―聞いても恐ろしくはなくつて？いつまでも〳〵常世の春は永かれとは、誰しも祈るとですけれど、いくら悶いたつてタイムは後返りしてくれませんのねえ。たか様、お互ひ一刻千金の時です。タイムのすぎないうちに、思ふだけ遊びませう、思ふ様に叫びませう。

楽しい時は短い！

苦しい時は長い！

學生生活はあまりに短う思はれます。一生を通じて學生であり度いわ。たか様お互に昔を偲び乍ら楽しい歌を唱ひませう、音楽室で共に叫んだあの歌を……さよなら。

小夜より

なつかしい

たか様

小夜様、毎日待ち暮したでせう、果敢ないことをたよりに……。



▶羞恥の情◀

けれど甲斐もございませんでした。彼の日、色とりぐのパラソル、騒々しい足音に、胸は落附きませんでした。あゝ、もつとどうかした所、紫雲棚引く黄昏の庭、黄ばんだポプラの蔭にても佇んで、しんみりと心行くまで話し度いと思ひました。「小夜は思はぬ運命にのろはれて、とらはれの身となりました。」には流石にぎよつとしました。私はむしろ逆境に生れたのを喜びます。

△秀子様から

繪葉書に

其後如何遊ばして？私も無事、安神下さいまし。あのひではミセスになりましたのよホ……。お笑ひ遊ばすな、これで田舎の御新造様、ほんとになさけなくなりました。おひまの折お手紙を。

母里にて

銀燭の影、花恥かしいひで様の晴れのお姿、一日拜見し度う御座いました。いきなり、抽斗から、四年時代のマガレットに幅廣りポン半身の御姿取り出して、かい抱いた儘ジツと、……でも何だか倦き足らず、……乍らジツとく。あゝあの浮出たやうなお美しい御面差し、佳人薄命？母里の三美人？ゾツとしました。ひで様、ひで様、遥かに御幸福を祈ります。どうぞ御自重遊ばして……。

△房子様から

畫堂流の墨痕鮮かに、萩香様そのまゝのすらくとして淀みなき御筆のあや、只嬉しさにじつと御文かい抱き、心ゆくまで樂しき思出に耽り候。吾が胸に浮び來るたか子様は、つめたる束髪の、かざり氣一つなく、裾短かきお袴の、足下見ずにとびまはり給ふ小姫。……お氣に障り候はゞ御免遊ばせ。御桃割の銀丈長、黒と白との花簪。さても華かなる御月日かな。お羨しう候。千代子様ならねど、一刻千金の人生の春、再び得がたき黄金時代を、黒き頭の髮かざり一つなく、細き木綿縞に包まれて、或は聲をからして比例問題をとき、或は涙を流して不正を責め、足を棒にグラウンドをかけまはり、女のあられもなく、



▶失意の情◀

右向け、左向け、廻れ右などと、かくしてわれは終日を過し居候。四圍山に圍まれたるこゝ倉吉の秋は、鳴りゆく蟲の音と、山の錦をのみ友に、げに淋しく候。胸に迫るゝ思ひはあれど、表はすべき筆持たぬ身は、まことこの世の大不幸者に候かな。たゞ羨ましきは君様よ。思ふこと悉く筆になりて、而かも鬪閲恰も一幅の繪卷物のやうに候。そもこの頃の御詩藻の重さや如何許りに候らん、御割愛の程願まほしう候。内藤千代子様とはかりにつくり給へるあなた様の御名前には候はずやと疑はれ候が、いかゞ？

文も字も荒み果てたる私などにかゝるお方より姉など仰せ給はり候が恥かしう候。寫眞は承知致し候。たか子様もぜひそのお桃割れを…其上に、お島田の御連寫をも…。

まづはお返しまでに

男子より

なぜ姉とよぶのを許しては下さいませんの。多かった四號室の室友の中で、「おやすみ」と男子様の頭に、いきなりしがみ付いた時、熱した唇にキッスして下すつたのは、もしやたか子一人ぢやなかつたか。琴さんのやうなやさしいお嫁様がお出で遊ばすけれど、姉と慕ふのがなぜいけないと有仰るの!?

おだて上げたり、下げたり、内藤様迄が近所迷惑、六尺の大丈夫文科大學生までに舌をお卷かせ遊ばした天才内藤様と山口の片隅の名なし小草のたか子と、…内藤様もどうぞお腹を横に遊ばして、唐人の夜迷事と耳を、しかとおさへ遊ばして、何卒お許し遊ばしませな。

△O様から

晩秋の夕美はしい

ゑはがきに

下宿を出て原を通り、町に出て電車に乗り、約一時間で學校所、これが私の毎日の業として居るところです。只私の頭は名前と同じく、英語でウーロー(零)なのですよ。一體次郎なんて氣の利かぬ名、私親にも大いに云つた事がある。けれど豪者にも權兵衛の名があるから、この文句を書く時、女中「Oさんお湯お入なさい早くもう御飯ですよ、」暮色蒼然、どんより天氣、然に地實、アフとは女中の聲、序に死ればよいと云ふと女中トンと背を叩いて、いやな御方れとは……。

在東京

どこ迄も凛とした顏の御面影し、一瞬の……果敢ない汽車のお別れが、まざ／＼浮んで仕樣がございません。何んでも片つ方丈けが二重まぶた？でしたね。敏子様にどこか似てゐると思ひました。

あの振ひ付き度いやうな吟聲！今頃でも矢張り、、矢張り遊ばすのでせうか。若しやあの可愛いお口元に、口ぐせだと仰せになつた、始めて知る大なる悲觀は大なる樂觀に一致するなんて、不景氣なお顔付で呻つてお出で遊ばすのぢやございませんの？

お正月には是非とも御歸郷遊ばして、むべ山風のそれよりもきわどいお手並拜見し度いものでございます。

△H様から

小判のレターペーパーに

細いペンの走り書き

淋しき草の庵より、なつかしき君の許へ一筆、御玉章儘に拜讀仕り候。讀み行く一句一句に、

嗚呼、冷えにし若き血潮は再び湧き申候。風強の丈夫も、情の前には膝を折る俗界のなさけなさ!? 實に人は有形の自由を論ずるも、無形の覊絆を脫する能はず……梅雨蕭々たる夕、細き燈の下に文くりひろぐれど、寂しき胸晴れやらず。花の露、朝顔の白き紅き、垣根の邊を徨ひて草むらの露踏み行けど、何の喜樂も無う、只海士の刈る藻に思ひ亂れて候。然れ共御玉章に依り胸のわだかまり限なく晴れて、充分に勉強なすべく候。やがては、華かな活動の御技倆、新ホームのマダム振り、遙かに御幸福を祈り候。時節柄御身お大切に、時折御音信を。

殘燈の下にて

HS生より

S樣は振り分け髮のお友達、何もかも知つて下さるのは、S樣ばかりでございます。姬御前のあられもない、政雄ちやんと二人で梨の木に攀ぢ登つて、S樣のこぶしにあまる大梨に、皮もむかずにかじり付いた。とう〳〵見つかつて「宜なるかな女は大なる謎」と慨嘆なすつたのを、くづをれて笑つた。涙を揮つて睨いて下さる御言の葉、「開けん功が何です」と馬耳東風と聞き流した罪業は、指折り切れません。ねS樣、西と東に山幾重。溢るゝ胸の思はあつても、もうかなひません。申し上げることさへも……。無心の行爲卿とお怒り遊ばすな。何も可も……。如何しい文字母樣に見せたら、請合眼を光らせませう。S樣とは申しますまい、秘めました。けれど心情の清い流露、嬉しと汲んで喜びます。私は永久に忘れますまい。私も遙かにS樣の祝福を願ひ、御成功を祈ります。

△敏子樣から

机上の一輪ざし、菊花がよく開いて、差し渡し三寸五分位。此頃ひまがありましたら、腕を振つて寫生位して送るんだが殘念……。ホゝ大きな事ばつかり待ち焦れの日も、晴天を迎へて大仕合せ。これもたか樣がお祈りして下すつたんぢやなくつて? ほんとに胸がをどりました。遊戯の時はオルガンとバイオリンの合奏、これぱつかりは顏が火の樣になりました。でもまあ無事にすんで安神々々。珍らしくて大變よく出來ました。アシントンに、竹劍體操、これなんか全くなりを鎮めました。新助芝居なんてお人の惡い、プログラム御覽遊ばして頂戴。番數を澤山に間を拔かさないやうにやつたのは破天荒だつて大してださうです。私も赤組でした。應援は確かにしつかりやつたつもりだのに、敗軍とは、いささか悲觀の歪りです。それからお目玉頂戴する事がありますのよ。何がつて? あゝこわい〳〵。あのね表情つていふの。お許しを得ないで頂戴しましたのよ。

そうら。あんな目を遊ばすんですもの……。御自愛專一に。多忙の折柄亂筆御免遊ばせ。ふうちやんによろしく。

とし子より

久紫香樣へ

黑目勝の張のある御眼差し、無理のない蠟細工のやうなお鼻は、兄樣にそつくり。しまつた唇、正しい線の輪廓、稀に見る玉の容、ほんにとし子樣は美人でございます。肩を抱いてお話したのは夢の間ですけれど、姉と妹、友達に叔母、あらゆる情をこれ合せたやうこれかりそめの御睦みではございますまい。



▶感興の情◀

瞳を落す瑞枝樣の「僞らぬ乙女の心」

　肉體の君さんと、手紙の君さんは、全く違つて居た、君さんは

　情の人ではない……その艷麗な筆の跡は……

讀み來つて思はず「たか樣さへ」と云つて下すつたとし子樣に感謝の涙捧げました。

　どうぞ早く御歸郷遊ばせ、お正月にはきつとれ、ビロードの柔かい布團の裾に、二人埋もれて、曉近くまで、盡きぬお物語りに、お手を握りませう。あゝ待たるゝよ！

新月さやかに窓洩れて、曉近い晩秋の風が身に泌みます。

當てられの記

千鶴子

　明日好天氣でしたら、近くお嫁ぎ遊ばす道子樣を、御訪れ致しませんか、おいでなさるなら、午前九時半頃より致しますから、お宅の御門でお待ち下さい。　靜子

　千鶴子樣

　紅葉の大槪は散り盡し、梢になごりをとゞむる二葉三葉さへ日光にてらされて、其の見すぼらしさに顫るえてゐる。

　門に立往生すること約五分、まだ靜子樣のお姿が見えぬ。待たれる五分はなんともないが、待つ身の五分は隨分長い時間でございます。

　門ぎはの松に病葉がひつかゝつてるのが、又なく見苦しい。清を呼んではうきではらはせる。

　靜子樣どうしてゐらつしやらないだらう、もう行かぬ先から疲勞れてしまふのに。砂利の上を水鳥法しながら玄關に逆戻り、どつかと腰をおろして淡肉色のスカーフの先をまさぐりながら、

見る目も眩く　うち飾りて
誰をか待ちけむ　龍田姫の
待ちけむ人こそ　實は我とも

いざわが友どち　いざやいざや
狩りこそ暮さめ　紅葉の蔭

小聲に紅葉狩を歌ひながら、茶の間に這入らうとすると、

「御免遊ばせ」

と聞き知りの聲。つと走り出で、

「隨分待たしたのね」

「でも、あの、兄樣がはなさないのですもの」

「さう、ぢやもつと遲くとも宜かつたのに、兄樣さぞおつらかつたでせう」

「そんなことないでせうが、私が居りませんとひどくさびーがるんですの」

「そんなら、たんとお側にひつついてゐらつしやい、腰巾着のやうに、オホ……」

いくら聞いても種のつきない有がたくもない御養子のお噂、もう耳にたこの出來るほど伺がつて飽々してゐるので、此の上いひ出されては大變だから、いろ〳〵おつしやることをたゞハーハー云ふてとり合はないので、張合がなくなつたと見えて、しまひには無言でゐらつしやる。

芳郎君も好奇だと、お友達がおつしやるさうです。當節は小糠三合あればなんとやら申しますのに、大した財産とてはなし、御當人は名代のお方です。生れて二十年ひつつめのぐる〳〵卷、それも御念の入つた縮毛。それでもお顏色でも白ければ、そんなでもないが、それが、さうでないのです。それにお召物ときたら、それこそ婆さんが着るやうな細かい縞ですから、一度見たらどうしても忘れられないと皆樣が申します。

それが、どうでせう、御養子お迎へになつてからの變りやうは。女は己れを愛するものゝため容づくるとは申せ、あまりの劇變に、皆目を圓くして驚いて居ります。此頃では御苦心の甲斐が見えて、お顏が干柿のやうでなくなりましたし、桃われも似合ふて參りました。兄樣兄樣つて、外から見てをかしいほどよく おつとめなさいます



▲平和の表情▶

　此の御宅へお出でになつた時、靜子樣大好物のドナーツをだしたら、どうしても御手をおだしになりませんの。これは珍しいと思ふて、靜子樣お見違ひしていらつしやるの、御かはりが待遠がつてお次ぎに控へて居りますのに、と申し上げても、ハイ頂戴きますとおつしやりながら、中々召あがる氣色がないので、不思議でたまらないから、再三再四おすゝめしたら。

「千鶴ちやん、實はね、頂きたくて咽から手が出さうなの、大好きですものね、けれど、あの」と一寸伏目になつて、

「兄樣がおきらひですからひかへて居りますの　どうぞわるく思ふて下さるな」

　惡く思ふてなりますものか、ほんとに感心してしまひました。世に婿取りといへば、多くは誰に遠慮氣兼することもなく、我儘氣儘のし放題、旦那樣をお供に散歩するといふが普通のやうですのに、一も兄樣、二も兄樣、兄樣でなうては夜が明けぬやうにおぼし召し、父上母上も、芳郎、芳郎、つて芳郎でなくてはならないやうです。ヒヨツト芳郎樣でもお亡くなりなさらうものなら、それこそ親子三人共お墓の下にもぐりこんでしまはれるでせう

○

「まあ、よくゐらつしやいましたこと、さあずつとお通り遊ばせよ」

　道子樣のお部屋はお仕立物で取散らけてるとおつしやつて、八疊のお座敷に通して下さる。お庭の西側に白菊の盛りの過ぎたのが横ざまに倒れ、他の木の枯れ落ちた中に松のみどりが異彩をはなち。隣の垣根を越して四季櫻の一枝がさびしい庭に趣をそへてゐる。

　床脇からふすまに添ふて、新しい重ね簞笥二個、道子樣のだなとうなづかれる。

「お目出度うございます。早速お祝ひにあがります筈でしたが、つひ。」

と仰せになつて靜子樣は私をごらんになるからびつくりしたやうに。

「道子樣お目出度うございます」

とお祝辭申述る。「どうも有がたう」と、ニコニコしてゐらつしやる。

「お式は何日でゐらつしやるの」と靜樣。

「此の十五日は日が吉いさうですから、東京の神宮で致します。あの婚禮は一生一度の盛典でございますから、成るべく華やかに致さうと思ふてます。」

「全くでございます」と靜樣がおつしやる。無言てゝ惡いから。

「さうですとも、一生一度の大禮ですもの、思ひ切り華やかに遊ばせ。なんなら新聞の廣告係りをおひきうけ致しませうホヽ……」

「それはさうと。あの御良人樣のお寫眞などうぞお見せ下さいな」と申しあげたら、

「え、お目にかけませう」とお手輕に持つてゐらつしやる。

靜樣とひつぱり合つて拜見する。お髯の濃い立派な方。

「お年お幾つ」

「一でございますの、三十と」

「ぢや十一違ひでゐらつしやいますね」

「え、東京では多く違ふのが今流行ますの」妙な流行もあつたものとをかしくなつた。

「御立派でございますこと」、と言つて靜樣がお

かへしするのを手に取つて、しげ／＼御覧遊ばし、
「素顔はも少し柄が肥えて居りますの、此寫眞は髪にとれてますのよ」つてまた見入られる。
「新婚旅行は何處？」
「まだ何處と定めませんが、私の行きたい處へ行くでございませう、私の申しますことは大抵きいてくれますので幸でございますホヽヽ」
「なによりでゐらつしやいます、家の兄なぞも私をよく面倒見てくれますので、家中喜こんで居りますの」「そら又始まつた」と心の中で
「私が東京へ參りました時も、あちこち見物に方方つれて行つてよく親切に教へてくれましたの」
もう皆様一かどの奥様になつたつもりで甘いお話しの御懸合ひ、まだ時期がちと早すぎはしまいかと存じます。なにしろもう満腹になりました。此の上御馳走になつてはたまらないからよこあひから、
「ね道子様、靜子様のお髪お美麗しいでせう」突然の問にびつくりしたやうなお顔して、眼をあげて靜子様のお頭を見なほして、
「ほんとうによくお似合ひなさること」、
「いゝえ、どういたしまして」つてうれしさうなお顔して右手でそつと輪にさはつて御覧なさる。
「東京ではもうローマは流行ませんですよ」つて私の髪を御覧になる。私もあちらで流行るかたちに結ふて見ましたの。
が、こんな束髪なら當方では疾うに皆様結ふてゐらつしやる。靜様は「良い格好ですこと、後をお見せ遊ばせ」なんておつしやつてる。
「私の感心致しましたのは帯の結びやうでございますの、それは／＼よい格好に結びますの、高く大きくしますのが今の流行でございますの。千鶴ちやんももちつと高く遊ばせよ」
「いゝえ道子様、私のやうな田舎者はこれで澤山、それより貴女が流行のお姿をして私に目のお正月をさせて下さいませ、それが流行のお話しよりもうれしうございます、道子様、幾日許り東京においでになりましたの」
「丸二月でございますの、これで二度目ですの今度參りましたら暫く當方に歸りませんつもりでございます、皆様東京へお出での折りは、是非お訪ね下さいね、もう幾度おいでになりました、只一度だけでございますの」と靜様。
「私まだ參りましたことございません」と申し上げたら、
「あら、うそでゐらつしやいませう」
「なんでうそを申しませう、行つたものを行かないと申したとてはじまりませんもの、貴女ぢやあるまいし」と心の中。
「まあ、ほんとうでゐらつしやいますか」と氣の毒さうにして、「一度は行つて御覧遊ばせ行つて見なくてはお話しになりませんわね靜子様それも年寄つてからぢやつまりませんもの、今の中でございますまよ、目新しいものは目につき易いし、流行は一月で見られるしね、それに一度も行つたことがないと肩身がせまうございますわ」
ホヽヽ二度や三度東京へ行つたとて、さう都かぶれしなくつてもよささうなのに、都へ上るのがそれほど光榮なのか、それほど肩身が廣い

ものか。

自慢せんため、羨しがられるための上京なら、田舍に居て自然を友とした方がどんなに宜いかしれない。

「兄樣、お召物をお買ひ遊ばすなら東京に限りますよ、柄がよくて價が安いんですもの、私の振袖は三越から昨日出來てまゐりましたの」

「どんなにお立派でゐらつしやるか」

「拜見させて下さいませんか」

「つまらないのですよ白木屋と松屋のとは未だ出來ませんの」

とおしやつて簞笥の一番上から黑色の包みをお出しになる。どんなのが現はれるかとぢつとお手の動くのゝ見つめてる。

「こんなでございますの」

黑縮緬に筋の裾模樣、オヤ〳〵見たことのあるお召物だこと。あさうだ、此の春後藤が或るお家で急にお金の入りやうがあつて、おはらひになるのだとかいふて、厚板の丸帶と一緒に持つて來たのによく似てる。まさかあれではなからうけれど。

「道子樣、これ旦那樣の御紋ですの」つて靜樣お尋れ遊ばす。

「え、」

とたんに午砲のひゞき。びつくりした二人座ぶとんをすべつておいとまする。



◀離別の情▶

婚する人の幸多かれといのりつゝ。

當世學生かたぎ

礎　菊

念入りにお化粧して、新聞の二三種へも目を通すと、もう間もなく午砲がなる、午後にお客樣の一人もお見えにならうものなら、これで其日はおしまひですもの、ほんとに日短かつてないのね、つて、これは道樣の歎聲。此頃はお日樣のまはりが早い。そのかはり夜は私共の世界です。讀書にもあきたから、一寸何か書いて見ませう。父が好きだから、家へは若い學生達がよく遊びにいらつし

やろが、中にはいろ〳〵の性格の方がありますのそれを一寸内しよで。

△H　様

富豪出です。白二本筋に蜂の帽章初めてつけて、得意の微笑を禁じ得ないつていふ面もちで濶歩遊ばしたのは五年前のこと。同じ年に初めて校門をくゞつた方々は、己がじし目ざすカレツヂへと影もないのに、此の君ばかりはいまだにTの大學の豫科。ホヽヽ六年計畫でいらつしやるんですつて、御當人至つて平氣なもので、懸命に勉強なさるのでもなし、ゆつくりかまへていらつしやいます。物質的にも精神的にもお家に苦惱のない君は、人が三年で卒へるところを其の倍かゝつてゆつくりやり遂げるつていふだけの事なんでせうよ。腦はあんまりよろしい方ぢやないんでせうけれど一つかういふ心のたるみがお有りになるのです。

そして「僕等のやうになると、幅がきゝますよ」ですつて。落第しい〳〵幅をきかしたつて、仕方がありませんわ。然し此の君は得な事にはお顏立が若くお見えになります。一寸貴公子風で、誰だつて六年もいらつした方だとは思ひませせん。造化の神様も御如才がないといつもお顏を見るたびに感じます。

こんな方だけに、妙技が一つおありになります。それは庭球で、もう三度の御飯よりお好きなんで、校内では一二を爭ふ腕前なんですつて。



▶懊惱の情◀

△S　様

此方の樣子のいゝことつたら、有名なものです。白二本筋のキヤツプやゝま深に、すつくとお立ちになつた時なんか、常に小さくないと自信して居る私も、象に對する兎のやう。まさかそんなでもないけれど、全く槪觀してしまひます。柔道の有段者で、ボートマンで、評判の運動家です。

未來の宰相たらんなんていふ滿々たる野心家揃ひの法科に席をおく一人。それだからスピーチなんかもおやりになります けれどあんまりお上手な方でもないらしい。そして柄になく咽

が素的におよろしいんで、
島も通はぬ八丈ヶ島に
なんて興に乘つちやよくおやりになります。性豪放磊落、自ら偉人の相ありとでも申しませうか、大聲を擬げていらつしやるけれど、三つ子も親しみやすいお氣質でいらつしやいます。

△K　様

此の君は、それは意志の強いお方です。何でも四度目とかでお入學になつたとか聞きました。それは一番至難だといはれてる三部ですけれどお父様は長者議員ですから、いはずとも豪家のお坊ちやんなんです。けれどちつともそんな風がお見えになりません。何時も久留米か何かの絣に、黒メリンスの太帯きりりと結んで、[illegible]木の高下駄重さうでもなく召していらつしやいます。

お酒なんか勿論、煙草も召し上りません。家へお見えになる學生方で、煙草召し上らないのは此の方位のものです。一たい親や兄の臑をぢりながら、煙草やお酒を嗜むなんて方は、間違がつてるのね。

ほんとにこの君は眞個の學生らしい方です。父も、「富家の子弟にしちや珍らしく意思の強い謹直な男だ」つてほめて居ります。入學のおそい早いは時の運として、これから怠らずおやりになれば、末を抜んでるのはさう難かしくないと思ひます。

△O　様

無邪氣な、一番年若な可愛い方ですよ。ホームシイツクでもお起しになりはしないかと内々お案じ申して居りますが、さすがハイスクールの生徒さん、それは杞憂に終りました。今年Tへお入りになつたのです。

此の方はうち見は眞面目さうですけれど、なか／＼面白い方で、「またさわぎに來ました」つては、よく家からお見えになります。其度に面白い話題を持つていらつしちや、セスチュア巧にお話し下さいます。

先頃、宿泊行軍がおありになつたので、其時の滑稽の卷を第一頁からおさらへ遊ばした時なんか、ほんとにみんなでお臍の宿がへをしました。

此の方のお好きなものは校歌とお汁粉。お汁粉ときちや財布の命もきかばこそ、ずん／＼決行なさいます。

夜更けて宅からお歸りになる時は、いつも高足駄で拍子とつちや校歌を高唱なさりながら：：無論壹公のお耳をぬすんでですよ。

花より花に蜜を吸ふ
蜂のいそしみ我がはげみ
不斷の渴きとめがたき
知識の泉汲みとらん

△A　様

來年はもう社會に打つて出て、實地の腕だめしをするんだつて、腕を扼しつゝあるのがこの君。或專門學校の最上級に席をおいて、電氣の方へ專攻していらつしやいます。

逆境に人となつた方だけに、確乎した方ですお成績は勿論良い方です。

晝間はおそくまで學校で實地研究夜は机上の研鑽專門なだけになか／＼お忙しいさうで、そんなにお出でになりません。たまにお見えになれば、よく專門のことをわかり易くお話し下さ

います。

何しろ、卒業すれば世の活舞臺に立つやうに養成せられていらつしやるので、前の方々などよりずつと大人らしくつていらつしやいます。

おや〳〵何だか玄關の方がさわがしい。あの聲は勇さん（從兄）らしい。見つかつたら百年目。「またいたづら書してる」僕は檢閲する權利がある」なんて強制執行をうけるから……。おゝこわ〳〵こゝいらでやめておきませう。

忘れ得ぬ友の面影

白梅女

思ひ出せば、櫻花咲く彌生の頃、四年が間共に學び共に樂しんだ級友の皆樣とをしき袂を分ちて、夢見る心持で、夫と共に昔はゑびすの住してふ陸奥さして立つてから、早や二年。只今皆樣にお目にかゝつたら、どんなにお變り遊ばしていらつしやるだらう。

御なつかしさのあまり取り出した記念のうつしゑ、口にこそ出し給はれど、かくしきれぬ希望にかゞやく御かほ、あゝ此頃皆樣のお胸はどんなに血がをどつて居た事でせう。いづれをあやめと引きぞわづらふ花乙女、ほんとうにあの頃は樂しかつた。せめてもの思ひ出に、此の中の花の幾枝籠に盛つて御目にかけませう。

△井田歌子樣

クラスきつての美形、お背は高く、肉付きの好い方。お顏は申し分のない美しさ。お髪の少しうすいが玉にきずと云へば云へるが、さして目立つ程ぢやありません。某旅館の愛娘で、お召物など隨分善いものを召していらつしやいます。一糸亂れぬ日本髪にお上げあそばして、黄がゝつた色の着物召してお歩きなさるお姿は女の私でもうつとりしてしまひます。

此方はそりやお兄樣の御自慢あそばします。お兄樣は早稻田に通つていらつしやいます。私達始めはどんなゑらい方かと思つて居ましたが、だん〳〵樣子を聞いて見ますと、學校の方は打ちやらかして、市中をうろついてるんですつて。あんな者末にどんなものになるか分らないつて、誰れかゞ云つて居ました。

さすが、お商業柄だけあつて、お口のうまい事は感心です。口悪のAさんは、何時かも、「歌子さんはお顏はよし、お口はうまいし、お家の繁昌するのは當然だ」つて言ひました。まさかそれ程でもないでせうが、兎に角看板娘つて事はまぬかれません。「歌さん、あなたの理想のハズは何」つて伺ふときつと「私實業家よ」つてすましていらつしやる。

先日B樣からのお手紙で承はれば、未だにお家にいらして、家事のお手傳ひ旁々ハズ君の御選擇に氣をもんでお出であそばすとか。

△高橋はる子樣

お背の高い事校中一番、私の樣な小さい者はお見上げてお話しなくちやなりません。お顏付きのおそろしい方で、妹が入學して始めて登校した日は、玉子樣見て「あの方こわい方ねえ」つて申しました位。成績は上の部、殊にお習字は見事なもの、先生方の評判はかなり好い方です。

お體は大層丈夫な方で、在學中一度だつて病氣で缺席あそばした事はなかつたが、卒業後間もなく人にも逢はれぬ胸のお病で、あたら春の

盛りな須磨の別荘に御静養中。

△安藤そで子様

御實家は實業家で、可愛い方です。お脊ははる子様とさかさまで、クラスでも一ばん低いんです。成績は大層好い方で。裁縫の先生と國文の先生のお花でした。それはおとなしい方で。人の陰口などつひにおつしやつた事ありません〳〵。

Aさんなどよく先生方の批評などあそばすと、ぷいと何處かへ行つておしまひなさるのです。そしていつも人の缺點など云ふ人大きらひですつておつしやつてほんとうに心の清い方です。

私とは一番氣が合ひました。



◀煩悶の情▶

皆様が藤棚の下へ集まって卒業の理想など話し合つていらつしやる時、二人で校舎のうちの土手に腰かけて歴史の話に興がつたものです。

卒業後は家事のお手傳ひの傍ら、お裁縫の先生の許に通つていらしつたが、この春、良縁あつて隣村の某家にお嫁ぎになりました。御主人は或る銀行の重役とか。氣むづかしい姑様も、此頃はそで様のおやさしさに我を折つて、大層可愛がつていらつしやるさうです。

△柴田ゆり子様

眞黒のくせのないお毛を、無造作につかれ、手織りお召物にこれも木綿袴を短かくおはきになつて、二里餘の道を自宅から通つていらつしやいました。

それは〳〵滑稽な方でした。

心に思つた事は何でも云つてしまはなければ承知の出來ない人で、先生だつてゆり子様には一目おいていらしたやうでした。お裁縫の先生とはどうしても氣が合はないので、先生はゆりさまのお顔御らんになると、何とか小言を云はなければならない様でした。しかし御當人のゆりさまは一向平氣だつたから、先生は尚更御立腹ではたで聞いて居てもお氣の毒でした。朗讀がお得手で、校友會の時には、何時もお藝が壇上に現はれました。

卒業後半年程で、御養子をおもらひ遊ばして、それはお仲がよくつて、人にさへ逢へば御主人のおのろけばかりおつしやるとかで、御近所の大評判とは先日A様からの通信。

△水野秀子様

さして美人と云ふ程ぢやありませんが、スタイルが非常に好い方で、クラス切つての運動家です。先生間の御信用は大したものだつたけれども、生徒間の評判はあまりよくない方でした。專横な所があつた爲めかも知れません。お身元はあまりよくないとか。お母様とお妹さんの三人暮しで、お母様は人のてかけとか何とか人は申しましたが、私はさうは信じませんでした。御卒業後は、おとなしくお家の事をお手傳ひなさりながら、母校の事に盡力していらつしやるとか。兼ねて高師が志望なのでしたが、お父君が、にはかに御逝去あそばしたについて、斷念なさいました。先日のお手紙にも、もう上の學府へ行きたいとは少しも思ひません、つくゞ世の中がいやになつたわ、此頃は毎日佛様の前に坐つて泣いてばかり居りますのつて書いてありました。ほんとうにお氣の毒ですわ、あたら全校に響き渡つて居た秀才も、かくして一生うもれ木になつてしまひはしないかと心配でなりません。

△古田美保子様

近村の豪家の令嬢で、お色がしろく愛くろしいお方です。何れの學科も一つとして人に敗けたおとりあそばした事はありません。級長は美津保様の專有物で、校長の君に信任殊の外厚く、クラスメートの評判も至極よろしい方でした。何かクラスにごたくが起つても、みほ様がお口を出されると、直ぐ解決がつきましたのを見ても衆望のあつた事は分ります。惡口屋の張本人K子様でさへ、みほ様には敬服していらつしやいます。

學校をお出あそばしてからは、しばらくお宅にいらつしやいましたが、先日同窓會報で見ますと、去年の夏從兄さんとかへ、お嫁き



◀ 憂愁の情 ▶

なすつて、もう可愛いお子樣がお出來あそばしたとか。背の君は法學士で、只今四の都に樂しく暮していらつしやいます。

△北村とき子樣

私の一番仲の好い友達です。御かほ立ちは十人並ですが、それはおとなしい方です。學科は美保樣や秀子樣と肩を竝ていらつしやいます。至極眞面目な方です。お家は醫者で、私立の病院を立てゝいらつしやいます。

お母樣が早く逝きなすつて、行儀など仕入れるものがないからつて、家政の先生の許に預けられていらつしやいました。朝早くからの水仕事に、冬などゆきやけがお可愛相でした。それでもおとなしい方ですから、お不足一つおつしやらないで、四年の間辛棒なさいました。

早くから婚約の方がございましたが、誰れにもそれをお知らせ遊ばさないで、色々の事を聞き出して來ちや話すA樣さへ知らなかつたやうです。それが卒業の間際に分つて皆樣のおどろき樣たらありませんでした。それからは氣の毒な程からかひましたが、それでもおこりもせず、何時もにこ〳〵して受け流していらつしやいました。ほんとうに感心な方でした。

今年の春目出度くお婚禮の式もすんで、背の君は背の君の父の病院へお出であそばすとか。快活な旦那樣に、しとやかなとき樣、まあどんなにあたゝかい樂しい家庭でせう。

うわさとりぐ　紫溪

△R樣

當市では、一般に女先生は木綿の筒袖に定められてゐます。兄樣はそんな事はすでに御承知でせうが、然しいつも秩父名仙の矢絣に、對のお羽織召して、それも大きな元祿袖に遊ばしてゐらつしやいます。お髮は、或時はルイザに、又或時はローマとやらに上げて、大きな飴色のたぼ留に前髮もたつぷりと付き出していらつしやる。どこから見ても教師とは見えません。まあ女學校の生徒さんつて云つた風です。ハイカラ八分の教師が二分つて云つた調子です。

心ある人は「エヘン御職がらでも無い」つて苦笑するでせうか、感心に職務大事と學校だけは雨の日も風の日も、お勤めになります。お宅は當市でも目拔きの通りです。そこから學校まで長くも無い道中ですが、道行く者は誰れでも此の君に目を留めます。それこそ三尺の兒童も知つて居ります。其の御入浴にお出ましの風がまた珍妙で、天下のヒユウチー弄れ一人と言つた風で、辨慶では無いが七ツ道具をタチカに包み、大路を意氣揚々と、それは面白い御樣子です。萬事がこんな風ですから、授業ぶりもさぞやと存ぜられます。

△K樣

昨年の夏頃此の桃園小學校へ御新任遊ばしたのですが、今まで某郡でやはり訓導を遊ばしてゐらしたのですつて。地方の方には珍らしい程ハイカツた風を遊ばします。ミスとして稍々オールドの方ですけれども、其のお若い事つたら、廿三の自分よりもずつと若々しくて、年の交換をしたつて人樣はうそとは申しません。お國はわさび漬が名物のところださうで。却々のしつかり者で、ふだんは口數少なにお出ですが、

批評會、職員會なんて云ふ時には、振つてお意見をお述べになるので、之れには堂々たる男教員も舌を卷いてしまひます。然しK樣にはそれだけのお力がお有りですから、人も免し吾れも免して居ります。授業法もなか〳〵の老練家ですから、校中一の難物たる第○年の男女合組の劣等生を受持つてゐらつしやいます。

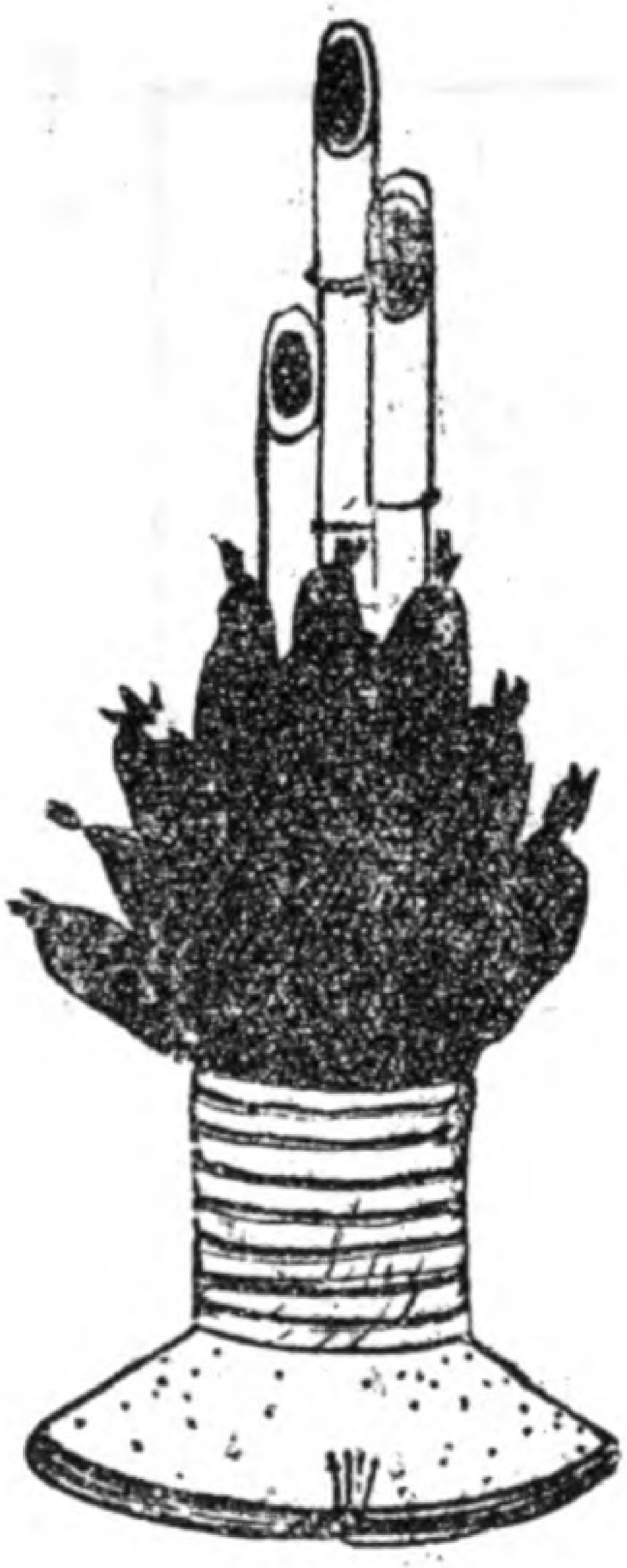
△M　樣

M樣は○○縣女子師範學校の卒業生で、頗るやり手との評判です。どつちから見ても小學校のテーチヤー然としてゐらつしやいます。どこか重みがあつて、其言葉と云ひ態度と云ひ、一として模範ならざるは無しとでも申ませうか、R樣とは月とスツポン程違ひます。吾れ〳〵女學校出は大に學ばねばなりません。矢張り餅屋は餅屋に限るやうです。只今六年の受持でいらつしやいますが、流石は本場を踏みなすつただけ有つて教授振りは達者なものです。そつの無い事、見る目も羨しうございます。此間も地理の時間に一寸拜見に上りましたら、丁度、關東州や滿洲地方の御教授でしたが、大變愉快に參觀が出來ました。私なぞ足掛四年目ですが、やつと此の十二月增俸して○○上俸、M樣は此の四月御卒業遊ばして矢張り○○上俸です。四年勤めの吾れ〳〵と、新卒業のほや〳〵と同じ對遇、たいがいいやになりますわ。「しかたが有りませんよ。お芋だつて本場丸やきにかざるぢやありませんか」つて同窓のH樣はよくおつしやいますが、ほんとうに私たちの樣な場違ひの出身はみじめなものです。

△A　樣

A樣は唱歌の先生、上野の乙種卒業とやら。流石は教育ちでいらつしやいます。吾々仲間では一番あかぬけした風姿で、筒袖召さすのは惜うございます。A樣もたしかK樣と同い年で、やつぱりミスでゐらつしやいます。そして校中一の氣樂家です。吾れ〳〵本科の教員は學籍簿調べ、やれ訓練誌、それ月末統計、○○報告つて、朝から日の暮れる迄筆を走らしてゐます。其ひまには教材の研究もしなけりやならないし分掌事務はあるし、息のつく間も無い位ですのにA樣は朝はゆつくりとお出かけ遊ばして、一日ほんの四五學級の教授遊ばしていらつしやるきり、あとは何時も譜集だの詩集だの紐といてお出です。それがおあきになると、手明きの訓導つかまへて、職員室をキヤツ〳〵と賑やかしてゐらつしやる。





文箱ひらけば

葉子

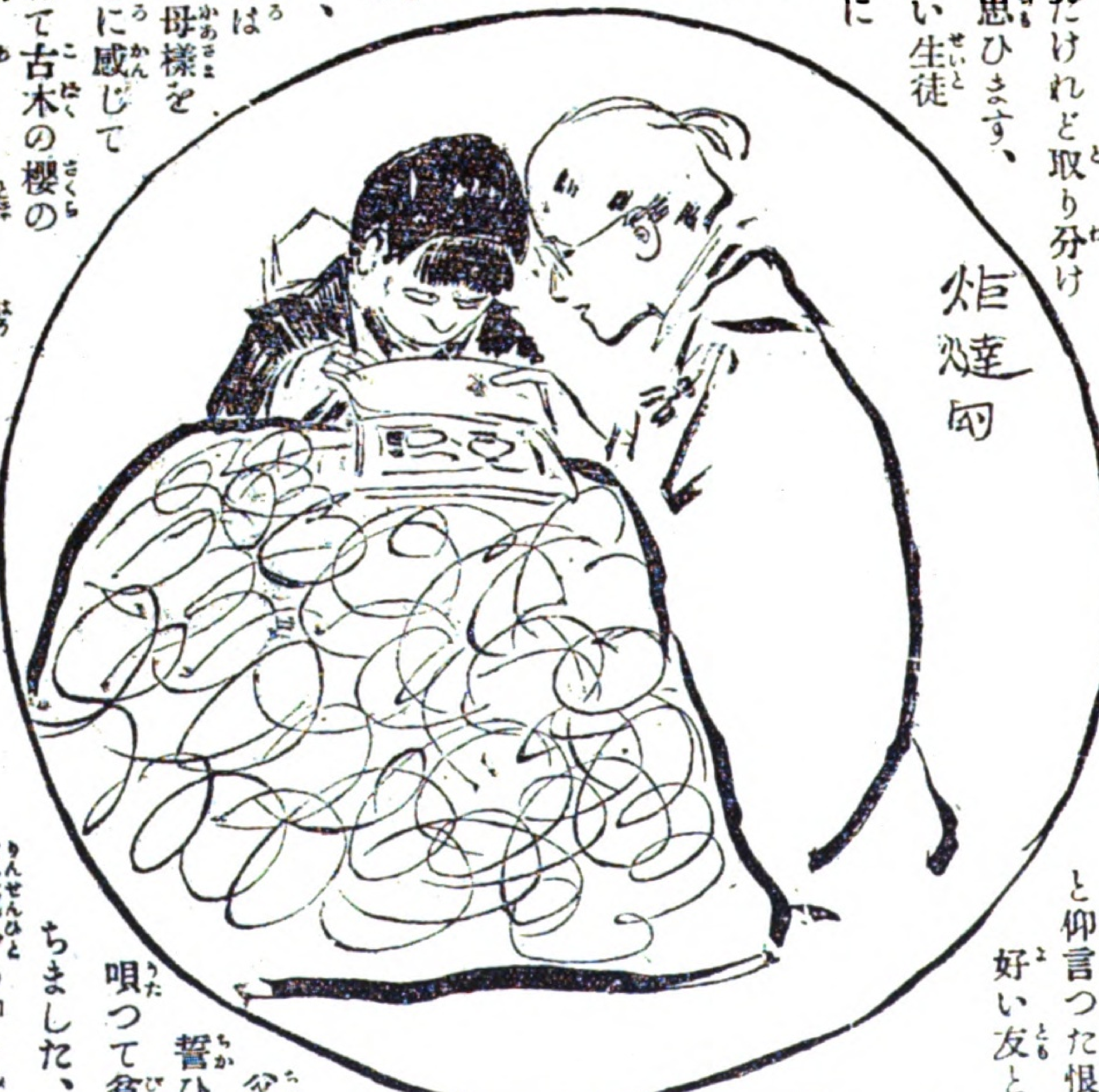
　十四の秋に死出の旅路に杖つく妹の殘して置いた手文庫。私はとくの昔に壞してお釜の下に焚いて了つたのに大切にする妹は同じ時に頂いたお父樣の京土產、輪島の本塗のそれが未だ蒔繪もはげて居ぬ、キチンと正しく片付けて……シト〳〵降る春雨の日母樣の前で二人でこさへた姉さまゝで並べて、私は幾度も前掛で目をふきました。次から〳〵珍らしい物を買つて貰へないのを承知してか三年も五年も後に買つたレース針や小さいタボ止まで一々色紙に叮嚀に包んで覺束ない字で上に記して有る、お姉樣に頂いた針十月二日、開けて見ると眞赤に錆びたマチ針が三本出る、お母樣の預かり物、見ると羽織の紐かけが出る、自分の妹ながらこんな規律正しい子が……姉の慾目と云はずに言はせてほしい、あゝ生かして置きたかつた私の大切な片腕、杖にも柱にもたつた一人の味方の妹を……中のしきりを取ると

藻を燒く煙　　川ちどり

と大變な題を書いた三十枚程の半紙の帳面、今まで見た事もなかつた好奇心が手傳つて鳥の足跡の樣な字を辿つて讀み初めました、

友どち

　惠美さんが作文の時間に泣き出されましたのは全く御氣の毒でした、何故なれば作文の題は、わが母と云ふので惠美子さんには其の溫き懷中に抱かれる母樣は無いのだもの、スヽリ泣きの聲が隅から聞えると皆言ひ合した樣に先生のお顏と惠美さんとを見くらべた、先生はチラと見ても何とも仰言いません、惠美さんの



お家は餘り豐かでは無いからでせう、どの先生でも女の先生は大ていさうだけれど取り分け山地先生は非道いと思ひます、お金持かお顏の美しい生徒だと時間中でも便所にまで付いて行かれるけれど、惠美子さんと私とは全くさゝつ子の樣です「木村さん何がそんなに悲しいんです」白い目で睨み乍ら愛の無い聲で一口仰言つたきり、私は惠美子さんの心は美しいと思ふ、亡い母樣を忍んでの床しいお心に感じて時間の終るの待かねて古木の櫻の下に到つて泣いて語り合つた、遠くの方で耳こすりし乍ら笑ふ友を見て「あの方達は幸福ねえ」と仰言つた恨みもせずに、それから仲の好い友となつて了つたのです。

乞食の子

砂塵の舞ひ上る寒い〳〵風の日でした十二三に成る女の子七つ位の女の子姉妹の巡禮が來ました、形ばかりのおひづるかけて居ましたが二人とも思ひ切つて汚ない風でした亡き母上のお好きだつた巡禮歌

父母の惠も深き粉川寺、佛の誓ひたのもしきかなと好い聲で唄つて貧乏とも知らずに家の門に立ちました、昨日當用紙買つた殘りの五厘錢一つ「これだけしか無いのよ」と與へま

すと叮嚀に鈴ふり乍ら亂れた萩の茂みを向ふに歸つて行く後姿、實に憐れでした「姉ちやん寒い」妹の聲「可愛さうね今少しよ」と慰て居る姉の聲、今暫くすると温かくなるんでせうか、嗚呼私は幸福でした、今宵は何所に宿かるか憐れの二人姉様の歌

　天地の神もりませよ梶まくら
　めざす所に二人ゆくまで。

　ラインの月夜
　　唱歌の題

咽喉の痛い程張上げて歌つて居るのに六ヶ敷所だけ皆さんはお唱ひにならないので先生はジレて〳〵、合唱の時だけ節が面白いのでワアーと聞えるだけ二部の人は名々に唱歌帳の端にハイカラの首から手や足の生えた人形だのヒヨットコだの、私もう嫌になつたわなど丶書いて後の人と取りやりして居られる、金波碎くる漣や、天津乙女の……の所になると皆黙つて了ふ「どうしてさう出來ないんです川上さん山村さん」惠美さんと私は顔見合してピクリとしました「ハイ」「外のは歌はないのに何故二人だけ大きな聲で怒鳴るんです見苦しい」まあ亂暴な言を……惠美子さんは泣き出しさう「二人だけ立

花の保存法

薔薇でも牡丹でも菊の花でも、大抵草木の花は次の方法により數月間其色の鮮やかなるまゝ保存して、床の間に飾ることが出來ます。

まづ細砂五合を清洗し、篩にかけて大粒のものを去り之をよく乾かし。次に牛脂又は豚脂八分、パラフィン八分、サリシル酸八分、右の薬品を五勺のアルコール（二重鍋の中で湯煎で温め）の中に入れて溶解せしめ其溶液を前記の乾かした細砂の上に一滴づゝ注ぐ（砂は前以て少し温め置く）其注ぐ間は絶えず沙を攪き廻はしつゝ、よく砂に液が交るやうにした上、再びこれを乾かします。

次に保存せんと欲する花を取り、此花の丁度よく入るだけの箱を取出して、箱の底に前記の砂を敷き、次に花を入れ、次に極々注意して砂を注ぎ花片のすき間に砂がよく這入するやうにし、花が全體かくれるまでに砂をつめる。此箱を攝氏三十度から四十度の温度の所へ四十八時間入置けば、花は全く萎れぬやうになるのである。砂から花を取出す時も花片を損ぜぬやうに注意せねばならぬ。箱の底に小穴をあけて砂をそろ〳〵と落下せしめるのが最良の法である。かうし取出された花は凋まず褪せずに長く床の間を飾る。若色が少し褪せたらば、アニリンの繪具で、其花片の上を彩色すれば可いのであります。

つて歌つて御覧なさい、一二三四と調が終ると待ち兼ねたりと一部の恵美さん二部の私、乙女の誇りとはこんなのを言ふんでせうか、嬉しい様な變な氣持、生れて初めてゝした(悠々茲に七百年)顔見合して唾を呑みました、此の時の先生乾度賞めなくても茲では賞められなかつたでせう。

落葉籠

野菊咲く野路の寒さやいなぐもり
秋風や母のみ墓を除けて吹け
草刈りのすゝきゝ入れて歸けり孤兒の頬吹く秋の風さむし

お嫁入り

夢の中に聞くそれの様に荷かつぎの音頭のび〳〵と向ふの畷を通る様子、月も凍りさうな寒い風を冒して姉様と二人お嫁入を見に行きました、桑畑の中を通る時「平源の娘さんよ乾度」と姉様は仰言いました、鬼住小學校の土手に立つて待つて居ると澤山の荷物を先に名入りの提灯の中に埋まつて、姉様の小學校時代の友達、今日の花嫁様の盛装を乘せた車はガラ〳〵私等の前を通りました、薄紫を上に白赤の縮緬のお召物、膝掛の下からチラと見えた模様は私の大好きな胡蝶でした「まあ良子様お目出度う御座いますのね」と姉様は人の陰から挨拶なさいました、眉の際立つて美しい其の方は角かくしの下から横目でチラと見たばかり、何所の乞食が！と云はぬばかりのお顔にツンと横向かれました、落ぶれると友だちにまで馬鹿にされます「姉様口惜しいでせう」「いゝえ何とも無いの昔なら知らぬ事、今の私等には當り前なのよ」と仰言いました。

天長節

二度も三度も水に入れた木綿のドス〳〵を着て出たのは矢張り二人だつて賣つた了つた鹽瀬の袴、惜しくは無いけれど古ぼけたのが失禮の様に思はれて……學校から歸ると直ぐ丸洗して火で乾かして姉様にコテ當てゝ頂いたのを着けて出る、「川上さん何故着かへて來ません」大勢居る中で先生は仰言つた、早速「貧乏ですからこれより外に有りません」「山村さんは」「私

もです」「後で二人とも一寸私の所まで來なさい」叱られる覺えが無いから平氣で二人行く、「今日だけこれをおはきなさい」と海老茶の新らしいのを出して下さる「でも私洗つて來ましたんですから失禮では無いと思ひます」「何です先生の云ふ事を聞きませんか惡いとは思つたけれど「ハこれで好いと思ひますから」「片意地だねえ」でも私は折角の姉樣のお骨折を捨てる事は出來ないんだもの、かうして私は先生や皆の方から除け者にされたのです。

春の曲



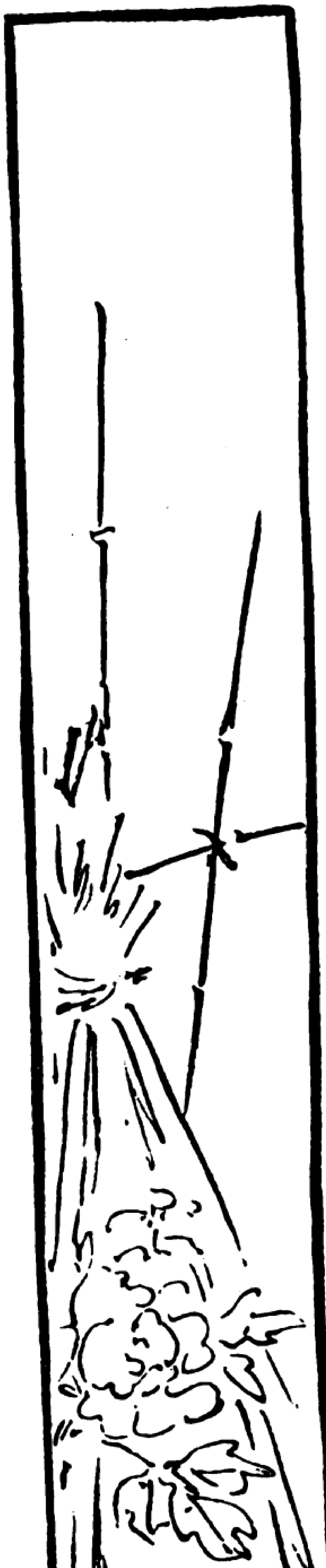
燃える樣な葉をつけて紅葉の枝がヌッと出て居る塀の前に立ち止まりました、月の手に床しく洩るゝ琴の音幸なき孤兒の少女は寒い風に首ちゞめ乍ら物盜りの樣に節穴を探しました、金屏の前に錦に包まれた美しい歌の主を一目見樣と思つて…グイと…いゝ、いゝ溝の中からジジーと嫌な聲で蟲が鳴く、鼻の先の痛い程豆粒程の穴に目を付けて覗きますと、明け放たれた美しい六疊の間・紅葉散るその前に埋る樣な友染の蒲團に坐つて向はれた十三絃は動かす指につれて自由自在な音色を出して今秋の曲の合の手、フト上げられ

た其の人のお顔、灯影でチラと見ますと惜しや雨の目は見えないのでした。

春　雨

「今日は午後からむづかしいから傘持つて行くんですよ」此の好いお天氣にと思つたが持つて出ると果して三時間目からポツリ〳〵歸る時分には流す程降り出した。二里も三里も有る田舍から通つてる方は習字もせずに心配さうにして居られた、木の葉を捲つてゴーッと暴風雨。チビた利久下駄に傘さして「姉樣はえらいわねえ」と考がへ乍ら新橋の竹籔まで來るとお下げのリボンを眞黒くぬらし乍らかけて行く人がある、先に歩いて居る二人連の方に追ひついて、入れて下さいと頼まれた樣子「貴君の樣な意地惡いやよ」と斷はられて居る、それも郡長の娘さんで有名な意地惡の威張りやさん、でも氣の毒と思つたから「永井さんお入りなさいな」と聲かけると、「好い事よあなたなんか汚いから」御機嫌取て辨當のお茶までかけて上げなさる山地先生に此の言葉を聞いて頂きたいと思つた。

藁を燒く煙り、それは妹の感想錄でした、大人びた筆使ひ小憎らしい樣な所もある、けれど好んど女學世界や婦人界を讀んで少女世界や少女の友は見向もしなかつた妹の絶筆？まだ紙數は二十枚程殘つて居る題の付け方の詩的に比して事柄の幼稚さ、すべて早く老人る子は長生をしない樣です、私は何時までも何時までも保存して置きたいと思つて居ます。



萬引とは何んなものか。（最近の新聞記事）

近頃呉服店の店仕掛を非常に大きく華美にする處から、女で萬引をするものが多いとかで、新聞紙や雜誌でしきりに之を書きたて、また學者がいろ／＼研究の結果を發表するなど、なか／＼やかましいことですが、萬引とは一體何んもなのでせうか、ここに最近の新聞紙に現はれたところを一寸お目にかけます。

△女は出來心、男は本職

八割は女だ　白木屋で云ふには、萬引には職業的なるは極少い。先づ十人の中八人は女である。女と云ふても上流の人に決して其樣な不心得はなく、先づ中流以下のお神さんとか、娘とかである。夫も今日白木屋へ行てつ萬引をして違らうと考へて出掛けて來るものは無く、金を以て買物に來た處が、非常に込んで、盜んでも知れさうもないから出來心でやるの許だ。品物は小切だとか、半襟などで、斯う云ふ人を調べて見ると、必ず其位なものは買へる金を持つて居る。私の店では職業でない出來心の人のは直ぐ歸します。

萬引に時節　はない。この十月から十一月中旬迄に十八九件あつたが、夫は冬物賣出で、人が非常に雜沓したからだ。雜沓さへすれば常に幾らかの萬引はある。今年の暮は非常に世間が不景氣の樣ですが、此不景氣と萬引とは何の關係もありません。其理由は萬引と云つた處で、只出來心なのですから、食ふに困つた竊盜や强盜とは違ひますから云々

又三越で云ふには、萬引は夏物賣出に廿件冬物賣出に十八件程ありました。歲末賣出には至つて少なかつたが、十日の日曜には一人ありました。大抵は皆女で、二割位男がありますが、男なれば必ず皆職業的萬引です。併し例外もないではありません。不良少年が玩具をかッぱらうとか、又は少し舊い話ですが

醫科大學生　が反物を盜んだのがありました。大多數の出來心の女萬引の中には、或は縞柄が馬鹿に氣に入つたが、人込で知れはしない、錢を出すは馬鹿々々しいと云ふのや子供の半襟にしたいと云ふ親心からお神さんの間違や、欲しくても買つて貰へぬ孃さんが半襟をチョロマカスなどで、多くは中以下の人、品物で云へば小切半襟類が一等多く。上流の奧さんや令孃で萬引をすると、店では知つて居ても知らぬ振をして、後からお邸へ

無銘御持參品　として付を持參すると云ふ事が、一度新聞に書いてありましたが、彼は噓です云々。尙白木屋では萬引なんぞすれば、刑事見張が澤山居ますから、直ぐ見付かると云ひ、三越では私の店には刑事や見張は

澤山居ますが、やらうと思へば幾らでも萬引が出來ますと云ふ。何れが眞やら(東京朝日新聞)

△警察眼と心理眼

萬引と云ふと直ぐに女を連想する。女許りが萬引をする譯では無いが、此の頃の誓文拂ひで警察署に萬引として引ッ張られて居る者は、大抵女だから、甚だしく女と云ふものは萬引をする爲めに産れて來たのでは無いかと云ふ様な感じを起させる。其處で老練な

某警部サン　に聞いて見ると此の節では本當の萬引と云ふものは其の跡を斷つたと云ふても能いが、誓文拂ひ抔云ふ場合には、必ず此の萬引女を引つ張つて來る。之れはお取りなさいと云ふ様に、買へと云ふ調子を外して店かざりを仕て居るものぢやから、女は欲しくなる、と云ふて懷中に金は無し、四邊を見れば別に氣の付きさうな人も無いから、直ぐに妙な氣を出して盗むが、其の時には、此の盗むと云ふことが惡いとか、惡くないとか云ふことを考へる餘裕は無いらしい。之れを取調べたり、之れを區分したりするには隨分困る。誓文拂は全く吾々の爲めには難問題だよ。

去つて

觀相者黒龍子　が浪花橋筋清水町の邸に訪ふて聞いて見ると、盗みをする女は眉毛から鼻頭の間が必ず長い。此の様な女は先天的に盗心を有するものであつて、發作的に萬引をすると云ふのは多く、其んな女である。此の眉毛から鼻頭の長い女は、自分と云ふ力が強くして、如何なる場合にも自分と云ふことを忘れないで、他の總ての事を忘れてゐるから、眼に見て欲しいと思つたら直ぐに盗む併し此節の萬引女を見ると、發作的の女が多くて、何れも境遇に支配されて居る。世間では盗みをするものは、悉く貧民であるかの様に思ふが、女子として女子の天職を完全に盡すことが出來ないで、後家生活をしてゐたり又た男性と同じ様な仕事をしてゐると、其の女子の天分を喪失して妙な行爲を敢へてすることになる。

欲しいと云ふのは女子の特性　であつて、之れを制禦することが出來るか出來ないかと云ふにある。高等生活をしてゐる奥さんが萬引をしたと云ふて、之れを一様に見る事は出來ない。觀相上から云へば、先天的に盗心を有して居るものと、然らざるものとがある。發作的に萬引をする女は衰運で　先天的に盗心を有して居る女が萬引を働くのは其の捕まると然らざるとを問はず、旺盛運にあるのであると、云ふ様な話を聞いた。

が、調べて見ると、

大阪に萬引女　の多いと云ふことは爭はれない事實であつて、今年も既に數名の良家の妻君が警察の手に捕はれてゐる。其處で警

察署では注意をして角袖巡査では萬引をした後に捕まへる丈けの力しかないからして、要所々々に數名の洋刀を佩けた巡査を配して未然に婦女子の發作的盜心を防遏することに注意して居る。誓文拂ひと云ふことが、安價な都合の好い物を買はすと云ふことで無くして、婦女子の盜心を發揮させるる機會を作るものであると云ふ樣なことになつてはお仕舞ひである。世の中が進步するに連れて、法律と云ふものが心理的に解釋され、而して、その積りで運用されなければならぬと某法官が云ふてゐた。成る程六つかしい世の中になつたものぢや。(大阪日報)

△哀れなる事實

驚く勿れ、三越呉服店のみでさへ、此中月に二十幾人といふ萬引が上つて居る。白木屋では絶無だと新場橋署は樂觀して居れど堀留署に捕はつた二十幾人中の數名は、一旦白木屋で萬引して巧々と見つからなかつたのに味を占め、又もや三越でやつたのだといへば、實數は檢擧された十倍以上にも上つて居やう。而かも是等の萬引は殆ど總てが貧の盜みといふのではなく、全く虛榮の捕虜となつた者で、中には立派な敎育を受けた者もある。

帝大法科を出た法學士の夫人があつて、懷中には卅幾圓の現金を所持しながら、十圓若干のお召一反をコートの内側に匿して出ようとしたが、淺ましくも捕はれの身となつた時、お情だから宅へは知らせて下さるなと涙ながらに哀願したといふけれども、世間へは祕するにしろ、宅へ知らせぬ譯にはゆかぬ。直に夫を呼び出すと、夫法學士は、今正に文官高等試驗を受けようとしての準備中此悲しい報告に接し、驚き呆れて言句も出です、はふり落つる涙を拳に拂ひながら、宅には三四十萬圓の資產もあり、岳父は縣の名譽職までしてゐるに、斯樣な事が耳にも入らば自分も生きては居られない」と、痛恨の涙に全署を泣かせたといふ、

若き女の一時の迷ひで親を泣かせ夫を泣かせる例しは數々あれど此に憐れなのは十四歲になる下女が奧樣のお供をして三越に來て、主家の人々は彼や是やと好みに應じて買つてゆくのに、自分の物は一つも買へない悲しさに、ふとよからぬ心を起し、メリンスの小切をそつと盜んで行かうとして捕へられ、アーツと許りに泣き出した事實である。取調べられる時、「ツヒ欲しくなつたものだから……妾にはお錢がありませんもの……モウ欲しくも何ともないから勘忍して頂戴」と眞實悔恨の涙にかきくれたといふ。是等は哀れなる一事例であるが、堂々たる男子が婦人の虛榮心を滿たさん爲に自ら萬引となり下つて淺ましくも捕はつた者さへある。(都新聞)

＊　＊　＊　＊

△原因となる刺戟

近頃又ポツ〱と相當な身分のある婦人が萬引の罪を犯す樣であるが、新聞紙上に出るから流行し始めたと合點するのは大早計で元來是は獨り我國のみならず、西洋にも以前から能くある例で、追々文明が進んで來る結果、

各商店は競爭上 規模を大にし、賣り方を成可く人の眼に着き易いやう爲向けて、巧に婦女子の購買心をそゝる。一方世の中の生存競爭は段々烈しく成り、生活が困難に成る結果、人々は外見を張る事に成り、十の家庭の經濟力を廿も卅もに見せやうとする所から、惡いと知りつゝ店の物品を欲しく思ひ出し、つひ〱萬引の罪を犯すやうに成る。是は主に虚榮心の強い婦女に多いので、

虚榮心に對する 自制力、即ち不當な慾心に對する抵抗力は、或病症に於ては甚だ弱く成つて居て、自分で是れでは不可ないと思つても、制する事が出來ず、既う反省する前には手が先に出て居ると云ふ始末である。恁那のは主に神經衰弱症やヒステリーに罹つて居る人故に、如何に教育があり富豪であり境遇に何不足の無い人でも、犯す事があるのだから、唯其人の意志が弱い故だとか

道徳的の判斷が 盲ひだとか云ふやうな單純な見解は與へられない。若し萬引をして婦人が法廷にでも立つやうな事があれば、少くとも其の人の遺傳、境遇、身體の健否、心理狀態、當日自宅を出る時の模樣、萬引をした場所の模樣等を委しく調べて、後に始めて罪の有無は決せらる可きである。

萬引に就き研究を重ねたデエボアツソン氏の說に依ると、男子すら或る

大商店に入ると 其處邊りに散在する美しい商品の數々は人に一種の刺戟を與へて、既に何か知ら感じに打たれ、身心の疲れを覺えるが、多人數の混雜に蒸されては愈々視力も聽覺も萎えるやうになるから、一體に身體も精神も弱い婦人、殊に幾分かでも病的精神を持つた婦人は何か知ら茫と成るのは無理も無いと云うて居る。

萬引殊に三越や白木屋の樣な所謂デパートメントストアーで行ふ萬引に就て考へて見るのに、

種々な精神病者 がある病氣でない人もある。又病人でも無い病人でもあると云ふやうな人もある。今から丁度十年前、レツプマン氏が調べた結果に依ると、神經精神に何等異常が無いが、娘が嫁入又は贈物等に出金多い爲め萬引をした者もあるが、それより變質者、躁揚病者、幼年の精神低能者、癲癇者、慢性偏執者、初期麻痺性痴呆者等も多く其外一番多かつたのは神經衰弱者であつた。そして其人達は罪を責られると皆一樣に『人込みで眼が眩んで何をしたか覺えません』と云ふのであつた。(東京日々新聞醫學博士吳秀三氏談)

ナイチンゲールの雄々しい姿(つゞき)

阪部清子

△一滴の涙萬斛の糧

ナイチンゲールの此美はしい行爲に感激して本國からは女史の手を經て病兵に慰問品を送りたいと云ふ申込が毎日陸軍省へ届いた、そしてそれ等の品は尊き邊よりの恤兵品と共に便船毎に山の様に土耳古に到着した。

斯うして其冬も過ぎ、暖かき地中海の沿岸に草が萌え出る頃となつたが、凍傷と入代に包圍軍は激烈なチブスに襲れて、十人に近い軍醫は遂に感染して斃れて終つた。其時迄は天使團は不思議に病人を出さなんだが、何時迄も此奇蹟は續かなんだ、先づ第一に犠牲となつたのは常々女史が股肱と頼んで居たエリザベス、スミスと言ふ婦人で、八日の間苦しみ抜いて死んで終つた。すると間もなく新しい悲が續き起つた、それは愛蘭から來た忠實な婦人である。斯うなると一行の心には急に暗い雲が掛つて今度は誰かと心細い思をして日を過した。

其年の五月──要塞の圍は依然として續いた。女史は官命により戰場の衛生狀態を視察する爲汽船に乘じてスクタリを出發した。前途に重大な任務を帶びて居る彼女には、靜なボスホラスの風景も少しも心を惹かない。船がバラクラバの港に入ると周圍は急に戰場らしい活氣を呈してゐる、加之時々要塞から放つた大砲の音は何となく人の心を不安にした。

女史の一行は上陸するや否や、糧食を運ぶ車や負傷兵の擔架を避け乍ら、惡い道を戰線の方に進んだ。斯うして途中の病兵收容所を視察しつゝ、時には小高い丘の上に登つて、目路遠く青い野原に白い天幕が幾百となく點在するのを飽かず眺めた。そして、要塞が落ちる迄に幾千の兵士が細い壍壕の内に命を殞すのかと思ふと女らしい彼女は思はず眼に涙を浮べたのであつた
──
かうやつて途中の天幕を見舞ひ乍ら一行は前哨線迄も進んで、退屈な包圍に疲れて居る兵士を慰めた。

△救濟基金の募集

處が女史は此視察を終へ、スクタリへ歸らうとする船中で烈しいチブスに罹つた。其結果再びバラクラバ港へ送り歸される事となり女史の華奢な體は擔架の上に載せられ白い傘をさしかけられつゝ、とある一軒の小屋に搬ばれた。此病氣の報知は野火の様に方々へ傳はつて、時には忌々しい訃報さへ噂された事がある。而し幸な事には危險な處も無難に過ぎて一ヶ月の後には見る影もなく衰弱したとは云へ、兎に角スクタリへ歸る事が出來る様になつた。

越えて九月……さしも頑強なセバストポールの運命も眼前に迫つて聯合軍は最後の一撃の準備におさ〳〵怠なかつた、九月八日未明、包圍軍は攻撃を開始し苦戰の後漸く之を陥れる事が

出來た。

此報知は直に倫敦に傳はり上下爭つて戰捷を喜んだが。女史の名は到る處で繰返された。國民　祖國の爲に奮鬪した戰士を犒ふと共に其人達を救つた女史の滿一年の心勞にも報いねばならぬ。此聲は八方からの同情を得て遂にはナイチンゲール救濟基金募集の計畫は起つた。これは女史が歸國後救濟事業に盡すのに充分の資金を供給せうと云ふのであつたが此計畫が發表せられると、四十萬に近い金は立處に集つた。亦ヴイクトリア女王は「慈深き者は幸也」との聖書の句を刻んだ美はしい十字架を賜はつた。

けれども肝腎の女史は休戰に成つてからも永く土耳古に留つて病院に殘された多數の患者を看護し、本國で我身がどんなに有名になつて居るかも知らぬ様に、或は本國との通信の便宜を計つた。或は圖書を取寄せて只管病兵の無聊を慰める外に餘念はなかつた。

△世界に轟く女史の名聲

休戰後滿一年を土耳古に過したが其年の八月女史二年越で懷しい英國の土を履む事となつた。政府からは特に軍艦の便乘を許されたが派出な事を好まぬ彼女は密と佛蘭西船に乘つて公の眼を避けつゝ國に歸つた。且つ鄕里では歡迎の用意に怠りないとの話に聞いたので態と質素な黒服に色の濃い面覆をして誰にも知れずに我家の裏門から入つた相である。然し一度女史が歸つたとの報が傳はると四方から訪問者が絶えない。そゝ名は到る處で人の口に上り、亦機敏な商人は其名を利用して廣告をした。處が此女主人公の消息は誰一人として知る者がない唯一ヶ月許後女王の懇な御招待によつて土耳古の宮殿に拜謁した外誰人の前にも姿を現さなんだ。

女史が戰地から歸つてからは定めし慈善事業に盡すであらうとは誰しも期待してゐたが、元々弱い處を無理して來た身體は最早此上の努力に耐へず其上病後の疲勞もあり第一室の外へ出る事は段々と稀になつた。これは比較的若い年齡で、且明るい前途を持つて居る女史には口惜しかつた事に違ない。其内にナイチンゲール基金の方は五十萬圓に垂んとするので、遂に人手に依つて看護婦養成所は經營される事となつた。

斯く表面に立つて活動する事こそ出來なんだが女史は決して無爲に日を送つてゐたのでは無い。鄕里の一間に閉籠りつゝも尙種々の慈善團體の設立を企てたり、亦戰地で世話をした兵士がいろ〳〵と相談してよこす手紙に一々返事を認めたりした。亦一方には看護法や病院經營に關する豐な經驗を巧な筆に書き綴つて專ら其等の智識の普及に力めた。

一八七〇年前後は女史にとつては今迄の心勞が總て美くしい果實となつて顯はれた樂しい時代であつた。一時は陣中の花と謳はれた女史も五十に近いて鬢の邊に微な白髮の影さへほの見える様になつたが、何處となく若々しい人を魅する様な處は終生其の容貌から消えなんだ。今は一昔となつたクリミヤ戰爭での女史の振舞は大くも軍隊の衛生に對する世上の注意を惹起したが、女史の推薦者であつた陸軍大臣が盡力の結果此頃に至つて英國兵士の生活狀態は見擬ふ許りに改良せられた。亦五十萬圓以上の費用を

投じた病院と看護婦養成所はテームス河畔に出來上る。又女史の宿志とも言ふべき、戰時の救護團隊は赤十字社の名に依て組織せられた。

日本の新聞紙の電報欄に女史の訃の傳へられたのは一昨年の八月であつたと覺える。それより四ヶ月程前に第九十回の誕生を祝つた女史は[illegible]て寢臺の外へ一歩も出る事が出來なんだ處、家族の人々に看護されつゝ眠る様に此世を去つたのである。

女史生前の功績から言へば優にウエストミンスター寺院に葬らるべき人であるが、兼ての遺言もある事なり出來る丈人目を避けて、ハムプシヤーの片田舍に葬る事になつた。

斯うして美はしい生涯は終つたのであるが、或點から云はゞ女史は最も不僥倖の人であつたかも知れない。弱い者に對する同情の餘りあらゆる我身の幸福を犧牲にして、淋しい獨身を守りつゝ人道の爲に奮鬪した其多事な生涯を想ふ毎に誰しもナイチンゲールの美はしい行爲に感謝の意を表せずには居られぬであらう。（完）

△麗はしい心の花　壹等　五拾圓　阪部　靖子
△白瓜と青瓜　貳等　參拾圓小布施とし子
△苦痛を知りそめし乙女　參等貳拾圓花がたみ
△四つの花　四等　拾　圓　玉　露　女
△澁い草　四等　拾　圓　夕かげ艸
△大和なでしこ　四等　拾　圓　玉かつら
△店頭の會話　四等　拾　圓　橋　姫
△銀校の寄宿舍　四等　拾　圓　未　央　柳

△卒業前（若菜）▲友のゆくゑ（わか葉）▲社宅生活の一日（梨花子）△文箱ひらけば（葉子）△甘い草（羽衣）▲縁日（稻垣きみ子）▲春の宵（紅梅）△友のおとづれ（夕香子）▲萎るゝ花（登志子）△雷てられの記（千鶴子）△忘れ得ぬ友の面影（白梅）以上五等金五圓▲印は次號掲載



和歌

一等

〇　麹町　牧野銀杏子

黒髪のたけなるほどにのびしより相見ぬことの多き人かな

評、世相人相を歌ひて、些個の疵瑕なし。

二等

〇　美濃　三田つき子

かず知れぬ星の呼吸もせはしげに見ゆるや年の暮あひの空

評、歳暮の夜色を借りて、人世忙匆の光景を狀す。

二等

〇　鹿兒島　鈴川優梨

あだなりと思ひながらもなか〳〵に捨てられぬをや戀といふらむ

評、古名歌を誦するの心地す。

三等

〇　川越　吉田登茂子

人夫など募集のふだの破れたる田舎茶店を木枯の吹く

評、人生苦寒の狀歌ひ得て見るが如し。板橋の霜を詠じたる古詩の面影あり。

三等

〇　小倉　西原千代子

はたとせも今宵かぎりの名殘かと思ひ寝にきく除夜の鐘かな

評、若きをみなの除夜の感を詠みたるものなるべし。

三等

〇　伊豆　遠山雪子

口紅のいと〳〵厚き京の子の入る門松に春の雪降る

評、相反映して、艶光景想ふべし。

秀逸

〇　深川　佐久間貞子

常盤木に初雪淡くかゝる時誰もはなしに人の戀しき

評、地味ながら、情眞に品の好き歌なり。

〇　川越　綾部富子

戀といふはひつぎをかざる花に似て上うるはしく悲し

きものよ

評、櫨を飾る花とは、比し得て警拔甚し。

○　　　　　　河内　絲若柳野子

絹針のひそむまわたをさりげなく人にまゐらすわれ女なり

評、深刻なる女性に對する批評也。或は世を憤るの言歟。

○　　　　　　横濱　四絃子

男をば泣せしことを世に二なき誇りとわれ等女子は言ふ

評、奇警。

○　　　　　　鵜山　松の露

窓の外は霰か何かかゝる夜を旅なる背子はいかにおはさむ

評、眞情の切なるを見る。必ずしも古歌と同趣なるを厭はず。

○　　　　　　深川　吉井孝子

我が町は長屋ばかりで似た樣な話して行く年の暮かな

評、蓋し實景なるべし　世の哀れさ言外に躍如

○　　　　　　新潟　巣賀井登志子

樂みの中に小さき悲みのまじる日となり年は暮れ行く

評、まじる日となりとは面白し。

○　　　　　　伊賀　山田照子

夜の御神遠なる闇に流すべき星姫あらば我が瞳に賜へ

評、ハイカラなる婦人の願望を歌ひ、豪宕と謂ふ可し。

○　　　　　　美作　田鶴子

繪端書の數をよみてははらからがほゝゑみかはす丸窓のもと

評、樂しき家庭の光景想ひ遣らる。

○　　　　　　日本橋　小島かつら

むすぼるゝ胸のなやみのとけやらで埋火のみぞ白く崩るゝ

評、物思ひに夜ふくるをも知らざるの狀さもこそと推せらる。

佳作

○　岩代　佐久間千代

右左に國なまりの中にありて都育ちのかろきはぢらひ

○　本郷　片岡淑子

馴れしこの淋しさなれど更に日の沈むをみれば涙ながるゝ

○　本郷　芳子

あし迷ひさむる頃には死ぬるべし愛よ涙よわが生命なる

○　大阪　なやめる子

問はせます君が情はよろこべど打明けかねし我思ひかな

○　大阪　奥野靜子

しろ金の生命のいとゝくれなゐの戀の糸もてわかつ日を織る

○　下野　今井いま子

こがらしや森の大木につどひたる死神達の勝ちさびの聲

○　大阪　金田初子

白粉の香のうせぬまに絹ずれの音さわやかに君が宿とふ

○ 神戸 笹尾たま子

としたちて汲若水のぬるめるは五十鈴の川に春やすむらん

○ 大連 怖喜子

しろがねの鈴ふる人も老いぬらむあまの川原は水あをに澄む

○ 麻布 中野友子

我れ呼はゞ静かに呼びぬ春の夜のえがたき寂寞破らぬ程に

○ 埼玉 大塚いせ子

年よりも若しと云はれ羽子板を袖にてかくす門松のかげ

○ 小石川 佐々木直子

とひいしのほとりはゆきのむらきえて夕日なゝめに水仙のさく

○ 明石 伴とき子

緋の鼻緒でもあるまいとむらさきのはな緒にかへし十八の春

○ 伏見 つる子

むすぼれし胸を擁きて押窓せば指月の森も光淡くて

○ 京都 田島かれい

かゝれとて親はうまじな寒き夜をながしゆくなる辻うらの聲

○ 同 同

袖の先まさぐりながらまふすことつたなとありぬ君がみ前に

○ 小石川 國武しづ

とまやよりおりたち遊ふにはとりのふめはくつるゝしもはしらかな

○ 丸龜 白露女

君がすむ宿の白壁はふつたの赤きを戀ひてよる夕べ哉

○ 高輪 泊子

明けぬれど心のどかになりにけりをさなき年のわが身ならねど

○ 東京 とき子

二十歳を過ぎぬと答へ身賣ひぬふと妖怪にをそはれし如

○ 埼玉 のきく

只せちにかくとは知らず戀といふ名のうれしさに君を得てしが

○ 岡山 久戸瀬里子

身をなかば母にかくして君に逢ふ肩上げのなき衣着し時

○ 芝 河村葉末子

あゝ時は過去し心の染糸の縺を解き見て母慕ふ哉

○ 大分 吉田山茶花

星の色赤き夜はたゞわけもなふ胸さわぐなりうら若き日は

○ 深川 安田はる江

新内の流し三味線しみ〳〵と涙をさそふ廓の霜の夜

○ 美作 芙容

水仙の花にかくれる淡雪のきゆるをまたで去にし君かな

○ 東京 くに代

よろこひもまた悲しみもうき事も涙は同じ涙なりけり

○ 横濱 石引ひさご

母が家に歸るが如く我が船は港に入ぬ灯のともる頃

○ 下關 奈良野靜子

人の世はまなびやに見し夢とのみ思ひてすぎしおとめなりしが

○ 名古屋 磯部てつ

夜としなれば夢をかづへて春を待つ少女よ今はなにをまつらむ

○ 橫濱 小豆澤しげ子

たゞひとつ死ぬてふことを思ふ時このあめ地はやすらかにして

○ 小石川 中島銀子

湯上りの甘き疲れよ八月の温泉宿の事の忍ばるゝ宵

○　新潟　曾屋えい子
ふりつもる雪の下なる紘路にも心のとけき春は來にけり

○　奈良　中富よしみ
花鋏とたゝずむ姉がみだれ毛ややつれ姿や逝く秋の風

○　廣島　永井惠美子
歸りゆく月下に人ありひろ〳〵と三篠野の原一筋の道

○　赤坂　鈴木文子
大和路を都へ急ぐ女籠募ふ小嵐に紅葉散るなり

○　東京　山内もゝ代
空も水も人も美し京の秋西山わたり薄紅葉して

○　丹後　豐田本樂
わか知らぬつとなりけりな笠のうゑに散りとまりぬる山のもみし葉

○　宇都宮　佐藤文子
枯れ殘るまがきか菊よなれも又憂き白霜の宿となりしか

○　安房　鈴木むらさき
春の夜の闇をうれしみ御腕によりつゝゆけば月出でにけり

○　伊豫　渡邊桃子
力ある除夜の鐘の音こだましてそゞろ眷きぬひんがしの空

○　下總　染谷まつ子
うつゝ世の義理のしがらみ解きかれて我が自由なるは涙のみかな

○　赤坂　海老原きす子
とりとめもなくもの思ふ身となりぬ母と別れしわれならねども

○　相模　藍子
やがてさく梅の梢に花のことうすくもかゝる今朝の初雪

○　和歌山　おつ子
人ならば聲をかぎりに泣むかな身の置きところなくて闇ゆる日

○　横濱　旅子
離おろうたのたえまをなきすくるかりかれ寒き夜牛の月かな

○　石川　德久田鶴子
赤き柿一つ殘れる枯枝に鳥淋しくとまる夕暮

○　横濱　夕野萩子
少女なれば年間はるゝをはじとする若き思ひを許しませ君

○　伊豆　深谷せい子
目覺時計のけたゝましくも鳴り響く音もまたよし今朝の初夢

○　深川　なでしこ
逢ふ事のかなはで煩え病む身より濁れて死にし戀の湖

○　長野　六波羅千代子
柴の扉ひらきてさし出づる初日のどかに世は治れる

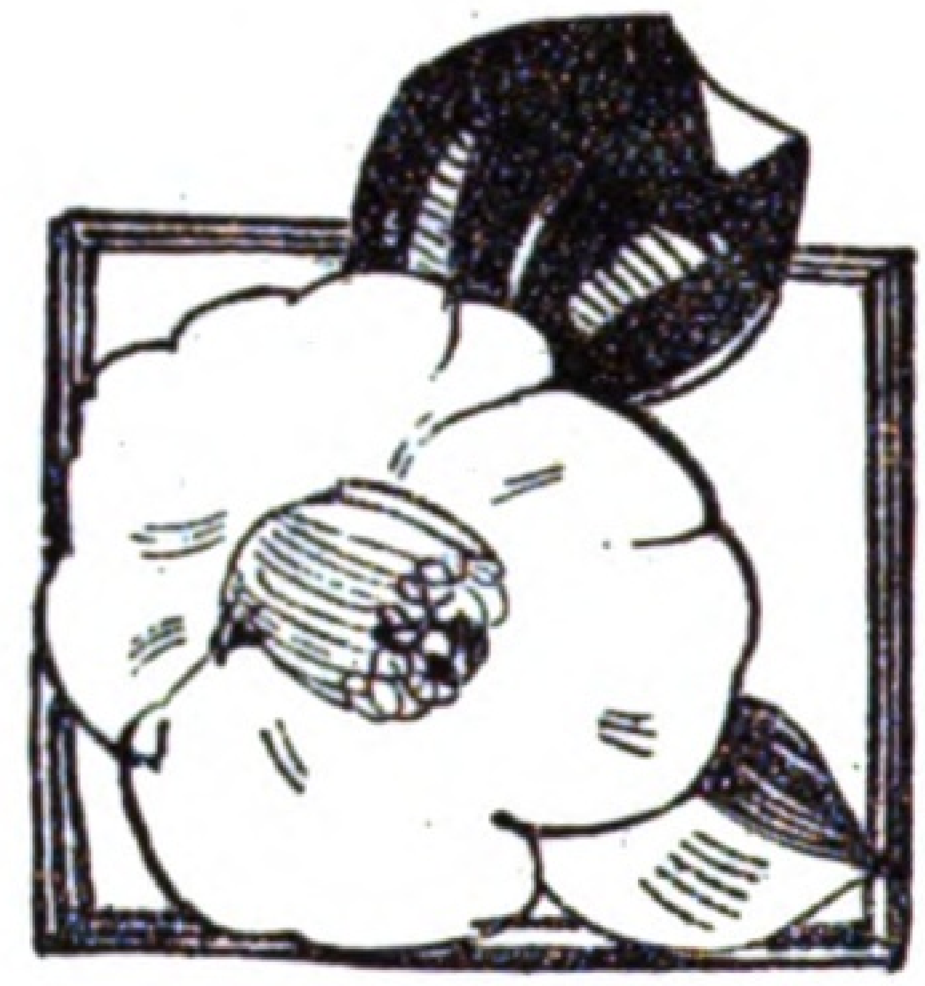
○　根岸　澄子
松原を柴笛吹きて行く人のうしろなつかし我がせこに似て

○　和歌山　森かえで
ゆくりなく夢に見てけりかの君のおもかげのみは昔なりにて

○　神戸　足立喜多子
きゝ蠶の絲ひく如く追想は胸を絡みてたゝなつかしき

○　京都　中野婦美子
我が心野越え山越えはしなくも君がみ胸のおもひにあひぬ

○　信濃　武田美子
何事も聞かんきかましたゆたひて胸のみくだく新妻い身よ



俳句

天

今朝春やぬぎ捨てし衣のきらびやか　秋田　加賀谷よし子

評　初日影いと長閑なり

地

琴柱に朝日さしけり初化粧　愛知　谷口繁子

評　寒菊の鉢は縁にあり

人

花鳥の集ひ美くし歌留多會　評　岡　瀧ひさ子

評　大奥の正月おもひ出でゝゆかし

秀逸

湯豆腐や初雪にほふ實南天　久留米　鹿兒島正子

評　この宿古歌によまれたり

雪明りする風呂水や梅の影　紀伊　宇田すが子

評　垣外の山遠く雪の上に霞立ちけり

繪暦に珊瑚の島や藏開き　越後　東樹花子

評　竹の影、福ら雀、皆目出度さの數なりかし

評　未だ日暮れず

春待や嫁入仕度縫ひ裁ちて　大阪　松浦くに子

時刻湧きする温泉香立ちや笹鳴りる　本郷　原琴子

評　筆硯座右にあり

佳作

福引の群雀放つ廣間哉　熊本　吉山百枝

梅の主今朝春の雪にうつゝなき　大阪　うその花

よきを着て訪ふ子らや窓の春　下谷　大上菊子

太洋の島粉雪とも初日哉　岡山　松肩ヨウ

猿曳や梅にも名ある小家勝　博多　平野まさ

初雛やかるたの夢も明けの空　信州　戒能澄子

老祖母の昔着おかし今朝の春　下谷　小林しげ子

梅の影うつろ障子や彈初す　廣島　小松さよ

鉢もうけして客待ち福壽草　横濱　山本眞子

初東風や何磨ぎし砥水忘られて　神戸　壽見もと

餅花や垂穗の數も長者ぶり　備中　冬瀬きく子

年賀狀にも見ゆ主の風姿あり　山形　高橋てい子

御降りやの手欄柏窓の梅　浦賀　池田とく子

島の便り待つ風順や三ヶ日　麻布　田中のり子

木枕の鬮さまようや嫁が君　岡山　三宅雪子

人眞似もおかし鸚鵡や初日影　芝　遠山紗紗子
書初やとくよりぞ力筆の儘　熊本　村山しげ子
杣人や懸樋若水汲む習ひ　大和　龍田花子
初風呂や誰かしもなく見知顔　愛知　谷口しん
御本丸の登城太鼓や初日の出　神戸　高山巴
とそ汲むで女斗りの家内哉　熊本　古田てつ子
元日や六波羅兇こけそうな　東平　渡邊梅子
國振りの大まか風や會津晴れ　岡山　多田幸
はしたなき戀になくこや落椿　神戸　平島壽子
ぬぎ捨てし小袖のかげや嫁が君　茨城　岩田濟子
萬歳の鈴よみ梅も縄手なる　福岡　諸岡てる子
たまに出てなくれ聞かれぬ嫁が君　本郷　田中球子
うら〳〵と湖東湖南や初日の出　横須賀　石渡とめ
山寺は梅さく遅し提婆品　秋田　ふみ子
實初や幼子すでに起きてあり　神田　齋藤つる
七種やはやしはじめも嫁となり　神田　芳賀つる
初日さすや梅樸枒として水響し　大阪　川西英子
舞初や鶯の餌を忘れ草　大和　西田豊
御降りや温泉に籠り居の都人　府下　海老原とみ
初東風や梅ほろ匂ふ風呂の窓　京都　小西好美子
白鶴の冴え返る畑の若菜哉　麹町　田部てふ子
追羽子や振袖かほる松の厨　高知　野田加奈子
鐵そめや水塚鴉もそこら飛ぶ　伊豆　遠山雪子
山科の狂態を唄に手毬つく　伊豆　深谷せい子
天傾の雲崩るゝや初からす　伊豆　河合はま子

しのゝめの朝霧晴れぬ初日の出　横濱　築瀬よし子
門松も麥生つゞきや草の庵　埼玉　林畝子
今朝春の限水や筏松据えて　福島　野木靜枝
旗立てゝ馬も初荷の祝ひかな　本郷　城本美知子
歌かるた同窓會の果たよりて　横濱　曉月
藥室に春寒き夜の灯かな　新潟　東樹末子
奈良人形京人形や御とし玉　越後　東樹喜世子
寺多き山多き奈良の小春かな　越後　東樹多伊子
大傳馬小傳町の初荷かな　越後　東樹ふみ子
折鶴のしきりに舞ふや春の風　大阪　小山清
若松や南天の雪初日影　大阪　金田利子
教へ子の學を空や鳳の聲　本郷　多田おと子
金紋の幾世へぬらん雜煮椀　下谷　大上菊子
正月や火鉢のつやも物甜り　三河　三輪らく
萬歳や小松が邸棒の家　芝　のり子
駒下駄に雪踏んで梅の庵あり　備後　田鶴子
扇面の鶴の試筆や松ぢらし　廣島　愛子
笹鳴や貧を安んず繪師のあり　三河　小百合
笹鳴くや友訪へば晴れ衣裁ちてあり　三河　紅雨女
義足やなら山茶花明り苔も踏む　三河　美枝女
笹鳴や茶殻すつ朝友も來て　愛知　高尾子
鳥居修繕し墓地堂や返り花　肥前　服部信代
銀河今宵よく見えて雁や渡るなり　肥前　服部芳子
冬の月もる襖に妹の唄淋し　下關　青山美子
病鶏のあさる畑や霜白し　大阪　守田秀

凩や誰ぞ鐵かけし軒庇　静岡　堀内綾子
蟲はみし遺書調ふや椽小春　大阪　河野よし子
水仙や佛器を磨く南椽　神奈川　矢後多賀子
柳吹くや月の木屋町川千鳥　日本橋　千代子
勤匪の模様を繕ふや年の暮　羽後　菊地まき
行年や眉の上なる水時計　兵庫　中津靜子
月の洲や蘆のそよきに渡る雁　横濱　小野澤政子
火事場風水なめてくる湖上かな　麻布　野口照子
檜明り馬蹄の寒さ侘びにけり　小松　曾根里子
番茶干す邊も近し冬ごもり　大阪　奥野靜子
庭くまに霜匿くや落葉堆し　美濃　松原房枝
降り積る落葉に霜の白きかな　函館　一方井きめ子
暴明きの掃除や埃かむる菊　横濱　稲毛たき子
衣裁て春待つ夜話も日毎哉　京都　町田てる子
草枯の池邊にあさる鶺鴒　信濃　坂口探子
雨戸たゝく小夜時雨今宵友も來ず　久留米　上田龍子
雪に秀づ南天見ゆる茶室かな　備後　岡本龍子
朝霜や馬橇煙る關の宿　岡山　久戸瀬里子
雁なくや矢來崩に濺ぐ雨　川越　高野らぐさ
滾々と藍流す大河雪明けり　芝　大和川みつゑ
奥物も沸し思ひや灯も寒む　横濱　橋口滿沙子
桑葉一つ蝶とや咏みれ散り紅葉　福岡　つくし野
休み日の子等寄り日和り小春哉　兵庫　吉本輝子
初霜や柱ばかりの能舞臺　清國　杉村歌子
鳥遠る汐だふ〳〵と初日哉　越後　五十嵐富美子

雪に明けて湖樓百軒旭の赤き　伏見　辻増子
霜降るや鴨待つ濠の夜を寒み　神田　松平福子
水室の春待ぐさも秀歌かな　紀伊　中島昌子
葬儀戻り枯野を低う鳥飛べる　和歌山　植松白萩子
厨聞と鉦鳴くも試庵あるひそか　三河　むくろ女
霜柱たつ屋根に鶏の高啼けり　熊本　宮原たけ
頽・廢の寺名のみ四國の山眠る　淺草　水野整子
月落ちて雁影寒き田面かな　函館　伊藤すゑ
白菜を運ふ荷馬車に時雨哉　旅順　山本やすゑ
裸灯や刀自病む庵の柳散る　四谷　杉本靜江
埋火や株櫚竹に落つ星の數　芝　田中知友子
寒月や林頭の塔に雲かゝる　神戸　山村香枝
水仙や室暖かに猫眠る　埼玉　荻野さく子
竹原や靜に雪の積る音　埼玉　野卷若葉
枯菊にさらす湯婆や粉雪とぶ　埼玉　林畝子
雪と見し鵜や翔れり松の空　札幌　松尾幾美
長橋を渡る牛車や霜白し　尾道　松翠
眞野こす雁のみだれや冬の月　近江　玉菊
寒月や枯木の中の鳥網　和歌山　北弦弓子
鶏のにげ込む鳥屋戸時雨哉　新潟　巣貸井登志子
裸銀杏詣み來て社參時雨寒む　京都　小夜千鳥
放浪の悔ありて夜を寒ふせり　横濱　小豆澤しげ子
靈木の高き枝張や木枯す　山田　岡村弘子
小春日やものほし飾る夜具蒲團　新潟　菅屋えい子
鳳なくや牧道にこぼれ乳わびし　廣島　藤田春子

募集（二月八日〆切）

●特別寄書

（主として人事、人情の委曲を寫し、又時の社會百般の事柄を捉へ、時勢の變化を知るに足るべきもの△紙數は原稿紙十枚以内の事）

〔報酬＝五圓以上拾圓迄、現金贈呈〕

▲端書文（一人一種）

▲和歌（一人一首）

▲俳句（一人一句）

▲誌友倶樂部

△端書文以下三種共用紙は端書の事　△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす　△名宛は博文館内女學世界行とし　△特別寄書の原稿には住所氏名を明記する事

賞品

△端書文

天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢

△和歌△俳句

天賞壹圓、地賞五拾錢、人賞參拾錢

每月一回一日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）	金二十錢
四冊（三ヶ月分）……	前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……	前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……	前金二圓八十錢
定刊數………………	十二冊

内増刊四回、一、五、九、十一月價格同一

郵稅　一冊　二錢

廣告料

（四字詰）	特等	一等	二等	三等
一行	……	……	……	五十錢
四半頁	……	……	十圓	七圓五十錢
半頁（卅二行）	……	廿三圓	十九圓	十四圓
一頁（六十四行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵劵代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢劵相添申込あれ

明治四十五年一月十二日印刷納本　第拾貳卷第貳號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

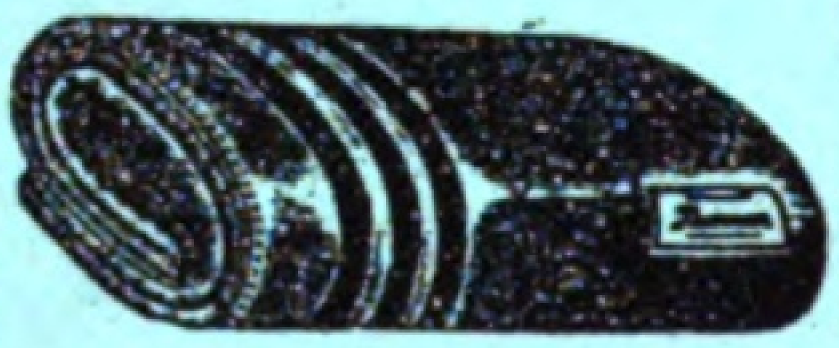
電話　三百三番　千十八番

本局　二千六百二十番　三千二百二十九番

博通社 (博) 特賣品

●安心の出來る買物は博通社に限る!!!

●舶來毛布特價提供



品質優等にして肉の厚き手ざはりの軟くして然も例の大なる本年第一等の徳用品である!!

⦿一號純白最優等貳枚續 特價 六圓七拾錢

⦿二號純白上等貳枚續 特價 四圓五拾錢

⦿一號鼠最優等貳枚續 特價 六圓五拾錢

⦿二號鼠上等貳枚續 特價 參圓八拾錢

▲送料内地廿錢 臺、樺、清、朝、四拾錢

◀純ダイヤモンドピン▶



金質の優等、「ダイヤモンド」の純粋にして意匠斬新なる眞に模範的逸品なり然も價格の廉なる到底他の企て及ばざる處であります

⦿正十八金純ダイヤモンド入ピン

特價 拾九圓五拾錢 均一

△送料市内無料臺樺 内地十二錢清朝 卅錢

●專賣特許 永田式家庭用洗米器



本器は實に中米を磨ぐにも少しも手を濡らさず而も混砂及小砂利芥等を除き去り頗る綺麗に磨ぎ上げ得るは當社の實驗上斷じて保證する處である故に衛生を重んずる家庭に於ては是非共一基は備へ付くる必要あり

⦿二升五合器 八拾五錢

⦿三升五合器 壹圓

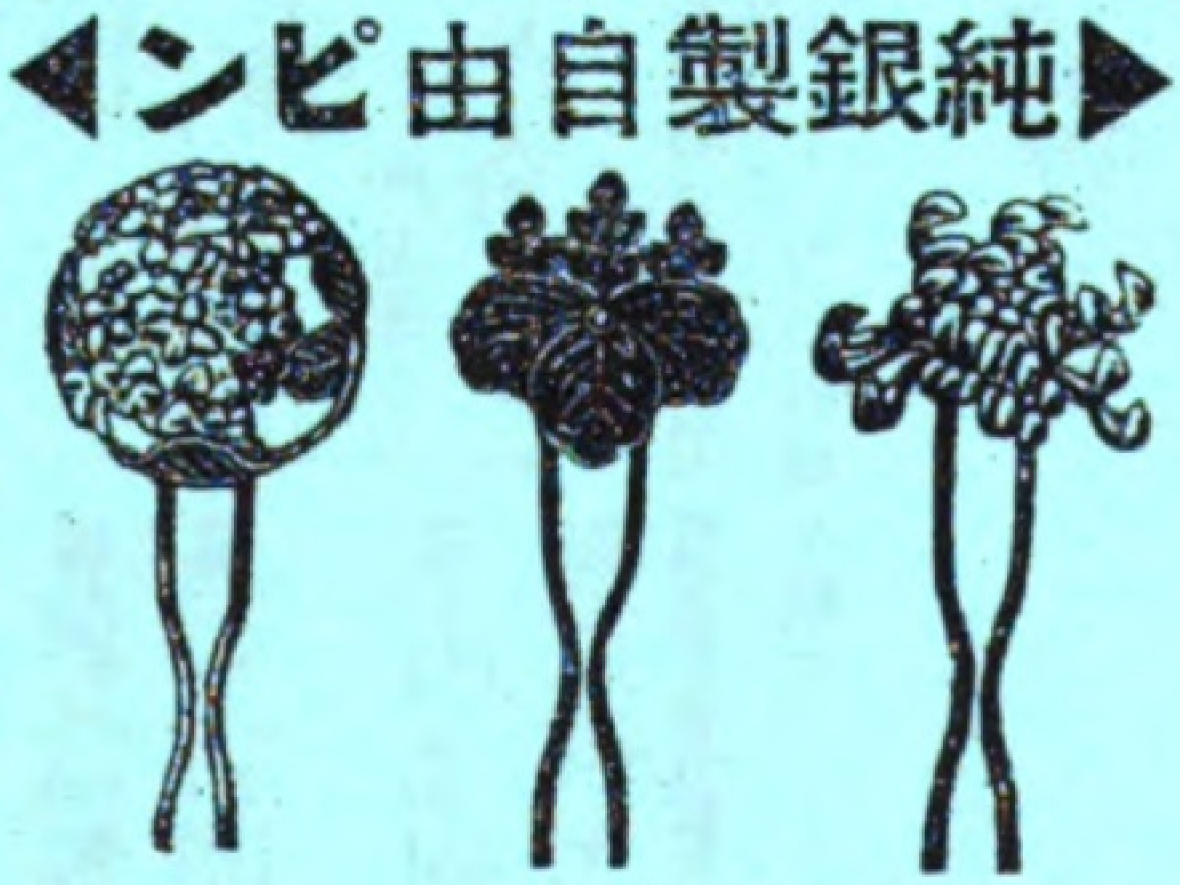
⦿五升器 壹圓貳拾五錢

▲送料市内無料内地廿八錢

△外酒造用軍隊用各種アリ

●取次希望者申込あれ

◀純銀製自由ピン▶



帝都に於ける大流行中なる束髮用純銀七寶入自由ピンで頗る高尚にして上品であり目下盛んに歡迎せられつゝあります殊に本品は東京某大「デパートメントストアー」に於て貳圓五拾錢づゝで販賣しつゝある事を御承知願升

⦿純銀製七寶入自由ピン

美麗函入

特價一圓九拾五錢

⦿種類廿餘種あり御注文の節は年齡御通知を乞ふ

▲送料内地八錢 臺樺清朝 卅錢

●御手紙一本で何んでも御求めに應じます!!!

大橋メール オーダー ビジネス

東京日本橋區本町一丁目

博通社

電話本局六百十四番

振替口座東京五十番

女(後付の一一)

女（後付の二）

女（後付の三）

少年雜誌中の大覇王

少年世界

第拾八巻 第壹號（既成發行）

菊判百廿八頁口繪澤山 正價拾錢郵税一錢五厘

▼特別大懸賞……僕なら斯様するの答……

▲口繪▼

（表紙）浮かれ鼠　杉浦非水

（原色版）治まる御代　中澤弘光

（水彩畫）瑠璃色の海　小林鐘吉

▲寫眞版▼

御題　松上鶴

兩陛下御尊影

ネヅミ畫報

ポンチ豚と馬

少年小説　火柱城……巌谷小波

●年始状の書方……芦田教授

お伽噺　鼠のお家……竹貫佳水

●愛する諸子へ……さゞなみ

光輝ある春……木村小舟

●日本の誇……渡邊文學士

勇中の勇將軍……黒田湖山

●誰にでも出來る飛行機の造り方……

天の橋立股覗き……坪谷水哉

●支那少年の正月……

我が大日本帝國……黒板文學博士

●お伽理科物語……

鼠ナポレオンを苦しむ……石川理學博士

●蝦夷物語鶴の衣裳……

海の日本人……上田文學博士

●少年スケッチ……

乃木將軍は我輩より贅澤……ゴルツ元帥

▼懸賞繪判じ新題……

口新年大附錄 ●少年飛行双六

東京日本橋本町三丁目　博文館　振替口座東京二四〇番

女（後付の四）


第七卷第一號
おもしろい繪の雜誌
既成發行
幼年畫報
□ネヅミノオトシダマ……ササナミ
菊判美麗畫本
石版極彩色刷十六頁
活版寫眞入二度刷十六頁▲寫眞版四頁入
どんな面白い畫がのつてありますか速く買つてごらん
正價一冊十錢
郵税本號限り一錢
□新年號大附錄・子ズキ大黑……春汀
■表紙……三郎畫
■ポンチ……三郎畫
■正行……國觀畫
■イソップ……春汀畫
■ポンチ……春果畫
◎ポンチ（四頁中繪）◎梅の花◎初日出◎ニハトリ◎コマ◎ネヅミノポンチ◎お宮まゐり…（木版）◎ポンチ………◎オソウニ（裏繪）
■單語……永年畫
■元日……竹坡畫
■四方拜……洗鱗畫
■ポンチ……古洞畫
（以上彩色石版）
東京市日本橋區本町三丁目
博文館
振替貯金口座東京二四〇番

女（後付の六）

實業少年

第六卷第壹號

□四六判二倍大紙數七十二頁□
□光澤寫眞版四頁色刷挿畫滿册多趣味□
□正價金拾錢（本誌限り）郵稅一錢五厘□

既成發行

◎小說供食會社……幸田博士快心の傑作

◎大黑傘改良のめでたい成功者木下氏の奮闘

◎めでたき三皇孫殿下のお正月……

◎めでたく三千圓の懸賞を得たる大博の設計者吉武氏

◎驚く程金の儲かつためでたい二人の實話 流石は東京なり 石井研堂

◎慈愛ほど効果の有る教育法は無い 森村總長

◎一生中最大の金を儲けた時はかうだ 大倉喜八郎

進呈 大附錄

古河銅山王出世譚 痴遊口演

松方侯爵壽福由來 貞水口演

◎府下十二大商店の最近客扱法の研究

◎思はぬ金を得て今に忘れられないめでたい話 澁澤男爵

◎一坪月七圓の家賃を拂つて大繁昌をして居る商店

◎國家の爲めにめでたい壯丁の體格を作る法

◎明治名數畫帳 日本三府、日本三景、日本三公園、私立二大學、早稻田三博士、紅葉門の四天王、東京三劇場等の類、一々圖示す

◎全冊に滿つる奇拔多趣味の彩色畫は雜誌界の大王

東京本町 博文館 振替口座東京二四〇番

女（後付の七）

女（後付の八）

面目一新せる新年號

文藝倶樂部

第十八卷
第一號

娘盛りの



●菊判本文紙數三百二十頁 ●原色寫眞版一枚
●寫眞版 光澤紙刷八頁普通四枚 二色刷光澤紙……二頁 ●木版摺錦繪一枚
正價一冊金廿五錢 郵稅一冊（二冊六錢）三錢

目次

本誌は左記未曾有の大附錄を添附するのみか現文壇の巨匠森鷗外氏が興味中心を標榜する樺太脱獄記てふ長篇を掲ぐ、其の如何に波瀾に富、其如何に變幻極りなきか、恐らく新春第一の讀物たらん。次に三島霜川氏作町の娘を收む。其の姿の優に愛らしさ、見ん人目を峙てん。第三、第四には、新進作家中の白眉廣津和郎氏作八月の夜及び高橋仁氏作旅役者とを載す。共に清新の氣紙上に溢る倘夫新講談に至りては斯界の奇傑大島伯鶴氏に囑し出世の春駒を口演せしむ。新春の讀物として是れ程芽出たきものなからむ長廣舌には饗庭篁村氏江戸趣味を論じ、其の他全誌趣味と實益とに充實し年の改まると共に其面目を一新せり切に祈二愛看一。

新年附錄 ■ **美人寫眞双六**
文藝倶樂部編輯部案
山中古洞氏書

東京 **博文館** 本町

JOGAKU SEKAI.
PUBLISHED MONTHLY, BY THE HAKUBUNKWAN, TOKYO, JAPAN.
ENTERED AT LOS ANGELES P. O. AS SECOND CLASS MAIL MATTER.

女學世界 第拾貳巻(増刊花籠)第貳號 (毎月一回十八日印刷納本)

明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可

明治四十五年一月十二日印刷納本

定價金貳拾錢●郵税貳錢

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界 明治期復刻版㊾
明治45年1月(第12巻第1号、第12巻第2号)

2011年7月10日　第1刷発行　　定価(本体20,000円+税)

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14(〒113-0021)
電話　03-3947-8251[営業] 03-3947-8254[編集]
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　富士リプロ株式会社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-4002-2　C3321